

---

# ネギまの世界に転生したカモ。

黄緑色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギまの世界に転生したカモ。

### 【Nコード】

N9248M

### 【作者名】

黄緑色

### 【あらすじ】

目が覚めたら、俺はオコジヨになってしまっていた。

原作知識なしの学者肌系オリ主が魔法と剣が入り乱れるネギまの世界にカモとして転生する。超ファンタジー世界でカモはどのように生きるのか！？

プロット無しノリのみで書いていますが、できれば見てやってください。

目が覚めたらオコジョになっていた件について。(前書き)

初投稿です。

何か不備などがあれば教えていただけると幸いです。

目が覚めたらオコジョになっていた件について。

……うん？

気がつくのと、俺は思考する事が出来ていた。

何が起きたんだ？

ぼんやりとする頭で俺は疑問を浮かべた。

視界はまるで何かに塞がれているように真つ暗で光すら見えず、耳も蓋をされたように外部の音が何も聞こえない。唯一働く嗅覚は、必要以上に情報を伝えてきた。

くんくんと鼻をならすと、冷えた空気独特の匂いに混じり、どこか優しい匂いが鼻をくすぐってくる。

体にはどうしようもない疲労感に満ちており、異常な眠気が俺を襲ってくる。まるで自分の身体が、違うモノに変わってしまった様であり、身体が発する心音や呼吸音すら異物の様に感じた。

どうなっている？

疲労と眠気、そして言いようのない異物感からくる吐き気を抑え込みながら、俺は急速に冷えて行く頭で思考を働かせていく。

俺は今、一体どうなっているんだ？

身体は指一本動かす事が出来ない。だが、どこかベッドで眠っている訳でもなく、冷たい地面の上で眠っているようでもなかった。

どちらかと云うと、何か温かなモノに包まれており、まるで動物の毛皮をくるんで眠っているような温かさだった。

何が起きているのか分からない。

だが、少なくとも、俺が理解出来るような状態ではない事は分かった。

現在の状況を把握しようと俺は、出来る限り冷静に思考を巡らせていく。

今どこに居るのか。今の俺はどうなっているのか。湧き出てくる疑問は尽きないが、そんな中で一番の疑問が頭をかすめる。

何故、俺は今こうして生きているのだ？

気を抜いたら爆睡してしまいそうになるのを、無理やり堪えながら俺はとにかく現状を把握しようとする。

何故、俺は生きている？

俺は、……俺は確かに死んだ筈だ。

とある国で研究員をしていた俺は、重役の一人に裏切られ、研究所ごと爆破されて死んだ筈なのだ。少なくとも、あの爆破で生き残るような装備や施設は無かったと言い切れる。

それに、あの国で既に干されてしまっていた俺を助けようとする酔狂な人間もいる筈がない。

だが、俺は今、事実としてこうして思考する事が出来ている。  
視覚と聴覚は動いていないが、嗅覚は動いており感覚だつてちやんとある事を考えると、脳みそだけ取り上げて試験管の中で生きているという訳でもなさそうだ。

どうなっているんだ？

目も耳も使えずに、身体も動かせない以上、外部の情報が全く入つてこない。情報がない以上、仮説を重ねる事しか出来ない。

……、仕方がないな。

俺はとりえず、無駄な思考を切り捨てると津波の如く襲ってくる眠気に身を任し、惰眠を貪りつくす事にした。

どんな事情があろうとも、俺は今、生きている。

その事だけは間違いない。

それだけでも、儲けものだ。

どうやら、まだまだ俺にも運が残っているようだ。

不敵な笑みを浮かべながら、俺はそう考えていた。

あれからどれだけの時間が経っただろうか？

問答無用の睡魔に流されて眠ってから、一カ月だろうか、一週間だろうか、それとも一日か。時間間隔のない世界の中で俺はただ思考を重ねながら生きていた。

だが、あれからいくつかが分かった事があった。

それは、俺は『誰かに生かされている』という事だ。

時折、俺の口に流れ込む温かな液体がその証拠であり、俺は定期的に何者かに食事をさせられていた。

今まで食べた事のないような生臭い液体であったが、どうやら栄養価が高いらしく、生きながらえるだけでなく、飲む事により身体能力がどんどん回復し、そして向上していくのが分かった。

けれども、一体誰が何の目的で俺を生かしているのかは分からなかった。

考えられるのは、俺の知識や、俺が制作していた機械の情報を奪おうとしているという事だが、それならばこんな回りくどいやり方をしなくても他に方法はいくらかもある。

そもそも、俺の情報を必要とする組織が一体どれくらいいるのだろうか？

俺の知識はもはや異端であり、抹殺対象であっても必要になるモノではないのだ。わざわざ、最果てにある研究所まで来て俺を救い

出す訳がない。

という事は、俺が何者かも知らずに助けた人間がいるのだろうか？

いや、有り得ない。そもそも、あの爆発で俺の身体が残っている筈がないし、仮に身体が残っていたとしても数分とせず森にいた化け物どもが俺の身体を貪り食うだろう。

偶然爆破されても俺が生きており、偶然研究所近くに人がいて、その人物が偶然見ず知らずの人間すら助ける変わりモノで、偶然血の匂いに敏感な化け物よりも早く俺を見つける事なんてほぼ有り得ない。

なら、俺は今どのような状況に置かれているのだろうか？

分からない。

そもそも、あの爆破で俺が生きている筈がないのだ、っとまあ、これまで延々と繰り返している思考のループだった。

しかし、俺はついにこのループから抜け出す事が出来たのだ。

そう、今日ようやく俺の目がぼんやりとながら何かを映す事が出来た！

やったー！

という訳で、俺はまだ光になれていない目をゆっくりと開ける。

むづ。ここは、洞窟か？



まだ薄くしか目を開けられないが、ゴツゴツした岩肌に暗くじめじめとした空間。ここは洞窟で間違いないだろう。ただ、どこの洞窟かまでは分からない。

それに俺の研究所の近くに、洞窟など無かった筈だ。

今いる場所が分かった俺は、更に自分の様子を見てみたが白くてふわふわな毛並みが見えるだけで、縛られている様子などはなかった。

それならそろそろ立ち上げられるのではないかと思い、後ろ脚に力を入れる。

しかし、半ば分かっていたが、やはり上手く立つ事ができない。むしろ、4本足の方がしっくりくる。

……うん？

やはりしばらく寝ていた為で身体が回復しきっていないのだろう。身体もそれなりに動けるのだが、2本足で歩きまわるのはまだ無理か。

もうちょっとで立ち上がれそうな感覚はあるのだけだな。

ほら、両手も両足も、自由に動かせるし、尻尾だって動かせるんだぞ。

……うん、尻尾？

あれ？ 何かがおかしくないかい？

違和感がなさ過ぎて逆に気がつかなかったがこれはおかしい。  
何かが決定的におかしい。

俺はとりあえず右手へと視線を向ける。

……まあ、なんて綺麗で真っ白な毛に覆われてる右手なんぞで  
しよう。

それに、これは右手というよりも、むしろ右前足と言った方が良  
いよな。

さつきも自分の身体を見たがあの時は違和感が無かった所為か気  
付かなかった。しかし、今よくよく考えてみるとこれは何かが決定  
的に間違っている。

「おや、目が覚めたのね、アルベール」

その声に俺は顔を上げると、そこにはいつの間にも近づいたのか、  
自分の3倍は大きなオコジヨの化け物がこちらを見下ろしていた。

なっ!?

目の前の規格外の化け物に俺は言葉を失う。

遺伝子操作で生み出された化け物の類か!?

っちい、今は武器も何も無い。そもそも、身体が満足に動かせな  
い!

「ほら、お母さんですよー。今、ご飯あげますからねー」

言葉を失いながらもどうにか撃退法を考えている俺に、でかい化け物は乳房を口元に向けてきた。

何をやっているのか理解する前に、俺の口が反射的に乳首を吸い始める。

この味は……、いつも飲まされている、あの栄養価の高い液体じゃないか!?

「良い子ですねー。早く大きくなって、賢いオコジヨになりなさいね、アルベール」

ん?

賢いオコジヨ?

アルベール?

やばい、これは……嫌な予感しかしない。

疑問だらけで始まったこれが、俺の、いや、アルベール・カモミールの新たな人生の始まりであった。



ほうほう、立派な魔法使いですか。そうですね。

うん、どうも。

オコジヨに転生した元人間の『アルベール・カモミール』だ。  
カモとでも呼んでくれ。

さて、いきなりオコジヨになっていて理解できていなかった俺だったが、しばらくオコジヨになって生活していく中で、まずこの世界は俺が生きていた世界とは違う世界であるという事が分かった。

何故分かったかというと、生活水準がすでに違うので理解できたのだ。

そもそも、俺が知っている世界ではオコジヨは喋らない。つか、身体の構造上ありえないだろ。

なので、割と簡単にこの世界は異世界である事が分かったのだ。

その上で、しばらく生活していると分かった事が、これが『輪廻転生』というモノではないかと推測できた。

輪廻転生とは何でも魂は死んでも、別のモノに転生してぐるぐると回っているという哲学や宗教でよく用いられる考え方らしい。ち

なみに解脱とかよく分からないモノもあるが、今はその話は置いておく。

とにかく、俺が生きていた世界では『輪廻転生』という概念がなかったのだが、俺の境遇について考えてみると輪廻転生と言った方がしっくりくるから、一応『俺は輪廻転生して異世界に来てしまった』という事で結論付けた。

そう、俺は元の世界の知識を持ったまま転生したのだ。

しかも、オコジヨに。

人間の意識を遺したまま、オコジヨに生まれ変わってしまうなんて何という地獄なんだ、と思っていたが、どうやらこの世界のオコジヨは人間の言葉が分かり、人間社会にそれなりに溶け込んでいるらしかった。

うん、これはかなりの僥倖だ。

元の世界では変人と言う二つ名で通っていた俺でも、さすがに吐き出されたネズミを好き好んで食べる変態ではない。

人間社会に関わっているおかげで、飯は普通に人間と同じモノが食べれたし、文明の発展のお陰でそこまで不自由な暮らしはしていなかった。まあ、住まいが洞窟な時点でどうかとは思うが。

さて、異世界に転生した俺だが、俺が人間として生きていた世界には無かった『魔法』というモノが存在していた。

魔法というのは、杖を持ってむにゃむにゃと唱えれば酸素がなかったり、水の中でも杖から炎が飛び出るといふ俺がいた世界では理屈が説明できない摩訶不思議現象の事だ。

うん、正直言っただけ意味が分からない。

酸素とかそんなんじゃなくて、魔力を使ってるんだぜ、へっへっへっへという事だったが、余計意味が分からない。

しかも魔力というのは世界の到る所に存在するらしく、先天的な優劣はあるらしいが、誰にでも使えるという事らしかった。

理不尽すぎると思う。

だが、同時に面白いとも思った。

せっかく、転生という面白可笑しい出来事が起きたんだ。

俺も魔法というモノを研究してみようじゃないか。

俺も生前は研究者のはしくれだった。未知のモノや出来事には興味を惹かれる。

それに……、この世界では少なくともそれを知らないと俺の目的は達成できそうにないからな。

さて、オコジヨに転生したからには、まずはオコジヨ社会に馴染まなければならぬ。

こんな俺でも一応、か弱い小動物だ。  
それに生前の記憶があるせいで、オコジヨとしての本能が弱い。  
その為、狩りも出来ないし、身を守る術も無意識的に持っている訳ではない。

それなのに外に出れば獣やら何やらが襲ってくる。そうなるに当然、一人で生きていける筈もない。

まあ飯は、洞窟で寝ているだけで親が買ってきてくれるが、親の脛かじり続けるのも気が引ける。

そんな訳で、俺は生まれて三カ月という速さで親元を離れ、オコジヨ専門の魔法学校に通う事にした。

ちなみに、オコジヨ専門の魔法学校がある街は、オコジヨサイズ



のビルやデパートが立ち並び、この世界の人間の街に引けを取らない街並みだった。

そうそう、魔法学校の入学金や授業料は親から借りている。

あー、どんな異世界でも金は必要なんだよな。

とりあえず、この街で一人暮らしを始めながら昼は魔法学校に通い、夜は社会に馴染む訓練も兼ねて仕事を行う日々を始めた。

まあ、仕事といっても生まれたてのオコジヨに大きな仕事など出来る筈もなかったので、色々な知識を得れるだろうという下心も兼ねて国立の図書館で資料整理のお手伝いの仕事をしていた。

これが中々面白く、オコジヨの世界以外の知識も随分と手に入れる事が出来た。

さて、魔法学校の授業についてだが、これも中々に興味深い事が多い。

受ける内容は色々だが、基本的には魔法について。

錬金術に魔法薬学、魔法宗教学、オコジヨ魔法学に、通常の魔法学の基礎など。これらの授業は、俺が元いた世界では、どう考えてもありえない公式がここでは平然と成り立つのだから驚きだ。

つーか、豚肉と玉ねぎと人参と砂糖とみりんと醤油と魔力を混ぜると、混乱解除の薬が出来るとか意味が分からない。それで出来るのは薬ではなく、魔力の入った肉じゃがもどきだけだ。

だが、意味が分からないからこそ、どれもこれも新鮮で、中々に面白かった。

残念なのは教えて貰う魔法のほぼすべてが、『魔法を唱える』魔法が発動する』という過程を一切無視してモノである事だろうか。

確かに魔法を唱える事により、魔法は発動するが、その過程が一番重要なのではないだろうか。いや、そうに違いない。

過程を知れば、色々なオリジナルの魔法を作る事も可能だろうに。

今分かっているのは、魔法は魔力を使い、精霊の力を使うという事。

精霊の力を使役する事により、魔法が使えるのだ。

ただ、精霊という存在の定義がこの世界でちゃんと定義されていないのが問題だ。

今のところ世界的に見ても『精霊』力を貸してくれる存在』という程度の認識だろうが、そんな曖昧なモノでは困る。

精霊は何故、力を貸してくれるのか。

そもそも精霊には、意思があるのか。

そして、精霊はどこから来るのか。

その辺りも今後の研究課題だろう。まあ、魔法に関してはこんな感じだろう。

まだ根本を理解しきれない以上、ここまでが限界だ。

後は、魔法学校で出来る限りの知識を吸収し、理論形成をしていくしかないだろう。

そうそう、この学校は魔法の事も教えてくれるが、同時にオコジヨ社会についても教えてくれた。

教員が言うには、『オコジヨとは人間を助ける事を生業にするベキ』という事らしい。

オコジヨにとって人間の使い魔になる事こそが、幸せであるらしい。

そして使える人間が、人間に評価されていればいるほど、それは素晴らしい事だとされているのだ。

そう言っていた教員の目は血走っていてちょっと怖かった。

これが世に言う洗脳教育だな。うんうん。

まあ、つまりオコジヨは人間の都合のいい奴隷扱いなのだろう。

こんな事を呟けば、教員が半狂乱で襲ってくるから、呟かないが、心の中では、そんなもんかと冷めた気持ちでいた。やはり知能があ

る生物がいる世界には『洗脳』だの何だのがつきまとうんだな！。

そもそも、人間の罪人をオコジヨにする時点で、人間とオコジヨの格差を見てとれる。

人間にとってオコジヨ社会とは、都合のいい道具であり、罪人を押し付ける場所でもあるのだ。

その癖、人間たちは自分の事を立派な魔法使いと言っているのだから、怒りと通り越して呆れてしまう。

弱きを助け、悪を倒すのが、立派な魔法使いらしいが、よくそんな事を言える。

弱きを力のない者の事を言うのなら、小動物でしかない俺達は間違いなく弱きに入るだろう。そんな存在に、厄介事を押し付けといて何が立派な魔法使いだろうな。

ただオコジヨにとってもデメリットだけではない。  
メリットももちろんある。

そのメリットとは、『人間に駆逐されない事』。

どんな生物もそうだが、自分の生存を脅かすかもしれない存在は怖いに決まっている。

人間は武力ではなく知力によって今の地位まで登りつめた存在だ。同等レベルの知能をもつオコジヨ妖精という存在に恐怖を持つのは当然だろう。

実際、過去には人間VS喋る小動物という構図の戦争もあったらしいからな。

しかし、オコジヨ妖精は人間と比べるとあまりにも弱い存在だ。

変に蹂躪されるよりは、始めから『人間>越えられない壁>オコジヨ』という公式をつくっておいて、人間の下にオコジヨを置く事で人間を安心させているのだ。

……、まあ俺にとってはどうでもいい事だが。

だがまあ、とりあえず、今はこのオコジヨ社会にそれなりに適応している。

まだ、俺は自分で生きる力を手に入れていないのだから。

さすがに剣を持った少女に追いかけて喜ぶ趣味は無い。

やあ、カモだ。

今、俺は魔法学校を卒業して、世界中を見るべく旅をしている。

えっ、時間が飛びすぎだって？

何を言う。

まだ、2年しか時間は飛んでいないさ。

こういう転生話だと最初の方は一気に5年とか10年とか時間が飛ぶのは基本だっけ誰かがいつてたしな！。

それに、魔法学校は魔法の勉強漬けの毎日だったから、そんな事を書いても詰まらないだろう。まあ、そのお陰で魔法学校を主席で卒業出来たけどな。

そんな俺だが、これまで色々な国を渡り歩き、ルーンやら何やら魔法について調べてきた。そのおかげか、自慢ではないがかなりの魔法知識を有する事が出来た。

一部の魔法の理論はすでに完璧と言っているレベルだ。

お陰で魔力効率の格段に良い魔法の作成がとても簡単に出来たし、不老不死に関する研究なんかも進めている。その辺りについてはまた機会があればお話ししようと思う。

つーか、俺から見れば巷で蔓延っている魔法は無駄の多いな。

特に魔法の射手とか武装解除とは無駄が多すぎて、まともに使う気も起きない。

魔法使いの奴らはどうして、もっとスマートに魔法を使えないのだろうか。

折角、人間に生まれている以上オコジヨの魔力よりも格段に高いのに、もったいなすぎる。

まあ、そんな事はどうでもいい。

それよりも、俺は今、結構なピンチに陥っている。

どんなピンチかと言うとだな。

「ざんがんけーん」

「っちい、ばれたか！」

小さく舌打ちした後、俺は転がる様にその場から離れる。

その瞬間、俺がいた場所にはゆるやかに刀が叩きつけられ、その速度に反して、叩きつけられた場所がえぐりとられる。

なんつー威力をしてんだよ。

多分、気って奴で強化してんだろうな。うん、東洋の神秘って奴だな。すげー。

危険人物を前に、現実逃避的な事を考えていると、再び刀が俺の方へと迫ってくる。

「いけまへんえー。闘いの最中によそ見なんてー」

「そもそも闘ってるつもりはないんだがな」

目の前にいるのは、まだ5歳程度の少女。というか幼女。手には二本の長短の刀を持ち、こちらへ楽しそうな視線を向けている。そして、その眼鏡をかけた目には明らかな狂気が巢食っていた。

いや、狂気といよりも狂喜かな？

強い人間と戦える狂った喜びと言った所だろうか。

「いえいえ、闘ってますやん。うちは強い相手と闘いたんどす」

明らかな戦闘狂。



よりスリルを求め、より強者を求め、より血肉湧き踊る闘いを求める。そんな人種。いやー、面倒くさい人種だ。学者肌の俺には分からない思考だな。

なぜ、自分から意味もなく危険に飛びこめるのだろう。

そんな事をしても得られるのは『強い奴を倒した』という事実だけ。そんなもん、犬にでも食わしとけばいい。本当に理解できない。

つか、そもそも、何で俺がこんな戦闘狂と戦わなければならなくなっただろう。

思い返してもくだらない出来事だ。

俺は今、東洋魔術というモノに興味を持ち、日本という国の京都という街へとやってきていた。

うん、趣のある中々よい街だった。

京都を散策しながら、俺は関西呪術教会のある邸を目指して森の中を歩いていた。

そんな時、突然爆音が響いた。

何の音かと興味を持ち、覗いてみたのが運のつきだったのだろう。

そこには2本の刀を持ちニヤリと楽しそうな笑みを浮かべる少女と、その少女の足元で虫の息になっていた爺さんがいた。爺さんはあちこち切り刻まれ、まさに死亡寸前と言った所だろうか。少女は何か言いながら、止めを刺そうと爺さんへと刀を振り上げた。

まあ、何があつたかしらんが、あんな少女に狙われている時点で、あの爺さんが悪いんだろ。というか、どちらが悪いとか興味が無いしな。そもそも他人のごたごたに無関係の人物が首を突っ込むのも無粋な者だろ。

俺は興味を無くし、再び関西呪術協会に向かおうと、背を向けた。

その瞬間、とてつもない寒気に襲われた。

ぞくりと冷や汗が流れる背中を感じ、慌てて振り返ると、何と死にかけての爺さんが少女に向かって、大規模魔法を使おうとしていやがった。

あの魔力の規模だと、俺まで巻き込まれる。それどころかこの森一帯が焦土へと変わってしまう。

そして、俺は巻き込まれたら普通に死ぬ。

それでも身体はオコジョなのだから、防御力は人間に比べれば紙ですよ、紙。

こんな所で死ぬ訳にもいかず、仕方がなく俺は瞬動で爺さんの胸元まで移動すると、頭突きで顎を綺麗に打ちぬき、気絶させる。この間、わずか1秒。職人技である。我ながら完璧だ。

ちなみに、瞬動とかは旅の途中で覚えた。これが無いと、魔法使いの戦闘に巻き込まれたら普通に死ぬるからな。

「えーい、ざんがんけーん」

自分の仕事にちょっとほればれしている俺に、刀を振り上げたままだった少女は俺に向って躊躇なくそれを振り下ろした。

「ぬおお!?!」

弾けるようにその場から脱出する。いきなりの攻撃に一瞬だけパニックになりかけるが、すぐに思考を切り替え攻撃してきた少女へと目をやる。

ニコリと見られるような笑みを浮かべている。あ……、やばい、あの笑みは、快楽者の笑みだ。

「てーい、ざんくうせーん!」

次の瞬間、少女は離れた位置にいる俺に向かって横薙ぎに刀を振るう。空を切った刀から、本当に空を切る斬撃が飛んでくる!

「くそっ、漫画かよ!」

俺は吐き捨てるようにそう言いながらも、再び瞬動でその場から離れる。轟音を発して、地面を抉った斬撃が通り過ぎる。

その場から掻き消えるように移動した俺に、少女は少しだけ驚いた顔を浮かべながらもものんびりとした口調で言う。

「ほえー、あんだ、強いんですねー」

「俺に襲われる理由はないと思うんだが?」

のんびりとしている彼女に、俺は小さくため息をつきながらも居場所がばれない様に注意しながらそう尋ねる。

「えー、そんなつれない事いわんといてーな。うちと死合いましよ  
うやー」

「付き合う義理はないな」

俺はそれだけ言うと、さっさと逃げようとする。この少女は俺を見失ってる今がチャンスだしな。

「逃がしませんえー、せんくうれつせーん!」

俺が森から離れるよりも一瞬早く少女は再び刀を振う。

瞬きをする間もなく何度も振るわれる刀。その刀から放たれる斬撃が竜巻のように渦を巻き周囲の全てを切り裂いていく。

「くそつ、無差別かよっ!」

全てを切り裂く竜巻を見て、避けるのは無理と判断すると俺は素早く呪文を唱え、辺りに障壁を張る。

次の瞬間、周囲が幾つもの竜巻により切り刻まれ山の一部が丸裸になってしまう。俺の障壁も斬撃により消滅するが、同時に斬撃も力尽きたように消滅する。

「はあ、これはマジで面倒な奴に絡まれた様だな」

俺は小声で呟きながら瞬動を連発し、さっさとおさらばを。

「うふふー、みつめましたえー」

しかし無情にも俺の背後からそんな声が聞こえてきた。

野生の少女が現れた！

コマンド

逃げる。

しかし まわりこまれた！

そんな感じで、彼女に襲われていたのだ。ちなみに、綺麗に寝かせた筈の爺さんは、気がつくと同時にこれ幸いと逃げて行った。

なんかムカつく、殺しとけばよかった。

「ほーら、よそ見はいけませんえー」

「うっせえ、動物虐待女が！」

「いややわー。褒めても何も出ませんえ？」

「褒めてねーよー！」

ダメだ、この女。全てにおいて俺の常識が通じない。

「つーか、5才程度で何でこんなに闇に堕ちてんだよ。通常ならまだ保育所も卒業してねーだろ！ くそつ！

「くそつ、親の顔が見てみたい！ どんな育て方されたんだよ！」

「さつき逃げて行ったんが親ですえー？」

……まあ、彼女にも色々あるんだろう。

深くは問わない。そして、どうであっても俺にとってはどうでもいい。

それに死にたくないし、逃げるのは無理そうだ。こうなったら仕留めるしかないか。

でも、こういうタイプの奴って勝ったら勝ったでメンドイんだよなー。

このままじゃ、殺されるから仕方ないけどな。

俺は小さくため息を吐き出しながら心の中でそう決定すると、クルリと反転し彼女の方へと視線を向ける。

「あー、ようやくやる気になってくれましたん？ 嬉しいわー」

本当にうれしそうな笑み。

これが狂喜に満ちていなかったら、可愛い笑顔なのに、もったいな

いな。逃げても死ぬまで追いかけてきそうな少女に、俺は小さくため息を吐きだすと、言った。

「ああ、やってやるよ。ただ、お前が求めているようなもんは得られないだろうがな」

「うーか、やらなきゃ、鬱陶しそうだしな。」

その言葉に、彼女は嬉しそうに笑いながら俺に向かって突進してくる。

そんな彼女を見ながら、俺は素早く呪文を唱えた。

「湧きだよ！ 陽炎！」  
かげろう

俺のその声が響いた瞬間、俺たちの周辺の地面から揺らめく透明な気体が湧きで始めた。

「ざんがんけーん」

だが、彼女はそんな事は気にも止めず、俺に向かって刀を振り下ろした。つもりなのだろう。

「え？ 消えはりました？」

俺から見れば、何もない所に刀を叩きつけただけ。

でも、彼女からしたら恐らくあの位置に俺がいたのだろう。

「どうだい、俺の魔法は調子は？」

これは俺が得意としている幻覚魔法。

半径約14メートル以内の人間を問答無用で、幻惑に引きずり込む魔法だ。

これは相手に幻覚を見ているのではなく、空気そのものを揺らめかせ、書き変えているので、どんなに魔力があっても簡単に抵抗できないのが一番の特徴。

まあ、空気そのものを掻き消されてしまえば消えちまうのが難点だが、さっきの竜巻程度ならこの技は破れない。竜巻だって空気なんだからな。

「つく、そこですえー」

彼女は俺の声から、場所を特定し刀を振り下ろす。

しかし、それすらも俺の幻惑。音はだって空気の振動。

この魔法の手にかかれば、いくらでも弄れるぞ。温度も感覚も、聴覚も、嗅覚も、すべてが俺の意のままに操れる。もはや彼女に信じられるものなど残っていない。

「さっさと、ギブアップした方が身のためだぞ」

この魔法はすべてを操るが故に、対象者は自分の感覚の何一つを信用する事ができない。

立っていたかと思えば、次の瞬間には寝転んでいる　様に思  
いこむ。



突然、天地がひっくり返る 様に思いこむ。

身体が自分の意思とは違う動きをしている 様に思いこむ。

実際は、そんな事ないのだが、今起きている事が本当かどうかなど対象者には理解できない。故に狂うのだ。  
身体が。そして、心が。

「負けるつもりは……ありまへんえっ！」

せつかくの俺のギブアップのお誘いなのに、少女はそれだけ言うと、刀を振るい続ける。

その眼には狂喜ではなく、恐怖。

その心にあるのは勝利を求める心ではなく、敗北を拒む心。

揺れ動く幻影の中で、ただただ少女はめげずにただ刀を振るい続けていた。

何が彼女をそこまでさせるのか、俺には分からない。

だが、俺も自分の命がかかっている以上、ここで技を解く訳にもいかない。というか、解いたら襲ってくるのは目に見えているしな。

「くう！ そこですえー！」

一体何度目だろう。架空の俺に向って少女は刀を振るう。しかし、当然そこには俺はいない。

少女は幻惑から逃げれずにもがき続ける。それは並の胆力ではなかった。成人した人間でも5分いれば狂う世界の中で少女は、まだその瞳に意思を宿し刀を振るい続ける。

何故、10才にも満たないこの少女はそこまで出来るのだろうか。

今まで信じていた感覚が狂い続ける恐怖。  
刻一刻と体力と気力が削られ続ける地獄。  
ギブアップを求める甘い誘惑。

その全てに抗いながら少女はただ刀を振り続ける。  
消して晴れぬ幻惑の中で、少女は何を思うのか。

俺はそんな少女を見ながら煙草に火をつけると、それを燻らせる。  
少女の叫びと刀の音だけが周囲に響き続けていた。

「ふん、最後まで付き合ってやるよ」

それからもう三日が経った。

少女はゆっくり、けれども力の入った斬撃を打ち続けていた。

もはや体力はないだろう。あるのは気力だけ。

飲まず食わずで、狂う感覚の中で少女はそれでも休む事無く刀を振り続けたのだ。

しかし、それもはや限界だった。

甲高い音が響く。

その細い腕から刀が零れ落ちたのだ。

がくりと膝をつく。

もはや膝はケタケタと笑っていた。

「まだ……、負けま……へん。うち……は、……負けれ……ま……  
へ……ん……の……や……」

それでも、少女は負けを認めない。

それでも、少女はどこかへ転がり落ちた刀を探し腕を動かす。

「……絶対に……負け……ら……れ……」

少女はその眩きを遣して、その場でついに瞳を閉じた。

「はあ……、やっとか」

力尽きた少女を見て、俺は何十本目にもなる煙草を吐き捨てると、  
ゆっくりと少女に近づいた。よくもまあ、これだけ暴れ通したものだ。  
だ。

倒れている少女の頬を少し撫で、俺は呆れたように肩を竦めた。  
下手すれば、こちらの魔力が先に尽きてしまいそうだったんだから  
な。

このまま放っておいても、いいんだが、こいつの親がまた殺しに来  
ても、寝覚めが悪いしな。あー、まあ、仕方がないな。

面倒くさく感じながらも、俺は倒れた少女に向って癒しの魔法を  
かけ始めた。

その少女が目を覚ましたのは2日後だった。

草のベッドの上で寝ていた少女は目を覚ますと、自分の状況が分かっていないのかキョロキョロと辺りを不思議そうに見回していた。

そして、焚火の前で煙草を燻らしている俺の姿を確認すると、驚いた表情を浮かべる。

「……てっきり、殺されるかと思ってましたえ」

「なんだ、殺されたかったのか？」

煙草をゆっくりと肺に満たしながら、そう尋ねる。

「そついう訳や、ありませんけどー」

俺の言葉に、彼女は可笑しそうに小さく肩を竦めながら言った。

「でも、敗者は何されても文句いえまへんえ？」

「まるで何かされたい口ぶりだな？」

どこか寂しそうな表情をしながら何も答えない彼女。そんな彼女に、俺は小さくため息を吐き出した。

「まあ、いい。敗者が勝者に従うなら、俺についてこい」

「あなたにですかー？」

俺の言葉に少女は少し驚いた表情をしながら、そう尋ねた。  
そんな彼女に俺は大きく頷いた。

「ああ、人手があるには越した事ないからな。それにお前はそれなりに強い」

「それなりですかー。これでも今まで負けた事なんて無かったんですえ？」

「だったら、お前の周りが弱すぎたんだ。世界は広い。強い奴らはそれなりにいるさ」

その言葉に彼女は嬉しそうに目を輝かせる。

この少女はどれだけ小さな世界に住んでいたのだろう。

小さな世界に住んでいるが故に、強すぎる力は狂気へと変わる。  
割と良くある話だ。

彼女が狂おうがどうでもいいが、労働力が手に入るのは悪い話ではない。

「ほんまですかー？　うちより強い人ゴロゴロいはるんですか？」

「少なくともお前以上はゴロゴロいるだろうよ」

まだまだガキでしかない少女。

これから先は分らないが、少なくとも今の段階では彼女以上の人間は掃いて捨てる程いるさ。

「見せてやるよ、世界の広さを」

啜っていた煙草を焚き火の中に吐き捨て、小さく笑う俺。そんな俺を見て、少女は一瞬だけ驚いた様な表情を浮かべた。

「……それならついていきますえ。家に何か未練はありまへんしー。強い人と戦えるなら本望ですわ」

そう言っつて、俺と同じ様に小さく笑う少女。

「こつちとしても、戦闘要員が入ってくれるのはありがたいからな。まあ、これからよろしく頼む」

その笑みは憑きものが落ちた様で、今までで一番、綺麗な笑みだった。

「よろしく頼みますー。うちの名は月詠っていいいます。姓はさつき捨てましたえ」

「俺はアルベール・カモミールだ。見ての通りただのオコジヨだよ」

「ふふふ、ただのオコジヨですかー。まあええですわー。これからお願いしますね、オコジヨさん」

こつして俺は月詠は出会ったのだった。

ちなみに、旅の目的だった東洋魔術は関西呪術教会ではなく、月詠の知り合いの裏の方々から教わる事になった。

そもそもいくら結界を張ってばれない様にカモフラージュしても家の前でドンパチをしていたんだ。その殺気や気配は伝わっているだろうから、入れて貰えるとは考えてなかったしな。

まあ、そのお陰で、邪道とか言われる魔法とかも教えてもらった。結果オーライというやつだな。

さすがに剣を持った少女に追いかけて喜ぶ趣味は無い。(後書き)

カモさんが物凄くチートっぽくなりました。

ただ、いくらチートでも所詮オコジョなので、単純な力比べじゃ人間に負けません。

それはもう、完膚なきまでに負けます。

まあ、それでもチートなんですが。



突然、有名人が訪ねてきたら、そりゃ驚く。(前書き)

月詠って何歳なんでしょーね？

突然、有名人が訪ねてきたら、そりゃ驚く。

やあ、やっぱりカモだ。

あれからまた、2年ぐらい時間が経ったぞ。

今、俺と月詠はとある国の端っこで工房を構え、情報屋をやりながら引きこもっていた。

ちなみに、この2年の間も色々あった。

魔法使いの討伐依頼や、オリジナルの薬品の販売なんかで、金も腐る程手に入れたし、不老不死の研究を進め、今の所俺と月詠は不老不死っぽい力も手に入れた。

まあ、単純な細胞強化魔法と、老化因子廃絶魔法だから理論そのものは何年も前に出来ていたんだけどな。

そうそう、オリジナル魔法もかなり進化して、幻覚魔法では俺の隣に出る奴はそうそういないレベルまで達した。他にも攻撃魔法もそれなりに準備した。

まあ、もう金は腐るほどあるから戦う必要もないんだがな。

金を集めたのも、工房を買い、研究資金にする為なのだから！

とは言っても、短期間で金を稼ぎまくった所為で、金が必要にならなくなった今でも、頼ってきたりする連中がいるから困ったモノなのだが。

とりあえず、完全に引きこもっても他の連中が煩いだけなので、俺は工房を開きながら情報屋を兼業する事になっていた。

そんな事を考えている俺は、微かに地面が揺れたのに気がついた。

これはもしかしたら、月詠の奴が。

そう考えた瞬間、轟音が部屋の中にも響く！まるで隕石でもぶつかってきたかのような巨大な衝撃だった。

「月詠の奴、暴れてるな！。誰か来たのか？」

少し遠くの方で、響く轟音を聞きながら俺は首を傾げる。

まあ、いくら月詠が変な奴だからといって、いきなり誰もいない場所に向って剣を叩きつけたりはしないだろうしな。

だがまあ、今の月詠はそれなりに強くなった。ただの雑魚じゃ、一撃粉碎されるだろう。

おや、外の轟音が聞こえなくなった。

……、終わったか。

静かになった外へと意識を向ける。

月詠が勝ったか、それとも負けたか。まあ、少なくとも死んではないだろう。

あいつがそう簡単に死ぬはずないし、いくつか保険もかけてるしな。

そんな事を考えていると、扉がノックされた。

ふむ、月詠ではないみたいだな。あいつはノックなんて洒落た事は覚えてないしな。

それはともかく、ノックという事は客なんだな。

正直、面倒くさいが俺は扉の前まで移動すると、ごほんと一度咳払いをして言った。

「英雄は？」

「……赤き桜」

これはただの合言葉。合言葉を知ってるという事はやはり客なんだろう。

信用ある奴にしか教えてないしな。

俺は取り合えず、警戒しながらも、扉を開ける。

「やあ、予約は無し何だが、大丈夫か？」

扉から顔を覗かせたのは、眼鏡をかけた髭がダンディーな人間のオヤジ。

「別にうちは予約制をとってねーからな」

そんなダンディーなオヤジに、俺はそう言つと小さく肩を竦ませると部屋へと招き入れた。

部屋の中には魔法関係の道具や本がズラリと並んでいる。

知識の無い人間が見てもガラクタにしか思えないだろうが、見る人が見れば仰天する程のアイテムを取り揃えている。ほとんど、自家製の魔法具だけだな。

「、これは、凄いな」

どうやらやってきた男は、後者の様で部屋のアイテムの数々に驚きの声を洩らしていた。

「それほどでもないさ、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグさん」

「っ、……知っていたのか」

俺の言葉に、ガトウは少し驚いた表情を浮かべる。

そんなガトウに俺は小さく肩を竦めながら、何でもない事のように言う。

「生まれたてのオコジョだって知ってる名前さ。それで、英雄さんは一体なんの様だ？」

「情報と、出来れば人手が欲しい」

ふーん、情報と人手ねえ。

「元老院議員の腹黒爺さんの汚職情報と、拠点を潰す労働力って所

か

「っ!？」

俺の言葉に驚いた今度は、本当に驚いた様な表情を浮かべるガトウ。そんなガトウに俺は、また何でもない事のように言った。

「別に驚くほどの事じゃねーだろ。紅き翼の情報をそれなりに持っていたら、それぐらい分かるさ。強すぎる集団ってのは、上から睨まれやすいからな」

それも、上の意向無視で勝手に動く集団はな。

まあ、それ以外にも色々と恨みを買ってるようだしな。英雄なんて、そんなモンだよ。

言い終わった俺に、ガトウは少し目を丸くしたが、小さく笑みを浮かべると頷いた。

「ああ、その通りだ。手伝ってくれば、金はいくらでも出そう」

「良いのか、そんな事言ってる？ 俺は遠慮って言葉を知らないぜ？」

知ってたら、工房でこんな馬鹿げた研究を続けたりはしないしな。

「いいさ。それで、嬢ちゃんが少しでも安全になるんならな」

「嬢ちゃん？ 誰の事だ？」

「それは教えられないな」

ある程度の情報は知っているが、そこまで詳しく紅き翼の情報を調べた事はない。

まあ、あの戦争自体裏がたんまりとありそうだし、紅き翼の方も色々とおったんだろう。災厄の魔女とかいうのも、きな臭い話だからな。

「別に教えて欲しいとは言っていない。それで、情報と労働力だったな。情報は後で教えるとして、労働力はどの程度必要なんだ？ お前を襲った女剣士程度でいいか？」

月詠は殺されてないだろうし、仕事やればちゃんと働く良い娘だよ。

「いや、彼女も強かったが、もう少し人手が欲しい。元老院議員の拠点を襲撃するのだからな」

まあ、それもそうか。

ガトウと月詠だけだと、確かにきついかもしれないな。

だが、他の奴に手を回すのには、少し時間がかかるな。それにそれなりに強い奴となると、メンバーも武装も限られてるし。

ふむ、メンドイな。

俺は少しだけそう考えると、小さく頷き言った。

「分かった、じゃあ、俺も行こう」

「なに？」

俺の言葉にガトウはまた驚いた表情を浮かべた。その表情は明らかに、不安だと告げている。

まあ、見た目は確かにただのオコジヨだからな。

「君は強いのかい？」

ストレートにそう尋ねてくるガトウに、俺はニヤリと笑う。

「少なくとも、お前が倒した女剣士よりは何倍も強いさ」

「うー、カモはん、事実ですけどそれは傷つきますえー」

丁度、その時、ちょっとボロボロになった月詠がそんな軽口を言いながら帰ってきた。

「随分、ボロボロになったな」

「いやー、そこのおじさんが強かったんですえー。興奮したわー」

ゾクゾクしている様な表情を浮かべながらそう言う月詠に、俺は小さくため息を吐き出した。

一緒に暮らして2年だが、狂気はなりを潜めたが、残念ながら戦闘狂は治らなかった。

「また死合いましょうやー」



「……いや、遠慮しておこう。次は殺されてしまいそうだからね」  
恍惚とした表情で嬉しそうに言う月詠に、ガトウは小さく冷や汗を流しながらそう言った。

「残念ですえー」

本当に残念そうに俯く月詠。そんな月詠に、ガトウは困った表情を浮かべる。

一体、さっきの戦いに何があつたんだろうか？

「まあ、いい。それよりも、元老院議員の黒狸をつぶしに行くんだ。さっさと行こう」

「頼んでおいてなんだが、本当に大丈夫なんだろうな？」

少し不安そうな表情で尋ねてくる、ガトウに俺は肩を竦ませる。

「絶対とは言えないが、まあ何とかなるだろう」

まだ不安そうなガトウに俺は小さく笑うと、月詠に向って言った。

「さて、月詠。出かける準備をしておけ、1時間後に玄関に集合だ」  
「わかりましたえー」

自分の部屋へ戻っていく月詠。その姿を目で追いながら、まだ不安そうなガトウに俺は言った。

「まあ、信じてる。俺達『桜』は依頼されたモンは絶対に達成するのさ」

「……ああ、信じよう」

その言葉に、ガトウは少しだけ安心したような表情を浮かべていた。

突然、有名人が訪ねてきたら、そりゃ驚く。(後書き)

時系列が微妙にずれてるカモしれませんが、御愛嬌という事で。

人間より強いオコジョなどいない。(前書き)

ガトウさんのキャラが分からない。

人間より強いオコジヨなどいない。

やあ、またしてもカモだよ。

元老院議員の爺さんの隠れ家にやってきました。ちなみに、魔法世界に来てますよーっと。

目の前にあるのは汚職の塊のような屋敷。

あの中を家探ししたら、どれだけ汚い書類がでてくるだろうか楽しみでならない。

そして、目の前にいるのは物々しい数の警備兵。

全員、油断する事なく辺りを見回している。しかも、かなり目がぎらついていらっしやる。

「しまったな。どうやら、気付かれているみたいだな」

苦い表情を浮かべながらそう呟くガトウ。まあ、通常こんなに物々しい警備は行わないからな。

そんなガトウに、俺は特に気にした様子もなく肩を竦めた。

「まあ、完璧には気付かれてないだろう。多分、向こうの情報とし

てはあんたがここを襲うかもしれないという情報だからな」

それでも紅き翼の一人に狙われている以上、警戒はするだろうがな。

「あー、早く闘やりたいですえー」

ガトウと俺で喋っている後ろで、既に刀を抜いている月詠は、嬉しそうに笑顔を浮かべる。放っておくと、そのまま突っ込みかねないな。

それにこの数相手にするのは、正直面倒くさい。数つてのは、集まれば厄介だしな。

取り合えず、雑魚はあの手で行くか。

俺は心の中で襲撃プランを決めると苦い顔をしながら煙草をふかしているガトウに向かって言った。

「おい、ガトウ。煙草吸うなら、こっちを吸え」

俺はそう言って、一本の煙草を取り出した。

「なんだ、この煙草は？」

「えー、あの方法使うんですかー？」

どんな作戦か理解したのか月詠は文句を言ってくるが、華麗にスルー。

戦闘なんて結果さえ勝利で終われば良いんだよ。

「これは空気中の魔力を体内に還元して、身体を自然回復させる俺秘伝の煙草さ。それに、体内の毒物を浄化する能力もある。効果は30分」

「何でそんなモノを俺に？」

疑問符を浮かべているガトウに、俺はニヤニヤと笑いながら言う。

「まあ、取り合えず吸えって」

そう言っただけ俺は無理やり煙草をガトウの口に突っ込むと火をつける。

「おっ、これは……いいな」

一度、煙草の煙を肺の中に入れ、ガトウは美味そうにそう言った。

「だろ。俺の特別製さ、味も格別」

さて、準備は整った。

俺は月詠の方を見ると、懐から取り出した俺特性の飴をなめながら残念そうな表情を浮かべていた。

「そんな顔するな。強いのは少しぐらい残しとくからよ」

「おい、カモミール。お前は何をする気なんだ？」

訳が分からないと言いたげなガトウに俺は小さく笑うと、俺も自分の煙草を取り出し、火をつけた。

ふうー。

肺に煙を見だし、外へと吐き出す。

すると、通常以上の煙が口から外へと出され、俺の周囲を包み込む。

煙は空気へ溶けることなく、俺の回りを漂い続ける。

その煙を目にしながら俺はまた煙草の煙を肺へと満たす。

それを何度か繰り返すと、俺の身体が完全に見えなくなる程に濃い煙が俺の周囲を包み込んでいた。

「おい、何する気だ？」

煙たくなっていく周囲の様子にガトウは焦ってそう尋ねてくる。  
下手したら隠れてるのがばれかねないからな。まあ、そんなへまはしないが。

「まあ、見てなっつて」

俺はそう言うと、呪文を唱える。

「集束せよ。魔力を秘めし煙よ。その形は人となれ」

呪文を唱えた途端、ただ辺りを漂っていただけの煙がどんどんと俺を包み込みながら集まり、形造られていく。

そして、ほんの数秒で完璧に形が整えられる。

「その姿は……人間？」



俺の姿を見て、ガトウが驚きながらそう呟いた。  
まあ、驚くのも無理はない。

今の俺はだいたいガトウと同じぐらいの身長をし、20代ぐらいの眼鏡をかけた、知的眼鏡のカッコいいお兄さんになっているのだ。俺はコキコキと首を鳴らし、調子を確かめながら頷いた。

「その通り。煙を集めて人の形を作る魔法さ。触れる事も出来るし、完全に形造られてるから、腕を切られれば血が出るし、何より見破られない」

まあ、それでも煙だからこの身体がいくら傷るけられても、死なないんだけどな。

「凄いな……、だが、何で人間の姿に？」

「オコジヨのままなら舐められるだろ？」

俺はそう言つてぴょんつと、空を飛び、警備兵の皆さんがいる場所へと着地した。

後ろでガトウがなんか慌てたように叫んでるが無視無視。

ちなみに、月詠も俺と同時に飛んで隣へ着地している。

「なっ、何者だっ!？」

スタツと着地すると同時に声を荒げたのは、警備兵の隊長と思われる人物。

それなりの風格と、それなりの装備、そしてそれなりの強さを持つているのは明らかだった。

「さあ、何者なんだろうねー？」

油断なく睨みつけてくる隊長さんに俺は軽い口調でそう言い、煙草を吸う。

「まあ、取り合えず襲撃しにきたお前たちの敵ではあるんだけどねー」

俺はのんびりとそう言いながら煙を口から吐き出した。月詠は俺の隣で、へらへらと笑っている俺を見て小さくため息を吐き出していた。

「なっ、何だと!? では、紅き翼もいるのか!？」

おーおー、めちゃくちゃ動揺しなさってる。

まあ、いきなり出てきて敵ですよー。何て言われても普通は驚くわな。それも不敵な笑みを浮かべている奴だからな。

「魔法の射手っ!」

おう、そんな事を考えているうちに、一人がいきなり攻撃してきやがった。飛来してきた一本の光の矢に突き刺される俺。

撃ってきた奴は兵士の一人。突き刺さった姿を見て、ニヤリと笑うが、残念ながらこの身体は煙で出来ているため、突かれても切られても痛みなどない。

「な、何故生きているっ!？」

心臓を突き刺されて生きている俺を見て、驚く兵士たち。しかし、俺はそんな事を気にせず、煙草を燻らす。

「何やってるんだ、カモミール！」

そんな事をしている間に、後ろから慌ててようにガトウがやってきた。つーか、そんなに簡単に本名呼ぶなよ、バカ。

「おつ、お前は！ ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ！」

ガトウの登場に、警備兵は更に驚きの表情を浮かべ、近くにいた隊長の部下と思わしき警備兵がリモコンのスイッチの様なものを押した。すると、屋敷全体にブザー音が鳴り響く。

そして次の瞬間には、すぐに出てくるわ、出てくるわ。

総勢200人は下らない数の警備兵が屋敷の中から出てきた。

一体、どこにあれだけの数を収納していたんだろうか？

それに出てきた連中の中には、それなりの実力を持つ奴らもちろほら存在している。

ふうー。

俺はそんな状況を見ながら、のんびりと煙草の煙を吐き出した。白い煙が口から吐き出され、空へと昇っていく。

「貴様！ 悠長に煙草なんか吸って、我々を舐めているのか！？ いや、それ以前になぜ生きている！？」

「いやいや、舐めてなんかいないよ?」

俺はそう言いながら、再び煙を吐き出す。

煙は先ほど人型に収縮した時と違い、しばらくすると大気へと融けていく。

「だったら……、煙草……、な……、ど……」

何か言いたそうにしながら倒れる警備兵の隊長さん。

しかし、最後まで言い切る事が出来ずに眠る様に倒れてしまった。

先ほど出てきた、200人の警備兵さん達も同様だ。

本当に呆気ない程、簡単に倒れこんでしまった。

そんな様子を眺め、俺は煙草を吸いながら聞いている筈もない隊長さんに向かって言った。

「別に舐めてないさ。

煙草を吸っていたのは、俺の作った毒薬を大気に混ぜる為。

君たちの前に姿を現したのは、君たちをおびき出し、一気に仕留める為なんだから」

俺は再び淡々と言いながら煙草を吸った。

俺はオコジョである以上、単純な力比べなら人間に負ける。

魔力量も通常の魔法使い以下でしかない。

そんな中で力比べをすれば、100%俺は負ける。オコジョ

そもその体格が違うのだから、それは仕方がない。

なら、俺は技で攻める。  
そして、俺は策で攻める。

一気に大量の人間を向こうか出来る方法があるなら、それを使うさ。

これで、大分無力化できたな。

「……凄い効果だな」

「臆病なモンでね。敵を無効化できるなら、その方法を使うさ」

おそらくこの屋敷の周辺はすでに俺の放った毒があふれているだろう。まあ、大気と混ざり合う事で薄まってしまっから毒自体は後1分も持ちはしないだろうが。

ちなみに、俺が渡した煙草はこの毒を無効化する為のもの。月詠の飴も同じ効果を持っている。

「殺してはないのだろ？」

ガトウの言葉に、俺は頷く。

「ああ、一週間ほど寝てもらっただけだよ」

変に殺して恨みを買つのもばからしいしな。

「うー、全部眠らしたら、私が倒す分がないやないですかー」

さっきから黙って見ていた月詠が頬をぶくつと膨らまし、怒った表情を浮かべながら言った。

「そう言うなよ。相手は腹黒狸だ。一番強い手札は、自分の周囲においてる筈だ」

多分、一筋縄じゃいかない相手がな。

「だろうな」

俺の言葉にガトウは頷く。

「まあ、取り合えず入ってみれば分かるさ」

俺はそう言うと、屋敷の中へと足を踏み込んだ。

ガトウさんは基本空気です。

「何も無いなんて、随分と余裕だな」

屋敷の中に入った俺達だったが、中には畏どころか、敵の一人もいなかった。

「ほんまに強い敵さんいはるんですかー？」

何も無い事にご機嫌斜めなのか、頬を膨らませて文句を言うてる月詠。俺は、そんな月詠の頭を撫でながらあやすように言う。

「それは間違いないさ。あの腹黒狸はここにいるのは信用できる筋からの情報だし、事前に転移魔法はレジストしているからな。

それに、もしいなかったら、今度死合い相手を用意してやるから」

「ほんまですかー？」

俺の言葉に目をキラキラと輝かせる月詠。なんとまあ、現金なものだ。

「どつやら、ついた見たいだな」

俺と月詠が喋ってる間に、どうやら汚職の塊である部屋へと着いた。

おうおう、随分と立派な扉だ事。国民の血税がこんな所に使われるなんてねー。

まあ、俺は払ってないし、別にいいんだが。

それにしても、扉の向こうから凄い邪悪な気配がむんむんと感じる。どうやら思っていた以上の使い手がいるらしいな。予想の範囲内だな。

「あーん、ビンビン感じますえー。この扉の向こうに、強い人がいはるはずですよー」

月詠もそれを感じるのか、嬉しそうに身体をくねくねと動かす。静かに俺がやった煙草を燻らすガトウ。

とりあえず、全員やる気は万全らしい。

「さて、蛇が出るか、鬼が出るか」

俺は二人を見渡すと、そう呟いて扉を開けた。



あー、感じますわー。

この扉の向こうから、向こうからピンピンと身体の芯から火照らす、きつつい殺気が。

「さて、蛇が出るか、鬼が出るか」

人間バージヨンのカモはんがそう言っつて扉を開けた。

扉は何の違和感もなく開く。畏も何もありません。

それほど、安心できる強者が中にいるんでしょうな。あー、ゾクゾクしますえー。

「ふむ、来客の予定はなかったはずだが？」

中はそれなりの広さの部屋に、禿げたオジサンはこっちを向いてニヤニヤと嫌らしそうな笑みを浮かべて、そう言いました。

それに、そのオジサンに従う様に5人のフードを被った人間がいらっしゃりましたー。

どうやら、この5人がすごい殺気を醸しだしてはったんやろーな。

「さて、議員。何か言いたい事はあるかい？」

オジサンの言葉を無視してそう言いながら煙草を燻らすカモはん。

ちなみに、あの煙草は睡眠薬なんて無粋なもん入りの奴やなく、普通の煙草やで。

「ははは、これから死んでいく人間に向って何を言えと？」

「そうだな。お前の遺言とか、そんな感じでいいんじゃないか？」

詰まらなそうにそう言いはるカモはん。そんなカモはんに、オジサンは吐き捨てるように言った。

「はんつ、戯言を」

「残念。できたら話し合いで解決したかったんだがな」

そんな事微塵も思ってはらへん癖に本当に残念そうな表情を浮かべるカモはん。

そして、そんな残念そうな表情のまま悔しそうに煙草を捨てた。

ほんまに流れるような自然な動き。

話し合いで解決できへんから、仕方なく戦闘準備を整えようという感じの動きで、カモはんは煙草を捨てはった。

そして、その瞬間、地面に煙草が落ちる前にその煙草が思いつきり爆発した！

爆発した瞬間にうちとカモはんと、ガトウはんが飛び出る。

あまりにも自然な流れやったから、相手も反応しきれへんかったらしく、5人ともローブが破れていた。

どうやら、ローブに防御魔法をかけてたらしく、その限界が来てローブが破けたらしい。

カモはんとしては、一人も倒せなかった事は残念なんやろーけど、うちとしては大歓迎や。

さっそく抜いた刀で5人のうちの一人に向って思いっきり切りかかる。

「ざんがんけーん」

「させませんよ！」

うちの一撃を一人の男が細長い独特の剣を弾き飛ばしはりました。ローブが脱げた男は、細身の優男でうちの刀の側面を突いて、力の方向をずらしはりました。

「やりはりますなー。さあ、死合いましょー」

うちはそう言った後に、ちょっとだけ視線をずらしカモはんとガトウはんの方へ視線を向ける。

すると、ガトウはんの方に3人。  
カモはんの方に1人いはりました。

ちなみに嫌らしい笑みのオジサンは爆発に目を回して気絶してはりますー。

「いややわー。ガトウはん、モテモテやん」

「そりゃそつさ。紅き翼のメンバーだからね」

「あー、そう言えば、そんな設定でしたなー」

「設定って……」

うちの言葉に言葉に小さく苦笑しながら、優男の人は内に向って剣を突いてくる。

その速度はまさに達人。

うちに踏み込む隙を与えへん、剣の壁。無理に踏み込もうとしたら、カウンターの餌食になってしまう。でも、踏み込めへんねやったら。

うちは一歩下がると刀を振るう！

「ちょーざんくうせーん」

刀の先から気が飛び出し、優男に向って飛んでいく。飛んでいく刀の気を、優男はは何度か突く事によって弾き飛ばした。

「やりますなー。じゃあ、次はこれでどうですかー？」

うちはそう言ってもう一度刀を振るう。

「ちょーざんくうれんせーん」

うちは目にも止まらない速度で刀を振るい何百発の気の斬撃を飛ばした。

一発一発が必殺の威力を持った斬撃が、あらゆる角度で優男はんを狙う！

「つく……」

優男はんは小さくそう洩らしながらも全部弾き落そうとする。

「せいっ！」

そんな掛け声と共に、うちの放った超斬空連閃を全て弾き飛ばした。

そやけど、気を取られすぎです。

「らいこーけーん」

「しまったっ！」

優男はんは何か言いはりましたが、うちは特に気にせず気を刀に集中し、一気に振り下ろした。

「つくっっ！」

優男はんは必死に追撃しようとしはりますが、遅すぎます。うちの斬撃に飲み込まれ、遠くへと弾き飛ばされました。

そこにうちは更に追撃で、超斬空連閃を飛ばした！

轟音と共に、優男はんは更に飛ばされ、壁にめり込んでしまいました。

しばらく、刀を相手に向けて反撃に備えてましたが、どうやら動く気配もないので、うちは刀を納めました。

ちなみにめり込んでやる優男はんは気絶はしてはりますが、五体満足でした。結構丈夫やな！。

相手は中々強かった。確かに心躍る死合いが出来た。

……でも。

「でも、こんなもんですか！。

カモはんの足元にも及びまへんな！」

でも、満足できまへん。

やっぱりうちを満足させれんのは、カモはんだけやな！。

あー、早く帰ってカモはんを襲いたいわ！。

ガトウさんは基本空気です。(後書き)

というわけで、月詠視点でしたー。

戦隊モノの最後はやっぱり巨大ロボに限る。

やあ、カモだ。

議員の屋敷に突撃して、5人組のうちの1人をさつさと倒したカモだ。

こいつはまあ、それなりの使い手だったけど、しょせんそれなりだったな。

最初に月詠に会った時に使った、幻覚魔法で一撃ダウンだ。13秒はもったんだがな。

おや、月詠の方も終わったみたいだな。

後はガトウだけだが、まああいつも腐っても紅き翼の一員だからこの程度相手でも余裕だろう。

「カモはん、早いですなー。もう倒しはりましたん？」

刀をしまった月詠がこっちへとやってくる。

何だか、無駄に火照った表情をしており、今にもこっちに襲いかかってきそうだ。

「まあ、こっちのもそれなり程度の腕でしかなかったからな」



そんな事を喋りながら俺はもう一本煙草を吸い。  
煙を吐き出す。

今回は特に無粋じゃない、普通の煙草。まあ、魔法の草で造られてはいるんだがな。

しばらく煙草を吸っていると、5本程吸い終わった後にガトウの方もようやく最後の一人を倒し終えた。

「ようやく終わったか、ガトウ」

「早めに終わったなら、手伝ってほしかったんだがな」

どこか恨めしそうに言うてくるガトウを華麗にスルー。

「さて、それじゃあ。」

汚職の証拠探しでもするか」

俺はそう言うと、適当に部屋の書類棚をあさり始める。

これで証拠を見つけりゃミッションコンプリートだ。

そんな俺の行動に、ガトウも少し不満げな表情をしながらも、黙って家探しを始める。

「慣れてるな、ガトウ」

「紅き翼の時代に似たような事は散々したからな」

テキパキと作業をしながら、どこか懐かしげにそう言うガトウ。その表情は楽しそうな笑みを浮かべていた。

「まあ、さっさと見つけて帰るか」

俺とガトウはそういつて家探しを続ける。

その時、初めに異変に気がついたのはやる事もなく、家探しをしている俺たちを見ていた月詠だった。

「カモはーん、なんかちょっとヤバそうですねー」

のんびりとした口調でそう言ってきた月詠に俺は何事かと思つて振り返る。

すると、先ほど気絶させて簀巻きにしておいた5人組の身体が光り始めていた。

そして5人組の身体はふんわりと宙に浮き始いた。

何が起きた？

気絶したり、負けたりしたら発動する魔法の類か。

だが、負けてからタイムラグが結構あるな。中途半端すぎる魔法だな。

全身から発光している5人組は部屋の四方へ散らばり、その癖、意識のないぐったりとした表情を浮かべていた。

「やはり我々を倒したか、紅き翼のガトウ・カグラ・ヴァンデンバ  
ーグ」

「俺達も手伝ったんだがな」

蒼白した表情のまま、無機質な口調でそういう5人組の中の一人。何かされても面倒臭いので、俺は喋りながら攻撃を仕掛ける。

しかし、その攻撃は5人組のうちの1人の魔法の射手によって打ち碎かれる。

「……つちい」

やはり、威力がないか。

打ち碎かれた事に俺は舌打ちをしながら、更に新しい魔法を仕掛けようとする。

「どうやら相手の魔法は普通の魔法じゃないな。恐らく命を引き換えにした召喚魔法の類か！」

倍々方式で膨らんでいく魔力。

元々、それなりな使い手だった5人が、一人一人何十倍も魔力を膨らませていく。

これは、うざったい事この上ないな。

面倒くさい事になる前に空中に指でルーン文字を描き、魔法を形成する。

その瞬間、雷が5人組に向かって飛んでいく。

速さ重視の即効魔法だ。

狙いは5人組、ではなく構成されていく魔法陣！

更にルーン文字を描き続け、炎や氷が相手に向って飛んでいくが、全て弾かれる。

っち、やはり、速さ重視の牽制魔法じゃ無理か。

魔力そのものが少ない俺だと、牽制魔法じゃ威力が足りない。

っーか、ガトウも呆けてないでさっさと攻撃しろ。

俺は幻覚魔法が専門で、攻撃魔法には一瞬の溜めがいるんだよ！

「我が命をささげる。故にいでよ、我が敵を滅ぼしつくせ」

そんな事をしている間に、5人組の魔法は終盤に近付いていた。

「我が名はサン・スケン」

五人組の一人がそう名乗る。

「我が名はサイゾン」

続けてもう一人が名乗る。

「我が名はジーン・ライアン」

更に続けてもう一人。

「我が名はセイン・カイン」

「我が名はツール・ヒール・メーン」

五人揃って？

「「「「「隠れ忍び五人衆！」「」「」「」

おー、綺麗に揃ったなー。

つーか、ジャパニーズ・忍者なのか、こいつら？

「「「「「いでよ、最強最悪の邪神よっ！」「」「」「」

そう言った瞬間、五人の身体が光に包まれる。

そして、光の中から巨大なロボットに似た悪魔が飛び出した！

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!

「っ！？ 何だ、あれは！？」

ガトウが驚きの表情を浮かべていた。

全長が10メートルはありそうな悪魔。

なんか城をモチーフにしたような巨大な悪魔。

おー、最強最悪の邪神なんていう御大層な名前に恥じない大きさ

だな。

そんな悪魔が唸り声を上げ、屋敷を破壊しながら現れる！  
俺たちは慌てて、窓から外へと避難すると、完全に召喚されきつた悪魔はこちらを見下ろしていた。

その悪魔の顔はただ凶悪に歪み、その悪魔の力はただ恐怖を撒き散らす。

うわー、殺気がビンビンのガンガンだよ。  
完璧にこつちを敵視してらっしゃるー。

まあ、そういう契約でこつちの世界に来てるんだから、仕方ないだろうけどな。

俺は冷静に観察をし、ガトウは驚きの声を上げ、月詠は嬉しそう  
な笑みを洩らす。

「いきますえー！」

堪え切れなかったのか、というか堪える気がなかったのか、俺が  
話をする間もなく月詠が問答無用で月詠が刀を振るう。

「らいめーけーん」

しかし、その一撃は悪魔の分厚い装甲で弾かれる。

……まじか。



楽しそうに、本当に楽しそうに笑いながら月詠は悪魔に向って斬撃を飛ばし続ける。

しかし、魔物はそんな事は気にせず俺に向って拳を振り下ろしてくる。

速い。避けきれない。

こちらら、ただのオコジョだつての！

オーバーキルすぎる攻撃を逃げ切れない事に心の中で舌打ちをすると、小さく唱える。

「発動『箱庭の時間』」

その瞬間、俺の身体が宙に浮き、周囲が突然遅くなる。

これはマジックアイテムの中に入ると1時間が1日になる水晶の原理を応用した技で、宙に浮いている間、外の世界で俺の体感時間で1時間が世界の1日になるという反則気味の裏技だ。

まあ、外の空間と中の空間を切り離す事によって、時間変化を可能にしているので、外からの接触、つまり相手に触れられるとか、地面に足がつくとかした瞬間にこの魔法は解けてしまうという弱点もあるけどな。

ちなみに、唱えた魔法が相手に当たっても魔法は解ける。

回避専門の技だ。

俺はクルリと反転し、のろのろと迫ってくる拳を避けると、一度







「力を溜めきましたえー、カモはん！」

そろそろやばくなってきた時に月詠から、そんな声が飛んで来た。

「終わらすには丁度いい時間だ。月詠、やってくれ」

「はいな」

俺の言葉に、月詠は頷くと刀を空高くに掲げ叫んだ！

「しゅうそーくらいこーけーん！」

そして、刀を力強く悪魔に向って振り下ろした！

轟音が響く！

刀に集められた気が雷の如くバチバチと火花を散らしながら、悪魔を一刀両断の元に真っ二つにした。

相変わらず、物凄い威力だな。あの集束雷光剣は。

力を溜めるのに時間がかかるのがネックだが、広域殲滅型の攻撃を一匹に向けた攻撃だと、あの悪魔も一撃かー！。

「うふふー、ええ感じじゃわー。こんなに心躍ったんは久しぶりやー」

刀を振り切った後、真っ二つになった悪魔を見上げて、月詠が恍惚とした表情を浮かべる。どうやら、巨大な獲物を切ってそれなりに満足してくれた様だ。

「よーし、よくやったぞ、月詠」

俺はそう言っつて、月詠の頭を撫でる。

そんな俺に、月詠はどこか恥ずかしそうにしながら首を振る。

「もー、いややわー。子供やないんやからー」

それでも、どこか嬉しそうな月詠に俺は小さく笑うと、巨大悪魔の所為で崩壊した屋敷を見渡しながら俺は言った。

「さて、悪魔退治も終わった事だし、ガトウを起こして、さっさと仕事するか」

まあ、この瓦礫の山の中からの家探しは骨が折れそうだけどな。

戦隊モノの最後はやっぱり巨大ロボに限る。(後書き)

チートはカモ君ではなく、月詠さんかもしれない。

それにしても、ガトウさんの空気っぷりが異常。  
いや、私はガトウさん好きだけどね!?

**ガトウさんの友達100人計画 (前書き)**

書き溜めていた分はすべて消化。  
こっから、牛歩更新始まるよ！。

## ガトウさんの友達100人計画

やあ、再びカモだ。

議員の家を探しまくって汚職の証拠を探し出し、なんとか政府へと報告する事が出来たカモだ。ガトウもこの結果に満足した様だ。

「世話になたつたな」

あれから二日。

何とか仕事を終えた俺たちとガトウは、仕事の報酬やら何やらの事務作業の為に俺の工房へと戻っていた。

工房にいるのは、俺とガトウ。

月読は、自室で刀の手入れをしている。

「ああ、全くだ。お前は全く頼りにならなかったしな」

居合拳の達人だか知らないが、これまでの話では居合拳のいの字も出てきてないぞ。

「それは……すまないと思っている。俺も随分と鈍ったものだ」

小さく頂垂れながらそう答えるガトウ。

まあ、頭使う仕事ばかりしてりゃ体力が落ちるのは仕方がないか。

「これからは、ちまちま鍛えておけよ。嬢ちゃんって奴を守るんだろ」

「ああ、そつだな」

俺の言葉にガトウは何か嘔みしめる様に頷いた。

「まあいいさ。何かあれば、また来な。今度はそれなりに割引した金額で仕事を受けてやるよ」

「いいのか？」

まあ、今回は危険手当も入れて必要以上に金も貰ったしな。

「当然だろ。少しの間だが一緒に旅したんだ。俺としては仲間ではないが、友人のつもりだぞ？」

「……友人。おおおお、友人か！」

その言葉にガトウは何故か凄く嬉しそうな表情を浮かべてそう言った。

何だ？ 変な事言ったか？

そう言えば昔調べた情報で、ガトウには紅き翼のメンバー以外に友人がいらないらしいという話を聞いたのだが、本当だったのか？

つーか、おっさんがそんなに目をキラキラさせて嬉しそうな表情



するな。自分のキャラを考える。

一応、ダンディーで売ってんだろ？ 登場してから、一度もダンディーなシーンは無かったけどな。

しかし、まあここでそんな事を言っても仕方ないので、俺も小さく笑うと頷いた。

「ああ、そうだ。友人だよ」

あんまり深く考えずに言ってしまったが、まあいいだろう。実際、ガトウは渋めで寡黙な感じだが、いい奴である事はここ数日で実感した。

俺の言葉に、ガトウは『友人……、ああ、良い言葉だよな』とかうわ言のように呟く。

いや、なんか、すでに友人を辞めたくなっただが、まあいいや。

「そうだ、ガトウ。お前に渡しておくもんがあった」

俺はそういつて工房を少し探り、刀を模した小さなワッペンのよ  
うなモノを取りだした。

「……へ？ 何だそれは？」

ようやくトリップから抜け出したのか、取り出したワッペンをし  
げしげと見つめるガトウ。

そんなガトウに、俺はワッペンを投げて渡した。

「これは、簡単に言えばちよつと特殊なマジックアイテムさ。お前が死ぬ 寸前に、所有者の意識を奪い、その身体を保存して、3日後に怪我、病気、呪いの類から完全回復させてくれる優れモノだよ」

まあ、いきなり頭部を吹っ飛ばされるなどの、即死系だと意味をなさな  
いが、じわじわと死んでく系には絶大な効果を発揮する。

「何っ!? そんなに凄いモノなのか!？」

俺の説明にガトウはしげしげと珍しそうにワッペンを見つめる。

「まあ、その分、回復した後3日は目を覚まさずに、目を覚ましたら後3 週間は物凄い苦痛が全身を襲うという欠点つきだが、死ぬよりはましだろ」

「……、物凄い苦痛とは？」

「具体的に言うと、物凄い苦みの事だよ。死ぬよりはましだろ？」

「……、まあ、そうだな」

おっかなびつくりポケットにワッペンをしまい込むガトウ。

「ちなみに、それは装備してなくても勝手に所持者を回復するから使わな  
い時はどっか別の場所に直しておくのがいいぞ」

「……、そうだな」

ケラケラと笑いながらそう忠告する俺に、ガトウは冷たい汗を流していた。

「そろそろ、俺は行くか」

しばらくガトウと話したり、月読がガトウと戦ったり、俺が月読と戦ったり、月読とガトウが戦ったり、ガトウと月読が戦ったりした後で、ガトウはそう言った。

「そうか、まあ頑張れよ」

ちよつとボロボロになっているガトウを俺はそう言ってを送り出す。

「ああ、またしばらくしたら顔を見せるさ。なにせ『友人』なんだからな」

物凄く『友人』という部分を強調しながらガトウはそう言う。

まあ、それだけ友達が欲しかったんだろうな。俺としては、別に英雄のガトウと繋がりが出来るなら、それでいいんだがな。

「それじゃあ、友よ！ 再び会おう！ 今度メールする！」

今までで一番、良い笑顔を浮かべ思いつきり手を振りながら去っていく たガトウ。

「……変な人でしたな」

去っていった後、月読がポツリとそう呟いた。

「うん、まあ。強い人間は総じて変人が多いんだよ」

月読もそうだしな。

今まで出会ってきた奴らの大半も変人だ。変人じゃない奴は、すぐに死ぬか隠居するかだしな。

平和な場所があるのに、死ぬか生きるかの世界にとどまるなんて、変人 じゃなければやってられんだろう。

「そうですねー。カモはんもそうですねー」

俺は人間じゃねーけどな。

どこか嬉しそうにそう呟く月読に、俺は苦笑を洩らしたのだった。

そうそう、ちなみに、ガトウは次の日に用も無いのに顔を出してきやがったので、叩きだしてやた。

どんだけ友人に飢えてんだよ。バカだろ。



ガトウさんの友達100人計画。(後書き)

さあ、皆もガトウさんと友達になろう！

暇を持って余す、月詠さんの日常的な何か。(前書き)

ちよつと閑話休題的な日常編です。

暇を持て余す、月詠さんの日常的な何か。

「カモはーん、朝ですえー」

……うーん。

眠い。すんごく眠いぞ。

「カモはーん、起きてくださいなー」

誰かが俺を呼んでいる？

だが、その声に反応するよりも、惰眠を貪る事を選択する。

「もー、はよ起きてください」

うん、呼んでるのは月詠か。

……、月詠っ？

、ハッ!？



「ざんがんけーん」

意識が完璧に覚醒すると同時に、俺はその恐怖感に身を任せたまま跳ねるように転がる。

それと同時に、俺が一瞬前までいた場所に無常な程に力を込められた刀が振り下ろされていた。

「あー、起きましたかー？」

「ああ、もう少しで目が覚めない場所に行きそうだったがな」

月詠の言葉に、俺は皮肉気に答える。

「目が覚めたんなら、それでいいんですえー」

しかし、そんな言葉は気にも留めず、地面に刺さっていたお玉を抜く月詠。

力は完璧にコントロールされているのか、斬岩剣の癖に無駄な破壊は一切せずに地面にぼっかりとお玉の形の穴が開いていた。

「ほーら、早く起きてくださいな。朝ご飯ありますえ」

まだ寝ころんでいる俺の首根っこをむんずつと掴むと、月詠はそのままキッチンへと移動する。

朝ご飯という言葉聞いて、俺は改めて月詠の姿を見る。

フリフリなエプロンをつけ、右手にお玉、左手にフライパンを持つ月詠。その姿はどこか料理の美味そうな新妻の様であった。

あつたのだが、

「さあ、カモはん食べましょー」

ぽいつと俺は捨てるようにテーブルに置かれ、月詠は反対側の椅子へと座りそう言った。

「ああ、食べようか」

そんな月詠に、俺はそう同意して近くにあつたハンバーガーを手を取った。

綺麗に包装された包みを器用に前足で取り、俺の顔よりも大きいハンバーガーに齧り付いた。

うん、いつも通りのジャンクフードの味だ。

つか、大きすぎる所為で、一口目だとパンしか食べられない。

正直、パンだけだと美味くない。

もつとちゃんとしたモノが食べたいです。

ちなみに、このハンバーガーは俺が信頼を置くシヨップで作っているハンバーガーだ。

「なあ、月詠？」

俺はもぐもぐと咀嚼しながら、月詠に声をかけた。

「何ですえー、カモはん？」

「何故、料理を作らないのにエプロン姿でお玉とフライパンを装備

しているんだ？」

「雰囲気ですわー」

あー、雰囲気か。

良く分からないが、別にいいや。

そう言えば、月詠は料理が出来ない訳じゃない。  
むしろ、結構美味い。特に和食が得意。

だが、残念ながら彼女は戦闘以外の事はぼわぼわなので、稀にしか料理を作ってくれないのだ。

非常に残念だ。

そんな事を考えながら、大き目のピクルスと格闘とする。

くそっ、口の中がピクルスでいっぱいだよ。

どっかでオコジョ専用のバーガーって作ってくれねーのか！？

「そう言えば、カモはんは今何を研究されてはるんですかー？」

黙々とピクルスを食べている俺に、月詠が尋ねてくる。

「んー、異空間に収納するアイテムの改造。どうも使い勝手が悪くてな。オコジョ用に小さくしたのは良いが、その分ガクツと収納量が減ったからな。ついでに異空間に関するモノ全部の研究を行うつもりだ」

オコジヨの身体になってから困ったのは、魔力うんぬんかんぬんではなく、身体の小ささゆえの弊害である。

物を持ち運ぶのもその一つだ。

このオコジヨサイズだと、煙草も満足に持ち運ぶ事が出来ない。

設計されてるモノ全てが人間サイズで、必要なモノはオコジヨの国から取り寄せなければならぬので面倒くさい上に無駄に金がかかる。

何故、無駄に金がかかるとオコジヨの国は治安が悪く、商人も腹黒狸が多いので、あそこから何かを取り寄せるといのは護衛代とか中間マージンとかで原価の3倍近く取られるからだ。

そんなバカ高いのに消耗品や嗜好品を買っ気にはなれない。

そもそも、オコジヨという存在は人間にとって可愛い存在と認識されているが、犯罪者をオコジヨにしているという事実もあり、オコジヨは基本悪人が多い。

悪人でなくても、目的の為に他人を巻き込む事に一切躊躇する事をしないのがデフォルトなのだ。

というか、そういう生き方をしなければ満足に生活する事は出来ないのだ。

その癖、使い魔になるのがオコジヨの幸せだとか言ってるのだから馬鹿げてるんじゃないか言いがたい。

まあ、基本ポジティブ&楽観的な魔法使いにとっては丁度いい、存在なのかもしれないが。

「ほえー、また収納系のアイテム造ってるんですかー。  
なんか、似たようなんいっばい造ってまへんでしたかー？」

「まあ、収納アイテムはいくらあっても困らないしな。今、俺が造  
ってるのは、魔法陣を植え込むタイプで、右手に植えつける事によ  
って、いつでも出し入れ自由だ」

ちよつと自慢げに俺は言った。

魔法陣は小さければ小さいほど、書きこむ要素が少なくなるので、  
複雑な異空間魔法を固定化するのは大変なのだ。

「ほえー、よう分かりませんえー」

聞いてきた癖に、もう興味なさげにバーガーにかぶりつく月詠。  
そんな月詠に、俺は小さくため息をはきだした、またピクルスを  
消化する作業が始まる。

さて、昼になったが、俺は時間など気にせずに研究を続ける。  
が、その前にパソコンを弄り、メールを確認する。

依頼メールやら何やらがいくつか怒られてきていた。

ふむ、討伐系依頼が2件と情報調査系が3件、それとスパムが8件だな。

ちなみに、スパムはガトウからのメールである。

あいつ、2週間に一度は顔を出してくるし、毎日5通以上はメールを送ってきてやる。

どんだけ、暇なんだと言いたい。

ちょっと前に2年ほど消息を絶っていた時期があってホッとしていたが、ここ最近復活しやがった。

ただ公式だとガトウは死んだ事になっている。

本人曰く『元老院議員の監視から逃げるため』らしいが、よくわからない。

元老院の方も色々ありそうだしな。

まあ、俺にとってはどうでもいいが。

そんな事を考えた後、俺は依頼メールを読み、2件ほど依頼を受け、依頼人と会う約束をする。

面倒くさいが仕事をしなければならぬしな。

俺はそう考えた後、思考を切り替え研究を続ける事にする。

研究の内容はとても単純。

簡単な魔法陣に、文字を書く。  
文字が書けるのはスペース的に一文字。

細かく書けばいいじゃないか、とかそんな無粋な事は云わない。  
そもそも細かくなればなるほど力が薄まるし、小さい文字では異次元に干渉する事は出来ないしな。

俺はその一文字分のスペースに、実際にはない言語の幾何学的な文字を書き込む。

その文字はルーン文字の曲線があつたり、神語で使う直線的な形があつたり、多種多様な言語を詰め込んだ文字だ。

いくつもの言語の違う文字を詰め込む事によって、2次元的な魔法陣を3次元的へ、そして4次元へと転化させていく。

一瞬だけ、魔法陣が光り、微かな魔力反応を感じ始めた。

ふーむ、そんなに悪くない出来か？

ポリポリと頭を搔く。

大量の呪文を一文字に纏めるのは、とりあえず上手くいったか。  
だが、魔力消費が少し問題だな。

少量とはいええ、常時魔力を供給し続けるのはオコジョにとっては問題だな。

それに、魔力反応を外に漏れるのも問題だな……。

固定化の概念も文字に詰め込むか？

頭を搔きながら、俺は考える。

いや、これ以上複雑にすると字が潰れてしまうな。  
理論上書きこむ事は出来るが、これ以上書きこむ事は出来る。出来るのだが、これ以上書きこむと、実質てきには黒い四角にしかないだろう。

ふーむ、どうすりゃいいんだろうか。

とりあえず、容量を減らして書きこむスペースを増やすしかないか？

いや、それだと……うーむ。

ポリポリポリポリ。

「カモはーん。暇ですえー」

「知るか」

どこか遠くから月詠の声が聞こえてくる。

俺はその声に冷たく一言。

そんな俺に月詠は駄々をこねるように言う。

「どうせ、行き詰ってはるんでしょー。闘いまひよーやー」

「どうせとか言うな！ っていうか、何で分かった！」

「頭をポリポリする動作が増えたら、カモはんが行き詰ってるって合図ですえー」



そんな癖が合ったとは。  
ポリポリ。

「カモはーん、闘ってくれたら、今日の夕飯、うちが作りますえー」  
「むしろ、居候なんだから毎日作れ」

今更だが、俺がこの工房の主人であつて、月詠が居候なのだ。  
断じて、月詠が主人で俺がペットではない。

「だからー、闘ってくれたいつでも作りますえー」

「お前は本気に殺しにくるから嫌だ」

朝から斬岩剣を振り下ろされる生活をしているが、これでも命は惜しい。

別に生きる事にそれほど執着してる訳でないが、研究をし尽くさずに死ぬのは、個人的には納得いかない。

前世も研究が中途半端なまま、死んでしまった。それが心残りではない。

せつかく、新型ロボットの図面を引いてたのになー。

「カモはーん、闘りましょーやー。うちが掃除もしますからー」

「むしろ、するのが当然だろ」

掃除と洗濯もして、ご飯代も稼いで人間を養うオコジヨなんて俺

ただだろうな。

まあ、月詠は一応戦闘要員でしかないのだから多くを望むのが間違っているのかもしれないが。

「カモはーん！ やーりーまーしょーやー！」

まだ諦めずに俺の事を呼ぶ月詠に、俺は研究の行き詰りもあり、ついにイライラが最頂点に達した。

「ああ、もう煩い！ 分かった！ やりやーいいんだろ！」

その代わり、負けたらお前1カ月炊事洗濯当番やれよ」

「わかりなしたー。でも、その代わりにカモはんが負けたら一カ月うちと戦ってもらいますえー」

何だ、その地獄は？

こちらら、ただのオコジョだぞ？ 剣で刺されたら死んじゃうんだぞ？

人間の本気の気に乗せた剣をぶつけられたら潰れちゃうんだぞ？

そもそも、負け＝死亡な気もするんだがな。

そんな事を考えていた俺だが、物凄く良い笑みを浮かべる月詠に首の皮を掴まれて、俺は外へと連れ出された。

「さあ、カモはーん。楽しい闘いをやりましょー」

俺は外で面倒くさげに煙草を吸っていた。

目の前にいるのは、2本の刀を持った月詠。  
その目には狂喜がある。

通常の戦闘では狂喜が無くなったのにも関わらず、俺との戦闘には常に狂喜全開で挑んできやがる。

今吸っている煙草は大気から魔力を吸収し、自分の体内のエネルギーを潤滑させる。

言ってしまうえば、簡易版の身体強化だ。

更に吐き出した煙を集束させ、人の身体を作った。

「睡眠系の毒物なんか使ってへんでしょーな？」

息を止め、俺が吐き出した煙を吸い込まないように注意している月詠。

「使ってないって」

昔、睡眠系の毒物を使って一発勝利をもぎ取った事があったので警戒してるのだろう。

まあ、目が覚めた後に、思いつきり追いかけられたが。

「でも、何で人間の姿になるんですかー？ 小さい方が動き易いっ

ていってませんでしたかー？」

俺の姿を見て、月詠が首を傾げる。

実際、確かにオコジヨの姿の方が攪乱するのには向いてるんだけどな……。

「まあ、戦術の一つだよ」

俺はただそれだけ言って、しっかりと月詠の方を見る。

それが、戦闘開始の合図。

「んじゃ、いきますえー！」

月詠は瞬動で俺の背後に回り、一閃！

一切の躊躇のない袈裟切りだ。

だが、俺は斬撃を回避しない。

刀はすんなりと俺の身体を切り、上半身と下半身が離れ離れになる。

その瞬間、切り口からは血液が飛び出し、臓物もはみ出す。

そして、そのまま上半身も下半身も力尽きるように、俺の身体は倒れる。

だが、所詮それは煙の身体。

グロテスクな死体は次の瞬間、どろどろと大気の中に溶けていく。

そして、身体が全て無くなると、その場に俺の姿は無かった。

だが、月詠は驚かずにバックステップで下がりながら、何も無い空間に超斬空連閃を放って行く。

その攻撃は一点ではなく、その空間そのものを攻撃しているような一撃だ。

おそらく幻覚魔法を駆使して消えた俺を空間ごと攻撃するつもりだったんだろう。

「まだまだだな、月詠。そんな程度では俺は死なないぞ?」

いや、直撃したら死ぬけどね。

ここは言葉で相手を攪乱する方法を取ったままだ。

「いややわー。この程度で死ぬなんて思ってまへんでー」

いや、直撃したら死ぬって。

「じゃあ、次は俺の番かな?」

俺のその言葉と同時に、月詠のすぐ後ろに空気が収縮し人の形を作った。

それと同時に人の姿をした俺は拳を握り、月詠を殴りつけた。

しかし、その一撃は月詠の振り向き様の一閃によって弾かれる。むしろ、俺の右手が切られる。

だが、その瞬間俺の右手が突然爆ぜた！

突然の爆発に、月詠は一瞬反応が遅れる。

その隙を突く様に、俺は左手で月詠に向って殴りつける。

だが、さすが戦闘要員。

俺のパンチを見切り、少し状態を反らし、パンチを避けようとする。

通常なら完璧に避けられたらろう一撃。

だが、俺の身体は通常ではない。

月詠が避けたと同時に、俺の腕は人体の構造上ありえない方向に曲がる。

「っ！？ きゃんっ」

そんな悲鳴を上げ、俺の一撃が月詠の首へと突き刺さる。

そして、そのまま後ろへとふっ飛ばされた。

いや、むしろ自分から威力を軽減させるために飛んだのだろう。そして、オマケとばかりに俺の左手を切り落としてくれた。

おー、やるなー。

追撃はしない。

戦闘能力自体は向こうの方が高い。

下手な追撃は、劣勢になるだけだ。

地面にぶつかり、土煙を上げる月詠の方を見る。

「いやー、理不尽ですなー。こっちの攻撃が一切届きまへん癖に、そっちの攻撃は届くなんて」

土煙が消えると、そこには平気そうな表情を浮かべる月詠。  
そんな月詠に、俺は軽く肩を竦めると切られた両手を生やす。

「どうだろうな？ 別に届かない訳じゃないぞ？」

クルクルと自分の腕を回し、調子確かめながら、俺はそう言った。

「そんな訳 っ!？」

何か反論しようとした月詠は慌ててその場から離れる。

瞬間、月詠がいた地面から樹の根っこのような物体が突きでた。

その根っこはうねりながら、月詠に向かって襲い始める。

「こんなもん！」

刀を手足のように振るい、根っこを受け止める。

だが、それも罠。

本命はこれだ。

地面に意識が向いている月詠の頭の上に、薄い雲が作られる。

そして、その雲から間髪いれずに尖った針の様な電が、雨の様に降り注ぐ。

一瞬、驚いた顔を浮かべる月詠だが、一本の刀を振り回し、空からの電を弾き飛ばす。

「相変わらず、隙を見ては嫌らしい攻撃してきますなー」

どこか嬉しそうな笑みを浮かべながら、刀で根っこを撃退して、更に空から降る電を華麗に避ける月詠。

今彼女を襲っている根っこは、俺の足元から地面を這って出たモノだ。

通常の敵なら会話中のこの一撃で一発なのだが、よく反応できたものだ。

殺気とか、気配とかは完全に消したつもりだったのだが。

そして、頭の上に浮かんだのは俺の煙魔法の一つ、『雨雲』である。

あの針の様な電は一本でも突き刺さればかなりの痛みだし、更にあの電には俺特性の毒物が塗られているから一瞬でもかすれば、それで勝ち確定だ。

まあ、今使っているのは致死系の毒ではないんだけどね。

「まあ、そういう攻撃が得意だがなー」



雲そのものを切り裂き、木の根を切りつける月詠に俺はそう言った。

この木の根っこはいくら切っても、元が煙なのですぐにくつつく。そして、くつついた根っこは彼女を襲い続ける。

雲も所詮は煙。

ばらばらにされても、その雲からは終わる事のない雨が降る。

「もー、らいこーけーん！」

鬱陶しそうに月詠は雷鳴剣を放ち、煙その物を消滅させる。

「あー、そういう攻撃には弱いんだよな！」

「次はこっちから行きますえー」

瞬動を使い再び俺の元に来る。

一瞬の出来事に俺は驚いた表情を浮かべた。

その表情に月詠はニヤリと笑うと、躊躇なく刀を振り下ろした。

一切の抵抗もなく、二代目のバルタン星人みたいに真っ二つになる。

それを見て、月詠は嬉しそうな笑みを浮かべたが、次の瞬間、驚きの表情に変わった。

真っ二つになった身体は一瞬だけ収縮し、再び爆ぜた！

二度目の事だから、月詠も予想はしていただろう。切った瞬間に瞬動で逃げるつもりだったのだろうが、そうはさせない。

先ほど切られ地面に落ちた左手が月詠の足を掴んでいたのだ。

「ほえええええええ！」

爆発に巻き込まれ月詠が吹き飛ばされる。

今度は自分から飛んだのではなく、完璧に巻き込まれた吹っ飛び方だった。

だが、それで終わらせない。

吹き飛んでいく月詠に、俺はルーン文字を描き、雷撃を紡ぎあげる。

更に炎を、水を、氷を、樹を、風を、闇を、光を作り上げ、俺はそれらを混ぜ合わせる。

「八種混合！」

俺の言葉と同時に、混ぜ合わされた攻撃が月詠を襲う！

「あ……、これはあかんわー！」

どう考えても逃げ切れない攻撃に、彼女は諦めの声を上げる。

そして、彼女はせめてもの抵抗に、刀を振り上げ力いっぱい振り

下ろした。

「らいこーけーん」

二つの攻撃がぶつかり合う。

だが、俺の攻撃は威力を殺される事なく月詠に向う。

そして、その攻撃は無情に月詠を包み込んだ。

「むー、まさか最初に消えた後、カモはんが気配消して隠れてたなんてー」

とんとんとんとキツチンで何かを切る音と共に、月詠の声が聞こえてくる。

「まあ、気配を消す事は俺の得意技だからな」

「むー、幻覚魔法も煙魔法も全部得意技ですよん！」

「おー、そつだぞ。単純な攻撃系以外は全部得意だ」

俺はそう言いながら、研究の続きをする。

先程の戦闘中に新しい方法がいくつか思い浮かんでいた。

そうだな。まずは書き込む時に魔力の質を変えるか。

魔力の質を変える事によって、いくつかの文字を同時に同じ場所に描ける様に……なるかもしれない。

理論的には、だが。

そこまで完璧に魔力の質を変える事が出来るかどうかだが、ネックだ。

ちょっと前に研究した事があるが、魔力の質は人によって微妙に違う。

それが得意な魔法に影響を与える。

例えば、炎系の魔法が得意な人間と氷系が得意な人間はその魔力の質が微妙に違う。

これを上手く使えば、何とかなるかもしれないと考えた。

つまり、書き込む文字の無い様だけではなく、その時練り込む魔力も弄り、意味のあるモノへと変え、空間を更に広げる。

……ふむ、出来そうではあるな。

まあ、もうしばらく研究する必要はあるがな。

他にも色々思いついたし、それらを複合的に組み合わせると中々強力な魔法陣を作れるかも。

……うん、なかなかいい考えだ。

「カモはーん、ご飯できましたえー」

しばらく作業していると、月詠の声が聞こえてきた。

時計を見ると、三時間は没頭していたようだ。

というか、月詠は三時間も料理してたのか。

「分かったー、今行くー」

俺はそう言っていると、作業をいったん中断して、リビングの方へと向かった。

まあ、そんな感じのいつもの日常。

暇を持って余す、月詠さんの日常的な何か。(後書き)

次はついにネギ君が登場する予定。まあ、予定ですけど。

ただ、まだ原作には突入しませんよ。

なんだかんだ言っても盗みや不法侵入は犯罪。(前書き)

ついにネギ君登場ですよ！

なんだかんだ言っても盗みや不法侵入は犯罪。

やあ、力モだ。

新しい研究で少し行き詰ってしまった力モだ。  
やっぱり、完全に魔力の質を変えるのは難しい。

そんな訳で、色々と魔力に関する根本的な文献を読み漁っていたのだが、魔力の質をコントロールする秘儀が書かれた魔導書がある事を知った。

あるのはウェールズのメルディアナ魔法学校の禁書室らしい。

ふーむ、ただのオコジョでは閲覧許可は受けれそうにないな。  
裏の権力とか情報を使えば、不可能ではないが、面倒くさい。それ  
れに、こんな所で変なしながらみも作りたくないしな。

なら、忍びこむしかないか。

ちなみに、諦めるという選択肢はない。



「という訳で、ちょっとウェールズに行ってくるわ」

「じゃあ、うちもついてきますえー」

特に理由も説明せずにそう言った俺に、彼女は何の驚きも躊躇もなくそう言った。

「あー、特に面白い事無いぞ？」

禁書を閲覧しにいくだけだし。

化け物が出てくるとか、強い人間が出てくるとか、そんなのは出てこないよ？

「カモはんがいるのに、面白い事が起こらないなんてありえまへんわー」

え？ 何だ、そのフラグ発生器みたいな存在は？

キラキラした目でそう言ってくる月詠に、俺は小さくため息を吐き出す。

まあ、別に月詠がついてくる事に問題はないけどな。俺としては、月詠がついてくるのが、戦闘フラグだと思っただけだなー。

「んじゃ、さっさと行くか」

「はいな！」

嬉しそうな笑みを浮かべ、返事をする月詠の肩に俺はちょこんと乗る。

移動するには自分で歩くよりも人間の肩に乗った方が楽なんだぜ、知ってた？

「ほえー、ここがウエールズですか」

「ああ、そうだな。かなり田舎な感じだな」

辺りを見渡すが、どう見ても田舎。

まあ、旧世界にある魔法関係の場所だから変に流通が良くても困るのだろう。他の国の魔法関連の施設も、孤立した村だったりするからな。

魔法の秘匿も大変なことだ。

まあ、どうでもいいけどな。

俺はそんな事を考えながら、メルディアナ魔法学校を目指した。

「世界の書庫は俺のモノ」

「ちょっと読むのに苦労する書庫ですけどねー」

鼻歌を歌う俺に月詠はどこか可笑しそうにそう言った。

そして着いたぜ、メルディアナ魔法学校！

ちなみに、今は日がどつぷりと沈んだ夜。周囲には誰もいない。居ても、気付かれない。

うん、忍び込むには良い時間帯だ。

「んじゃ、月詠はここで待っていてくれ」

「はいな」

俺の言葉に月詠は素直に頷いた。

月詠は、隠密行動とかに向いてないからな！。

っーか、ただ閲覧してるだけだから月詠には暇でしかないしな。

「さて、それじゃあ行ってくるか」

俺はむにゃむにゃと魔法を唱える。

気配を消し、姿を消し、ついでに壁をすり抜ける潜入専門の魔法だ。

これで、あちこちの禁書を閲覧しまくってるんだぜ！。

「さーて、禁書室はーっと」

俺は軽い口調で歩きながら、辺りをキョロキョロと見渡す。

幻想的な雰囲気建物の建物だな。街が殆ど発展していないのにも関わ

らず、ここだけこんなに発展しているとはな。変に目立ってそうなんだが、どうだろうか？

それにしても、ふーむ、意外と警備が固いな。

あちこちにある警備の魔法に俺は少し感心する。

壁にも床にも、天井にも、手すりにも、どれに触れても一発でアウト。捕獲&通報コースだな。

「まあ、俺には関係ないが」

俺はそう言うと、警備魔法を無力化しながら図書室へと向かう。

それにしても豪華な校舎だな。こんな片田舎にあるのは不自然な程に。

何だ……、なんか違和感を感じるんだが？

……まあ、いいや。

そんな事を考えていると図書館についた。

中に入ると外から見た感じよりも随分と大きい。

おそらく空間魔法やら何やらを使っているのだろう。

俺は辺りを見渡しながら、本棚の奥に隠れるようにしてある扉を見つけた。

ここが禁書室だろうな。

こここの警備は他よりもかなり厳しく、一般的な魔法使いどころか、

それなりの腕の魔法使いも潜入できそうにないな。

「まあ、これも俺には関係ないがー」

俺はそう言っただけ魔法陣を無力化する。

基本的に魔法陣などの魔法の構築方法が読めるモノは俺にとって弄るのは簡単。

これでも古今東西の魔法を齧り切ったからな。

……ん？ 何だ、この魔法陣。歪な形をしてるな。

まるで、態と一つだけ無理やり穴を開けているっていう感じだな。管理者がこの抜け穴で入ってるのか？

いや、管理者は普通に入れるよな。つーことは、誰かに侵入させる為に穴があいているのか？

むしろ、態と穴を開けて扉の向こうにその方法で入ってきた侵入者を捕まえるトラップがあるのか？

そんな事を考えながら、俺は禁書室へと侵入する。見渡す限りに異質な魔法がかかった本が沢山ある。

おお、なんかすげー本がいっぱいだな。

つーか、何でこんな旧世界の片田舎にこんな魔導書が沢山あるんだ？

ガラスケースに保存された魔導書や、黒い霧に覆われた魔導書などがあり、その全てが貴重なモノばかりだ。

なぬっ！？ 普通の禁書レベルを超えたかなりの質だぞ、この魔導書は！

おお、これ何て歴史的な奴じゃないか！

予想外の魔導書の数に俺は心の中で驚きの声を上げた。

むはーっ！ 物凄く当たりではないか！

俺は驚きながらも、次から次へと禁書を開いていく。

開けば精神的トラップとかあるが、俺は気にしない。簡単に無効化しながら、本を読み漁る。

おお、これはマジックキャンセル系のアイテムだと！？

それにこれは時空を歪める時間移動の概念の魔導書か！

むむむ、魔力量が問題で現実的には無理か。だが、検討の価値はありだな。

ふむふむ。なるほど。こつこつ考え方もあるのか。だが、そう考  
えると、あれ？

俺は色んな本を読み漁っていると、ふとある一角にある本棚に気が着いた。

「ここの本棚だけは普通の教本だな。ちょっとレベルの高い攻撃魔法を書いた……」

怪訝に思いながら、そこにあつた教本を読む。

別に教本に見せかけた魔導書とか、そんなモノではない。

本当に、ただの普通の教本だ。

魔法世界の魔法図書館なら普通においてありそうな程のありきたりな教本。

これだけ大量にある魔導書の中に普通の本があるってのは、かなり不自然で浮いてるな！。

なんで、こんなのあるんだろ。

まあ、どうでもいいや。

俺は少し考えたが、理由が思いつかないので気にしない事にする。今は、そんな事よりも他の魔導書を読んだ様が断然に良い。

そんな事を考えながら、俺は目的の魔導書以外の本も貪欲に読みまくっていた。

うおー、真祖についての考察の魔導書もあるじゃないか！

これは、うまうま！

貴重な本の山に、俺はかなり興奮しながら書かれている研究を読み漁りまくる。

そんな時、がちやりという扉が開く音がした。

その音に、俺は慌てて読んでいた魔導書を棚にしまうと、息をひそめた。

所要時間僅か0.2秒の無駄な技術である。

ギシギシと出来の悪い忍び足が聞こえ、二人の子供が禁書室へと

入ってきた。

一瞬、ばれたのかと思ったが、どうやら違うようだ。

「ちよつと、ネギ。大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だよ、アーニャ」

二人組はどうやったのか魔法陣をスルーして、禁書室に入ったのが知らないが、のんびりとした事を言い合いながらある一角を指して歩いて行く。

まるで導かれる様に、先ほどの教本の一角に二人組は移動すると、教本のいくつかを不用心に取りだした。

なにやってんだ、こいつら？

テーブルに教本を起き、ふむふむと呼んでいる2人組。

何で、こんな子供がここに侵入出来て、あんな教本を読んでもんだ？

そんな二人組に俺は首を傾げていると、ふと後からじつと二人組を見守っている爺さんを見つけた。

確か、こいつはこの学校の校長だったか。

何で、こいつはこんな孫を見守る祖父ちゃんのような表情を浮かべてるんだろ。

訳分からんが、あまり長いすべきじゃないだろうな。



「もう、ネギ！ 一度集中すると聞こえないんだから！」

「……僕は早く父さんみたいな英雄になるんだ」

耳元で少女が何か言っているが、少年はうわ言のようにそう呟くだけで、ただ目の前にある教本へ視線を落としていた。

ふむ、『ネギ』『英雄』『父さん』。

俺は彼らが口にした単語を頭の中で組み立てて結論を出す。

ふむ、どうやらこいつが千の呪文の男の息子か？

いくつかの推論を基に俺はそう結論付けた。

千の呪文の男に子供がいるのは一般的にはAランク級の秘密事項ではあるが、その筋では有名な情報屋をしてる俺にとっては常識であつた。

ガトウの奴も昔そんな感じの事を言つてたしな。

ふーむ、どうやらあの一角の教本はあの少年専用の本棚だったのか。

さすが、英雄の息子だな。

いい扱いされてる。

いや、むしろ手のひらで踊らされてるとでも言えばいいのだろうか。

その思想にはあの少年は気づいていないだろうがな。

まあ、俺にとってはどうでもいいがな。

俺は小さく鼻で笑うと、これ以上ここにいても無駄だろうと判断し、見つからないように俺は外へと出た。

ちなみに、魔導書をパクりはしなかったが、半分以上は記憶する事ができた。

よかった、よかった。

また明日も忍び込みたいです。

ついムラっとしてやった。反省も後悔もしていない。(前書き)

本日、2度目の投稿。

ついムラっとしてやった。反省も後悔もしていない。

やあ、カモだ。

禁書室で思いのほかいいモンをよめてホクホク顔で、宿まで帰ってきたカモだ。

「ふいー、良い収穫だったぜ。ほくほく、ほくほく」

「そりゃ良かったどすなー。こっちは暇すぎて暴れだしそうでしたわー」

うん、洒落になってないから止めるよ？

お前が暴れたらこの辺りの地形が変わるからな？

「もー、冗談ですやん。2割ぐらい」

「半分以上本気じゃねーか」

ケラケラと笑いながら刀の手入れをしている月詠に俺は小さくため息を吐き出して、ベットまで移動する。

そして、ベットの近くに置いてあったノートパソコンを弄り、メールを確認した。

ふむ、討伐依頼メールが結構きてるなー。

一応、俺は情報屋なんだが……。

なんか最近は『死の女剣士』とか『鬼畜オコジヨ』とか訳の分からない二つ名つけられてるしな。

つーか、古龍討伐をただのおコジヨに頼むんじゃねーよ。

「面白い依頼ありましたかー？」

「そうだな、古龍に悪魔に盗賊。それに、これは海龍か。後はガトウのスパムメール」

今日のスパムは7件か。

毎日毎日、よくメールする事があるな。ほとんど、読んでないけどな。

「相変わらずですなー、ガトウはんは。」

それよりも討伐依頼は全部受けましょーや」

「いや、全部受けたら研究する時間なくなるからな？」

俺としては、てけとーに1件ぐらい受けて、後は研究に専念したい。

そもそも、研究を邪魔されない為に依頼受けるのに、それが忙しくなって研究できない何て本末転倒すぎるからな。

「んじゃー、うちは海龍と古龍がやりたいですー」

「……、一番、面倒そうなの選んだな」

まあ、いいんだけどな。

俺は小さくため息を吐き出し、パソコンを閉じる。

「取り合えず、明日も禁書室に入るから。  
んじゃ、俺は寝るわ」

小動物になってから、徹夜というのが苦手になってきている。  
身体の構造上からなのだろうが、これは地味に困っている。

前世は1週間以上寝ない日もあったのだが。

まあ、いくら寝なくても魔法アイテムという不思議パワーを使い、  
基本的に俺と月詠は死ににくく、老化しにくい身体なんだけどな。  
それは、どうでもいいや。

「はいな。おやすみなさい」

俺はベットでバタリと倒れ込むように眠った。

「……で、何故こうなってるんだ？」

俺は目の前にある光景を見て、思わずそう呟いてしまった。

今、俺は簀巻きになり、月詠のポケットにしまわれていた。まあ、それはいい。良くないけど、いいでしょう。

気が付いたら、月詠に連れられてどこかに来ているなんてのは、いつもの事だからな。もう慣れた。

だが、問題なのは月詠の前に対峙している5人の魔法使い。5人とも杖を持ち、敵意満々でこちらを睨みつけていた。

「月詠、何やったんだ？」

小さくため息を吐き出した後、俺は油断なく剣を構えている月詠にそう尋ねると、月詠は楽しそうに答えた。

「それがですなー、昼間暇やったからカモはんポケットに入れて散歩に出かけたんですえ。

そしたら、無駄に魔力の高い子が魔法の練習してましたんや。しかも、中級レベルの魔法ですえー」

ああ、あれだろ。

昨日忍び込んでいた、英雄の息子のネギとかいう奴だろうな。

つーか、そのネギ少年があそこで伸びてるんだが？

「それに、ついムラっと来て殺気放ってしまっただんですえー！。

そしたら、あの人たちが現れてその子を魔法で眠らせた後、殺気ビンビンで対峙してるっていう訳ですわ」

ムラっとして。

それにしても、殺気放っただけで、これかよ。

英雄の息子だけあって、過保護だなー。

「貴様、何者だ？」

ネギ君になんの様がある？」

「別に何の用もありまへんでー」

睨みを利かせながらそう尋ねてくる魔法使いに、月詠は小さく肩を竦めながらそう言った。

「嘘をつくな！ では、先ほどの殺気は何だ!？」

「ついムラっと来たんですえー」

正直なのはいいが、火に油を注いでるようにしか見えん。

ちゃんと話し合えば、誤解だと分かってくれる筈なのになー。まあ、別に分かって欲しくもないんだが。どっちにしても、メンドイし。

月詠の言葉に当然だが、魔法使いの奴らは軽く激昂しギリツと睨みつけ、殺気が更に倍に増す。

「英雄の息子に手を出そうというのなら、立派な魔法使いとして俺達はお前を倒す」



うわー、危ない奴らだ。こいつらは、建て前があったら笑顔で人殺せるタイプの危ない奴らだ。

魔法世界の兵士たちに良くいるパターンの奴らだな。

俺はこういう奴ら苦手なんだがなー。

「そんなんはどうでもいいですえー。やるなら、ほら、どーぞ」

月詠はそう言って刀を構え直す。

もはやその表情は笑顔に満ち、殺し合いをする気満々の様だ。元から話し合う気なんてさらさらなかったんだろっかな。

あー、こうなったらもう止めれないな。

止める気も無いんだが。

「ふん、ようやく正体を現したな。

邪悪なモノめ！

正義の名の元に死ね！」

魔法使いはそう言って無詠唱で魔法の射手を放ってくる。

だが、放ったのはたった5つの魔法の射手。

牽制のつもりだろうが、その程度では月詠にとって牽制にすらならない。

月詠は嬉しそうに刀を振るい、直撃してきそうな2つの射手だけを弾き、一瞬で魔法使いの胸元へと飛び込む。

瞬動は使わない。ただの脚力で、一瞬にして胸元に近付いたのだ。使っまでもないのだろう。

驚きの表情を浮かべる魔法使いに月詠は少し詰まらなそうに、躊躇なく刀を振るった。

手加減の無い無慈悲な一撃。

当然、そんな一撃をただの魔法使いが受け止める筈もなく、そのまま刀は吸いこまれるように叩きこまれ、

そうになる瞬間、月詠が攻撃を止め、慌てて後ろへと飛んだ。

轟音が轟く！

先程まで月詠がいた場所に100を超える魔法の射手がどこからか飛んできたのだ。威力はさほどではないが、牽制としては十分だ。流石の月詠も、これを喰らってまで、魔法使いを殺す必要もないので、後ろへと下がったのだ。

魔法の射手を飛ばしたのは周りの魔法使いたちではない。

それなりの経験はあるだろうが、本当の殺し合いの経験もない魔法使いに月詠の動きを止める事は出来ない。

「誰ですえー？」

魔法の射手が飛んできた方向に油断なく刀を構え、彼女はぼつり

とそう尋ねた。

「ふおおおお、そう殺気を飛ばさんでくれ。  
老体にはちと堪えるんどのう」

そう言いながら現れたのは、昨日の禁書室で見たメルディアナ魔法学校長の爺さんだ。

蓄えた髭を撫で撫でしながら校長はやんわりとした笑みを浮かべて言った。

「ルーベンス君、それに他の者も杖を納めなさい」

「しかしっ!」

爺さんの言葉にルーベンスと呼ばれた魔法使いや、他の魔法使いが不満そうに叫ぶ。

しかし、爺さんはそんな言葉を問答無用で切り捨てる。

「いいから、納めなさい。」

お主たちでは、勝てる相手ではない」

「……………、分かりました」

有無を言わさないその言葉に回りの魔法使いたちは、ギリツと悔しそうに歯ぎしりをした後、杖を納める。

なるほど、ここで素直に杖を納める辺り、それなりに教育されてんだな。

「さて、お嬢さんも、刀を納めてくれんかのう?」

爺さんがニコニコと人の良さそうな笑みを浮かべながらそう言ってくる。こいつは笑顔で人を殺せるタイプだな。  
元老院とかに良くいるタイプの奴だ。

「えー、やだあー」

「いやいやいや、そこは渋々でも納めてくれる場面ではないのかね！？」

嫌そうな表情を浮かべ、刀を納めない月詠に爺さんは少し驚いた表情を浮かべながらそう言った。

だが、そんな爺さんに関係なく月詠はまだ油断なく刀を構えている。

まあ油断しないのは当然だし、まだ高ぶってるからなー。

「いいから、闘やりましょーやー」

「いや、闘やらんからね？ その為に杖を納めたんだからね？」

まだ殺気ビンビンの月詠に爺さんは狼狽しながらそう言う。

「えー、やだあー」

不満げな月詠に、爺さんはごほんつと無理やり咳払いをして話を切り替えようとする。

「まあまあ、落ち着きなされ。今回の件はこちらが悪かったからの

う

「えー、やだあー」

「いやいやいや、そうでないよ、話が進まんじやないか」

「えー、やだあー」

「だからのう!？」

まあ、そんな感じで3時間。

ようやく月詠は刀をしまい、爺さんの話をする事になった。

「ふむ、つまりネギ君とは一切関わりがないのじゃな？」

「そもそも誰ですえ？ そのネギとかレタスとかサーモンとかオリーブオイルとかいう人はー」

何だその混ぜたら美味しいカルパッチョが出来そう奴は。

ボケた事をいう月詠に爺さんは苦笑する。

「ふむふむ、それならやはりこちらが悪かったのじゃな。早とちり

してすまんかったのう」

爺さんはそう言ってすまなさそうな表情で頭を下げる。

「そんなん、うちとしてどうでもいいですわー」

「ふおおおお、そうかのう」

バルタン星人のように笑う爺さんに、月詠は詰まらなさそうにそう言った。

結局、闘えなかったのが残念でしかないのだろう。

まあ、俺としてはどっちでも良かったんだがな。

「そうじゃ、お嬢さんは旅をしているらしいのう」

髭を撫でながら爺さんはそう言うてくる。

まさか、お前の所の禁書室に忍び込みに来たとは言えなかったの  
で、そういう理由にしておいたのだ。

ちなみに、俺はまだポケットに入っている。

なんか出るタイミングを失ったしな。下手に出ない方がいいしな。

「そうですけどー、それがどうしましたえー？」

爺さんの言葉に、月詠が小さく首を傾げる。そんな月詠を見て、爺  
さんは頬を見を深くしながらこう尋ねる。。

「なら、ここに滞在している間に依頼したい事があるんじゃないが、頼

めんか？」

「依頼ですかー？」

首を傾げる月詠に爺さんは笑いながら頷いた。

「うむ、そうじゃ。」

依頼というのはとある山中の調査をして欲しいのじゃが……」

爺さんが厭らしく笑う。その笑みは見る人が見れば、好々爺であるろつが、俺から見れば、人を食ったような笑みでしかない。

月詠もそれに気づいたのか、表情を変えずに尋ねる。

「内容によりますえー」

そんな月詠に爺さんは表情を変えずに、穏やかな口調で言う。

「ふおふおふお。なーに、とても単純な盗賊討伐依頼じゃよ」

ふむ、どうやらこの爺さん、やはり狸だよな。

ついムラっとしてやった。反省も後悔もしていない。(後書き)

ペース配分に定評のない作者です。

その所為でそのうち、更新が止まるかもしれませんが、気長にお待ちください。

ただ疲れてるだけなので！。



私は55人目だから。だから、その威力は格別。

やあ、カモだ。

爺さんの依頼で盗賊がいるらしい山中へとやってきたカモだ。

依頼内容は山中にいる盗賊をどうにかしてくれという事だ。  
正直言っ て面倒くさい。それに胡散臭い。

そうそう、ちなみに俺は人間の格好をしている。  
理由は舐められない為と値段交渉の為。立場としては、月詠のパ  
ートナーでフリーの西洋魔術師となっている。

「うちは鬪えるだけで満足ですえー」

「まあ、昼間は禁書室に潜入できないから別にいいんだがな。それ  
にかなり胡散臭いから、上手くすれば弱みを握れるだろうしな」

俺はそう言いながら、辺りをキョロキョロ見渡す。

恐らく今の俺達の状況は遠見の魔法で、見られてるんだろうがな。

一応、妨害魔法で会話は聞こえないようにしてるけどな。

ちなみに、今いるのは魔法学校の近くにある山の中。  
青々とした木々が生い茂り、人が踏み荒らした形跡が不自然な程  
になかった。

「それにしても、あの爺さんは本当に胡散臭かったなー」

ザクザクと落ち葉を踏みしめながら、俺はポツリとそう漏らした。

「そうですかー？ 絵に描いたようなファンタジー世界の住人って  
感じてしたけどなー」

「そういうのを胡散臭いっていうんだよ」

俺はそう言いながら山の中へとどんどん進んでいく。

ふーむ、畏どころか人間が入った形跡すらないな。

本当に盗賊なんかがいるのか？ しかも、この旧世界に？ 機械  
と法律が蔓延る世界だぞ？ 活動する世紀を間違ってるだろ。

「そもそも、いくら実力がそれなりにあつたからといって、名前も  
知らん旅人に地元の洞窟の調査依頼なんてする訳ないだろ？」

「そうですねー。依頼金も言い値でいいなんていいはりますし、怪  
しさ全開で、逆に怪しくなくなる感じですよ。ミステリーの基  
本ですよー」

俺の言葉に月詠も大きく頷いた。

月詠も俺と一緒に依頼をこなしたりしている結果、それなりに相手の裏を読む事が出来るようになっていた。

「あんなをそのまま信じんのは、立派な魔法使い病の楽観主義者や大した実力のない冒険者ぐらいしかいまへんえー」

「だろーな」

俺は大きく頷く。

あの爺さんはどうやら俺たちをただの賞金稼ぎか何かだと判断して、適当な契約内容なのだろう。

「恐らく、あの爺さんは俺らが帰ってこないと思っただろうな」

依頼金が言い値な所から、それは何となく予想出来る。帰ってこない人間には金を払わなくていいんだからな。

という事は、それほどのモノがいるのか、それとも……。

だが、それでも態々、死ぬと分かって人間を送るのも訳が分からんな。

こういう場合、まず考えられるのは、。

「カモはん、来ましたええ！」

月詠の言葉に俺は現実には視線を戻した。

そして、月詠は俺を引っ張ってバックステップをする。

次の瞬間には、足元に巨大な樹が突きでてきた。

おいおい、警告なしの問答無用の攻撃か。今の避けないと普通に死んでたな。

突きでてきた樹は、生き物のようにこちらを睨むような仕草をすると、すぐにこちらへと突撃してきた。

「そんじゃ、いきますえー！」

月詠は嬉しそうにそう言って刀を抜くと、襲ってきた樹を切り刻む。

しかし、刻まれた樹は地面に落ちると再び根付き、襲ってくる！

俺の煙魔法程ではないが、なかなかに厭らしい攻撃だ。

「ふむ、これはトラップではないな。

どっかにこれを操ってる奴がいる筈だ」

「ほんなら、そっちを頼みますえ」

魔法の形状からそう判断し月詠にそう言つと、月詠はそう言つて俺に任せてくる。

丸投げかよ……、まあいいけど。

「へいへい、りょーかい」

俺は二つ返事でそう言つと、鼻をひくひくさせ魔力元を読みとる。

自動操縦じゃないからな、この程度なら1秒もかからずに場所を特定できる。

「ふむ、あの木の上だな。」

すぐに場所を見つけて、俺はむにゃむにゃと魔法を唱える。

そして、異空間からマッチを取りだすと、しゅっと火をつけて木の方に投げつけた。

すると、その瞬間、轟音が鳴り響き、狙った木を中心として10メートル程の巨大な火柱が上がった。

魔法で酸素と水素を集めて火をつけたのだ。

お手軽簡単なキル魔法である。

「うぎゃあああああああああああああああああ……!!」

断末魔を上げ、焼かれる魔法使い。

火柱はすぐに収まるが、巻き込まれた魔法使いは無事では済まない。

バチバチと炎は煙を上げ、木が焦げた匂いが漂ってくる。

その瞬間、魔法が切れたのか月詠を襲っていた樹はピタリと動かなくなった。

「やりましたかー？」

「おう、多分な。でもまあ、」

俺はそう返事するが、油断なく黒こげになった木の方へと視線を向けるが、どうやら倒した様だ。

でもまあ、これで終わりでは無いみたいだな。

「お前らは誰だ？ いきなり襲ってくるなんて物騒だと思わんのか？」

目の前には何十人という集団がこちらを取り囲んでいた。おうおう、そろそろと出てくるな。

その中から一人の男が一步前に出て、そう言うてくる。

「いきなり襲ってきたのはそっちだな」

俺は煙草を吸いながら、皮肉気にそう肩を竦める。

「おいおい、そんな筈はないぞ？  
認識阻害魔法はかけていたし、トラップもあちこち置いといたんだが」

……いや、そんなもん、無かったぞ？

俺は首を傾げるが、今はそんな事を考えている暇はなさそうだ。  
何故なら、魔法使いたちは杖や剣を構えているからな。

「まあ、とにかくこっちの組織の仲間を一人殺されたんだ。  
黙ってみてる訳にはいかないな」

男はそう言うと、魔法を唱え始める。かなり大規模な魔法なのか、高純度の魔力が練られていく。

「そうはさせまへんえー」

魔法を唱え始めた男に向って、月詠が瞬動で男の元へと移動し、流れるように刀を振るう。

「……させないのは、こつち」

しかし、その一撃は男を切り裂く事なく、途中で割って入った大き目の斧が邪魔をした。

ふと見ると、フードを被った女性が巨大な音で受け止めていたのだ。

どうでもいいが小さい身体に、あの大きさの斧って不釣り合いだよな。月詠も人の事言えないが。

現れた女性は無表情のまま、斧を担ぎ直と、じつと月詠の方を見て言った。

「……、私がお相手いたします」

「はーん、ええなー。ええですなー。ええ殺気ですわー、ピンピンしますー！」

無表情でも、強力な殺気をぶつけてくるフードの女に月詠は嬉しそうにそう笑い、刀を振るう。

ふむ、あの男もこの女も中々のレベルの奴らだな。

なんか俺としては、睡眠系の毒ですぐにでも終わらしたいんだが

な！。

でも、そうすると月詠が煩いんだよな！。今回は一応、月詠が受けた依頼だし、自重しておこう。  
邪魔すると煩いしな。

俺がブチブチと考えていると、男の詠唱が終わった様だ。  
あの感じから、影魔法か！

「百の影槍！」

男の言葉と同時に俺の足元から大量の影が飛び出し、俺の身体を貫く。

血が飛び出て、内臓が串刺しになり、手足が切り刻まれる。  
ポタポタと血を垂れ流し、臓物は外部へと飛び出している。

何ともグロい感じだ。

「……どうやら男は大した事無かったようだな」

串刺しになっている俺を見て、男は小さく肩を竦める。

「いや、それでもないさ」

男の呟きに俺は男の背後でそう答えてやる。



「なっ!？」

男は驚きの表情を浮かべて後ろを振り返ると同時に、バックステ  
ップ。

中々いい反応するな。

後ろを振り返った男の前には、当然だが傷一つない俺の姿があっ  
た。

まあ、煙で造った人形だからいくら突かれても死なんしな。

ちなみに、本体はさっさと避難している。下手に巻き込まれたら、  
死ねる自信があるからな。

何度も言うが、俺は防御力紙だし、単純な攻撃力もオコジョレベル  
だしな。

「っち、十の影槍!」

男は無詠唱でそう言つと、再び俺の足元から十本の影が飛び出し  
た。

先ほどよりも数は少ないが威力は変わらない。鋭利な影のナイフ  
が俺へと襲いかかってくる。

そして、そのまま躊躇なく、俺は突き刺される。顔と首と心臓と  
腹などの人体急所という急所は取り合えず刺されていた。

そして再びグロい死体が出来あがる。

これでこの周辺には刺殺された死体が二つ。

「……何なんだ、この男は？」

突き刺された俺の姿を見て、男は少しため息を吐き出してそう言う。

「さあな、何なんだろーなー？」

「っちい、またか！」

そう返す俺の言葉に男は舌打ちをして、再び影魔法で俺を突き刺した。

今度は先程よりも大きな影が一本飛びだし、速攻で俺の心臓を綺麗に抉り抜いて行く。

これで刺殺死体は3つ。

ついでに同じように先程までずっと呆けて俺達を見ているだけだった周囲の魔法使いの背後を取ると、それぞれが思い思いの殺し方で、俺を殺す。

これで死体は27つ。

だが、これで全員の攻撃方法と力具合は分かった。全員合わせても、十分に何とかなるレベルだな。

「物騒だなー」

「何故死なんのだ!？」

魔法使いの中の一人が悲痛な叫びを上げる。  
俺は一切攻撃していないのに、男たちは勝手に劣勢に陥る。

「なんでだろーなー？」

俺はのんびりと言いながら、新しい身体がすぐに精製される。その状況に既に慣れたのか、男は苦虫を噛み潰したような表情で、再び俺と距離をとり、魔法を唱える。

「くそつ、影槍！」

一本の影が再び俺の身体を貫く。

貫かれたのは、脳。

一切のブレなく心臓を突きさした。

なんとまあ、殺し慣れた手つきだろうか。

魔法学校周辺で襲ってきた立派な魔法使いの何倍も強い。あの魔法学校の連中は束に立っても勝てないだろうな！。あの魔

だが、所詮その程度。

魔法の根本を、理解しておらず。

精霊の意味も、理解しておらず。

魔力供給の仕組みについても、理解しておらず。

ただ、過去にある魔法をなぞらえているだけ。

オリジナル魔法を造ったとしても所詮は真似事でしかない。

その程度では俺の魔法を捕らえる事など出来はしない。

「よそ見はいけまへんえー！」

次から次へと現れる俺に、驚き殺していく男たちに月詠は笑顔を浮かべながら襲いかかる。

「くそっ！」

吐き捨てる様に男はそう言つと、月詠の攻撃をギリギリ回避する。

斧を持った女も月詠の相手はキツイのdarou。

もうボロボロで、立っているのがやっとと言つた所だ。

ちなみに俺の死体はついに50の大台を超え、54つだ。  
いやいや、殺し過ぎdarou。全ての死体は消えずに、グロテスクな姿でこの場に残っている。

だが、俺は攻めない。

「カモはーんは、何で攻めへんのどすかー？」

ただ殺されるだけの俺に、月詠は疑問に思つたのか、一度後ろに下がりそう尋ねた。

「いやなに、あの狸爺さんに化かされるのも嫌だからな」

俺はそう言っただけで周囲の様子を探る。  
そんな様子に月詠も、敵に視線を向けながらも辺りの気配を読み  
とり始める。

静かな森の中。木々が生い茂り、辺りを見回しても誰もいるよう  
には思えない。

素人が見たら、だろうが。

「誰かいますな」

「おうおう、あれで隠れてるつもりなんだからさすがだな」

皮肉気にそう言う。

周囲には何十人の人間が隠れて、こちらの様子を見ていた。

だが、素人に毛が生えたような隠れ方。俺達には通用しない。

敵対している男たちも普段ならすぐに気付くそうだが、俺達と戦  
っている為に気づいていないようだ。

その事に月詠は少しだけ考えてポツリと言った。

「……つまる所、こちらは囿ですか」

「だろうーな」

俺らが暴れて、あいつらの意識をこちらに集中させ、弱った所で  
叩く。

まあ、基本的な戦い方だ。

黙って囿にされた俺達にとってはたまったモノではないがな。  
恐らく俺達も巻き込んで殺すつもりなのだろう。

というか、もう既に囿んでる魔法使いたちは共同で大規模な魔法を  
唱え始めているしな。まあ、この程度の魔法をあの人数でこれだけ  
時間がかかるなんて、貧弱にも程があるがな。

「なんか踊らされるのは、腹立ちますなー」

「だろ。まあ、見てろって」

俺が悪い笑みを浮かべると月詠も何だか楽しそうに笑って頷いた。

「んじゃ、そろそろやるか」

俺はそう言つと、55番目の俺を出した。

55番目の俺は煙草を吸つと、相手に向つて睨みを利かせると、  
指を鳴らして言った。

「火柱よーい」

突如、俺の周りに火柱が現れた。その炎はうねりを上げて、敵す  
べてを巻き込み蹂躪していく。

「くっつ！？ しまった！ 俺たちも行くぞ！」

突然攻撃を行い、監視していた魔法使いたちは驚いたのだろう、焦

りつつも大規模魔法を唱えるのを止め、各自個々で魔法を放とうと飛び出してくる。

功を焦ったという奴だろう。

盗賊たちを自分たちで殺さなければならぬのに、火柱が盗賊達を襲いまくっているのだからな。何も確認せずに、飛び出してきやがった。

だが、彼らがようやく盗賊達と戦える程の距離に近づいた時、炎に巻き込まれていた筈の盗賊たちが、何食わぬ顔で俺の分身と戦っているのを見て驚きの声を上げた。

「何故、お前らがいる!？」

「お前らこそ、何故こんなところに!？」

辺りに現れた魔法使い達を見て、敵対していた男も驚きの声を上げる。

ちなみに先程の火柱は周りに潜んでいた連中にだけ見せた幻覚魔法。だから、敵対していた奴らも無事。

程度の低い幻覚魔法だったが、どうやら簡単に引つかかってくれた様だ。

美味しい所だけ、取って行きたかったのだろうが、そうはさせないのさ。

「くそつ、やるしかない! ものみな 焼き尽くす 浄北の炎 破壊の王にして 再生の 徴よ」

やけっぱち気味に魔法使い達は長つたらしい詠唱を行っている。  
その表情には何故か、勝利を確信していた。そんな魔法使い達に  
俺は少しだけ呆れる。

そんな長つたらしい魔法詠唱で、しかもそんな無防備な姿で勝て  
ると思っっているのだろうか？

そもそも、まともに戦って勝てないから、俺達を囷にするという  
策を講じた筈なのに、バカなんじゃないのか？ 策が失敗した以上、  
尻尾巻いて逃げだすのが一番いいんだがな。

それに魔法使いも盗賊達も疑問に思わないのだろうか。

なぜ、俺が現れては殺されて、現れては殺されてを続けていたのか。  
なぜ、今まで54つの死体をそのままにしていたのか。

馬鹿な魔法使いたちの必死の詠唱に、その姿を見て盗賊たちも魔  
法を唱え始める。

そんな奴らを見て、俺は小さく笑みを浮かべる。

そして、小さく。

しかし、全員に聞こえるような低く通る声で俺は言った。

「終わらすには丁度いい時間だ」

その瞬間、この山を包み込むように轟音が鳴り響いた。



全ての死体が大爆発を起こしたのだった。

いや、やらないとはいってないから。それをさっさと渡せ。

「なるほどな。そういう訳だったのか」

目の前にいる男が面白くなさそうにそう呟く様にそう言った。

今、目の前にいるのは先程まで敵対していた影使いの男。先程まで良く見ていなかったが、色黒で顔の彫が深い中々カッコいい男である。

名前を『ディーン・フェイルズ』というらしい。

「まあ、そういう事だ。

こっちの依頼の詳細はお前たちを何とかする事。

つまり、さっさとどっかに行ってくれば問題がないんだが？」

俺はディーンと対峙してそう言った。

先程、山中で大爆発を起こしたのだが、殺してはいない。

あそこにいた月詠以外全員を、気絶させたのだ。ただ遠見で見ていた爺さんには恐らく、こいつらは死んだように見えただろうけどな。

そもそも、変に殺しても恨みを買っただけだしな。

ただ、全治数カ月にはなるだろうけどねー。

そして、今、リーダー格であるディーンと今回の話をしていただけだ。

「……、ここから去れというのだな？」

ジロリと睨みを利かせ俺にそう確認するディーン。普通の人間ならビビる所だろうが、俺も月詠もそんなのでビビる筈もない。

そんなディーンに俺は小さく肩を竦めながら頷いた。

「死ぬよりはマシじゃないか？」

何を理由にここにいるかは知らないが、俺たちが向こう側にいる以上勝てない事は分かってるだろ？」

俺達の実力は先程の戦いで嫌という程分かっただろう。

月詠の実力は当然だし、何度殺しても生きている俺も相手にとってはかなりの恐怖だろう。恐らく二度と俺達と、闘いたくはないだろうな。

「……分かった」

「ディーン！」

渋々といった感じだが頷くディーンに、近くにいた巨大な斧を使っていた女性が驚きの声を上げた。月詠にやられた傷の所為か、随分とフラフラしている。

「仕方ないだろ、エスレア。  
俺達ではこいつらに敵わない」

「……つく」

諦めたようなディーンの言葉。その言葉を聞き、エスレアと呼ばれた女性は舌打ちをして、その場にしゃがみ込んだ。

どうやら、これで依頼は完了らしい。

月詠も戦闘に満足したのか、ホクホク顔をしているし、俺としても帰ったら言い値で金を貰えるのだ。悪い事はない。

「そうそう、お前らは何故ここにいたんだ？ ただの山賊ではないだろ？」

商売柄色々と気になる事は聞いてしまう俺は、ディーンにそう尋ねる。

「俺達は魔法世界のどの政府にも属さないレジスタンスだ」

「……ふーん」

予想していなかった訳ではないが、ちょっときな臭い。場所も場所だし、先ほどの戦闘もだしな。

「そのレジスタンスが何故、こんな片田舎に？」

「知らん。上からの命令で、あの魔法学校を見張っていたんだ」

「いつから見張ってたんだ？」

「一週間ほど前だ。前に見張っていた奴らはこっぴどく撃退されたらしい」

小さく肩を竦めるディーン。

そんなディーンを見ながら俺は色々と頭を働かせる。

態々、魔法世界のレジスタンスがこんな片田舎の魔法学校を見張る、何故だ？

魔法学校の連中はこんな旅人を使ってレジスタンスを早急に排除したがる、何故だ？

そもそも、一度撃退された場所に新たなメンバーを送って見張りをさせる理由なんてあるのか？

色々と頭を捻り、そして、一つだけ理由らしき存在を思いついた。

「ネギ・スプリングフィールド。千の魔法の男の息子が」

ポツリと呟く俺に、ディーンは僅かに眉を動かさず、エスレアは驚いた表情を浮かべていた。

「……知っているのか？」

エスレアの表情から、ごまかすのは無理と判断したのか、ディーンは小さくそう尋ねる。

「まあ、仕事柄ね」

威圧するように尋ねてくるディーンに、俺は曖昧にそれだけ言った。

あーあ、今回の件に興味を無くした。

ネギだが何だか知らないが、あんなガキンチョが良くもまあ、これだけ大勢の大人に囲まれてるもんだ。

馬鹿じゃないか？

英雄の息子という以外に何か、特別なモノがあるのか？

まあ、俺にはどうでもいいが。

俺はそんな政治的な事には関心はないからな。

さて、今日も魔法学校に忍び込みますか。

「さて、興味も失せた。お前らは、すぐにでもここから立ち去るんだな」

「また死合いましよな」

話は終わったとばかりに、俺は肩を竦めて、この場から去ろうとする。

その後ろを、月詠もニコニコと笑みを浮かべながらついてくる。

だが、そんな俺を新たな声が止めた。

「待つんじゃ、アルベール・カモミール」

ピタリと足を止める。

そして、後ろを振り返ると、そこには一人の少年が立っていた。その顔は幼く、可愛らしいが、どうやら油断するべき人間ではなさそうだった。

彼の足元には魔法陣があり、その構造からどうやら立体映像のようだ。

「誰の事かな？」

「そう言うな。その筋では有名じゃから知っとるよ」

少年は何でもない事のように肩を竦めてそう言う。だが、今の俺の姿はオコジヨではなく、人間の姿だ。

……月詠からバレたのか？ 月詠は変装していないしな。

「あんたは何者だい？」

名前についてうだうだ言う気もないし、俺はクルリと少年の方へ向き直るとそう尋ねた。

そんな俺に少年は可笑しそうに、本当におかしそうに大声をあげて笑った。

「何だよ？」

必要以上に大笑いする爺言葉の少年に俺はむっとした表情でそう尋ねる。

すると、爺さんは笑いすぎて緩んだ目じりを拭いながら言った。

「いやなに、お主がワシの事を知らず、ワシがお主の事を知っているとこののがな……」

何やら眩くようにそう言う少年。しかし、言葉の意味が分からずに俺は心の中で首を傾げた。

ただまあ、何となく馬鹿にされた事は分かったが……。

「お前は誰だよ？」

仕切りなおすようにそう尋ねる俺に、少年は薄く笑いながら答える。

「いやいや、なに、こやつらの上司じゃよ」

「ふーん、それでその上司がなんのようだよ？」

何だか、面倒くさそうな事に巻き込まれそうな感じがビンビンしてる。

このまま高速で逃げ出したくなるが、それをすれば余計に面倒くさい事になりそうな気がする。

つまり、どっちにしても面倒くさそうだな。



「お主に依頼したい事があるのじゃ」

平坦な声でそう言う少年に俺は首を傾げる。

「依頼？」

そんな俺に少年はカラカラと笑いながら頷く。

「ああ、依頼じゃよ。

件のネギ・スプリングフィールドという少年についてのな」

「パス」

打てば響くタイミングで、それだけ言うと、俺はまたクルリと背を向け帰ろうとする。

皆、何であの少年に固執するんだろうか？

ただのガキだぞ？

やってらんねー。俺は帰る。帰って寝て、んでもって忍び込む。俺はとことこと歩いて帰ろうとするが、

「そう言うな。報酬は……、そうじゃなあ。お前の好きな魔導書20冊でどうじゃ？」

ピタリと足を止める。

今の言葉は聞き逃す事は出来ない。

離れた所で月詠が『あーあ、釣られましたわー』とか言ってるが気にしない。

「……ふーん、魔導書か。それはどんなのかな？」

あくまで興味がなさそうに、あくまでとりあえず確認する様に尋ねる。

交渉事で、変に相手を優位にはいけない。あくまで興味ないフリを、演技をする。

いや、でもそこまでいう程欲しい訳でもないけどね。

「……そうじゃな、こんなのはどうじゃ？」

そんな俺に、少年は可笑しそうに笑ってどこからか一冊の魔導書を取り出した。

その魔導書は……グリモワール？

しかも、原書？

「はあああ！！？ ええええっ！？ ちよい！ ちよい！ ちよお  
おおい！ 何でそんなもんを持つてんだよ！？」

俺は演技なんて忘れて、思わず素で叫んでしまった。

少年の手にある魔導書は『グリモワール』。ソロモンの鍵などで有名な魔導書の、しかも原書であった。あれがあるだけで、大魔法使いになれる程だぞ！

あの本は戦時中に魔法世界から忽然と消えたと言われていたが。

「どうじゃ？ この本は欲しくないか？」

「欲しいに決まってるんだろ！ 馬鹿か！」

おちよくるように尋ねてくる少年に、俺は思わず叫んでしまつ。  
「やばい、ペースを崩されっぱなしだ。」

「なら、依頼を受けてくれんか？」

ひょいっと取り上げるようなしぐさで、胸元に大事そうに魔導書をしまいこむ少年。

そんな少年に俺はぎりっと睨みつけるが、少年にはどこ吹く風で口笛なんか吹いてやがる。

「……、つち。内容による」

舌打ちをして、俺は憎々しげに少年を睨みつけながら、そう言うのが精いっぱいだった。

まだ見ぬ魔導書に、俺の知的好奇心は止まりそうにない。

「依頼内容は簡単じゃ。」

ネギ・スプリングフィールドを監視し、育てる」

「監視？ それに育てる？」

少年の言葉に俺は首を傾げた。

「何だ？ 戦闘できるように育てればいいのか？」

「いや、育て方は自由じゃよ。」

ただ、魔法世界の奴らに操られないように育てて欲しいんじゃない」

「……、立派な魔法使いの広告塔にするなって事でいいだな？」

少年の言葉に俺はそう尋ねた。

その言葉に少年はニヤリと笑うと頷いた。なんか人の悪い笑みだな。

「まあそのあたりは任せるわい。期間は、あの少年が18才になるまででよい。つまり、12年間程付き合っただけで欲しい」

「おいおい、長期間の依頼は受け付けて無いぜ？俺はこう見えても忙しいんだ」

何でもない事のように言ってくる少年に俺は呆れてそう言った。  
オコジヨの寿命、なめんなよ？

それに、その期間まで研究が滞ってしまうのも問題だ。

「ふふふ、お主らは死にくく、老いくいんじやろ？  
それに魔導書の内容によれば、10年とつとぐらいの穴はいくらでも埋めれるだろ？」

あきれ顔の俺に、少年は笑みを崩さずにそう言う。

……いや、そうだけだな。

そういう状況だけだな？でも、そういう事じゃないだろ？  
つーか、何で知ってたんだよ、この餓鬼は。

色々と考えながら、俺はこんな少年に良いように使われるのも何

か嫌で、首を横に振ろうとし、

「それに魔導書はグリモワールだけでなく、他にも」

「わかったよ！ 受ければいいだろ、受ければ！」

止めとばかりに新たな伝説級の魔導書を3冊程取りだす少年に、俺はお手上げとばかりに手を上げてそう言った。

「ははは、分かり易い奴じゃ。昔を思い出すわい」

そんな俺の様子を見て、少年は愉快そうに笑った。

どこか意地悪な笑みを浮かべる少年に、俺は吐き捨てるように言った。

「依頼内容を確認するぞ。」

依頼はネギ・スプリングフィールドの監視及び教育。

教育とは魔法世界の連中に良い様に操られない事。つまり、自分で考えられる様にするって事でいいんだな？」

苦々しげにやっているが、この作業は重要。

俺は何をするべきなのか、俺は何をしなくてもよいのかを把握しなければ動けないのだから。

俺の言葉に、少年は仰々しげに頷いた。

「うむ、監視といっても逐一こっちに報告しなくてよい。こっちも暇ではないんでな。」

何か重要な事があれば、報告してくれればよい」

報告先はここにつと行って、メールアドレスを書いた紙を俺に渡す少年。俺はその紙を受取り、一瞥するとポケットに入れた。

「へいへい、分かったよ」

俺はそれだけ言うと、再び少年に背中を向けて帰ろうとする。そこで、ふと気になって俺は少年に向かって尋ねた。

「なあ、そういえばお前は何て名前なんだ？」

俺のその言葉に少年は少し考え込むような仕草をして、

そして言った。

「『天地創造』とでも呼んでくれ」

「……はんつ、仰々しい名前だな」

少年の言葉に俺は鼻でそう笑うと、今度こそこの部屋から出て行ったのだった。

ああ、そうだそうだ！

俺は慌てて部屋へと戻って来た。

「おいこら！ 依頼受けたんだから、さっさと魔導書渡せ！」

「なんじゃ。戻ってきたと思ったら煩い奴じゃ。

そんなもん後払いに決まるとるじゃろーが」

今にも魔法陣から消えそうになっていた少年が呆れたように言うが、俺は気にしない。

「うつせー、こんなしょぼいレジスタンスが十年以上も続く保証ないだろ！ さっさと渡せ！」

「うるさいわい！ お主の方こそ、魔導書渡したらさっさとトンスラするじゃろーが！」

っち、ばれてる。

「だが、譲る気にはなれない！ さつさと渡せ！」

「なら、前払いとして3冊でどうじゃー！」

「少ない！ せめて半分の10冊は渡せ！」

「渡すかアホ！ それじゃあ4冊でどうじゃー！」

「ダメだ！ 12冊だ！」

「増えとるじゃろ！ 5冊じゃ！ これ以上は譲れんのわい！」

「いや、10冊！」

「さっきと変わつたらんじやないか！」

「うっせー！ さつさと10冊渡せー！」

「子供じゃないんじや、それぐらい聞き分ける！」

「子供はお前だろうが！」

「わしはこつ見えても、100歳は過ぎ取るわ！」

「じゃあ、ジジイ！ さつさと渡せー！」

「年上は敬え！」

「だったら、お前こそ小動物を大切にしろよ！」





いや、やらないとは言っていないから。それをさっさと渡せ。(後書き)

さて、原作からずれ始めたこの世界は一体どうなる!?

それに爺さん言葉を喋る少年魔法使いは何者だ!?

まあ、勘がいい人はすぐにわかるでしょうけどね!。

月詠は何を考えているのか、ときどき俺にも理解が及ばない。(前書き)

ノリで書いたら、こうなった!

反省も後悔もしていない!

月詠は何を考えているのか、ときどき俺にも理解が及ばない。

さて、カモだ。

報酬は言い値で払うと言ってくれた爺さんの前で、人間の姿になつてニヤニヤ笑いながら煙草を吸ってるカモだ。

「さて、爺さん。今回の件で何か説明はあるか？」

すばーつと煙草の煙を吐き出しながら、俺は爺さんに詰め寄るよ  
うに尋ねた。

つまり、申し開きはあるのかつと。人の事を囿にした拳句、皆殺  
しにしようとしたんだ。

今回はどう考えても爺さんに非があるからな。

だが、爺さんは涼しい顔を浮かべながら、軽く肩を竦めた。

「何を言っているのか分からんのう？ 問題があつたのか？」

頼んだ依頼をそっちのお嬢さんが片付けてくれた。それだけじゃ  
ないのか？」

そう言った。そう言い切りやがった。なんて、面の皮が厚い爺さんなんだ。

まるで何事も無かったかのようにさらっと言いやがった。

「じゃあ、あの襲ってきた人たちはなんですかー？」

「襲ってきた？ はて、何の事かのう？」

まるで表情を変えない爺さんに月詠がそう尋ねるが、爺さんは首を傾げて本当に何も知らない様な顔を浮かべた。

爺さんはこのスタンスで乗り切るつもりなのだろう。

「……、確か爺さんの部下だったと記憶しているが？」

「わしの部下？ ああ、ルーベンス君たちの事か？」

彼らは何やら爆発事故に巻き込まれたらしいのう。大丈夫かのう？」

顎鬚を撫でながら呟くように爺さんはそう言って、再び首を傾げた。

「それで、彼らがどうかしたのか？」

「俺らが盗賊を殲滅しに行っているときに、盗賊諸共襲ってきた」

白々しく尋ねてくる爺さんに俺は、平坦な口調でそう言った。

俺のその言葉を聞き、爺さんが大げさに目を見開く。

「なんじゃと!?!?」

おーおー、本当に驚いているみたいな表情だな。  
こいつはマジで狸だ。しかも、腹黒狸だ。

そもそも言い値と言っても本当に俺が提示した金が料金になる訳ではない。そんな事をすれば、魔法世界の方から睨まれてしまうし、恐らく向こうが魔法世界の方に訴えたりする筈だ。

つまり、言い値とは実際の所は常識の範囲を超えた金は請求できない。それでも、それなりの金はくれるだろうが。

だが、今回は違う。

俺達を勝手に囷にし、その上俺達を殺そうとしたのだ。

通常の値段で済む筈がない。

だから、俺達はその交渉の為にここに来たのだが、爺さんはどうやら殺そうとしたことなど全てを無かった事にしようとしているらしい。

そんな事実が無い。

だから討伐依頼は常識の範囲の料金を払う。

そんなふざけたスタンスを取っているのだ。

……どう考えても、俺達を舐めている。舐め切っていやがる。

「だが、その事実が本当なら済まなかった。  
それを含めて、料金を払おう」

ちよつと腹立っている俺に、あっさりと頭を下げ、爺さんはそう  
言つて旅行バックを5つほど取りだす。その表情は本当に申し訳な  
さそうな表情だ。

旅行バックの中を開けると中にはぎつしりと金が詰まっている。

どう見ても通常の討伐依頼の4倍はある金。

つまり、これを渡すから今回はこれで手打ちにしないかっという  
事だろう。

うん、ふざけてる。

通常の冒険者なら一も二も無く飛び付くような金額だ。おそらく、  
俺たちもそのレベルと考えられているのだろう。

うん、ふざけてる。

「いやいや、それはないだろ、爺さん？」

旅行バックに目もくれずに俺はそう言った。

「ぬっ？」

爺さんとしては予想外の言葉だったのだろう。始めて爺さんは素  
の表情を浮かべた。

そんな爺さんに俺はにっこりと笑うと、煙草を燻らしながら言った。

「爺さんは俺達を殺そうとしたんだろ？　それがこの程度のはした金でチャラになるとでも思ってたのか？」

「わしがお主らを殺そうと？　何の話じゃ？」

訳が分からないと言いたげに首を傾げる爺さんに、俺は小さくため息を吐き出すと言った。

「あくまでしらばっくれるって言うんだな？」

「何の話が分かんと言っているんじゃ。確かにルーベンス君たちの暴走は本当にすまなかったと思う。じゃが、本当にわしはその事を知らなかったんじゃ」

「知らなかったくせに、何故賠償金を含めた依頼料がすぐに出てくるんだ、爺さん？」

金で俺達が深く考える時間をおかずにさっさと解決しようとして、即金で払ったんだろが、そもそも賠償金が用意されている事自体が可笑しい話だ。

「……これはわしのポケットマネージャ。常にこの部屋に常備されておるんじゃよ」

「あつそ。つまり、お前はお前曰く『部下が暴走した結果』を自分のポケットマネー程度で無かった事にしろっていう事だよな？」



「いや……、そういうつもりはない。もちろん、部下の暴走は申し開きのない事じゃ」

ふーん、申し訳ないと思ってるっけか？

まあ、嘘だろうけどな。本当にすまなさそうな顔を浮かべている爺さんの額には僅かだが冷や汗が流れている。

適当な旅人を使って、上手く証拠隠滅をする気だったんだろっけが、詳しく俺達を調べなかった爺さんが悪いんだぜ？

「申し訳ないと思ってるんだったら、分かってるだろ？」

脅す様に睨みつけながら俺は爺さんにそう尋ねる。つまり、何らかの報酬を渡せと言っているのだ。

「うぬぬ、では、更に報酬を3倍にしよう。それ以上は……流石に出せん。すまん」

苦しそうな表情を浮かべながらそう呟くように言う爺さん。

なるほど、普通の人間なら遊んで暮らせる金だな。並の魔法使いなら、この苦しそうな表情と大量の金から、この辺りで手打ちにするんだろっけが、俺は違う。

そもそも金は十分にあるからいらん。欲しいモノは別にある。

だから、俺は表情に更に凄みを持たし、吐き捨てるように爺さんに言う。

「ぶざけんなよ、爺さん？俺らの命を金で解決しようっけか？

っけか、今更そんな善人ぶった表情してんじゃねーよ。こっちは、

「こっちの願いを聞いてくれりゃーそれでいいんだからよ」

懐から煙草を取り出し、啜えるとそのまま火をつける。  
吐き出した煙は白く天井へと登り、消えていく。

そんな俺を見て、爺さんは値踏みするような目で俺を見てくる。  
恐らく爺さんの心の中では、このまま今のスタンスを取りしらばっくれ続けるか、それとも俺の望みを飲むか。どちらの方が有益かを考えているんだろうな。

だが、まあ、答えは出てるだろ？

このまま話し続けても俺達は金を受け取らない。

「だから、申し訳ないと思っておるが、これは事故であって」

「これが最終警告だ。これ以上、しらばっくれるなら考えがあるぞ？」

まだしらばっくれ続ける爺さんに、俺は殺気を込めつつ睨みつけてやる。

爺さんの喉がごくりと鳴った。

目まぐるしくメリットとデメリットを脳内で計算し続ける爺さん。  
そして、しばらく黙った後、小さくため息を吐き出していった。

「……では、どうしろと言っんじや？ こちらは金以外出せるものはないぞ」

ふむ、流石にこの状況でも白紙の小切手を出したりはしないか。  
だが、その言葉だけで十分だ。

俺はニヤリと笑って言った。

「うーん、そうだな。」

俺はこの魔法学校にある魔導書全部と、マジックアイテムを全部。後は、今後手に入った魔導書・マジックアイテムの類で、俺が気に入れば全部俺に譲渡する事」

「……………」

あまりの内容に思わずショートしてしまったっぽい爺さん。白目をむいて固まってやがる。

俺はしばらく待ったが、煙草を2本ほど吸い終わった後、ようやく再起動が完了した様だった。

いやいや、やっぱり年代物は再起動が遅いね。

「はっ!? いやいやいや、ないじゃろ。」

それはないじゃろ、いくらなんでも!」

つらつらと並べていく俺の言葉に爺さんは慌てて止めに入るが、俺は気にしない。悪いのはどう考えてもお前だからな。

一切の妥協をする気はない。怨むなら自分の愚策を怨むんだな。

「何とか出来るモンだろ。今回の一件の口止め料にしては安いモンだろ。」

何しろ、学校機関が人間の命を勘定に入れてやがったんだからな」

ギリッと悔しさで歯を噛む爺さん。これ以上、惚けてこちらが違

う集団に出られれば、困るだろうし、俺の要件を飲むしかない。そんな爺さんに俺は小さく微笑むと更に言っちゃった。

「まあ、これは俺の条件だ。後はこいつの条件も聞くんだな」

「な、まだあるのか!？」

俺の言葉に爺さんが絶望的な表情を浮かべるが、俺には関係ない。そんな爺さんに、月詠は小さく首を傾げながら答える。

「うちはですな」。

うーん、特に欲しいものはないですしー」

月詠はうんうん唸りながら考える。そして、何かを思いついた様にぼんっと手を叩いて言った。

「この学校改名とかどうですかー?」

「は……、改名?」

月詠の言葉に爺さんが首を傾げる。

そんな爺さんに、月詠は何故か嬉しそうに言った。

「そうですね」。

『なんちゃって魔法学校』に変えるんですわ」

「いやいやいやいやいやいやいや!」

なんで!?! なんでなんですか!?! それは勘弁して下さいよ!」

いや、うん。俺も意味が分からないが、嫌がらせとしてはかなり

上級だな。

多分、月詠としては特に欲しいモノがないから適当に思いついた事を言っているのだろうが、いやいやこれはこれで面白い。

「ダメですかー？ それなら『立派な魔法使い（笑）魔法学校』とかもありですけどー？」

「そっちの方がダメじゃい！ いや、その前でもダメじゃけど！ 他のなら、何でもするから！ 何でもするからそれだけは無理じゃ」

恥も外聞もすてて、ジャパニーズ土下座をする爺さん。

月詠が日本人だと思つての土下座だな。うん、綺麗な曲線美だ。

「いやですえー」。

今、この瞬間からこの学校は『なんちゃって魔法学校』ですえー」

だが、月詠には効果がない。

問答無用で、涙目になっている爺さんに月詠はそう宣言した。

そしてその瞬間、この学校は『なんちゃって魔法学校』になったのだった。

いやー、面白い。

俺はもう耐え切れずに爆笑してしまった。

爺さんはマジ泣きしてた。

いやいや、人を殺そうとした代償がそれだけなら安いもんだろ？

なあ、立派な魔法使いさん。

月詠は何を考えているのか、ときどき俺にも理解が及ばない。(後書き)

さて、次回からなんちゃって魔法学校編です。

まあ、すぐに原作の時期に飛ぶと思いますけどw

ドキ 使い魔はオコジヨ!? 第一話』どっしてこっつなった?』。(前書き)

いや、本当にどうしてこっつなっただよ?



ドキ 使い魔はオコジヨ!? 第一話』どっしてこじつなつた?』。

やあ、カモだ。

依頼を受けてネギ少年と、どうやって接触を図るか考えているカモだ。

「また、面倒くさい依頼を受けはりましたなー。そんな長い間、うちは何しとればええんですー?」

ぶーぶーと文句を言ってくる月詠。

うん、分かってる。

どう考えても魔導書に釣られてしまったのは分かってる。

伝説級の魔導書にテンションあがって、あんまり何も考えずに依頼を受けてしまったのは分かってんだよ。

「面倒くさい依頼を受けてるのは、分かってんだよ。

くそー、失敗したなー」

今すぐトズラをしたい感じだが、残りの魔導書は欲しい。くそー、葛藤が凄い。

「うーん、とりあえずネギと接触して使い魔にでもなるか。それが一番やりやすいしな」

「むー、うちはどうしてたらいいんですえ？」

ぶつぶつと考えている俺に月詠はむっとした表情でそう尋ねてきた。

「いや、好きにすればいいんじゃないか？」

10年以上もかかるんだから、魔法世界を旅するのもいいし、俺の情報屋を継いでもいいし」

「敗者は勝者に従うもんですえー」

いや、それは何年前の話だよ。

当然つと言いたげにそう言い切った月詠に俺は呆れる。だが、まあついて来てくれるなら、それはありがたい。

ついて来てくれる気満々の月詠に俺は小さく微笑むと少し考え、月詠に向っていった。

「そんじゃ、月詠はネギ少年の通う魔法学校の警備かな。ただし、少年に見つからないようにしろよ」

ここの魔法使いと一悶着あったが、それを差し引いても月詠は腕の立つ人間だ。英雄を守りたい向こうの立場からしたら、雇っておきたいのは確かだろう。

ちなみに、改名についてはあの爺さんの独断でやった事になっているから、その事について他のメンバーに変に睨まれる事もないだろう。

いやー、改名発表から1日しか経ってないのに、退学届もった生徒が校長室に長蛇の列を作ったり、爺さんが脳の検診に送られたりなど色々あった。

ちなみに、今は校長代理が頑張って汚名返上に燃えているらしい。

うん、なかなか笑えたぞ？

だが、まあいくら立派な魔法使いがお気楽集団でも、素情が分からない人間を雇うほど馬鹿でもないしな。

……ふむ、そうだな。ここはガトウを使って信用してもらうか。あいつ自身は公式的に死んでいるが、あいつの知り合いを使えば何とかなるだろう。

英雄の知り合いの知り合いを雇えるなら、汚名返上とばかりに積極的に雇い入れるだろうな。うん。

思い立ったら吉日と、俺はガトウにその旨のメールを送る。

すると、間髪いれずにガトウからメールが来る。

そのメールを起動させると……

件名：『親友の頼みならば』

本文：『（ ） b OK

親友の頼みだ。何とかするよ！o(\*^ ^\*)o 』

いやいや、顔文字がウザいよ。親友辞めなくなる程のウザさだよ。

「相変わらずですなー、ガトウはんはー」

返信のメールを見て、月詠も呆れたようにそう呟いた。

ああ、相変わらず過ぎて今すぐ毒殺したい気分だよ。

俺はガトウメールを見なかった事にして、小さく息を吐きだし、思考を切り替える。

「さて、これで月詠の方の根回しは出来たな」

まあ、ガトウの奴の性格は置いといたとしても、これで月詠の方は十分。後は俺なんだが……。

「……やはり使い魔が一番楽だな」

人間の姿で接触してもいいが、教育や監視なら常に傍にいた方がいいしな。会った事すらない俺にはそれが一番やり易い。

そんな事を考えてそう呟いた俺だったが、そんな俺を見て月詠は可笑しそうに微笑んだ。

「ふふふ、カモはんが使い魔ですかー」

「何だよ？ 何が可ましい？」

ちよつと意地悪そうに笑う月詠に俺はそう尋ねると、月詠は袖で口元を押さえながら言った。

「いやだって、カモはんが、誰かに使われるなんて想像できへんねんもん」

「うっせー。やりたくてやる訳じゃねーよ」

俺だって想像できねーよ。

俺の言葉に更に可笑しげに笑う月詠に、俺はムツとしながらもネギ少年との接触方法を考えているのだった。

色々考えた末に、面倒臭くなった俺はぶつつけ本番でネギ少年の部屋の前へとやってきた。

今現在の俺の設定は『旅をしているオコジヨ』『旅の理由は主を探すため』『今、凄くお腹がすいている』の3つだけである。

この設定で、ネギ少年の部屋に入り飯を貰って一宿一飯の恩とか言つて、半ば無理やりにも使い魔になればいいだろう。

まあ、所詮は子供だから口八丁で丸めこめばいいか。

軽い感じでそう考えながら、俺はネギ少年の部屋のドアをノックしようとして、

「ネギっ！ いるんでしょ！」

むぎゅっという擬音にすると可愛らしいが、実際はグロい音を発して何かに踏みつぶされた。

そして、俺はそのまま気を失ったのだった……。

S I D E : アーニヤ。

私の名前はアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

普段はアーニヤって呼ばれているわ。

今はなんちゃって魔法学校に在籍しているの！

っていうか、何よ！ なんちゃって魔法学校って！ おじいちゃんボケたんじゃないの！？

そういえば、おじいちゃんは、なんとか病院って所で長期入院する事になったらしい。

元気になって帰ってきてほしいな。

ちなみに、頭は良い方よ！ 成績だつて上位なんだから！

そして、私は今、幼馴染で一つ年下で手のかかる弟みたいな存在のネギに合いに、部屋へとやってきていた。

「ネギ！ いるんでしょ！」

私はそう言つて、ノックも無しに無理やり問答無用でネギの部屋に入ろうとする。

その時、むぎゅつという何か可愛らしい様なグロテスクな様な音が私の足元で響いた。

「きゃっ！？ なになに、何なの！？」

突然の音に私は驚いて自分の足元を見ると、そこには小動物が目を回して眠っていた。

あー、こいつを踏んじやったのね。でも、こんな所で寝てる方が悪いわよね？

私はそう考えるが、踏んでしまったのは事実なので、尻尾を摘み持ち上げて、死んでいないか確認する。

「きゅー」

何だか可愛らしい声を洩らしているその小動物。どうやら、生きているようだ。よかった、よかった。

それにしてもこれは何かしら？

イタチ？ オコジヨ？ フェレット？

うーん、まあ、何でもいいわ。

少し悩んだけど、私はそう考えて小さく頷き、この小動物を持ったまま私はネギの部屋へと入った。

「ネギ！ 入るわよ！」

私はそれだけ言っただけで部屋の中に入る。

「わわっ、アーニヤ！ 突然入らないでよ！」

「うっさいわね。別に隠すもんもないでしょ」

なんか文句を言ってくるネギに、私はそう言っただけでネギのベッドに腰掛ける。ネギは何かこそそこそと机で何かやってた。

どうせ、口癖のように『お父さんの様に英雄になるー』の練習か何かでしょ。もう、そんな事はっかりしてるから、頭でっかちになるのよ。

まあ、その分異常な程頭いいんだけどね。

「もう何の用？」

可愛らしくぷくつと頬を膨らませるネギ。

本人は怒ってるつもりだろうけど、迫力のはの字もないその顔に私はビビったりしない。

「何よ。こんな可愛い女の子が尋ねて来たんだから喜びなさいよ」



怒っているネギにムツとしながら言う私に、ネギは小声で何か文句を言っている。とりあえず、ム力つくから殴っておこう。

「痛いよ！ アーニヤ！」

「あんたがグチグチ言うからよ！」

ふんつと鼻を鳴らしてそう言う私に、ネギは涙目になるが何も言わない。うん、自分が悪いのを認めたのね。

「それよりも、アーニヤ。それは何？」

少し満足した私にネギがそう尋ねてきた。ネギが指差しているのは私が摘まむように持っている小動物。

「何か、そのドアの前で寝てたのよ」

何でこんな所で寝てるのか、分からないけど。

「アーニヤ、それってオコジヨじゃない？ それもオコジヨ妖精」

「オコジヨ妖精？ あー、あの使い魔がどうこうっていう」

ネギの言葉に私は学校で習った授業を思い出していた。ルーベンス先生が教えている魔法動物学で使い魔について教えてくれた時に、確かオコジヨは使い魔になるとかそんな事を言っていたような気がする。

「ふーん、これがオコジヨ妖精ねー」。

「何でそんなのが、そこで寝てんのよ？」

「僕に聞かれても分からないよ」

じろつと私の手につままれているオコジヨに目をやる。

あつ、目を覚ましそう。

「……ここは？」

「うわっ、本当に喋った！」

目を覚ましてそう呟くオコジヨに私は驚いて、思わず手を放してしまった。すると、オコジヨは重力に従って地面へと落ちて行く……が、地面に落ち着る前にクルリと回転して綺麗に着地した。

オコジヨはキョロキョロと辺りを見回していたが、すぐにポンッと手を叩いてポツリと言った。

「……、ああそういう事が」

何かに合点が言ったようにそう言うオコジヨ妖精。

「何がそういう事かなのよ？」

そんなオコジヨ妖精に私はジロリとした目線でそう尋ねる。その私の言葉にオコジヨは始めて私の存在に気がついたように、少し驚き、そして仰々しく頭を下げた。

「いやいや、お嬢さん。」

私はアルベール・カモミールというしががない旅をするオコジヨ妖

精さ。

そして、そちらの少年も初めまして」

演技つぽく頭を下げるカモミールとか言うオコジヨ。

どことなく大人つぽいその仕草に、私もネギも思わず気圧された様に自己紹介を始めた。

「ど、どうも。ネギ・スプリングフィールドです」

「私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウアよ！ アーニヤでいいわ」

私達の挨拶に、カモミールはぺこりと頭を下げる。

「ふむ、ネギ君にアーニヤちゃんか。よろしくな」

「うん、よろしく！」

ニコニコと笑いながらネギがそう言う。

何よ、そんなにすぐにニコニコ笑って。もしかしたら、このカモとかいうオコジヨは悪い奴かもしれないじゃない。いや、そんなに悪い奴には見えないけど。

別に私がいるのにオコジヨにばかりかまってるネギにむかついたとかそんなんじゃないけどね？ ね？

私は警戒するようにオコジヨを見ると、オコジヨはそんな私の視線に気がついて少し可笑しげに笑う。

「いやいや、お嬢さん。そんなに警戒しなくていいよ。私はただの旅オコジヨだからね」

「旅オコジヨって何よ？」

カモミールの言葉に私はわざと険悪そうにそう尋ねると、カモミールは何か可笑しそうに笑いながら言った。

「ふむ、そうだな。どう説明すればいいのか、旧世界から魔法世界まであちこち旅をして自分の主に相応しい人間を探すオコジヨの事だよ」

「へー、あちこち旅をしてるんだ！」

カモミールの言葉にネギは目をキラキラと光らしながら、そう言う。

そのネギの反応にカモミールは嬉しそうな笑みを浮かべながら言った。

「ああ、色々な旅をした。巨大な龍を見た事もあるし、古の遺跡に潜った事もある。全て大冒険だった」

「すごいなー！　どんな冒険をしたのー！」

目をキラキラ光らせるネギ。私もちよっと気になる。

そんな私達の視線を受けて、カモミールはどこか得意げに笑うと小さく息を吸って言った。

「そうだな、こんな話なんてどうだい？」

このオコジヨは、巨大な龍と戦った話や盗賊を盗伐した話などを面白おかしく聞かせてくれた。

ハラハラドキドキの冒険シーンにネギは手に汗を握り、異国の姫とのラブロマンスには思わず顔を赤らめていた。もう、子供なんだから。

……、まあ私もだけど。

「とまあ、そんな訳で俺と相棒はその国を救うと新しい冒険を求めて旅を続けたんだ。何でかって？ 冒険が俺達を呼んでいたからさ……」

カモミールは（長いからカモで良いわよね？）、カモは話を区切る。

ネギはパチパチと涙ながらに手を叩いた。

私も小さく手を叩く。私は泣いてないわよ？ いえ、良い話だったけど。泣いてないわよ？

その時、カモのお腹がぐーっとなった。

その音を聞いて、カモは少し恥ずかしげに顔を歪ますと、顔を赤らめながら言った。

「いやいや、お恥ずかしい。

ここ数日まともに何も食べていなくてね。

出来れば、何か食べさせてくれると嬉しいんだけど」

「うん、分かったよ！」

打てば響くタイミングで頷くネギ。

「あっ、待ってよ！ ネギ！」

カモの言葉にネギは大きさに頷いて、どたどたと外へと出て行った。私もそんなネギの後を追ってキッチンへと向かった。

とりあえず、冷蔵庫の中にあるモノを適当に取ってくればいいのかね？

「はい、とりあえずこれを持って来たわよ」

私はそう言って1つをカモに渡す。

とりあえず、喋る事はできるけど、小動物なんだし猫に餌を上げる感じでいいのよね？

「お嬢さん。これは、何だい？」

差し出されたそれを見て、カモはぴくりと眉を動かしながら、どこかぎこちない口調で訪ねてくる。

「何って玉ねぎよ」

私が差し出したのは大きな玉ねぎ1個丸ごと（生）。

「お嬢さんは笑顔で子猫に玉ねぎを上げるタイプだね？」

「何よ、悪い？」

ジロリと睨みを利かせる私だが、カモは小さく肩を竦めた。

「もー、アーニヤ。だから言ったのに」

そんな私達にネギは苦笑しながら、持ってきたビスケットとミルクを渡した。それをカモは何も文句言わずに受けとった。

何で私のに文句いって、ネギのに文句言わないのよ！

美味しいのよ、玉ねぎ。林檎みたいで。

ガツガツとビスケットを食べているカモ。その食べ方は本当にお腹がすいているようで、話していた通りここ数日何も食べていなかっただろう。

「いやー、助かった！ 生き返ったよ、少年、お嬢ちゃん」

カモはそう言って大きな爪楊枝を器用に使って歯に詰まっているのを取った。

「べつにいいわよ、このぐらい」

「……アーニヤは何もしてないよ」

「何か言った？」

私の言葉にネギは小声でそんな事を言ってくるが、私が睨むとすぐに黙ってしまった。もう、男ならしっかりしなさいよ！

「いやいや、ありがたいよ。本当に」

カモは仰々しげにそう言って、頭を下げる。

「本当にありがとう、少年。生き返ったよ。」

そうだな、一宿一飯の恩義という訳ではないが、私を雇ってくれないだろうか？ ああ、使い魔とかそんなに細かい決めごとはしなくていい。

今日の飯分ぐらいはちゃんと働くさ」

そんな事を言って、ネギの方を見るカモ。

ほんの少ししか会っていないけど、私はこのカモと長い付き合いであった様な錯覚を受けていた。それはネギも一緒だろう。

カモのその視線にネギはプルプルと震え、何か決意して言おうとした瞬間。

「分かったわ！ あんた、私の使い魔になりなさい！」

S I D E : カモ

やあ、再びカモだ。

今日のうちに2回も挨拶しているカモだ。

始めの方で少しトラブルが合ったが、概ね予想通りにいっていた



カモだ。

印象の悪くない、それでいてこの年の人間には大人に見えるがとっつきやすい感じの口調で喋り。適当にでっちあげたり事実をかなり捻じ曲げてハッピーエンドにした武勇伝を話たりして、ネギ少年の心をつちりとキャッチしたのだ。

まあ、簡単に言えば詐欺師とかが使うテクニクだ。

そして、そんなテクニクもあり俺はついに使い魔の契約をさり気なく持ち出し、小動物特有のクリクリお願い目線で可愛らしくネギ少年に頼んだのだ。

そして、事実後数秒もたたずに折れたであろうネギ少年の前に、何故かアーニヤという少女がポンっと手を叩いて言ったのだ。

「分かったわ！ あんた私の使い魔になりなさい」

えええええ！？

何故そうなる！？

なんでそうなる！？

どうしてそうなる！？

いや、これはどうするべきだろうか？

予想外の出来事に俺は驚きの表情を浮かべない様に、無理やり飄々とした表情を顔に張り付け、高速で頭を動かす。

断るのはここまでの流れをぶった切る感じもあるし、断った後であの少年に改めて使い魔の契約を持ち出すのも間違っているだろう。

「何よ？ 嫌なのよ？」

なかなか答えない俺に、アーニヤは少しムツとした表情でそう尋ねてくる。そんな顔でにらむなつて。

「いやいや、嫌ではないよ。」

だが、お互いの事をちゃんと知っていないのに使い魔契約は出来ないさ」

「そんなもん大丈夫よ！ 私があんたを使い魔にしてあげるんだから！」

暗に嫌だと言ってみるが、そこはさすがお子様。直接言わないと理解しない様だ。

うーむ、YESかNOをハッキリしなくちゃ逃げ切れん様だな。

とりあえず、NOと言えばネギ少年の使い魔になる事は出来ないだろう。だが、YESと言っても使い魔の契約は出来ない。

でも、確かアーニヤという少女はネギの幼馴染なんだよな。

……、うん。とりあえず使い魔契約しておけば、この魔法学校にいる間は一緒にいれるか。その後の事は、後で考えよう。

俺は投げやりにそう考えると、アーニヤに向かって言った。

「分かりましたよ、お嬢さん。」

こんなしがたない旅オコジョでいいのなら、お嬢さんの使い魔となりましょう」

こうして、俺とアーニヤの関係が出来上がったのだった。

いやいや、何が間違っただろうなんだよ？

……もう、どうでもいいや。

ドキ 使い魔はオコジヨ！？ 第一話『どうしてこづなった？』。(後書き)

という事で、カモ君、無事に使い魔化しました。……アーニヤの  
すが。

さて、これからどうしようかな？

悲劇のヒーロー程、面倒くさい生き物はいない。

いや、なんかもう力モだ。

何か訳のわからない事になった拳句、勝気幼馴染系少女の使い魔になつてしまった力モだ。

いや、ホント訳が分からないよ。

ただまあ、使い魔ならばらく使い魔らしく頑張るよ。

月詠に爆笑されたけど頑張るよ。仕返しに月詠をぼこぼこにしよ  
うとしたけど、頑張るよ！ 何か逆に喜ばしちゃったけど、頑張る  
よ！？

ヤケクソじゃないよ！？ 泣いてもないよ！？

「……はあ、朝か」

小さくため息を吐きだし、俺は目を覚ます。

ちよつと前に研究した1時間の睡眠を10時間にするとという時間  
魔法を使用して、俺はぐっすりと睡眠をとる事が出来た。

これからしばらくはこの魔法を使って、夜中にこそこそと魔法研究をする事になってしまう。

ふう、研究室をどっかに作らないとな。

その当たりは月読に頼むか。

俺はそんな事を考えながら、首をコキコキと鳴らし、一度気合いを入れる。

そして、馬鹿みたいにぐっすり眠りこけている少女が寝ているベッドへと飛び乗った。

「やあ、お嬢ちゃん。

おはよう。そろそろ目を覚ます時間じゃないのかい？」

仰々しく演技チックに俺はベットで寝ているツンデレ少女を起こす。

「うーん、むにゃむにゃ」

おー、ジャパニーズ漫画で有名な寝言『うーん、むにゃむにゃ』を地でやるとは、さすがだな。

後は『もう食べられないよー』とか聞いたら嬉しいんだが。

起こすのをやめ、しばらくアーニヤを観察していると、再び口が動く。

「うーん、食べられ」

おおっ！ 言うのか!？

「るーが、タベラレルーが食べられて、アークドラゴンにいいいい！  
ぎゃー！ 青タベラレルーもはぐれた！  
ぬあああ、モンスターハウスだー！」

おー、夢の中で風来っばい大冒険してやがるな。かなりピンチだ  
けど。

何だか、泣きそうになっているアーニヤに俺は安心させるように  
声をかける。

「お嬢さん、大丈夫だ。

その世界では例え死んでもレベルとアイテムが消えるだけだから  
な」

「ああ、私死んだわ。フロアのどこかにアークドラゴンさんが3人  
もいらっしやるなんて、もう一步も動けないじゃない。ああああ  
っはっ！？」

ガバツと身体を起こして目を覚ますアーニヤ。  
目には涙を溜めて、せいぜいと荒い呼吸で、まるで猛獣のように  
ぎよろぎよると辺りの安全を確かめ始める。

その姿はお世辞にも可愛らしい寝起きとはいえないね。

いや、野生動物を愛でる感じの可愛さはあるかもしれないけど。

そんな事を考えていると、きよろぎよると見渡していた視線が俺  
に移り

「……オコジヨ、倒す、経験値稼ぎ」

何かとんでもない事を呟くアーニヤ。

まあ、見た目小動物の俺は経験値稼ぎにちょうど良く見えるかもしれないな。

実際の俺は経験値の割に特殊能力あるから、見かけたら新しいフロアに逃げるのを勧めするけどな。

「どうたぬきを装備……」

あー、まだ夢から覚めきつてない様だ。

俺は面倒臭くなって、オコジョパンチを食らわしてやる。

「あいたっ！？ って、ここは」

「起きたかいお嬢さん？」

魔力も気も込めてない小動物のパンチなので、大した威力はない。そのパンチで目を覚ましたアーニヤは叩かれた頬をさすりながら、まだ少しうつろな目でこちらを見てくる。

うん、低血圧だな。

「お嬢さん、とりあえず顔を洗ってきなさい。

そんな夢に怯えた顔じゃ、可愛い顔が台無しだよ」

「へ？ あ、うん。分かった」

自分でも言っていて寒気がする戯言を吐くと、アーニヤは少し顔を赤くしながら目をこすり、素直に洗面台へと向かっていった。



「そう言えば、カモを使い魔にしたんだっ たわね」

洗面台の方でそんな声が聞こえてくる。俺としては忘れられた方が楽だったのだが、どうやらすっかりと記憶されてしまっている様だ。

ふう、仕方がない。覚悟を決めて、使い魔ごっこでもするか。

「よし、これでいいわね。」ご飯食べに行きましょう」

くるっと一回転して自分の姿に満足がいくと、アーニヤはそう言っ て俺を持ち、部屋から出て行く。

うん、出来れば、尻尾を持つのは止めてほしいな。

「ねえ、カモ。何か普段よりも人が少なくない？」

朝食を取りに食堂にやってきた俺とアーニヤ。アーニヤは食堂の朝定食を頼み、もきゅもきゅと食べながらそんな事を俺に言ってきた。

その言葉に俺は辺りを見回すが、確かにこの広さの割に座っている人間は少ない。

「いやいや、お嬢さん。私は普段の様子を知らないの、何とも言えないのだが、あれではないかな？」

なんちゃって魔法学校なんて名前になったのが嫌で逃げたか、それとも現実逃避をするために部屋に籠って覚める筈の無い夢が覚めるのを待っているんじゃないのかな？」

名前が変わっても、内容は変わらないのにそんな事にこだわる何て、やっぱり子供だね。まあ、俺にはどうでもいいけど。

「……うがーっ！ 私だって現実逃避したいわよ！」

俺の言葉に何か刺激されたのか、アーニヤはそう叫んで無理やり朝定食を口の中へと放り込んでいく。うんうん、やけ食いだね。

「でも、私もネギも行くところないんだし、なんちゃってだろうが何だろうが、やってくしかないのよおおお！！」

うん、頑張れアーニヤ。俺には関係ないから、外から声援ぐらいはかけてあげるよ。

「……アーニヤ、大丈夫？」

見事なやけ食いをしているアーニヤを眺めると、キョドキョドした表情を浮かべているネギ少年が、朝定食を乗せたお盆を持ちながらやってきた。

「やあ、ネギ少年。おはよう」

「あつ、カモミールさん！ おはようございます！」

俺の顔を見てキラキラとした顔で挨拶してくるネギ。

ちよつと好感度上げ過ぎでウザいかも。何か、ガトウに似てる。

この一度、心許すと尻尾振ってくる感じが特に。

「私の事はカモでいいさ。それよりも少年、座って食べなさい。

君は標準よりも背が低いみたいだからね、しっかり食べてしっかり寝ないと健康的な身体は出来ないよ？」

「あつ、はい」

俺の言葉に素直にテーブルにつくと、カチャカチャとナイフとフォークを使って食べ始めた。

うん、素直な子供は好きだぞ。扱いやすいという意味で。

「そう言えば、カモミール……いえ、カモさんは旅をしてたんですよ？」

食事をしながらネギが改まってそう尋ねてくる。

そんなネギに俺もアーニヤの食器から、色々と摘みつつ首を傾げた。

「なんだい、また旅の話聞かせて欲しいのかい？」

「いえ、そうではなくて……、その」

ウジウジと下を向くネギ。そんなネギに俺は小さく肩を竦めてこ

飯へ手を向ける。

うん、ハンバーガーよりは美味しい。

「あの、カモさん！」

「何かな？」

さつさと言えと内心思いながらも、やんわりと尋ねる。そんな俺の姿にネギ少年は何か決心をした様に言った。

「旅の途中で、僕のお父さん。いえ、千の魔法の男に会いませんでしたか？ いえ、本人でなくても紅き翼のメンバーの誰かとあったりしませんでしたか！？」

何だ？ 父親の情報？ それに紅き翼のメンバー？

ガトウなら友人だが、下手な事言っただけ刺激するのも鬱陶しそうだしな。

こいつウザい所がガトウに似てるから。しかも、ガトウ程大人じやないから、ウザい所が全面に出てる。

うん、俺には関係ないしどうでもいいや。

「いや、そんな有名な人には会ってないな。そもそも千の魔法の男は死んだ筈ではなかったのか？ それ以外の話もほとんど聞かないしね」

ガトウも公式的には死んでるし、案外どっかでのほほんと暮らしてるかもしれんがな。

そんな事を考えながら、ごく一般的な回答をした俺にネギは悲痛な表情を浮かべながら首を振った。

「違うんです！ お父さんは生きてます！

僕はあつたんです！ 悪魔に襲われたあの村で、お父さんに！」

何だかハッスルして語り始めようとするネギ。

食堂に来ている人間の視線が彼に集まってくるが、彼は気にしていない様だ。というよりも、語るのに必死で気づいていない。

語りは長いので話半分に聞いていた。

「あー、つまり君の父親である千の魔法の男に会いたいけど、会えなくて、会えない間に気持ちがつのって、ワウワウワって感じな訳だね？」

何か後半は歌の歌詞みたいになったが、まあそんな感じなのだろう。

俺の要約に、ネギはちよつとどこか違うと言いたげな表情で頷いた。

だが、その顔は真剣そのもので、ここで変に父親の情報を渡すと今すぐにも確かめに行きそうな顔だ。まっすぐ過ぎて面倒くさい。

あー、これは『僕はお父さんを探す旅に出る』フラグでも立つのかな？

それって12年以内にそのフラグが回収されたら、俺も旅に出る事になるんだよな？ 嫌だよ、そんな面倒な事。

よし、ここは面倒くさい未来を回避する為にちょっと諭しておくか。

俺は頭の中で、そう考えると少し息を吸ってネギ少年に真剣に見える表情で尋ねた。

「なあ、少年。お前は父親の強さに、偉大さに尊敬してるんだよね？」

「はい、そうです」

少し雰囲気が変わった俺にネギ少年はしっかりとした目で見据えてくる。あー、この目は面倒くさい事を真顔で持ち込んでくる人間の顔だよ。嫌だなー。

ネギ少年の顔に俺は小さくため息を吐き出したくなる衝動を抑えて言う。

「それで生きてる事を知ってるんだよね？」

「はい、そうです！ 僕は確かにあつたんです！ あの時、お父さんに！」

あー、分かった分かった。だから、もういいって。一回目だぞ？ そんな事を考えながら俺はネギ少年を制止する様に言った。

「なら、それでいいんじゃないのか？」

「え？」

俺の言葉にネギ少年は俺の言った意味が分からないという表情を浮かべた。

そんなネギ少年に俺はたたみかける様に言った。

「お前の父親は強い。んで、生きてるなら、それでいいじゃないか。一度、お前に会いに来たんならまたふらつと現れるだろ」

「でもっ！ 僕はっ！」

俺の言葉に何か反論してくるネギ。

聞いているとネチネチした感じた。悪魔の襲来が自分の所為だとか、自分は強くなりたいとか。

あー、これは分かりやすい心的外傷トラウマだな。

しかも、自分が全部悪いんだとふさぎこむタイプの奴だ。

「だから、僕は強くなりたいんです！」

「このバカネギが！」

うだうだうだーっとか言っているネギに、俺が止める前にアーニヤが思いつきりネギをぶつたいた。よく見ると、ぶつたいた、その右手には魔力が集まっている。あれは痛い。

というより、アーニヤの嬢ちゃんは無意識でやってんのか、知らんが中々の腕だな。アーニヤの内申点を少しだけあげる。

「あのね！ あの事件がネギの所為な訳ないでしょ！ 思いあがんのもいい加減にしなさい！ 頭でっかちウルトラバカネギが！」

あんたが何か言つてあんな事件起こるなんて思つてるなら、一生『お父さんに会いたい』とか言つとけばいいわよ！

そしたら、その内、会いにくるんじゃないの！？ この泣き虫自意識過剰のド変態馬鹿ネギ！！」

ネギの胸元をつかみながら、物凄い形相でアーニヤはそう言った。そのアーニヤの迫力にネギは涙目になっていた。

うん、アーニヤの言う事は最もだ。だが、ネギ少年にはその言葉は通じない。

小さな声で、泣きそうになりながら『でも、それでも』とか呟いている。

まあ、それはそうだろう。

少年の話を聞く限り、悪魔の襲来とかいう奴は彼の心的外傷トラウマになっている。

そして、その結果、『自分が悪い』と思ひこむ事によってそのトラウマを自己完結させているのだ。

自分とは何の関係もない事件にただ偶然巻き込まれたと思いたくないから。

なんらかの原因が無ければ、いつまた同じように悪魔がやってくるか分からない。

だから、少年は思い続けるのだ。自分が悪い、と。

自分が悪いなら、その悪い所を直せばいい。直せば、もう二度とあんな事は起きはしない。

そう思い込む事で、少年は自分の壊れそうな心を何とか守っているのだ。



強くなりたいと漠然と思うのも、その反動だろう。

強くなれば、悪魔を倒せる。

悪魔を倒せるなら、あんなに怖い思いをしなくて済む。

そして、強さを求め続ける事で、自分が何かをしているという気分になれるのだろう。

あの事件を繰り返さない為に、自分は努力している。

自分の父親の様になる為に努力を続けている。

努力をし続けている事で、強さを求め続ける事で、少年は自分の中で自分をようやく許せるのだ。

ほら、見て見て。

僕はこんなにも頑張ってるんだ。

あの事件から反省して、僕はこんなに頑張ってるんだよ。

まあ、そんな感じに考えているのだろう。

そう考えている以上、いくらアーニヤが正論を言い続けた所で意味などない。むしろ、逆効果だ。

「……でも、僕は強くなりたいんです。

誰も失いたくないから」

涙目で、アーニヤに胸元をつかまれながら、それでもネギ少年は諦めずに絞り出すような声でそう紡ぎだした。その声からは確固たる意志が伝わってきた。その表情からは決して曲げない信念が伝わってきた。

ドロドロとしたモノを抱えるが故の意思。

負の感情から紡ぎだされた信念。

自分で自分を許し続ける為、ネギ少年は決してその気持ちを曲げないだろう。

アーニヤにもその気迫が伝わったのか、いつのまにか彼から手を離し、何か言おうとして何も言えなかった。彼女だって、そのトラウマを少なからず持っている筈だ。

彼の気持ちは分からない訳でもないのだろう。

静まりかえる、食堂。

誰も何もしゃべらなかつた。

いや、喋れなかつた。ネギ少年のそのねじ曲がつた迫力に皆が気圧されていたのだ。

そんな様子を見ていて、俺は心の中で思った。

知らんがな。

少年が強くなるのが、なるまいが、俺には一切関係ない。

俺が受けた依頼はあくまで、監視と教育。教育と言っても、特に具体的な指示は無いので、監視さえしていればいい。

だから、少年が何を思おつが、どうねじ曲がろつが知った事ではない。

だけど、と俺は考える。

その結果、強さを求めて旅に出られたり、無茶な行動されたりするのは俺にとって得策ではない。ちょっと話ただけで、この少年の頑固さは分かる。

一度、旅に出ると言い出したら聞かないだろう。それこそ、手が引きちぎられても進むはずだ。

そうなると非常にメンドイ。

少年の頑固さはトラウマからきている。だったら、トラウマをどうにかすればいいんじゃないだろうか？

俺はそう考えた。

考えた結果、こう言った。

「よし、少年。今日の夜、ちょっと顔を貸してもらおう」

静まり返った食堂には俺の声がよく通っていた。



なんちゃって魔法学校の設備は意外といい。

やあ、カモだ。

あの後、ネギやアーニヤと別れて、魔法学校内を探索しているカモだ。

この魔法学校は無駄な造りが多いためか意外と広い。

俺はそんな学校の中を歩きながら、きよろきよろとあたりを観察していた。

ふむ、警備はやはり固いな。

人の配置などではなく、用意されている魔法陣が固い。

例えば、あの窓に嵌められている魔法陣は認められた人間以外が窓から侵入すると、亜空間に飛ばされ中からは永遠に出れないという魔法陣だし、あっちの廊下にある魔法陣は認められた人間以外が歩くと廊下が水みたいに液状になり、尚且つその液状に触れると必ず溺れるという鬼畜仕様だ。

見た感じ、全て侵入者捕獲用の様で、殺す事はしない様だ。

それは立派な魔法使いだからか、それとも拷問をする為か。

どっちにしても、素人にはお勧めできないダンジョンだろう。

だが、その分この警備をしている人間は弱い様だ。

まあ、これだけ固い魔法陣があればそもそも警備する必要がないから、弱くなるのは当然と言えば当然かもしれないな。

「おっ、この魔法陣は人格そのものに乗っ取る仕様か。中々、鬼畜だな」

「何やってはるんですかー、カモはん？」

改めて魔法学校内の警備を見回っている俺に、そんな聞きなれた声が聞こえてきた。

振り返るとそこにいるのはやはり月詠。しかし、何故かスーツを着ている。

多分、警備の関係上だろう。

「いや、ちょっとこの学校の鬼畜警備を見回ってんだよ」

「何言っではるんですかー、うちの工房はこれ以上の警備してるやないですか」

まあ、そうだけだな。うつのは触ると永遠に苦痛を感じ続ける魔法陣とか、そもそもその魔法陣に入った人間を魔力に還元するとか

デフォルト装備だしな。

「そういうお前は何やってんだよ？」

俺は自分の工房の警備を思い出し、軽く笑った後に月詠にそう尋ねた。

「うちは警備という名の散歩ですえー。  
取り合えず、見回ってたらいいらしいですわー」

ちよつと詰まらなそうな表情を浮かべている月詠に俺は小さく苦笑する。

まあ、戦闘狂からしてみれば詰まらないだろうな。

「魔法陣が凄いから警備の方はぬるくなるんだろうな」

「あー、突然地面が割れて古代の魔物とか現れたりせんかなー」

「何だ、そのB級怪獣映画は」

魔物を想像したのかうつとりしている月詠のちよつと物騒な発言に俺は小さくため息を吐き出して、再び学校の中を見て回るために歩き始める。

すると、俺の後を月詠が着いてくる。

「何で俺の後を着いてくるんだ？」

「カモはんがいた方が面白い事が起きそうな気がするんですえー」

いや、別に部屋の中を見て回るだけだぞ？

そう言おうとするが、月詠はそれでも気にしなさそうなので、結局何も言わずに俺は歩き始める。

「それにしても変わった学校だな。」

禁書室にあれだけの魔導書があったのだから、この過剰なまでの魔法陣もそうだな。

英雄の息子がいるから、警備をきつくしている、装備を多くしていると言ってしまうえば、それまでかもしれないが、それでも過剰過ぎるな」

正直、きな臭い。」

「そうなんですかー？　うちには見えませんから分かりませんが、」

「見えないのが普通だ」

トラップ系の魔法陣が見えていたら誰だって引つかからないっての。

だが、どっちにしてもこの魔法陣の数は気になる。

辺りの魔法陣の量を見て少し考えて、俺は一つの推論を導き出す。

「……ふむ、恐らく、何かを隠しているとかそんな感じだろうな」

「何かあってなんですか？」

「知らんよ。秘密の研究か、強い魔獣か、それとも他の何かか。」

少なくとも人に見せたらいけない系の何か何だろうな」



とりあえず、何か隠してるんじゃないかと当たりをつける。それ以外、これだけ魔法陣を敷き詰める理由にはならないしな。

ただ、分かるのは隠されているものが普通のモノではない事だけだ。

まあ、どうでもいいがな。

俺に関係ない事なので、俺は思考を切り替える。

そもそも、俺がこうやって見回っているのは、俺専用の研究室をどこかに造れないかと考えていたからだ。

異空間に繋げるのもいいのが、繋げる媒体も持ってきてないので、そういうのも含めて探しているのだ。ちなみに、残念なことに爺さんから奪ったマジックアイテムの中にそういう系のアイテムは無かった。

なので、1から制作する為、材料探しをしているというわけだ。

「さて、どこから探してたモノか」

俺はそう呟きながら、ふと月詠がついて来ていないのを感じて、後ろを見た。

すると、後ろで月詠は目をキラキラさせていた。

うん、何かスイッチ入っちゃってる。

「どうした？」

突然、身体をふるふると振るわせて、目がきらきらな月詠に俺はそう尋ねる。

しかし、そんな俺の言葉は彼女の耳に入らず、代わりに小さな眩きが聞こえてきた。

「強い魔獣……、どんなやつ！。どんぐらい強いんでっしやる！」

どうやら、さっきの会話でスイッチはいつた見たいだな。

面倒くさいったらありはしない。

小さくため息を吐き出してさっさと材料を探しに行こうと、足を進めた俺に、月詠は俺をむんずつと掴むと元気よく言った。

「カモはん！ さあ、強い魔獣を探しましょ！」

今すぐにも探しにいきましょ！」

えー、問答無用か！。

俺を掲げるように持ちながら、どこかを目指して走っていく月詠。

あー、この月詠を止めたら、代わりに俺を襲ってきそつだな。

はあ、触らぬ月詠に祟りなし。

ただのオコジヨの俺は、ハッスルする月詠に掴まれ、無抵抗のまま

まどこかへと連れていかれた。

面倒くさいが、探すとなればさっさと探そう。

こんなモノに時間をとってられないしな。

俺はそう考え、この学校の見取り図に魔法陣があった場所を書き込んでいった。平面上で客観的に見ると、意外とどこに何を隠しているのが分かり易いんだよな。

「……、んで、最後にこの階段にも魔法陣つと」

最後の魔法陣を書き込んでこの学校の全貌を把握する。  
それにしても、魔法陣ありすぎだろ。

見取り図の殆どが魔法陣で埋まったぞ？

「カモはーん、分かりましたか？」

こういつ仕事は専門外の月詠は作業している俺を見下ろしながら  
そう尋ねてくる。

「ああ、大体は分かった。  
恐らく、ここだな。この部屋に何かある筈だ」

そう言っ指差したのは、校長室の隣にある倉庫室だった。  
巧妙に隠されているがここが一番固く守られていたのだ。

「わかりましたえー」。

それじゃあ、さっそく行きましょー！」

俺の言葉に月詠は目を輝かせると俺をもう一度掴み、倉庫室へと向って言った。

うん、もう何も言わないよ。

そして、倉庫室へ到着。

「ここですな！ 強い魔獣がうじゃうじゃいるのわ！」

いや、いるかどうか分からんよ？

うじゃうじゃかどうか分からんよ？

「さあ、開けますえー！」

月詠はそう言って倉庫室の扉を開けようとする。

しかし、まあ当然と言えば当然なのだが鍵がかかっていてあかない。

「邪魔ですえー！」

だが、月詠は止まらない。  
躊躇なく刀を抜くと、横に一閃。

もはや扉が扉の機能をしなくなった。

まあ、月詠の斬撃を耐えられる扉なんて早々ないだろうしな。

ご丁寧に扉に付けられていた魔法陣も綺麗に切り裂かれていた。

「さて、何があるんでしょうか」

月詠はそう言って辺りを見回す　　が、見回すまでもないだろう。

この倉庫室で一際異質な力を放っているモノがあったからだ。

恐らく、あれだろう。

俺はそう思い、その力を放っているモノに近付いた。

それは水晶玉だった。

しかも、ただの水晶玉ではなく水晶玉の中に一枚の大きな葉っぱが入っている水晶玉だった。

うん、これはどう考えてもマジックアイテムだな。

あの爺さん、隠してやがったな。これは、明確な契約違反だぞ。

「なんですか、それは？」

水晶玉を覗きこんでいる俺に、月詠は首を傾げた。

そんな月詠の問いに俺は予想で答える。

「恐らく異空間系のマジックアイテムだな。何かを封じてるのか、何かを造っているのか知らんがな」

予期せず、探していたアイテムを手に入れて俺は少し上機嫌になる。

「じゃあ、入りましょー！」

俺の言葉に月詠は躊躇なくそう即答すると、また俺を掴み水晶玉へと躊躇なく手を伸ばした。

すると、眩い光が辺りを包み……。

気がつくと、俺と月詠は廃墟にいた。

巨大なマンション。遊び道具のたっぷりある公園。整備された道路。

何人もの人間が生活していた痕跡のある、しかし誰もいない廃墟という言葉が相応しい場所だった。

これがあの水晶玉の中の世界なのだろう。

「何なんですかー、この場所は？」

月詠が辺りをきょろきょろと見回しながらそう尋ねてくる。

ところどころ地面が抉れていたり、ビルが倒壊していたりしている。

戦闘のあった形跡だろうか？

なら、安全な場所とは言えないな。

「さあな、多くの人間が生活していた場所……とでも言えばいいのかな？

とりあえず、状況把握サーチ」

首を傾げながら俺はそう答え、魔法を発動させた。

無詠唱でも出来るが、態々口で言ったのは魔法の精度を上げるため。

一瞬にして、大量の情報が俺の脳内に送られてくる。通常のオコジヨでは脳が焼き切れる程の情報量であるが、俺はそれをなんなく許容した。

そのお陰で、この異空間の全てを把握する事が出来た。

「異空間にしては狭いが、かなり丈夫な出来だな。

この異空間そのものを破るのはほぼ不可能って感じだな」

俺でもこの異空間を破るのは、無理だ。理論が出来ていても魔力が足りない。

それに必要とする魔力も馬鹿みたいに多いしな。

「あと、月詠。後ろにいるぞ」

「ほえ？」

俺の言葉に月詠が首を捻って後ろを振り返った。

すると、そこには全長5メートルは超えそうな馬と牛と蛇と人間とかこの世の全ての生物をこねくり回して合体させた様な化け物が立っていた。

3 2 9 7 9 3 2 6 9 7 9 4 2 2 ! ! ! ! !

明らかに人間の言葉でもない、そもそも俺の知っている世界の鳴き声ですらない、異質な鳴き声。

「なんですえ!?!」

珍しく月詠も驚きの声をあげた。それもそうだろう。

この化け物の存在は月詠の理解の範疇を超えた存在なのだろうか。

「全然気づきませんでしたえー!?!」

驚きの言葉を洩らしながらも月詠はそう言って、それでも硬直せず刀を抜いて化け物に向き直った。

化け物を見れば、この化け物がどれだけ力を持っているのか分かるだろう。

だが、それだけ強大な力を持った化け物の癖に気配がないのだ。

顔がたくさんあるため、化け物がどっちを向いているのか分からない。

だが、この化け物を放置しておくのは危険すぎるな。主に俺の命が。



「行きますえ！」

俺がそう判断したのと同時に、月詠はそう言って斬撃を飛ばす。理解の出来ない存在に対しての牽制だろう。

だが、その牽制は意味がなかった。

防御するでも弾くでもなく斬撃は吸いこまれるように化け物にぶつかる。しかし、その化け物は足を止めずにこちらに向かってきた。

「ほんなら、らいこーけーん！」

牽制が効かなかった事に驚きもせず、月詠がそう言ってまた刀を振るう。かなり凶悪な気に乗せた一撃だ。

普通ならこれで決まる筈だ。

だが、その生物は理解の範疇を超えている。

凶悪な一撃を受け、それでも足すら止めずにこちらへと向かってくるのだ。

喰らっているのかいないのかも分からない。

外見に変化はなく、その歩みにも変化はない。

1 4 2 8 4 5 3 8 0 0 4 3 8 0 3 ! ! ! ! !

化け物が咆哮する！

その瞬間、近くにあった巨大マンションが呆気なく消えた。

「消えましたえ!？」

月詠には理解の出来ない攻撃だっただろう。再び驚きの声を上げた。

……まあ、消えたように見えるな。

先ほどまでの戦闘を見て、この化け物の様子を視て、俺は一つの結論にたどりついた。

俺は異空間から煙草を取り出し、口に含み、火をつける。

「取り込まれたんだな」

「ほえ、取り込まれたってなんですか？」

油断なく刀を構えつつ月詠は尋ねてくる。

「さつきそこにあつたマンションが消えただろ。」

あれはその化け物に取り込まれたんだよ。食われたと言ってもいいかもな。食われる過程を全て無視してな」

「な、何なんですえ、それは？」

俺の言葉に月詠は驚きっぱなしだ。

そんな月詠に俺は分かり易く、この化け物の事を説明してやった。

まあ、しっかりと確認してないから仮説でしかないからな。

「こいつは恐らく、この世界に生まれた存在なんだろうな」

「この世界に生まれた存在？」

うん、簡潔過ぎてあまり理解していない月詠に俺は更に詳しく説明する。

「ああ、もっと具体的に言えばこの異空間の歪から生まれた存在だ。この世界はかなり強い魔力で創られてるだろ？」

「そうですね。そういうのを感じるのが苦手なうちでも分かるくらい、しっかりとした世界でしたえ」

「それは恐らく、水晶玉の中にあつた葉っぱが原因なんだろうな。まあ、その説明については省くが、おそらくこの水晶玉は創られた世界なんだ。

異空間とは根本的に違う。異空間や亜空間の格上の存在。

俺達が住んでいる旧世界や魔法世界の様な、世界そのモノなんだ」

分かり易くしたつもりの俺の説明だったが、月詠には理解できなかったようだ。『世界』と『空間』の概念は確かにすぐに理解できないだろうな。

「つまりだな、俺達がいた世界とは違う世界に来た。

そんでもって、その世界で生まれた生物だから、お前の理解の範疇を超えてる訳だ」

以上で説明終わり。ぶはーっと煙を吐く。

「何でカモはんは理解できてるんですかー？」

「いや、理論的に考えたまでだ。概念としてこういう現象が起きるだろうと知っていたが、実物を見た事なかったしな。おっと、来たぞ」

俺が言うまでもなく、月詠は化け物に向って切りかかった。その瞬間、近くにあった公園に何かが襲った跡が残った。

「襲った過程を無視して、襲った結果を残した……ねえ」

うん、チートだな。チート。

さて、そろそろ月詠もきつくなってきただろうし、俺も助太刀に入るか。

煙を収縮させ、手を作る。

だが、普通の手ではない。化け物と同じ大きな手だ。

「さあ、いけ！」

俺の言葉に造りだされた手がまっすぐに化け物に向う。

8 4 3 4 8 0 3 2 3 3 2 8 3 4 7 ! ! ! ! !

化け物が咆哮する。

その瞬間、手の半分が消えた。食われたな。

しかし、手の動きは止まらない。

食われた部分など気にせず手は化け物をつかみ取る。

「しゅーそくらいこーけん」

その瞬間、月詠が奥義を放つ。

4 3 5 3 9 8 9 5 7 5 4 7 5 4 8 5 4 7 ! ! ! ! !

化け物が再び咆哮する。

その瞬間、掴んでいた手は消えるが、代わりに月詠の一撃が入った。

「今度は食われなかったな」

「……ほえ、食われるですか？」

悲鳴の様な良く分からない声を上げている化け物を見て、俺は月詠にそう言った。

「さっきまでの月詠の攻撃は全部、マンションと同じように食われてたんだよ」

ちなみに、今回食われなかったのは代わりに俺の煙が食われたからだ。どうやら一度に食える限界はあるようだな。

これで攻撃全て無効だったら、他の退治方法考えなきゃならなかったがな。

「……、もう何もいまへんわ」

呆れ切ったような声を上げる月詠。まあ、それだけ理解の範疇を超えた化け物という事だ。

「んじゃ、続きをするか」

俺はそう言っつて再び巨大な手を造りだす。

そして、先ほどの一撃で悲鳴をあげ続けている化け物をつかみ取る。

「らいこーけーん！ ついで、ざんがんけーん！」

月詠が攻撃していく度に、煙が食われ、月詠の攻撃が決まる。そして、煙が全て食われる前に、新たな煙を補充する。

どんな強い敵でも、思考しないモノなど、パターンに嵌めたら余裕で勝てる。

見上げると、月詠が渾身の一撃を放とうとしていた。

「さて、終わらすには良い時間だな」

口から煙草を吐き出し、火を消して言った。

「しゅーそくらいこーざんまけーん！」

轟音を伴う斬撃が放たれた！

3 2 8 5 4 3 9 3 9 8 7 … 6 5 … 4 … 3 2 1 … … …

その一撃をまともに食らった化け物は断末魔をあげて、そして呆気なく消えていった。

「うーん、楽しかったですね！」

水晶玉から出てきた月詠はそう言って大きく伸びをした。

「まあ、有意義ではあったな」

月詠の言葉に俺も頷いた。理論上で生み出されるだろうとされていた化け物を見る事が出来たのだ。有意義であったに決まっている。

時計に目をやると、結構な時間が過ぎていた。

どうやら、この水晶玉の中の世界と、この世界の時間はほぼ一緒なのだろう。

現在は夕方過ぎ。学校の授業も終わった頃だろう。という事は、アーニヤもネギ少年も帰ってくる頃だな。

まあ、部屋に置き手紙してきたから、何か言われる事はないだろうが。

さて、それはともかく今日の深夜までに色々準備しておかなくてはいけないな。

俺はそう考える、亜空間にしまった筈のアイテムを思い出す。  
よし、あれとあれを使うか。

後、……そうだな。

「なあ、月詠」

「なんですか？」

俺はふと考えて満足げな月詠に声をかけた。そして、首を傾げる月詠に俺は言った。

「今日の夜、ちょっと手伝って欲しい事があるんだ？」



なんちゃって魔法学校の設備は意外といい。(後書き)

次回、ついにカモ君に教育的指導を行います！

生意気な子供を殴ってやるのも、教育。(前書き)

ネギ君フルボッコタイム始まるよー！

生意気な子供を殴ってやるのも、教育。

やあ、カモだ。

約束の深夜になりネギの部屋へとやってきたカモだ。

「おやおや、少年にお嬢さん。  
態々待っていてくれて嬉しいよ」

ネギの扉を開き、アーニヤとネギがいるのを確認して俺は仰々しい仕草でそう言った。そんな俺にアーニヤは明らかにムツとした表情をする。

「ちよっと、どこ行ってたのよ！」

「何、ちよっとした準備さ」

噛みついてくるアーニヤを流して、俺はそれだけ言うと、ネギに向って言った。

「さて、ネギ少年」

「な、なんですか？」

アーニヤがまだ何か文句を言っているが、それを耳に入れずに俺はネギに向き直り少し低い声で言った。

その声にネギは緊張した面持ちで、そう尋ねる。

そんなネギに俺は小さく言った。

「お前に強さを与えてやるよ」

その瞬間、ネギとアーニヤ、そして俺は眩い光りに包まれたのだった。

目を開けると、そこには今日の昼にいた廃墟。

「ど、どこですか、ここは!？」

「なになに!?! 何が起こったの!?!」

突然の出来事にアーニヤとネギが驚きの声をあげる。

そんな二人に俺は、クルリと宙返りをし、砕かれたコンクリート

の破片に飛び乗り、二人と同じ目の高さになる。

「これは俺が昔、旅で手に入れた特殊な魔法道具だ」

俺はそれだけ言って、小さく笑うと一度ゴホンと咳払いをした。

そして、仰々しく俺は言った。

さて、力を求めし少年よ。力が欲しいか？

その声はよく通った。多少の魔力も込めたので、恐らく心に響いただろう。

「あ、あんた！ 何言ってるのよ！」

俺のその言葉に最初に反応したのはアーニヤだ。ネギを守る様にネギの前に立ち俺に向かってそう叫ぶ。

しかし、俺は気にせずに尋ねる。

少年よ、力が欲しいか？

「ぼ、……ぼくは」

「ネギ！ 答えなくいいわよ！」

俺の言葉にネギは何かを奮い立たせるように答えようとするが、アーニヤが止める。いやいや、アーニヤのお嬢さんはさすがだな。心が強い。

力が欲しくないのか？

だが、俺の誘惑は続く。  
その言葉にネギは小さく呟いた。

「ぼくは、……………しいです」

聞こえねーよ。

力が欲しいか？

俺は再び言葉を紡ぎだす。

その言葉は魔法の言葉。

その言葉は魅惑の言葉。

故にその言葉は心に響く。

力が欲しいか？

ネギは俺の言葉を聞き、少しだけ躊躇した後、ぱつと顔をあげ、叫ぶ様に言った。

「欲しいです！ 力が！ 僕は力が欲しいんです！」

「ネギっ！？」

その言葉は心の吐露だった。そしてその言葉にアーニヤがかな切り声をあげる。

しかし、そのアーニヤの言葉はもはやネギには届かないだろう。

では、力を授けよう

俺はそう言い、亜空間から豆の入った袋を取り出した。そして、それをネギ少年に向かって投げた。

「わわっ」

突然投げられた袋にネギ少年は慌ててそれを受け取った。

それを1つ食せば、力はお前のモノになるだろう……

俺の今の笑みは凶悪な笑みになってるだろうな。

SIDE：ネギ

力はお前のモノになるだろう

カモさんがそう言った。

僕は袋に目をやる。袋の中には10粒程の豆が入っていた。普通の豆じゃない、はち切れんばかりの魔力を持った豆だ。

アーニヤが何か言っている。

でも、僕の耳には入らない。  
今の僕にはカモさんと僕しかない様な気さえしていた。

僕はまるで何かの魔法にかかったように、ゆっくりと豆を摘み、それを口に入れ、

噛み砕いた。

その瞬間。

僕の中の魔力が跳ね上がった。

今までの力の何十倍もの魔力だ。魔力が全身を駆け巡るのが分かる。

強くなったのが分かる。

誰にも負けない力を入れたのが分かる。

僕は、強い。

誰にも負けない力を入れたんだ。

自然と僕の口から咆哮が上がった。

アーニヤが何か言っている。でも、僕には聞こえない。

僕の心は喜びで満ちていた。あの悪魔が襲撃してきたあの時から、



満たされる事の無かった心が今始めて喜びに溢れた。

今なら、悪魔に勝てる。

今なら、お父さんにも勝てる。

今なら、全てを相手にしたって勝てる！

再び僕の口から咆哮が上がる。

喜びの咆哮！

歡喜の咆哮！

力強い咆哮！

「僕は最強だあああああああ！」

僕はそう叫んだ。

アーニヤが何か言っている。でも、聞かない。

カモが何か言っている。でも、知らない。

そんな声など、僕には聞こえない。

僕は僕にしか止めれないのだから。

その時、瓦礫の向こうから一人の人間が歩いてきた。

その手に持ったのは2本の刀。

ローブを着ていて、顔は見えない。長い髪が見えているから、女性の様だ。

でも、そんなの関係ない。  
こんな女など、僕に敵う筈がない。

それなのに、女はハッキリと僕に敵意を向けてきた。

この僕に敵意を向けた！

攻撃するには、その理由だけで十分だった。

僕は拳を握り、目の前のロープの女に殴りかかった。

「……………えっ？」

気がつけば、僕は地面に倒れていた。

何をされたかすら分からなかった。

だが、この女が何かした事だけは分かった。

この僕に何かをしたのだ。許せる筈がない。

僕は咆哮をあげ、拳を握り女に向かって攻撃する。

女だろうが、何だろうが関係ない。

僕の前に立ち、僕の進路を阻むだけで、それは罪なのだ！

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

魔力をたっぷり乗せた右手を女に向ける。

今なら分かる。身体に魔力がめぐり、その魔力で僕の身体能力は  
今までの比ではない程、跳ね上がっていた。

だけど、僕のその右手は相手を殴りつける事なく、

「ぐはっ!?!?」

代わりに、再び僕が地面に叩きつけられた。

意味が分からずに僕は女を見上げた。

女は何か言っている。何を言っているのか分からない。

だが、その目には明らかな失望の目が浮かんでいた。

ふざけるな……。

僕は最強なんだ……。

そんな目で……。

そんな目で……、

そんな目で僕を見るなああああああああああ!!!!!

僕は跳ね上がる様にして立つと、持っていた袋から全ての豆を取りだし、全てを噛み砕いた。

その瞬間、僕の魔力は何千倍にも膨らむ!

あははははは、やっぱり僕は最強だ。

誰にも負けない力が手に入った。

僕は英雄になったんだ。

僕は右手を振り上げ、振り下ろす。

たった、それだけの動作で数百メートル先まで、衝撃が飛んで行った。

やっぱり、僕の力は最強だな。

僕はそれを確認すると、目の前の女に向き直った。  
とりあえず、この女を倒そう。

英雄に歯向ったんだから、倒されて当然。

英雄の進路を妨害したんだから、殺されても文句がある筈がない。

僕が英雄なんだ。

僕が英雄何だから、これを倒しても問題なんてある訳ない！

「うおおおおおおお！！！！」

僕は叫び、拳を握りその最強の拳によって女を貫こうと突きだした。

それは最強の拳。

何千倍にも膨らんだ僕の魔力が乗った、その延長線上にあるモノは全て打ち砕く、史上最強の拳だった。

だったのに……、

僕は地面に這いつくばっていた。

無様にはいつくばり、立ちあがっては、何度も叩きのめされていた。

女はいつの間にか刀をしまっていた。

それでも、僕は女を傷つける事が出来なかった。

僕は最強だった。

なのに、この女はそんな僕を余裕で叩きのめしていた。

最強って何だ？

女の拳が僕の顔に突き刺さる。その時、そんな疑問が僕の頭に浮かんだ。

僕はそんな疑問を首を振って払いのける。

そして、すぐに立ちあがり、僕は女に拳を向ける。

しかし、その拳も簡単に避けられ、カウンターとばかりに僕のお腹に拳が突き刺さった。

強いつて何だ？

再びそんな疑問が浮かび上がる。

僕は強いのか？　、強い。

僕は最強なのか？　、最強だ。

なら、どうして僕は倒れている？　、分からない。

どうして、僕はこんな女に負けているんだ？　、分からない。  
い。

疑問が浮かび続ける。

僕はその疑問を振り払う様に拳を握り、女にぶつけようとし続けた。

しかし、その拳はぶつかるともなく、代わりに僕に拳が突き刺さり続けた。

分からない。分からない。分からない。分からない。分からない。  
分からない。分からない。分からない。分からない。分からない。

疑問しか浮かばない。答えが出ない。

分からない。分からない。分からない。分からない。分からない。  
分からない。分からない。分からない。分からない。分からない。  
分からない。分からない。分からない。……勝てない。

唐突に僕の頭の中にその言葉が浮かんだ。

僕にはこの女には永久に勝てないのではないか。

そんな言葉が僕の脳裏をかすめた。

恐い。

その瞬間、そんな感情が僕の中で爆発した。

爆発したのは恐怖感。

悪魔がやってきたその時に僕の頭の中に浮かんだ感情と同じ。  
絶対に、二度と感じたくなかった想いだった。

嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 死にたくない！

僕は拳を振るった。今までの勝つための拳とは違う、死なない為の拳。

嫌だ！ 死にたくない！ 怖い思いはもうしたくない！

僕は蹴り続けた。勝つためではなく、生き残るために。

だが、現実は無情だった。

いつの間にか、僕は女の人に殴られ続けていた。  
骨が折れ、耳が引きちぎられ、足がもぎ取られた。

痛みも感じない。

でも、常に恐怖だけは感じる。

僕はこの女に殺される。

それだけは感じていた。

「いやだ……、死に……、たく……ない」

僕の口から自然と、そんな言葉が漏れる。

その言葉を聞き、女は嘲笑を浮かべると、止めとばかりに拳を振り上げた。

ああ、僕はあるの拳が振り下ろされたら死ぬ。

カチリと頭のネジが動いたような気がする。

何かが、いや全てが理解できた気がする。

こんなことなら……、

僕は思った。

こんなことなら、力なんて求めなければ良かった……。





生意気な子供を殴ってやるのも、教育。(後書き)

実は今回は全部、ネギ君目線で書いていたのですが、あまりにウジウジし過ぎていた為に、冒頭部分はカモ君視点に切り替えました。

フルボッコにされたネギ君。

これからどうなるのでしょうか？

実際、子供に怒ったりするのも大人の都合が大部分な訳で。(前書き)

連続で投稿！

ネギ少年をぼっこぼこにした理由の説明的な話です！

実際、子供に怒ったりするのも大人の都合が大部分な訳で。

さて、カモだ。

スプラッタな感じになって良い感じに身も心もボロボロになったネギ少年を、取り合えず治療した後、部屋に寝かせたカモだ。足もちゃんとくつつけたし、耳だって生やしたよ？

変に傷跡残したら、こっちの魔法使いたちに睨まれるしねー。

「ネギっ！ ネギい！」

アーニヤが泣きながら、ベッドで眠っているネギの手を必死で握り締めていた。まあ、友人が目の前でスプラッタにされてたら、そうなるわな。

「あなた！ 何で、なんでネギにこんな事したのよっ！」

ネギの手を握りながらアーニヤは泣きはらした目で、俺に向ってそう叫ぶ。

まあ、当然の疑問だな。

突然使い魔が友人をボコボコにした理由が、何となくだったりしたら嫌だろっしな。

「まあ、理由はネギの危うさを何とかする為だな」

煙草を吸いながら、俺はアーニヤに向かってそう言った。

「ネギの危うさ……？」

俺の言葉にアーニヤは顔をしかめて、そう聞いてくる。  
意味が分からないのだろう。

俺は一度、大きく煙を吐き出した後、言った。

「アーニヤ。お前は今までのネギでいいと思っていたのか？」

俺の言葉にアーニヤは何も答えない。  
恐らく今朝の食堂での出来事を思い出しているのだろう。

アーニヤの無言を肯定と考え、俺は言った。

「俺はネギの為にしたんだ」

いや、嘘だけどね。

ネギをボコボコにした理由は簡単。

ネギのトラウマを何とかする為。

そもそもトラウマというのは簡単に直りはしない。  
薬物治療やカウンセリングなどで、地道に直していくしかない。

しかし、時間が経てば経つほど、トラウマは完治しづらくなる。

恐らくネギの心の中にあるトラウマはかなり根深くネギに傷をつけているのだろう。

正直言って、それを直すために態々カウンセリングもどきをした  
りするのは面倒くさすぎる。

なので、俺は手っ取り早くネギのトラウマをどうにかする為に、  
ネギに本当の恐怖を与えてやった。

つまり、トラウマを更に強いトラウマで書き換えてやったのだ。

強くなりたいという思いから、強くなりたくないという思いへ書  
き換える。

英雄になりたいという思いから、英雄になりたくないという思い  
へ書き換える。

その為に、一度ネギを強制的に強くし、その上で本当の恐怖で蹂  
躪してやったのだ。

おそらく、ネギ少年は思った筈だ。

強くなるんじゃないやなかった、と。

こんな事なら、英雄になるんじゃないやなかったと思った筈だ。

後は、目を覚ましたネギ少年にいかにも強くなる事が意味のない事かをしてけとーに演説すればトラウマの書き換え、並びに洗脳の終了だ。

夢は公務員になりたいとか言う世知辛い少年に育ててやるつもり。

だが、そんな考えは億尾にも出さずに、俺はアーニヤに向って言った。

「ネギは危うかった。本当に……、本当に危うかったんだ」

言葉と言葉の間隔を開け、自分の想いを全て吐き出すようにして言う俺。もちろん、演技だ。

口八丁で丸めこむ為に、俺は言葉を紡ぐ。

「あのままだと、ネギは必ず今回のような結果になった筈だ」

これは本当。

ネギは英雄の息子だし、絶対何かに巻き込まれただろう。

その結果、強さを求め過ぎて死ぬような想いをする事も沢山あるだろう。

俺はそれに巻き込まれるのは絶対に嫌だ。

「なあ、お嬢ちゃん。ネギは殴つてでも止めなければならなかったじゃないと、ネギは死ぬまで力を求め続けただろう」

「……ネギは」

アーニヤは何か呟くように言う。

だが、俺はそれを遮り言った。

「アーニヤ。子供の為にも大人には非情にならなければならない時があるんだ。

子供の為に、殴つてでも教えなければならぬ事があるんだよ…

……」

そうして重い重い息を吐き出した。

「今は分からなくてもいい。

でも、……いずれは分かる時がくるさ」

俺はそう言った。

その言葉に、アーニヤは俯きながら小さく呟くように洩らした。

「……でも、やりすぎよ」

「必要な事だった」

「必要な事って！ そんな事で納得できる訳ないでしょ！」



きつぱりと言い切った俺に、アーニヤは弾かれるように顔をあげてそう叫ぶ。しかし、そんなアーニヤに俺はただ淡々と答えた。

「納得しなくていいさ。」

だが、お嬢ちゃん。お前にも分かっただろ、力を求め続けた人間がどうなるのか。最後の末路が」

「私は……ああはならないわ。それにネギも……」

俺の言葉にアーニヤは自分に言い聞かせるようにそう呟く。俺はそんなアーニヤを見て、小さく笑うと言った。

「それでいいんだ」

俺はそう言っただけで部屋を出て行く。

部屋の中からはアーニヤの啜り泣くような声が聞こえてくる。今のアーニヤの心の中は色々な想いが渦巻いているのだろう。

だが、アーニヤは賢い。

その内、結論を出す筈だ。

まあ、どうでもいいがな。

あくまで俺の仕事はネギ少年の教育と監視。

後はネギ少年が目覚めた後に、てきとーに言いくるめて、強

さを求めるなんて意味の無い事だと思わせればミッションコンプリートだ。

「さつて、時間も出来た事だし。工房造りを再開するか」

せつかく異世界へ行けるマジックアイテムを手に入れたのだ、使わなければ損だろう。

俺は上機嫌に口笛混じりで、異世界へと旅立った。

「おかえりなさい」

異世界に戻ると、ローブを着たままの月詠が俺を出迎えてくれた。

「どうでしたー、あの……えーと、オーリーブオイル君でしたっけ？」

「ネギだよ、ネギ」

月詠の言葉に俺は呆れながらそう言った。本当に興味のない事は何も覚ええないな。

「あー、そうでしたえー。それにしてもあの子は本当に面白くなかったですなー」

不満そうに月詠はそう漏らした。

月詠としては、せつかく俺のマジックアイテムまで使用した魔力の塊のような少年なのに、あんな力任せの攻撃をされた所で面白いのだろうか。

「なんだか、最近の月詠は力よりも技を持った相手を好む傾向が出てきた。」

「多分、俺の所為だろうけどな。」

「まあ、そういうな。戦闘のいろはも知らない子供なんだからな」

俺はそう言っただけで煙草を取り出すと、火をつける。

そして、煙を吐き出す。

すると、煙が徐々に形作られていき、それなりの大きさの簡易工房が出来上がった。

まあ、工房と言っても部屋の中にあるのは暖炉に窯、それに棚と机ぐらいだが。

後は爺さんから奪ったマジックアイテムや魔導書を並べれば完璧だ。

「さつて、久しぶりに研究するぞー！」

「ここ最近、なんだかんだあって研究する事が出来ていなかったからな。」

今の俺は研究欲が大爆発している。

ちなみに、もうすでにネギとかアーニヤとかの事は忘れてる。

「相変わらずですなー」

そんな俺を見て、後ろで月詠はそんな言葉をもらしながら、楽しげに俺を眺めていた。

カモ君が新技を開発したようです。(前書き)

20話目にして、まだ原作開始時期にならない……だと？

カモ君が新技を開発したようです。

人間、個人が持っている価値観と言うものを徹底的に破壊するとその人間は不安定になる。

それは当然だろう。

今まで自分が信じていたモノ、心の中心にあったモノが全て破壊されたのだ。何を信じていいのか分からない。

そんな時に、とても分かり易い『新しい価値観』を提示してみればどうなるだろうか？

当然、人間はその価値観に飛び付く。

つまり、簡単に人間の考え方が変わってしまうのだ。

これは基本的な洗脳概念の一つである。

徹底的に痛めつけて、恐怖と力と痛みで価値観を蹂躪し、その後、打って変わった様に優しい笑みで新しい価値観を提示するのだ。

それをされた人間は簡単に考え方が変わってしまう。

まあ、つまり何が言いたいのかと言うとだな。

「カモさん！ やっぱ人間は変に目立つのはいけませんよね！  
っていうか、魔法なんて使わなくても生きてけますよね！」

あんな死が日常にある世界なんて僕には合ってませんよね！」

キラキラした目でそう語るネギ少年が俺の目の前に立っている。

どうやら、無事洗脳は完了した様だ。

やあ、カモだ。

目が覚めたネギにいかにも強さが意味のないモノか、いかに目立つ事が危険な事を力説し、ただ一般の人間として生きて行く事の素晴らしさを教えたカモだ。

その結果、まあ上記の様にネギ少年の洗脳は完了した。  
これで監視が大分楽になった。

ちなみに、そのお陰でアーニャ以外のお友達が出来たようだ。

朝起きて、魔法学校に通い、友達と遊び、夜は健康的に眠る。

今の少年はそのサイクルを繰り返し、ごく一般的な少年として魔法学校で平和な日常を過していた。

そうそう、言い忘れたが、今のネギは魔法がほとんど使えない。

基礎的なモノは出来るが、それ以上は魔力量が原因で使えないのだ。

ネギの現在の魔力量は俺と同じぐらい。

原因は俺がネギを強くするためにやった豆だ。

魔力をあれほど増やしたのだから、副作用があって当然。その副作用というのが、魔力の枯渇。

ただの欠片も残さずに魔力が無くなってしまふのだ。

まあ、今回は月詠にポコポコにされて早めに豆の効果も切れたので、そこまではならなかったが、小動物並の魔力量しか今の少年には無かった。

少年は「魔法使えない方が自立出来ないからラッキーですよ！」と言ってその事を気にしていなかったが。

ただまあ、それが教師にばれるとうるさいので、俺特性のマジックアイテムで魔力がある様に見せかけているのだ。



そんなこんなで、ネギ少年は今も年相応の幸せと、2度のトラウマによる『目だ立たない事こそ幸せ』という悟りきつた信念を持ち、魔法学校をただ楽しく過ごしているのだった。

まあ、そういう訳でネギ少年の事は置いておいて、俺の研究の話だ。

この学園の魔導書を読破し、葉っぱのついた水晶玉の中で地道な研究を重ねて2年。

ついに、俺が目指していた魔力の使い分けの理論が完成し、系統の違う魔力を紡ぎだす事に成功したのだ。

もちろん、魔法陣やマジックアイテムを使わなければ、完璧に系統を別ける事が出来ないけどな。

そういう訳で、俺の右手には有限だが限りの無い収納ボックスが出来上がったのだ。

更にこの魔法理論を確立した結果、新しい魔法を生み出す事も出来た。

そういう訳で今日はその魔法のお披露目テストだ。

水晶玉の中、工房から少し離れた場所にあるただっ広い場所。壊れたビルや抉れた公園などの遮蔽物もまあまあある、俺と月詠の戦闘訓練場所だ。

「そんじゃー、行きますえー！」

「ああ、いっちょ、揉んでやるよ」

「胸をですかー？」

いや、違うから。

ボケた事を言ってくる月詠だが、その表情にはいつもの狂喜。

そんな月詠に俺は小さく肩を竦めた後、軽く両手の力を抜いた。

ちなみに、今の俺はオコジヨの姿。

「ざんがんけーん！」

俺が何かしようとするのを察知するや否や、月詠はいきなり切りかかってきやがった。

っちい、俺の新技を発動させない気か！

俺は転がるように避け、口から煙を吐き出す。

即効性の弛緩剤を混ぜた煙だ。

月詠はバックステップで煙の外へと脱出すると、斬撃を飛ばし煙を蹴散らす。その瞬間、煙がかき消される。

だが、俺の姿はそこには無かった。

「かくさーんざんくーせーん！」

月詠は焦らず、刀を振るうと360度上下左右全ての方向に一部の間もない斬撃を飛ばした。

俺をあぶりだす気なのだろう。

というか、これは最早斬撃とは言わない。むしろ、衝撃だな。でも、触れると切れるからやはり斬撃か。

放たれた斬撃は地面を抉り、コンクリを切り裂き、隠れた俺を探し出そうとする。

だが、俺は飛んできた斬撃を障壁で防ぐ。

そして、そのまま月詠に姿を現さずに、隠れると再び両手の力を抜く。

あらかじめ体内に刻んでおいた魔法陣を起動し、魔法を発動させる。

左親指には炎の魔力を

左人差し指には雷の魔力を

左中指には樹の魔力を

左薬指には闇の魔力を

左小指には石の魔力を

くそつ、やはりかなりの集中力を使うな。  
実戦では使いづらいな。

それに時間がかかる。

まだ実用は難しいかもな。

右親指には水の魔力を

右人差し指には氷の魔力を

右中指には風の魔力を

右薬指には光の魔力を

右小指には土の魔力を

十指にそれぞれ違う系統の魔力が集まる。

俺はその魔力を均等に配分し、全てを合わせた！

「十種混合！」

俺の言葉と共に、全ての系統が合わさった魔力が俺の体内をめぐり始めた！

それは咸卦法なんて目ではない程の威力。

身体能力が適応能力が、思考能力が、戦闘能力が、感覚器官が、全ての能力が爆発的に上昇した！

ふむ、なかなかだな。

俺は自分の能力上昇を実感し、そう結論付ける。  
模擬戦とは言え実戦で使えたのだし、悪くはないな。

まあ、発動までに三〇秒もかかっていては、使いづらいがな。

「らいこーけん！」

ふと気がつけば、俺の前に月詠がいた。

あら、やばい。

気がつかなかったとは、それほど集中していたのか。  
軽く驚く俺に、月詠は躊躇なく刀を振り下ろす。

ぬおおおお！

その瞬間、俺はその場から姿が掻き消えた　様に月詠には見え  
ただろう。

別に変わった事はしていない。

ただ、刀を避けるために回避し、月詠の後へと回ったのだ。

「っ！　速い!？」

月詠は驚き、慌てて振り返る。

見落とさなかったのは見えていたのか、それとも俺の魔力が膨大だったから気付いたのか。

少なくとも、魔力を隠せないというのも欠点の一つだな。

俺は軽く飛ぶと、俺は亜空間から刀を取り出し、月詠の首に突き付けた。

その行動は俺からしたらとてもゆっくりなモノ。

だたの魔法使いからすれば、絶対に感知できない程の速さ。

それでも、突きつけられた瞬間に後ろに転がったのは流石と言った所だ。

ギリギリで、俺の速さについてこれているのか？

それなら！

「発動『箱庭の時間』」

俺はそう唱える。

その瞬間、俺の周囲の時間が更に遅くなった。

俺の時間と外の時間をずらす魔法。

ふわりと俺の身体が浮く。

そして、俺はゆっくりと月詠に向かって飛んで行った。

ここで速く飛んでいつてはいけない。

早く飛んでいけば、音速の壁というのにぶつかるから。音速の壁にぶつかれば、箱庭の時間が解けてしまうので使えないので。

俺はゆっくりと月詠の背後を取る。

月詠は俺を見ない。

それどころか動かない。

今の俺には現実の一分が一日になる程のレベルだ。いや、それは言い過ぎか。

だが、どっちにしても俺の速さは異常なのだ。

俺はぽんつと月詠の背中を触った。

その瞬間、俺の時間と外の時間のズレが全て消えた。

「ほえ？」

間の抜けた声を洩らす月詠。

そんな月詠に、俺は小さく苦笑すると言った。

そろそろ俺の中に十種の魔力をつなぎとめておくのも、限界。もって、六秒。こんなもんか。

「終わらすには良い時間だ」





散歩という名の見回りで金が稼げるなら僥倖だろう。

いつも通りアーニヤの部屋で目が覚めたカモだ。

「ふむ、もうこんな時間か」

ちらりと時計に目をやり、一度大きく伸びをすると俺はぴよんと眠っていた段ボールの箱にタオルを敷き詰めただけの寝床から、飛び降りた。

アーニヤの使い魔になって早2年と半年。

もはや、面倒なのでアーニヤを起こす事もなくなり、面倒なのでアーニヤにつき従い事もなくなった。

というか、基本的にはアーニヤがネギと行動しているんで、アーニヤにネギの話聞き、何か大きな出来事があったら携帯であの爺言葉の少年に送っているのだ。

監視といっても四六時中、一緒にいる必要もないしな。

とりあえず向こうとしても少年が外傷なく生きていればいらし

いので、俺は日々研究所に籠り、夜になる前に研究所から出てアーニヤと喋り、寝るといふサイクルを繰り返していた。つまり、ここに来る前とほとんど同じ生活を送っていたのだ。

まあ、それはいいとしてだ。

「いやー、今日もいっぱいおりはりますなー」

工房に俺の目の前には、2メートル程ある粘土を擦り合わせて作った人形のような生き物が7体程いた。

それぞれ顔は無く、気配もない。

ただ、明らかに敵意を向けてこちらを睨んでいた。

「つたく、毎朝、ゴミ掃除から始まるとはめんどくさい」

明らかに敵意を持ち、ゆっくりとこっちの出方を窺う様に立っている。そいつらを見て、俺はいつも通り大きいため息を吐き出した。

4 8 3 8 3 9 4 4 7 2 3 8 9 7 9 2 3 ! ! ! ! !

奴らが咆哮をあげる！

その瞬間、俺と月詠がいた場所がばくりと食われる。

過程を無視し、結果を残す攻撃。

この世界で生まれた化け物の唯一の攻撃方法だ。

俺はバックステップで回避し、月詠は瞬動で前進する事で攻撃を回避する。

「まずは一人ですえー」

月詠はそう言うと、一瞬のうちに何十回も化け物を切りつけた。

切りつけるごとに、その斬撃が化け物に食われるが、徐々に斬撃の速度が食う速度を超え、粘土人形が切り刻まれた。

切り刻まれた人形は音もなく崩れ、消えて行く。

3 4 3 7 9 8 7 9 7 9 4 3 7 7 ! ! ! !

切り刻まれた仲間を見て、化け物が咆哮をあげる！

「まあ、そう吠えるな」

俺はそう言うと、月詠の足元から煙が噴き出した。

その煙は月詠を守る様に展開し、その瞬間、かき消される。

月詠の代わりに食われたのだ。

煙が消えた瞬間に月詠は更に瞬動で移動し、新たな化け物に斬撃を繰り出す。

「こつちも忘れるなよ。四種混合」

切り刻まれるた化け物に視線が向かう化け物に俺はそう言い、生み出した四種の力が混ざった攻撃を二つ生み出し、二体にぶつける。

これで四体。

3 2 4 0 4 3 0 4 3 8 4 3 8 ! ! ! ! !

化け物が咆哮をあげるが、俺の方は煙に憚れ、月詠は己の斬撃を飛ばし回避する。

「れんげきざんがんけーん！」

回避した直後、月詠は連続で斬岩剣を化け物にぶつけ一体を切り刻む。

俺は煙の拳を生みだし、2体の化け物を掴み取った。

3 2 4 8 3 4 3 0 9 4 3 3 ! ! ! ! !

化け物が叫び、もがき、逃げようとする。

だが、化け物が食う量よりも俺から供給する煙の量の方が多い。

「さて、終わらすには」「いい時間ですえー！」

煙が収縮し、化け物を圧迫する！

その上で、月詠は跳躍し、気がたつぷり乗った刀を振り下ろした！

「らいこーけーん！」

振り下ろした刀が全てをかき消した。

「終わりだな」

辺りを魔法で調べ、何も無い事を確認すると俺は煙草に火をつけた後、さっさと工房へと帰っていく。

「いやー、毎朝、こんな相手を用意してくれはるなんて、便利な世界やなー」

そんな俺の隣を月詠はホクホク顔でそう言った。

「俺としては面倒な事この上ないがな」

煙を吐き出しながら俺はがりがり頭を掻いた。

先ほどの生物はこの世界の歪みから生まれた生物。初めてこの世界に来た時にあったあの化け物と同じ種類の生物だ。

この世界を作った誰かがそう設定したのか、それとも偶然そうなっているのか知らないが、その生物はほぼ毎晩、この世界に生み出され、あちこちを食い荒らしている。

工房をここに構えている以上、変に食い荒らされて研究結果が食われては不味いので、毎朝ここでゴミ掃除ならぬ、化け物掃除を行っているのだ。

「それにしても、何で毎回こんな化け物が生まれるんでしょうーな？」

工房に戻り、俺はPCの前の定位置で昨日の作業の続きを、月詠はお気に入りのソファーに座り刀の手入れをしていると、ふと月詠が疑問に思ったらしく、そんな事を聞いてきた。

そんな月詠に俺は小さくため息を吐き出すと言った。

「前に説明した筈だが？ それも何十回も」

「忘れましたえー」

ぼんぼんつと刀を手入れしながら、そう言い切る月詠に、俺は大きなため息を吐き出した。

態々忘れる事を説明するのも、面倒だが、ここで変にごねられても面倒なので説明してやることにする。

「あのな、ここは創られたものだが、世界なんだよ。世界つてのは、ただの空間ではなく、本当に世界つて事だ。だから、亜空間や異次元よりも頑丈で壊れない。

だけど、反対に亜空間や異空間の様に変化のない空間でもないんだ。

世界つてモノは生物が生活すべき場所。故に世界に生物がいなければ、世界がその生物を生み出す。

俺たちは生活しているが、この世界の生き物じゃない。

世界が求めているのは自分に合った生物だからな。

まあ、その結果として生み出されたのが、あの化け物だ」

俺たちがいる世界では推し量れない、この世界で生まれた俺たちとは根本が違う生物。それが、あの化け物なのだ。

俺もあの化け物について、調べてみたが分かったことは少ない。

まずは『過程を無視し、食うという結果を残す攻撃』はどうやら、あの生物の延長線上のモノにしか効かないらしく、間に何らかの障害が割り込めば、それが食われる事。

次に、奴らは放っておくと勝手に殺し合いを始め、食い合い、より強い化け物が生まれる事。それが一番最初に出会った、あの巨大な化け物だったのだらう。これについての深い研究はまだ行えていない。

また、あの生物は人間の形意外にも他の形が多々ある事も分かった。ドラゴンの様な形をしたモノもいれば、煙のように粒子が集まって出来たものなど、さまざまだった。

そして最後に分かったのが、奴らは毎晩生み出されるといふ事だ。奴らはどうやら夜に生まれるらしい。生まれると言っても親から生まれる訳ではなく、この世界にある色々な元素が集まり、作られるのだ。どちらかという概念的には練成に近いかもしれない。

まだまだ謎の多い生き物だが、俺の研究はまだまだ終わらないぜ！

「……、よう分かりまへんわー」

「だろうな」

俺の説明を聞き、ざっくりとそう言ってくれる月詠に俺は呆れながらそう言った。

基本、月詠は戦闘以外はぼけぼけなので、こんな事いっても理解できないだろう。というか、九九も覚えてない奴に『世界』と『空間』の違いが理解できるとは思えない。

「まあ、つまり毎晩、あの化け物が生まれるってことだ」

「なら、退屈しませんな」。魔法学校の仕事は退屈でしかありませんしー」

俺の言葉に嬉しそうに目を輝かせる月詠に、俺は小さく苦笑を洩らす。

月詠のいう魔法学校の仕事というのは、散歩という名の警備である。しかも、事後報告なので、『警備をした』と言えば、それだけでいいのだ。何という楽な仕事だろう。

まあ、初めは月詠に教師をさせようとしたらしいが、あまりにも頭が残念だった為に警備専門で雇われた結果、今こういう形になっているのだけでも。

俺としてもあの生物の退治を手伝ってくれるのはありがたいんだがな。

まだまだ謎の多い生物だから、一人で戦わない方がいいだろうしな。





散歩という名の見回りで金が稼げるなら僥倖だろう。(後書き)

ちょっと、忙しくなるので更新が止まるかもしれません。

カモによるネギ少年の活動報告書。(前書き)

時間が出来たので、久しぶりに投稿です。

次々回ぐらいで、原作突入できたらいいなーと考えてます。

## カモによるネギ少年の活動報告書。

報告：

ネギ少年のトラウマを上書きしてから、1か月が経った。

幼少のトラウマをトラウマで上書きした事により、その心理的疲弊などはそれなりに心配された。事実、少年は2週間ほど引きこもり、布団の中でガタガタと震えていた。

そんな少年だったが、アーニヤの懸命な介護により部屋から時たまた出て、夜な夜な冷蔵庫の食べ物を物色し始めるようになった。

俺が言うのも何だが、あれは、子供というよりも小動物に近い動きだったな。うむ。

報告：

前回の報告から3か月が経った。

ネギ少年の心の傷は癒えたのか、少年は学校へ行く様になった。ただ、魔力が限りなく減少しており、それが教師陣にバレると面倒なのでマジックアイテムを渡し、魔力の減少がバレないようにしている。

そのマジックアイテムとは、マジックアイテム自体が強力な魔力を持つというマジックアイテムであり、持っているだけで強力な魔力がある様に見えるアイテムである。

ただ、少年自身はその事を気にしていないらしい。というのも、トラウマの上書きと、俺の洗脳洗脳により、少年はどうやら『ただ普通に生きて、普通に友人を作って、普通に人生を謳歌したい』という希望を持ったらしい。

何とも夢も無く素晴らしい希望だと思いが、少年の立場から言えば儚い希望でもあるように思えるがな。

報告：

前回の報告から半年が経ったが、ネギ少年はこれと言って特に変化はしていない。

ただ変化してないという事が異常であるから報告しておこう。

ネギ少年は強さに固執しなくなった事により、魔法というモノを積極的に使わなくなった。また、前回報告した通り少年の魔力は減少している。その結果、少年は座学の成績は高いままだが、実技の方は並程度になっていた。

魔力減少しても並程度で踏みとどまっているのは、今までの練習結果と少年の魔法の才能の結果だろう。

ただ、魔法実技が並に落ち、少年自身も魔法というモノに興味を無くしたというのに、教師陣のネギ少年を見る目と待遇が変わっていない。

それはただ単に教師陣の目が節穴なのか、それとも何かしら少年を優遇する必要があるのか。  
どちらにせよ、どうでもいいがな。

報告：

さて、ネギ少年の日常についても少し報告しておこう。

ネギ少年は現在、普通に子供らしく青春を謳歌している。

毎日、学校にいき、友達と遊び、学校から帰り、アーニヤと会う。この繰り返しだ。

うん、ネギ少年のも友達が出来たんだ。良かったな、少年。

強くなる事を止めた結果、周りに目が行くようになり、始めのうちは衝突も会ったが、今では仲良く遊んでいたりする。

そう言えば、ネギ少年は最近、サッカーに凝っているらしい。運動神経は良い方で、エースストライカーなんかをやっている。

そうそう、更に報告する事があるとすれば、少年は結構背が高くなった。どうやら、夜中こそそこそ図書館に行かなくなったのが良かったらしく、成長期にぐっと身長が伸びたのだ。

元英雄のナギ・スプリングフィールドに会った事はないが、結構似てきているらしい。

健康なのは良い事だろう。

また厄介事が増えそうな予感はあるがな。

報告：

前回の報告から更に半年が経った。

前回の報告と同様にネギ少年の周囲はほとんど変わっていない。

ただ、目に見えて変化があったとしたらアーニヤとネギ少年の関係だろう。今までは野暮だったから報告していなかったが、ここ最近目に見えて変化があったので、報告しておこう。

まあ、分かり易く言えば二人は恐らく恋人関係にある様だ。

どうやら、少年が負った心の傷をアーニヤが慰めている間に愛が育まれたらしいが、その辺りは省略する。

少年の変化というのが、ここ最近、つまり飛び級しアーニヤと同じ学年になった後からだ、アーニヤとのいちゃつき度が目に見えて上がってきていた。というか見せつけているように思える。

それは教師陣が危惧する程にだ。

よって、ネギ少年と同じようにアーニヤもどうやら監視される様になったみたいだ。

報告：

さて、そろそろネギ少年も卒業する時期が近づいてきた。

何やら監視している教師陣も色々と動いている事が分かる。

それと連動して、少年の周囲でも不穏な事が起きている。  
少年自身には危害が加わる事はないが、小競り合いも増えてきている。



お前の所の連中もこの前暴れていたから、知っているだろう。こっちの魔法学校の連中も殺気だっていたしな。

そして一番気になる事だが、元老院の奴らもちよくちよく顔を出してきている。

今まで元老院の意向で魔法学校の連中が動いている様に感じていたが、どうやら魔法学校の奴ら、というよりも、あの入院している魔法学校の校長と他数名が元老院と仲たがいをしたらしい。

他数名が誰だか知らないが、そこを調べるのは俺の仕事ではないので勝手に調べておけ。

少なくとも、これで少年の周りで動いている組織が3つになった。

魔法世界を統べていると言っても過言ではない、元老院。

その元老院から離れ、旧世界で顔を利かし始めた、魔法学校。

そして、お前たちレジスタンス。

さて、それぞれそれなりの思惑があるようだが、やはり鍵となるのはネギ・スプリングフィールドの様だな。

何故、お前たちが俺をこんな監視という立場に置いたのか、そこに答えがあるのだろうか。

「元老院はどんな理由でネギ少年を操ろうとしているのか。」

「魔法学校はどんな思惑で動いているのか。」

「そして、お前はどんな未来を描くんだ？」

「なあ、元英雄のフィリウス・ゼクトさん。」

カモによるネギ少年の活動報告書。(後書き)

謎の老人言葉の少年の正体が明らかに！

まあ、皆さん知ってたでしょうけどね。

ガトウさんのハードボイルドっぽい日常のよじなまもの。(前書き)

ガトウさん視点です。

ガトウさんの渋い日常をお送りします。

ガトウさんのハードボイルドっぽい日常のよじなまもの。

やあ、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。

気軽にガトウと呼んでほしい。

じゃあ、せーので呼ぼうか？

せーの！

今、呼んでくれた君！

さあ、友達になろうか！

今友達になると、何とこの街の占い師から買った『友達が出来る壺』をあげるよ！

さあさあさあ、友達になろうか！

……ゴホン。失礼。

ちょっと、取り乱してしまった様だ。

改めまして、俺の名前はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

元メガロメセンブリア当局の捜査員にして、元紅き翼のメンバー。現在は死亡を偽ってとある案件の調査を行っている。

この仕事はかなり大きくて、俺だっていつ死ぬか分からない。だから、弟子だったタカミチも置いて、俺は一人でここ数年調査を続けているのだ。

今日はそんな俺の一日を紹介しよう。

「……朝か」

とある街のビジネスホテルの一角。

俺は真新しいベッドで目を覚ました。

枕元にあった友人特性の煙草をつかみ、火をつける。

「……ふう」

吐き出される白い煙は部屋に立ち込め、すぐに空気に馴染み消えて行く。

俺の仕事は今も昔もスパイの真似事みたいなモノ。

この煙のように大衆に馴染み、必要な情報を調べ上げて行く。

その分、自分の居場所というモノを見失っていたのだから。

俺は皮肉気に顔をゆがめると、慣れた手つきで携帯を取り出し、友人におはようメールを送る。

さて、そろそろ時間か。

俺はベッドから抜け出すと、スーツに腕を通し、レストランへと向かった。

今日の朝食はブラックコーヒーとトースト。

いつもの変わり映えのしないメニューだ。

これからの仕事をどのように行っていくのか、頭の中でプランを立てながら、俺はコーヒーに手をつける。

苦い。

ふん。まるで、俺の存在の様に苦いな。

うん、別に苦いからといって砂糖は入れてないぞ？  
俺は渋いブラックコーヒーが好きなのだから。

トーストにたっぷりとジャムを塗って、その上に砂糖を振りかけたりしてないぞ？

俺は何も塗ってない味気ないトーストが好きなのだから。

うん、本当だよ？



さて、朝食も食べ終わり親友にメールを送った後、俺は街へと繰り出す。

今、探っているのはここ最近、急速に活動を始めたレジスタンスについてだ。

俺の親友にもそのレジスタンスは接触してきたらしい。なんでも、天地創造とか言う奴らしいが。

ふん、御大層な名前をつけたものだな、ゼクトさんは。

『レジスタンスの『天地創造』という少年から接触を受けた』

俺は親友からその連絡を受けた時に、愕然とした。

彼の言うその少年の姿は俺の知っている仲間のフィリウス・ゼクトそのモノだったからだ。

すぐさま俺は、その案件について調べ、レジスタンスの活動を追

った。

かつて仲間だったゼクトさんが何故、レジスタンスという存在を率いて活動しているのか知りたかったからだ。

別に一人だけ仲間はずれにされたからとかそういう小さな理由ではない。

俺は俺の知っている限りのフィリウス・ゼクトの情報を親友に渡し、親友もレジスタンスと接触して俺に情報を渡してくれている。

見事なギブ&テイクの関係！

まさに親友同士に相応しい！

いや、やっぱり友達っていいよな！

ごほん、失礼。

まあ、そんな訳で俺はフィリウス・ゼクトの動向を探っていた。

そして同時に嘗ての仲間であったナギ・スプリングフィールド、アルビレオ・イマ、ジャック・ラカンの動向も探っている。

それは俺を一人にして、勝手に集まっていたりしてないかとかそんな心配をしている訳ではなく、ただ単純に仲間が今どのような状況に置かれているのか心配だったからだ。

ナギの奴も、アルの奴も、死んだとの噂だからな。

え、ラカン？　どっかその辺で生きてるんじゃないか？　あいつバカだし。

俺もあいつらも英雄と言われているが、残念ながら一人の人間だ。死なないなんていう事がある筈がない。

だから、もし仲間がピンチだったら助けたいのだ！

決して！　決して、仲間はずれにされるのが嫌だから探してる訳ではない！

さて、しばらくレジスタンスについて調べた後、俺は昼食を取る事にし、その旨を親友にメールで連絡した。

今日の昼食はどこにでもあるファーストフード店。

忙しい時にはこういうのは本当に助かる。

それに、こういう店には老若男女色々な客が来るからな。聞き耳を立てるにはもってこいだ。

今までの経験から必要な情報を持っていそうな客は目につく。後はごく自然にそいつらの話に聞き耳を立て、必要なら情報を引き出せるようにいくつか仕込みを入れる。

今日も、目ぼしい人間がファーストフード店で喋っていた。

俺はごく自然に彼らの近くの席に座り、携帯を開き、親友へ連絡メールを送りながら、聞き耳を立てる。

ここで必要なのは、いくら親友にメールを送るからといってそっちに集中しすぎない事。

あくまで、メールをしているのは偽装なのだから。

だから、俺はメールに集中しつつも、聞き耳を立てれる程度の集中力でメールをする。

親友から返信は来ないが、あいつも忙しい身だ。そんなにすぐにメールを返せる訳がない。

少し寂しいが、それは仕方ないだろう。

「ああ、見た見た。あのでかい奴。あれが新型らしいな」  
「ふん、あの機械もまだまだ捨てたモノではないって事だな」

二人の会話を聞き、俺は自然とその会話をメモする。

このレジスタンスの会話には、時々科学や機械などという言葉が出てくる。魔法世界で、これは中々ない事だ。

旧世界ならいざ知らず、ここは魔法中心の世界。科学よりも魔法が優先されている。

そんな世界で、こつも頻繁に機械という言葉を聞くとは。

この辺が何か重要なキーワードだろ。

後、重要なキーワードと言えば、ナギの息子のネギ・スプリングフィールド。

何故か、彼は多くの組織から監視されている。しかし、接触されるという事は起きていない。

あの少年の周りで何が起きているのか。

いや、何が起ころうとしているのか、不安でたまらない。

その後、聞き耳を立てていたが大した情報も得られなかった為に俺は席を後にした。

食後に親友にメールをする。

さて、夜だ。

俺の仕事はこれからが本番だ。

本番前にメールを送り、俺は再び街へと繰り出す。

昼間の風景とは違い、街は金と欲望の匂いが充満していた。

ふん、気分が悪いな。

あちこちで見られる奴隷に目を向けながら、俺は心の中で吐き捨てる。

だが、俺にはどうする事も出来ない。

仕方がない事で割り切る事も出来ないが、今の俺にはどうしようもない。

彼らを解放してやりたい。

解放して友達になりたい。

そんな想いは強いが、だが俺はまだそんな立場にいない。

そもそも俺は一度死んだ人間だからな。

自嘲気味に俺は小さく笑うと煙草に火をつける。

そう、俺は一度死んだ人間だ。

親友の助けが無ければ、あそこで俺の人生は終わっていた。

『……何だよ嬢ちゃん、泣いてんのかい？』

あの時は俺がいて、嬢ちゃんがいて、そして弟子のタカミチがいた。

俺は死にかけて、嬢ちゃんは泣いてくれていた。

俺はあそこで死に、すぐに親友のマジックアイテムにより生き返った。

地下3メートルの土の中で。

うん、土葬で良かった。

火葬だったら死んでいただろう。

丁寧に葬ってくれた事は嬉しいが、目が覚めた時土の中で身動きが取れないなんていうのは恐怖でしかない。

しかも、土から這い出る前に全身を襲う激痛を襲ってきた。

もう、あの時の恐怖ったらない。

いま思い出しただけでも震えてくる。

知ってるか？ 土って冷たいから体温奪うんだぜ？  
冷たくなっていく身体に絶え間なく激痛が走るんだぜ？

もう、死んだ方がましだったかもって思ったよ。

ごほん、失礼。

そして、生き返れた俺は嬢ちゃんたちをしばらく影ながら見守った後、今の案件に当たっているのだ。

今、生きているのは親友のお陰だな。  
よし、メールしよう。

そして、夜は更け。

俺は新しいビジネスホテルに泊まる。

同じホテルには泊らない。

俺はチェックインをした後、メールを送り、夕食を食べる。

そして、部屋に向い、軽くシャワーを浴びた後、寝巻に着替えメール。

その後、今日合った事をメモに纏める。

レジスタンスの動きはまだ完ぺきに掴みきれていない。



ネギ君が監視されている理由もまだ分からない。

ふう……、まだまだ調査が必要だな。

俺は煙草に火をつける。

これから先、どうなっていくのだろうか。

不安で仕方がない。

なあ、ゼクト。お前はこれからどうしたいんだ？

なあ、ナギ。お前は自分の息子を何にしたいんだ？

答えの返らない疑問ばかりが頭の中に浮かぶ。

ふう……。

俺は頭を振り、疑問を追い出す。

分からない事を考えていても仕方がない。

俺は煙を吐き出すと、火を消し、枕元に煙草を置き、メールした後、眠りについた。

これが俺の一日。

渋いだろ？

ガトウさんのハードボイルドっぽい日常のよつなもの。(後書き)

ガトウさんや月詠さんが絡むと筆が進む不思議。

逆にネギ少年が絡むと筆が止まってしまふ不思議。

まあ、基本的に形だけの卒業式だしな。(前書き)

今回で原作いけるかと思いきや、卒業式の話となっています。

まあ、基本的に形だけの卒業式だしな。

逃げろっ！

そう言う声が聞こえる。もう久しく聞いていない家族の声だ。

命乞いの声が聞こえる。

燃え盛る炎が見える。

喧騒が聞こえる。

蹂躪されつくした町並みが見える。

泣き叫ぶ声が聞こえる。

無慈悲な銃弾が降り注ぐのが見える。

赤ん坊の泣き声が聞こえる。

巨大な機械が町を踏み潰すのが見える。

ああ、これが殺し合いだ。

俺は久しぶりに思い出していた。

そう、これが殺し合いの世界。

俺が、かつての俺が生きた、狂気と恐怖が渦巻く殺し合いの世界。

「カモはーん、珍しいですなー、うたた寝ですかー？」

そんな声に俺はふと目を覚ました。

どうやら転寝をしていた様だが、随分と胸糞悪い夢を見たもんだ。

目を開ければ、そこには荘厳と云っていい雰囲気にもまれたなんちゃって魔法学校の一室だった。

視線を人だかりの方へと向けると、そこではちょうどそこで教師陣や生徒が集まり、卒業証書を渡しているところだった。

今、この部屋ではアーニヤとネギ少年の卒業式が行われていた。

ネギ少年は主席、アーニヤは次席で卒業した。

大変優秀なことだ。

まあ、色々なところからの鼻肩は入っているだろう。

じつとネギ少年の方を見ると、なにやら長つたらしい卒業生代表の言葉を述べている。その姿は俗に言う男前で、見物に来ていた保護者からきゃーきゃーと黄色い声が上がっていた。

というか、卒業生代表の言葉に『なんちゃって魔法学校』という言葉をふんだんに盛り込んでるのは、わざとだろうか？

まあ、態とだろうな。今の少年はこの学校に良いイメージを持ってない様だし。

保護者は白い目で校長代理の方を見ているし、教師陣は名前を言われる度に顔を赤くしている。それに、あそこでスパイと思わしき人物が爆笑すらしている。

うん、カオスだ。少年も意地が悪いな。

「まあ、寝てしまっくんも仕方がないですけどなー。」

あんな形式的な卒業式。涙を浮かべてる生徒なんかいまへんえー」

見上げるといつの間にか、俺の隣へとやってきていた月詠が欠伸を噛み殺しながらそんな事を言っていた。

確かに赤い顔や白い目はしていても、卒業生の中で泣いている人間は誰一人いない。

全員がただの行事として考え、特に何も思わずに参加しているのだろう。

「まあ、たいした教育していなかったから」

月詠の言葉に俺も小さく欠伸を噛み砕きながらそう言った。

魔法第一主義のなんちゃって魔法学校。

あのネギ少年が飛び級した事もそうだし、授業内容もそうだ。

洗脳的な立派な魔法使いを除いた、人間という存在についての教

育はほとんど行われていなかった。

教えられたのは、魔法の使い方と立派な魔法使いの在り方だけ。

この学校はあれだな、戦時中の軍事学校に近いな。

必要な技術と価値観を植え付け、それ以外は与えない。  
そうすれば、ほら正義の為なら死ねる生徒の完成だ。

その過程で不必要な物事を見抜く能力などは教えられることはない。  
い。

これのやつかいなところは、もう何年も前から行われている所為で、大人も同じような考え方をしている連中がたくさんいるということだ。

まあ、俺には関係ないが。

「そうですねー。そもそも卒業して更に課題を受けるといつのも変な話ですし。まあ飼い殺して奴でしようけどー」

月詠の言葉に、俺も更に頷いた。

卒業したのに、さらに課題を渡される。

これもどう考えても可笑しい話だ。

恐らく課題をクリアした後は、更に新しい課題。更にその後にも課題と連続で課題を与え、常に首輪をつけておくつもりなのだろうな。



就職難には陥らないが、代わりにほかの就職口にありつけない。

この学校に入った時点で、すでに生き方が決められているのだ。

そんな、見え見えの策略を月詠と話していると、いつの間にか魔法学校の卒業式は終わろうとしていたので、そっちへと視線を向ける。

「以上で、なんちゃ、……いえ、この魔法学校の卒業式を終了します！」

いやー、しかし最後まで教師陣はこの卒業式で『なんちゃって魔法学校』とは言わずに『この魔法学校』とか『我が魔法学校』とかそんな言葉を使い続けたな。

その分、ネギ少年が連呼しまくったが。

まあ、とにかくこれで無事に卒業式は終わった。

別に大した心配はしていなかったけどな。

「さて、問題はここからだな。修業先がどこになっているのか」

そう、ここからが問題なのだ。

あのネギ少年の修行先次第では、ついて行くのも一苦勞だろうしな。

俺のそんな言葉に月詠はのんびりと笑いながら頷く。

「そうですねー。まあ、カモはんがどこに行こうとウチはついて行きますけどなー。」

おっと、来たみたいですね。じゃあ、うちは消えますえー」

不安など全く無さそうな微笑みを浮かべた後、月詠はしゅばつと忍者みたいな音を残してどこかへ消える。

「あつ、やっと見つけたわ、バカオコジヨ！」

そして、消えると同時に両手を振りながら現れたのはアーニヤ。その後ろにはゆっくりとこっちへ向かってくるネギ少年と、少年の姉。

「もう！ 彼方此方探したのよ、こんのバカオコジヨ！ あれほどじっとしてなさいって言ったでしょ！」

近づいてくるなり、罵声を浴びせ、いきなり尻尾を持って振り回してくるアーニヤ。

うん、確実に俺じゃなければ死んでる。

というか、ここ数年で俺のデフォルトの持ち方が尻尾という小動物に優しくないモノになっているのは、どうにかできないだろうか。

「アーニヤ。何度も言うが、バカという奴がバカなんだ。あと、尻尾を持つな」

何を怒っているのか、知らないがぐるぐると回されながら落ち着いた口調でそう返してやる。

すると、アーニヤはムツとした表情で更に俺を回転させる。

「何言ってるのよ、バカ！ それだったら、あんたは今バカバカって2回もバカって言ったから私よりもっとバカよ！ このバカ！」

「今、アーニヤの言い分が笑えてくるほど、清々しくバカを連呼したよ？」

そんなアーニヤに後ろで見ていたネギは困ったような笑みを浮かべながらそうツッコミを入れる。

「うっさい、スーパーミラクルウルトラエクセレントバカネギサイクロンジェット！」

「なんか凄い光線が出そうだよ!？」

俺を振り回しながらネギとアーニヤがいつも通りの言い合いをしている。

うん、個人的にはそろそろ振り回すのをやめて欲しいんだが。

つーか、魔力で身体強化すんじゃないよ。

何故かこういう時だけ、身体強化をマスターしているアーニヤに俺は小さくため息を吐き出した。

そして、ごほんと一度咳払いをすると、一番の懸念材料についてたずねた。

「そんなことよりも、嬢ちゃんと少年の卒業課題の場所はどこになつたんだ？」

「そう！ それよ、それ！ ふざけんじゃないわよー！」

グルグルグルグルグルグル！！

おう！？ 更に何かの逆鱗に触れてしまったのか、俺の回転速度が段違いに上がる。上がりすぎて、通常の間人には見えないほどだ。

「アーニヤ！ 落ち着いて！ 風が！ カモさんから巨大扇風機みたいな凄い風が！ ああ、向こうでルーベンス先生の鬘が飛んでつたよお！？ ああ、窓の外にいい！？」

エキサイトしていくアーニヤを必死で止めるネギ。  
そんなネギに、俺を武器に攻撃してくアーニヤ。

アーニヤ、武器や防具は装備しなくては意味がないが、俺を装備しても攻撃力は上がらないぞ？

そんなやり取りがあつた後、ようやく落ち着いたのかアーニヤは俺の尻尾を離して、卒業課題についてポツリポツリ語り始めた。

「へえ、学校の教師。しかも、日本ね」

「そうなのよ！ それに見てよ、これ！ 私も日本の学校なのよ！ しかも、生徒って！ ふざけないでよ！ 何でネギが教師で私が生徒なのよおおお！」

バンバンと机を叩きまくり遺憾の意を示すアーニヤ。

そんなアーニヤを落ち着かせようと、ネギ少年は女受けしそうな優しい笑みで『僕はアーニヤの凄ところ知ってるから、安心して』とか『そんなに怒らないで、可愛い顔が台無しだよ』とか甘ったる

い台詞を吐いている。

ここ数年でネギ少年はどうやら女の扱い方がある程度マスターしたらしく、アーニャに振り回されながらも、意外とアーニャをうまく操っていた。

まあ、この女落しのテクニクはアーニャ以外に使われたことがない（『愛している人以外に愛は語れません』（ネギ少年談））ので、今のところアーニャ専門の武器になっているけどな。

しかし、9歳の技ではないがな。

手を取り合い、どんどん甘い世界を構築していく二人を見ながら、俺は少し考える。

ふむ、日本の学校ということはおそらく麻帆良だな。

そして、ネギとアーニャを一緒につて事はおそらく監視目的か。

ふむ、確かに魔法学校で面倒を見てみると、ネギ少年の洗脳を続けることが出来るし、魔法学校であるが故に出張などの手で戦闘経験を積ませる事も出来る。

あいつらにとっては、悪くない手ではあるか。

それに、麻帆良ねえ。

『魔法の導き手』と言われている近衛 近右衛門に、紅き翼のメンバーだったタカミチ・T・高畑。それに神多羅木やら何やら、一癖ありそうな奴らが集まっている場所と聞くしな。

噂では、闇の福音を保護しているという話もあるしな。

それほどの設備と人材がいるってことか。ふん、面倒だな。

「なあ、嬢ちゃん、少年………っておい」

ふと、思考に耽っていた俺が顔を上げるといつの間にか少年と嬢ちゃんがイチャラブしてやがった。

好きだの、愛してるだの言い合いながらイチャラブしている少年と嬢ちゃんに俺は小さくため息を吐き出した。

「おい、そのバカ二人。これからお前らがどうするつもりか聞いていいか？」

「どうするつもりですか……、そうですね」

アーニヤを抱きしめながらネギは少し首をかしげる。

ちなみに、アーニヤはまだイチャラブモードから帰ってきていない。

「とりあえず、反対してもしかたがないので、日本の学校に行くことにはなると思います。おそらくそれは決定事項ですね  
僕自身も出来るかどうかは置いておいて、人を導く教育者という職業には興味がありましたし」

少し考えた後、ネギはそう言い今後のプランを頭の中で構築していった。

「ただ、何の経験もない10歳以下の僕が教師なんて出来るはずもないですから、その辺りは向こうとの話し合いですかね。」

たぶん、非常勤講師とかその辺りにねじ込まれると思いますが、人に教えるという立場に立つのですから、向こうに行く前に色々勉強しないといけませんね。あー、めんどつくさい」

ツラツラと自分の考えを喋っていく少年に、俺も大きく頷いた。

……ん？ ネギ少年のキャラが違ってた？

ネギ少年は基本的に俺がトラウマを植え付けた後、死ぬ気で普通の人間として生きるために常識やらなにやらを得ようと日夜努力を重ねていた。

魔法が関わっていない町に赴いて、そこで夏休みの間生活したりなど、積極的な常識やマナーを勉強して、今では魔法学校を卒業したとは思えないほどの常識人っぷりと大人もびっくりの理解力を発揮するようになったのだ。

その分、魔法関係はからつきしだけ。

精神的にもかなり成熟して、三十路過ぎぐらいの精神年齢はあるんじゃないだろうか？

これはもしかしたら、少年の努力以外にも何か裏がありそうだけど、今は気にしないでおう。

「ということ、勉強する為に休みを利用してこの近くの魔法関係ない学校で少し教師として教壇に立たせてもらうことにします。

幸い、その学校には知り合いがいますから、ボランティアとして参加させてもらうことにします」

「りょーかい。ついでに、それに嬢ちゃんもつれてけ。

嬢ちゃんも一般常識を理解させた方がいいからな」

俺の言葉にアーニヤは『何よ、私がバカって言いたいの!? ムキー!』と叫びながら暴れる。そんなアーニヤに俺は小さくため息を吐き出しながら、これからのことについて考える。

ネギ少年とアーニヤが一緒の修行先になったのは、おそらく監視のしやすさの為だろうな。

極度にネギ少年と仲のいいアーニヤにも、監視の目が言っていたし、どうせなら一緒にしてしまえという考えだろう。

こっちとしては、そのおかげでだいぶ楽に動けるが。

さて、これからどうするか。

まずは事前の情報集めだな。

それに、月詠をどう潜入させるかも問題だ。

後は、麻帆良の人間がどの派閥に属しているかだな。

今ある派閥は『元老院派』と、そこから独立した『魔法学校派』、それにこそこそ影で動いてる『レジスタンス派』。

おそらくは『魔法学校派』か『元老院派』のどちらかだろうが、一枚岩とも限らないしな。

レジスタンスの連中は潜入が得意のようだし。

変に目をつけられるのも、面倒だな。

まあ、なるようにしかならないか。



俺はしばらく考えた後、俺はそう思い直すと、アーニヤたちと別れ部屋から出て行った。

まずは、月詠と相談だな。

まあ、基本的に形だけの卒業式だしな。(後書き)

次こそは、原作に行ける……はず。多分。  
頑張ります。

俺にも分からない事はある。特に馬鹿の考えとか。（前書き）

お久しぶりです！

いやー、長い事忙しくて更新してなかったですが、少し暇が出来たので更新を。

しかし、まだ麻帆良学園には行ってません。

原作前の話がもうちょっとだけ続くんじゃない状態です。

後、2〜3話後に原作に行く予定ですが……、まああくまで予定なので、違っても許してください。

俺にも分からない事はある。特に馬鹿の考えとか。

「うー、どうしてこうなったのよ……」

柔らかな光がステンドグラスから漏れ、部屋全体を明るく照らしている。

部屋の中にあるのは大きなパイプオルガンに、絵に描いた様な宝箱、それに黒い櫛の木で造られた机に大きな椅子。

そんな洋風チックな部屋の椅子の上でカルロツテ・ハハリは頭を抱えていた。

そもそもの始まりは、この魔法学校の名前が突然、『なんちゃって魔法学校』などというふざけた名前になり、校長が精神科へと入院する事になった事からだ。

校長が不在という事で、校長の孫であり、魔法世界で学校の教師をしていたカルロツテがこの学校の校長代理を務める事になったのだ。

そこまでいい。

ここでいい感じに運営出来れば、私の輝かしい経歴が更に輝かしいモノになる事は確定されていた。

しかし、この学校には大きな問題があった。

その問題が紅き翼のリーダー『ナギ・スプリングフィールド』の息子であるネギ・スプリングフィールドの存在だ。

いや、英雄の息子がこの学校にいる事はすでに知っていた。

むしろ、いるからこそチャンスだと思っていた。

英雄の息子を英雄へと育てた人間。

私はそう呼ばれる筈だったのだ。

それは当然だろう。

ネギ・スプリングフィールドは本人が望もうが望まなからうが、英雄になる運命にあるのだ。

その強大な魔力。子供とは思えない理解力。そして、その生い立ち。

その全てが英雄としての素質がある。  
英雄にならなければならぬ、義務がある。

ネギ・スプリングフィールドはどう足掻いても魔法というモノから逃れる事が出来ない。そして、魔法から逃れない限り、ネギ・スプリングフィールドは英雄になるしか道はないのだ。

それなのに！

カルロツテは再び頭を抱えた。

ネギ・スプリングフィールドは魔法に興味を持っていない。

それどころか、魔法を全く使わない傾向がある。

その傾向が表れたのは、あの少年がしばらく引きこもってしまった後だ。

生気の抜けた表情で『強さって……』とか『人生には何が必要なのだろう……』とか呟き始めてから、ネギ・スプリングフィールドは可笑しくなってしまったのだ。

そして、そのまま授業も魔法関係の科目はサボるようになり、その間に街へ出て一般人と積極的に関わるようになってしまった。

その傾向は卒業した後でも変化はせず、今は近くの普通の学校で教師のボランティアとして活動しているらしい。

「どうすんのよ。このままだと私の経歴に傷がついてしまうじゃない。英雄の息子をただの凡人にしてしまった教師なんて、汚点以外の何物でもなにわ！」

このままではいけない。

少なくとも魔法の有効性は理解させなければならない。

そうすれば、ネギ・スプリングフィールドを英雄にさせる事が出来る。

魔法というモノは使えるのと、使えないのでは大きな差がある。魔法を使える人間は魔法から、魔法の便利さから逃れられない。

今の現代人が、機械を手放せないのと同じ原理だ。

「そうね。多少荒療治になっても、何か手を打たないとね」

きらりとカルロツテの目が光る。

まだ自身の輝かしい未来を諦めた訳ではない。

その輝かしい未来の為に、ネギ・スプリングフィールド君には少し成長して貰わないとね。

S I D E : カモ

やあ、カモだ。

近くの学校で、小学生を相手に勉強を教えている真っ最中のネギを月詠と一緒に隠れて監視中のカモだ。

「えーと、A君がバームクーヘンを6つ持ってます。B君と二人で別けるとバームクーヘンは一人何個でしょうか？」

黒板に問題を書きながらネギ少年は優しい笑顔で生徒たちにそう尋ねた。

「えーっとね。うーんと、」



女の子が一生懸命手を使って答えを導き出そうとしていた。

「ほえー、次は日本で、しかも教師ですかー。面倒な場所に飛ばされましたなー」

「まあ、向こうとしたら最良の選択肢だったんだろうな。紛れ込むこっちとしては面倒極まりないがな」

ぼんやりとネギ少年たちの様子を眺めながら月詠の言葉に俺はそう返した。

そんな俺の方を見ながら、月詠は小さく首を傾げた。

「それで、どうするつもりなんですかー？　うちはまた警備として日本の学園に侵入するんですか？」

「いや、一度やったから向こうに情報が行ってるだろうし、それは無しだな。そうになると、変装して潜伏する事になるか」

月詠の言葉に俺は小さく首を振ると、少し考えて言った。

「よし、お前は学生として学園に入ってもらおう」

「学生ですかー？　という事は高校生とか大学生とかですかねー？」

「いや、小学生だ」

「な、何ですかー!？」

俺が即答すると、思いつきり驚いた表情を浮かべる月詠。そんな月詠に俺は小さくため息を吐き出すと、言った。

「月詠、 $7 \times 8 = ?$ 」

「3!」

「小学生決定だ」

自信満々に3と答える月詠に俺は再びため息を吐き出しながら、俺はそう言い切った。

「なんでですかー!? さすがに小学生は酷過ぎますえー!」

「酷いのはお前の頭だ。いい加減、アホの子を卒業しろ」

ぶーぶーと文句をいう月詠に俺は小さく肩を竦める。

「それにお前の容姿はすでにバレてるんだから、変装する必要があるだろ。どうせなら、年齢詐称の魔法使つての変装の方が楽だからな」

「ぶー、納得できまへんえー!」

「まあ、お前は少し常識を勉強してこいって事だ。っと、雑談はここまでだ。どうやらお客さんが来たみたいだぜ」

俺はそう言つと、周囲に目をやった。

そこには俺達と同じように気配を消しながらネギ少年を監視している5人の人間がいた。接近してきた事に気づかなかった事を考えれば、恐らく転移して来たのだろう。

「ふむ。あれは、レジスタンスの連中だろうな。」

腕はそこそこ、俺と月詠で5秒あれば倒せるレベルだな」

「残念ですえー。もっと強い相手を闘いたいですー」

「別に闘う必要ないからな？」

刀に手をやり、殺る気満々な月詠に俺は呆れながらも、宥め刀から手を放させる。

「それよりも、問題はあつちだ」

俺は少し遠くの方を指差した。そこにはサングラスに黒いニット帽、それにマスク姿の『私は不審者です』と選挙カー並に宣伝している男二人がネギ少年のいる学校を目指して歩いて来ていた。

「何ですえ？ あの不審者を絵に描いたような連中は？」

「さあな？ 見た感じ魔法使いか？ にしては弱いから、魔法学校の連中か？ つーか、何を考えてんだ？」

なんか物凄く面倒くさい事が起きそうな予感しかない。

レジスタンスの連中もそれに気づいたのか、小さく首を傾げながら仲間と相談し合っていた。

「まあ、あのいかにも怪しげな姿でネギ少年を殺す様な事はないだろう。可能性としてはネギ少年の周囲で監視してる連中の炙りだし……だろっか？」

まあ、あんな連中がネギ少年の近くにいたら、多少は騒ぎが起こるからな。その騒ぎの中で敵を炙りだそうとしているのだろうか。

そうすると、あいつらは実は実力を隠していると考えた方が妥当だな。

この周囲で、大きな問題を起こそうとしている事を考えると、魔法学校の連中なのは間違いないだろうが。

いや、そもそも何で今更、敵を炙りだす必要があるんだ？

いや、今だからこそか？

魔法学校から離れた今だからこそ、ネギ少年の周囲は魔法学校の連中がいらない。だからこそ、炙りだすにはチャンスと考えたのか？

だが、それこそ今更ではないか？

ネギ少年はこれまで授業をサボって街へ出たりしていた。むしろ、態々卒業後の今、炙りだす必要はあるのか？

分からない。

俺は色々と考えながらも油断なく、不審者二人に気づかれない様に視線を向ける。

何か、何かヒントがあれば分かるかもしれないが。

そんな事を考えている間に、不審者二人は学校へ近づくと

「全員、動くんじゃねー！ 強盗だ！」

ドアを蹴り破り、拳銃を子供達に向けた。

教室に響き渡る悲鳴！

混乱する生徒！

驚きの表情を浮かべるネギ少年！

うん、いや前言撤回だ。

ヒントがあっても、何考えてんのか分からないわ。



一般人が強盗に勝てるのはフィクションの話。(前書き)

時間が空いたので、投稿です。

一般人が強盗に勝てるのはフィクションの話

ネギには訳が分からなかった。

平和だった筈の風景が二人の不審者の乱入で、突然地獄に変わったのだ。

響くのは、子供の悲鳴。

逃げまどう子供達の足音。

ネギはただ茫然とその様子を見ている事しか出来なかった。

しかし乱入してきた不審者達は、そんなネギには構う事なく拳銃を突きつける。

「おいおい、静かにしろ。俺達の邪魔する悪い子は食べちまうぞ！」

そんな子供達の様子にいら立ったのか、不審者達は拳銃の照準をあちこちに向け、威嚇するようにそう叫んだ。

その声に子供達は余計に怖がり、涙を浮かべる。



泣きやまない子供達に不審者達はいらだちを隠そうとせずに、持った拳銃一発上空に向けて発した。

僕は状況の整理や理解は、後回しにし、とにかく拳銃を持った二人組を刺激しない様に、泣いている子供達に大きな声で、しかし優しい口調になるように言った。

「落ち着いて、皆！ まず一か所に固まろう。近くで転んでる子がいたら起こして上げて、向こうに固まろう。大丈夫だから、ゆっくりと落ち着いてね」

今、この学校にいるのはネギと子供達だけ。

ネギが行っていたのは通常授業ではなく、希望者を対象にした居残り授業の様なモノであった為、監督する教師はここにはいなかった。

それ故、ここに不審者二人を追い返す手立ては正直言っただけでなかった。

ネギは多少大人びて、9歳にしては発育の良い身体をしているが、それでもまだまだ子供。大人二人相手に喧嘩して勝てる筈がない。

それに、相手は拳銃を持っている。

子供達に被害を出さずに取り押さえる方法はない。

出来る事は、不審者が子供達を傷つけないように不審者がして欲しいそんな事を率先して行い、不審者の逆鱗に触れない様にする事だ

けだった。

子供達はネギの言葉に従い、ゆっくりとだが一か所に固まった。

そして、近くに友達がいる事による安心感からか錯乱状態も治った様だった。

ネギはキョロキョロと子供達を見渡し、全員いる事を確認する。

全員怪我がない事や、下手に隠れて、隙を見て不審者に飛びかかるような、昔の自分の様な子供がいなかった事に小さく安堵した。

全員の無事を確かめた後、ネギは出来るだけ柔らかな顔で、不審者に話かけた。

「あの、どういった御用でしょうか？ 金品の類は学校ですので殆ど置いておりませんが」

とりあえず、要求を聞かなければ始まらない。

この場での一番の責任者としてネギは不審者にそう尋ねた。

「あん？ どういった用だと？」

ネギの言葉に不審者は嘲笑するような笑みを浮かべる。

そんな様子を見ながらネギは心の中で確認する。

最重要なのは子供達の安全。そして、次に自分の安全である。

相手が必要としているモノがあるなら出し惜しみせずにくれてやり、さつさと帰って貰う事が一番だ。

そして、確認した後に、この場にアーニヤがいない事に小さく安堵した。

アーニヤの事だ。もし、この場にいたら魔法を使いまくっていただろう。

別にネギは魔法を使う事を悪い事だとは思っていない。

折角便利な魔法があるのだから、使えばいいと思っている。

だが、同時に便利な魔法の過信も良くないと思っている。

魔法は便利だが、万能ではない。

ネギの知っている限り、アーニヤの実力では子供達に被害が及ばずに、二人の不審者を無効化する手立てはない。

不意を突いて1人を無効化するのが精いっぱいだろう。上手くいって二人を何とか無力化出来るレベルである。

そして、その無力化する過程で何発か発砲される危険性だっ十分にある。

それに、こいつらの武器が本当に銃だけだと決まった訳でもない

し、仲間がどこから覗いている可能性だって十分にある。

だが、そんなあやふやな可能性の上であっても、アーニヤはそれでも魔法を使っただろう。

中途半端な拳銃に対抗できる術があるからこそ、『上手く行けば』とか『なんとかなるだろう』とかそんなあやふやな言葉の中で行動に出るのだろう。

だが、ネギにはそんなあやふやな希望は信じられない。

故に、ネギは安全な方法を選ぶ。

抵抗という手段を捨て、服従する事で子供達と、そして自分自身の安全を確保する。

余裕綽綽の笑みで、不審者二人はネギを見下ろす。

ネギは出来るだけ子供達を庇える場所に立ちながら、ごくりと相手の要求を待つ。

その時だった。

「いええええーい」

蹴り破られた扉からそんなこの場に全くそぐわない声と共に短髪の女の人の不審者の一人に向けて思いつきりとび蹴りをかましたの

だった。

「ぐぬあ!？」

跳び蹴りを喰らい、まるでギャグのようにぶっ飛んでいく不審者の一人。

『いえーい。トウジョウ、とうじょー。いえーい』

一人蹴り飛ばした事に満足したのか、短髪の女の人は眠そうな目でそう言つと、やる気のない万歳をする。

いやいやいや、扉の外から跳んだとして目算で5メートルはジャンプして来たよ？

それにあれは日本語かな。今度教師になるために勉強している言葉にそっくりだ。

彼女のあまりに突然の登場にぽかーんとしてしまふ俺たち。

そして、僕達の中で一番初めに立ち直った蹴り飛ばされてない方の不審者が拳銃を突きつけながら叫ぶ。

「な、何者だ!? 予定が違うじゃねーか!」

しかし、その言葉はどうやら通じなかった様で、酷い剣幕でまくし立てる様に言う不審者に、女の人は小さく首を傾げる。

『あのーもしもしー。えっと、日本語分かりますか? きゃんゆーすばーくじゃぼねーぞ?』

どうやら女の人は日本語以外喋れないようで、その眠そうな目で小さく首を傾げながら、片言でしかも間違っている英語と、ぶんぶんとオーバリアクションでボディーランジェジを図ろうとする。

しかし、そんなモノが苛立っている不審者に通じる筈もなく、不審者は拳銃を向けて、女の人に向かって叫ぶ。

「意味分かんねーんだ！ 誰だお前！？」

『おー、通じたー。えっと、私は東条 茜。小学校の頃は茜を文字って『東条おつかねー』で通ってましたー。よろしくー』

「だから、何語で喋ってんだ、この野郎！」

全く通じていないのにも関わらず、通じた気になっている東条となる女の人。見た所は高校生ぐらいだろうか？

そんな東条に痺れを切らしたのか、不審者は拳を握り東条に向けて拳銃を発砲しようとしていた！

「危ない！」

それを見た途端、僕は思わずそんな声を上げて彼女へと走ろうとした。彼女の態度から、この不審者がこんな行動に出る事は予想が出来ていた事だった。

だから、僕はこの時誰よりも早く彼女を助けに行けたのだ。

よく分からないがこの女の人も僕たちを助けようとしてくれたのだろう。だからこそ、僕は彼女を守れるならば守らなければならぬのだ。

しかし、いくらスタートダッシュが速かったとしても僕が彼女の元に辿りつく速度と、不審者の指が引き金を引く速度のどちらが速いかと言われれば答えは誰でも分かるだろう。

後、彼女まで数センチという所で無情にも発砲の音が聞こえた。

僕はその発砲の音を聞きながらも、飛び出した身体を止める事が出来ずに彼女を巻き込んで地面へと倒れ込んだ。

『だ、大丈夫ですか!?!』

僕は慌てながらも日本語で彼女に向ってそう尋ねた。  
見た所彼女には外傷がない。

……外れたのか？

俺はその事に安堵しながら彼女にそう尋ねる。

『おー？ なんだい僕？ お姉さんの胸に飛び込みたい年頃なのかい？ よーし、東条が撫で撫でてあげよー』

能天気な口調で彼女はそう言うと、僕を撫で撫でする。

うん、姉さんを思い出すが今はそんな事をしている場合ではない。

彼女の無事を確かめると、僕は今度は発砲した不審者の方へ眼をやる。

すると、そこに立っていたのは不審者と、その不審者の腕を掴み銃口を上へと無理やり向けさせた今までいなかった男の人だった。

『茜ちゃん、こっちの話無視で飛びだすのはあかんでー。これでも一応規律つてもんがあるんやからな』

その男は苦笑しながら日本語でそんな事を言った。

男は20代ぐらいの長髪で眼鏡をかけており、どうやら東洋人のようだった。

「だから、誰なんだよ!? お前らは!？」

酷く強い力で腕を握られているのか、苦痛で顔を歪めながらもバタバタと暴れながらそう叫ぶ。

『あんさん煩いわ。用も何もないんやから取り合えず寝とって』

そんな不審者に眼鏡の男は興味無しと言った感じで掴んで上を向けていた腕を無造作下ろした。

その瞬間、下ろされた腕と同時に不審者が何の抵抗もなくバク天する様にくるりと回転し、力強く地面に叩き付けられた。

!? な、何だ、今の？



ネギには突然、自分から回転して叩きつけられた様にしか見えなかった。

驚いた表情を浮かべているネギに、男は小さく笑うと眼鏡をくいと上げて言った。

『驚いてんな。まあ、簡単にいえば合気の応用やな？』

『……合気？』

首を傾げるネギに、男は小さく笑うとまだネギの下敷きになっていた彼女の首根っこを掴み、無理やり立たせた。

『あのなー、茜ちゃん。単独行動は懲罰ものやねんで？』

『おー、そう言えばそんな話を聞いた気がするー。あー、でも、うん、そんな話はなしで。あつ、ちなみに今は『話』と『はなし』がかかっているんだよ？ 分かりづらい？』

『そやなー。茜ちゃんの存在が扱いづらいわー』

男は小さく肩を竦める。

そして、そのまま猫のように彼女を持ちあげるとネギに向かって言った。

『ほな、俺ら帰るから後よろしくなー』

男はそれだけ言い残すと、小さくウインクをする。

そして、次の瞬間には男と女の人はいつの間にか消えていた。

まるで、先ほどまで誰もいなかったように、忽然と姿を消したのだった。

「な、何だったんだ一体？」

残されたのはネギと子供達、そして伸びている不審者二人であった。

まるで突風のように現れて、煙のように消えた二人組。

ネギは少し考えるが、当然のことながら答えが出る筈もなかった。

ネギは取り合えず、不審者二人を縄でぐるぐる巻きにする事を優先し、一通り不審者を無力化した。

その時！

「大丈夫！？ 怪我はない！？ 子供を苛める悪党は、この立派な魔法使いである、カルロツテ・ハハリが成敗してあげるわ！」

窓を突き破って盛大に、なんちゃって魔法学校の校長代理が飛び込んできた。

そして、自分に酔ったような正義の味方っぽい決めポーズをして、ピシッと指差した。

「さあ、きなさい!」

..... いや、僕では突っ込みきれないよ。

何とも言えない空気が部屋を包み込んでいた。

S I D E : カモ

「あの校長代理は何がしたかったんだ?」

カモは煙草を吹かしながら先程までの様子を見て、そう呟いて首を傾げた。

「さあ、多分、やんちゃしたい年頃なんですえー」

同じ様に首を傾げながら適当に答える月詠。

そんな月詠に俺は小さく笑った後、少しだけ腕を組んだ。

「しかし、あれは置いといたとして、途中で登場した二人組……」  
確か、女の方は東条 茜と名乗っていたな。  
名前からして、多分月詠と同じ日本出身の奴だろう。

そして、もう一人の合気の使い手。あいつは中々の腕だった。

「そうですねー。まだ弱いですけど、その内いい獲物になりそうですえー。あーん、たまりまへんえー」

あいつらと戦った所を想像でもしたのか、小さくくねくねする月詠。そんな月詠に俺は呆れながらも考える。

あいつらは恐らくレジスタンスの連中だろう。

だが、あそこに隠れているレジスタンスの連中とは少し訳が違いそうだな。

何故、この場にいたのか。

何故、ネギ少年を助けたのか。

疑問は尽きない。

だが、どうやら俺たちが考えているよりもネギ少年の周囲は面倒な事が多そうだな。

一度、徹底的に洗い直した方がいいかもな。

今のまま、適当にやっていたら痛い目に会いそうだな。

カモはそう考えると、空へと向かって煙草をふかした。

さて、取り合えず『アイツ』に話を聞く所から始めた方がよさそうだな。

疑問に思った事を正直に話すとプリントになる事もある。(前書き)

今回の話、ちょっと分かりづらいかもしれませんが。

まあ、のちのち答え発表するので、分からなくても大丈夫です。

疑問に思った事を正直に話すとイベントになる事もある。

『桜』という名の組織がある。

それはあらゆる組織にその枝を伸ばし、強大な力を持っているにも関わらず、その組織の詳細はほとんど知られていないのだ。

そんな謎の組織『桜』であるが、主に3つの集団に別れ、それぞれ『花』・『枝』・『根』となっている。

『花』は主に機械や魔法などに関係なく発明や開発、改良を行う集団。

『枝』は魔法世界も旧世界も関係なくありとあらゆる情報を扱う集団。

そして『根』は主に戦闘を行う集団である。

この三つの集団が集まり『桜』という組織が作られている。

そして、この組織の最も特徴的なのが、その人員に人間がいない

事だ。

一般人はもちろん、魔法使いも、そして亜人すら存在しな組織。故に人間界ではほとんどその存在は知られていない。

「まあ、つまりどういう事かと言うと組織の人間全てが俺の様な小動物なだけなんだがな」

カモは小さく呟きながら地面を掘る。

ネギ少年の強盗騒ぎが終わり、一週間程経った。ネギ少年は警察やらなんやらの説明を終え、しばらくは色々と忙しそうに活動していたが、ようやく落ち着いたので今日一日は休暇を取るらしい。

その為、カモも監視役を月詠に託して『桜』に会いに行くために穴を掘っていた。

……いや、このまま穴を掘り進めて物理的に『桜』のアジトに乗り込もうって訳じゃないぜ？

これが『桜』に乗り込みに行ける唯一の方法だから、仕方なくやっているのだ。

その方法とは、簡単にいえば魔法や道具を使わずに半径20？以内、深さ2メートル程真下に掘り進め、与えられた転移札を使うというモノだ。

まあ、簡単に言うと人間には出来ない方法である。



「地層が変わってきたな。そろそろ、2メートルかな？」

オコジョであるカモは悠々と地面を掘り進め、しばらくするとその  
う呟いた。

そして、小さく呪文を唱える。

『英雄は赤き桜』

その瞬間、地面に囲まれていた視界が無駄に広い癖に何も無い部  
屋へとがらりと変わった。

部屋には8つほど扉があり、それ以外は何も置かれていない。  
地面も天井も壁もドアも全部真っ白で、どことなく天国に来てし  
まった様なイメージすらしてしまう殺風景な部屋であった。

カモは転移が完了した事に疲れた様な息を吐くと、異空間から煙  
草を取り出し火をつけた。そして、煙草の煙で肺を満たし、満足し  
たように外へと吐き出した。

その時突然、どこからともなく甲高く、それでいて神経を逆なで  
するような声がかモの耳に飛び込んできた。

「おやおやおや、今日は珍しい珍客がやって来たな。なんだい、な  
んだい、どうしたんだい？ 未確定さんよ。遊びに来たってガラじ  
やないだろ？ もしかして、あの人間の姉ちゃん和喧嘩別れでもし  
たのかい？ それなら、喧嘩の仲裁してやってもいいぜー。こっち

としてもあの姉ちゃんとは仲良くしたい部類だからなー」

「なんだ、お喋りデグーか。まだ首になってなかったのか」

聞こえてきた声に、カモは軽く眉間に皺を寄せながらそう言う。  
カモのその言葉にデグーと呼ばれた生き物は甲高く笑う。

「おいおいおいおい、そう言うなよ。つんけんすんなよ。つれないぜー、未確定さん。こっちはあんたが抜けた穴を必死で埋めて埋めて埋めまくってんで、俺が首になる余裕も辞めさせてもらう余裕も全く持ってないんだぜ？ こっちだって好きでこんな組織に属してる訳じゃねーんだって？ これマジだぜ、嘘だぜ、ホントだぜ？」

「あー、そうかよ」

デグーの言葉にカモは小さく肩を竦めながらそれだけ言うと、さつさと8つある扉の一つに向って歩きだした。

「ちよつと待った。少し待った。ちいつとストップ。もつとずつと色々喋ろうぜ。こっちは青鬼も真っ青なぐらいのデスクワークに囲まれてヒーヒーギヤーギヤーワーワー言ってるんだぜ？ 少しぐらい俺と喋って、俺のストレス解消させてくれよー。いいだろ、よいだろ、オツケーだろ？」

そんな声にカモは小さくため息を吐き出す。

「あのな、俺はもう事実上『桜』は抜けたんだぞ？ 企業秘密をバンバン喋るお喋りデグーと喋ってたら、俺が組織から狙われる」

「ぎゃははは。嘘つけ、嘘こけ、冗談きついぜ。誰が、『桜』の

元名誉顧問を狙うつていうんだよ。俺だってあんたに勝てる自信は皆無だぜ。あんたに勝てるのはあの人間の姉ちゃんぐらいじゃねーか？ それも色々前提あつての話だけどなー？」

部屋中に響く甲高い笑い声にカモは再び小さくため息を吐き出す。そして、手に持っていたまだ火のついていいる煙草を吸い、煙を吐き出した。

すると、煙がゆらゆらと動き、何もない所で突然収縮する。

「うぎゃあああああ」

その途端、そんな悲鳴と共に誰もいなかったその場所に一匹に茶色い小動物が現れた。

光学迷彩をかけていたお喋りデグーである。

一見しただけではその存在を認識できない程の光学迷彩により、あちこちから情報を仕入れている『枝』の中でも指折りの情報屋だ。しかし、そんなデグーも煙に一度握りつぶされ、グタリと倒れてしまっている。

「さつさと『疑問屋』に合わせる」

デグーに近づき無愛想にそう言うカモ。

そんなカモに、デグーはぐっと起き上がると愉快そうに笑う。

「なんだい、そうかい、分かったよ。疑問屋の旦那に会いに来たのかい。旦那は今奥の扉で休憩タイムだぜ？ 鍵は開いてっから勝手に入りな。あーあー、俺はてっきりあの人間の姉ちゃんと喧嘩して、

飛び出して、穴掘って、ここまで来たのかと思っっちゃったぜ？ いやいやいやいや、これはマジだぜ、嘘だぜ、本気だぜ？」

こいつと話していると疲れる。

カモは心の中でそう呟きながら、ゲラゲラと笑うデグーを無視して一番奥にある扉へと向かう。

そして少し重い扉をゆっくりと開いた。

「何故、アルベール・カモミールは人間ですら到達できなかった、魔法の高みを知る事が出来たのだろうか？」

扉を開けた途端、そんな声が聞こえてき、カモは小さくため息を吐き出した。

聞こえたその声は低く、それでいて響く重低音であり、どこか心地よい声でもあった。

「何故、アルベール・カモミールはたかが魔導書の為にネギ・スプリングフィールドのお守をしているのだろうか？」

この声の主は部屋の奥でただ座っていた一匹の小動物。その身体には毛はなく、口からは歯が前へと突きだしている。

種類的にはハダカデバネズミと言われている生物だ。

まあ、この『桜』の中では疑問屋という名で通っているが。それにしても、俺の状況を色々探っただな。

「おい、疑問屋。お前の力を借りに来た」

「何故、お前は俺の力を借りに来たのだろうか？」

単刀直入に言う俺に、疑問屋はそう尋ねる。

「お前も知ってるだろ。ネギ・スプリングフィールドについて聞きに来たんだよ。いや、詳しくはあの少年の周囲の状況についてだが」

疑問屋は『枝』のリーダーを担っている。『枝』から集められた情報はすべてこいつの元に行き、その情報全てを管理している。

「何故、ネギ・スプリングフィールドの周りは多くの組織の監視下にあるのだろうか？」

だが、この疑問屋は情報を教えない。

疑問屋が教えるのは疑問のみ。故に疑問屋なのだ。

しかし、疑問というモノは情報があつてこそ初めて生まれる。そして疑問の中にも情報というモノが存在する。

複雑に絡み合った情報の中から、疑問点を見つける事の出来るこの疑問屋は確かに優れた情報屋であった。

つまり言えば、情報を聞くには正確ではあるが、回りくどく面倒くさい相手という事だ。

「ああ、そつだ」

疑問屋の言葉に俺は素直に頷く。すると、疑問屋は少し考えた後に言った。

「何故、ネギ・スプリングフィールドの周りにはあれだけ監視されているのに、当の本人にはほとんど接触がないのだろうか？」

「……なるほど」

疑問屋の言葉に俺はそう呟いた。

確かによくよく考えてみれば疑問点だ。

俺と学校の連中以外は外から見ているだけで、ほとんど接触しき接触はなかった。それは元老院の連中も同じだ。

あつたとすれば、彼の故郷を襲った悪魔襲来の事件だけだ。

「何故、接触しないにも関わらず監視されているのだろうか？」

俺の考えを補足するように疑問屋から疑問が突きつけられる。

考えられる理由は2つ。

1つは監視するだけで接触するには及ばない立場にいるから。しかし、監視していた人間が殺されても新たに監視する人間を送り込む程なのだから、可能性としては薄い。

もう1つは接触したくても出来ず、監視するしかないから。通行人を偽って話しかける事も出来ない何らかの理由があり、彼は学校の連中以外接触できないのではないか。

確かにそう考えると、あいつらの行動が何となく読めてくる。

恐らく連中の中で、ネギ少年についての取り決めがあったのだろう。故に監視は出来ても、少年を育成する事は出来ない。

なるほど。つまり、俺があんな訳の分からない依頼内容で送られたのも、この取り決めにも則った事だったのか。

まあ、その事を校長代理は知らないのか、あっさりと取り決め破って強盗騒ぎを起こしていたがな。

「他には？」

一つ答えに辿りついた俺がそう尋ねると、疑問屋は目を細めながら言った。

「何故、ネギ・スプリングフィールドはあれほどの人間に注目をされているのだろうか？」

「そうだな。英雄の息子というだけでは、説明がつかないレベルではあるな」

今、魔法社会は英雄に飢えている。だが、だからと言ってあれほどまでにネギ少年に固執する理由もない。

そう考えると他に何か理由があるのだろうか？

俺の気がついていない何らかの理由でネギ少年は監視下に置かれている？

「何故、『紅き翼』のナギ・スプリングフィールドはネギ・スプリングフィールドの前から姿を消してしまったのか？」

「やはり、そこがネックなのか」

ガトウの話ではナギ・スプリングフィールドは生きているらしい。確かな情報は無いが、ガトウはそれを信じている。

もしも、ガトウの言うとおり生きていると考えるならば、何らかの理由で姿を消してしまった事になる。

つまり、ナギが姿を消して、何かを行った。その何かが原因でネギが監視下に置かれたと考えるのが妥当か。

「……何故、ナギ・スプリングフィールドとネギ・スプリングフィールドを無意識化に関係づけているのだろうか？」

俺が頭の中でそう考えている時、疑問屋がそんな疑問点を突き付けてきた。

「……確かに、ナギに関係なくネギが監視下に置かれている可能性もあるな」

だが、それは何故なのだろうか？



疑問しか頭の中に浮かんでこない。

これを考えるにはどうやらまだ情報が足りない様だ。もっと、色々情報を集めるべきだろう。

この辺りは、ガトウにでも頼るか。

そんな事を考えていると疑問屋が次の疑問を突き付けてきた。

「何故、ネギ・スプリングフィールドは、麻帆良学園に教師として派遣される事になったのだろうか？」

「それは、学校の連中としては最善だからじゃないのか？」

疑問屋の言葉に、カモはそう答える。

しかし、疑問屋は表情を変えずに更に疑問を浮かべる。

「何故、ネギ・スプリングフィールドは教師をしなければならないのだろうか？」

確かにそれも疑問だ。

アーニヤは生徒だったのに、ネギが教師でなければならなかった理由。

ネギ少年を教師にするメリットは何なのだろうか？

思いつく事はいくつもある。

人を教える立場に就くことよっての責任感の向上などの精神面

の充実。

生徒よりも重い立場である事での仕事という名の強制力。

生徒より一步後ろで全体を見る事での、人間的成長。

それに、強制的に生徒とかかわる事になる事による思考の誘導など。

考え出せば切りがない。

だが、教師にする事により生まれるメリットのほとんどがネギ少年の精神的な成長、または特殊な人間関係の構築である。

学校の連中はそれを求めているのだろうか？

どつやらこれも、答えが出そうにないな。

「……他に何か無いか？」

俺は疑問屋にそう尋ねるが疑問屋は少し黙って、首を振った。

「ふう、そうか。悪かったな」

どつやら他に知っている事はなさそうだ。

とりあえず収穫があったとすれば、ネギ少年を取り巻く組織は何らかの協定を結ぶ程、しつかりとした組織だという事であり、その

組織の連中以外が英雄の息子にちよつかいをかけてこない事を見ると、武力的にも組織的にも中々に大きな組織のいくつかが拮抗状態にあると考えて間違いはなさそうだ。

ネギ少年はナギの影響の所為で監視下に置かれているかもしれないし、もしかすると英雄以外の理由で監視下に置かれているかもしれない事。

そして、ネギ少年は麻帆良学園に行く事により何らかの精神的成長を期待されているかも知れないという事だ。

これから導かれる答えは、麻帆良学園に行った後、または麻帆良学園卒業後にもネギ少年になんらかの功績を求めているのではないかとこの可能性があるとおう事。

そして、協定が結ばれている事から考えると、その功績は全組織にメリットがあるかも知れないという事。また組織同士で牽制し合いながら監視してる事から、その得られるメリットはいくつかの組織の中でも一部の組織だけかも知れないという可能性。

すべて可能性の段階でしかない。

それにどれも、詳しくは分かっているが何も分からない状態よりは進歩した方だ。

俺は今日の収穫を改めて頭の中で思い返した後に、疑問屋に向って尋ねる。

「それで、今回の報酬は何がいいんだ？」

まさか昔いた組織だからってタダで情報を貰おうとしていた訳ではない。

もらった情報分はちゃんと報酬を払う。

俺の言葉に疑問屋は少し考えた後こう言った。

「何故、女性はあんなにも可愛いのだろうか？」

あつ、ちよつと顔を赤らめた。

そんな疑問屋に俺は小さくため息を吐き出すと、亜空間からいくつかの写真を取りだした。

取りだしたのは、月詠のプロマイドだ。

全てカメラ目線で、可愛いポーズをした月詠が笑っていたり、少し頬を膨らませたりしている。

これら全てこいつとの交渉用に、月詠にわざわざ許可をもらって仕入れた逸品だ。

「これでいいか？」

俺はそう言って写真を渡す。疑問屋は写真を受けると満足そうに笑った。

「何故、お前のパートナーはこんなにも愛くるしいのだろうか？」

「黙れ、この女好き」

俺は煙で創った腕でグーパンチをお見舞いすると、さっさと部屋

から外へと出た。

全く、あいつは何年経っても変わってねーな。

あんなのが幹部をやっているこの組織に俺は若干の不安を覚えながらも、さっさと転移札を使って魔法学校へと戻った。

とりあえず、ネギ少年の事も少しは分かったし、研究の続きでもするか。

疑問に思った事を正直に話すとコメントになる事もある。(後書き)

なんか、ちょっと探偵ものっぽくなって気もして仕方がない。

大人も悩む。教師だって悩む。子供教師なら尚更悩む。(前書き)

ネギが色々考える話。

そして、次回辺り原作突入！……できるといーな。

大人も悩む。教師だって悩む。子供教師なら尚更悩む。

おはようございます、ネギです。

今日は久しぶりに予定も何もなく、ゆっくりとしてられる日なので、情眠を貪りつくしているネギです。

アーニヤも日本語の勉強の為に、部屋に閉じこもり、彼女の使い魔のカモさんもどこかに行ってしまったました。

それに同級生の友人も、卒業してしまっただので誰かが遊びにくるという事もない。

つまり、久しぶりに何も考えずに眠る事が出来るのだ。

いやー、もうね。休日最高ですよ。

ここ最近、バタバタ忙しくてたまらなかったからね。何が忙しかったってあの強盗事件の後処理ですよ。



あの強盗事件があった後、まず必要に迫られたのは警察への事情聴取。これは大して時間が取られなかったから、特に問題ありません。

その後に必要なに迫られたのが、生徒達の心の傷を癒す事。これが大問題なんです。

短時間とは言え、拳銃を持った不審者に脅されたのだ。まだ幼い彼らに心の傷が生まれるのは当然でした。

しかし、僕一人でどうにか出来る問題ではない。

何故なら、僕は精神科の医者でもないし、カウンセラーでもないただの子供ですから。

だから、彼らを助ける為になんちゃって魔法学校に頼った。すると、校長代理は二つ返事で了承してくれ、ルーベンス先生を派遣してくれた。

そうそう、この前の卒業式でハゲだという事を公の場で明らかにされてしまった彼だが、魔法使いとしてはそれなりに優秀らしく、なんか魔法世界でもそれなりの地位にいるらしい。

何でそんな人がこんな学校で教師をやっているのか疑問に思い聞いたが、『ははは、何というか教育というモノの必要性とか？ 次世代を育てる為の努力とか、まあそんな感じ？』と、あやふやな言葉で説明してくれた。

さて、そんな彼だったが、魔法使いとしては優秀な為、すぐに子供達を集め魔法を使ってくれた。

使った魔法は『忘却』の魔法。

簡単に言ってしまうえば、『強盗に襲われた』という事実を忘れさせたのだ。

その効果は観面で、今まで大声やよく知らない大人の人を見るだけで震えていた子供達が、強盗事件が起こる前の様の明るい笑顔を浮かべていたのだ。

『あれー？ せんせー、じゅぎょーは？』

何があつたのか思い出せずに頭の上にクエッションマークを浮かべながら可愛らしく尋ねてくる生徒に、思わず安堵の息を洩らしてしまった。

そんな様子を見てルーベンス先生は『どうだ？ やはり、魔法という力は偉大だろ？』と大笑いをしていたので、適当に同意しておいた。

すると、そんな俺にルーベンス先生は鼻息を荒くしながら更に『だろう！ だから、ネギ君も立派な魔法使いを目指し頑張るんだぞ！』とか言ってきた。

その目は何か血走っていて怖かった。

しかし、あまりここで調子に乗られても困るのでなるべく穏便にルーベンス先生に言った。

『あのですね。僕は別に魔法の力そのものを否定はしてませんよ。ただ、そんな力に拘らなくても生きていけると思っているだけです』

『なんですと！？ 魔法の有用性を知っているのですよ！？ 何故、あなたはそんな事が言えるんですか！？』

なんか発狂寸前の顔で問い詰められた。あの顔は怖かった。

とりあえず、物凄く興奮しているルーベンス先生に丁重にお引き取り願った。

そして、本当に強盗の恐怖を忘れていいのか試す為に生徒たちを引き連れて街へ散策に出かけた。

俺は魔法の効力は確かに凄いと思うが、それが万能でない事ぐらいは知っている。

忘却魔法も確かに凄いが記憶を消しても、心に刻まれた恐怖は残る事もある。

恐怖で記憶が無くなっているても、その恐怖を作った原因を怖がるという事例は魔法を抜いたとしても沢山ある話だ。

そもそも、魔法で記憶を消しても、心そのものが変化した訳ではないからな。

と言う訳で、街へ出かけた訳だが、結論から言うと大半の生徒は大丈夫であった。

しかし、大丈夫だったのは大半の生徒であり、3名の生徒が意味も分からずに大人の人間を怖がるそぶりを見せたのだ。

『せんせー、何か……落ち着かないよー』

3名のうちの一人が周辺をキョロキョロと見渡しながら、そう言った。

この3名は強盗が押し入った時、もつとも入口に近かった3名であり、多分他の生徒よりも恐怖が濃かった所為だと俺は考えた。

そして案の定、魔法で完治が不可能だったため、一般の精神科の医者の方と話し合い、ゆつくりとトラウマを克服していく方針を建てた。

怖がる理由が自身で分かっていない為、あまり無茶は出来ないの  
で、簡単なカウンセリングから始めた。

俺も一応、教師としていたのでカウンセリングに参加し、生徒の親御さんと色々話し合った。

その時、気がついたのだがどうもアフターケアのつもりか、生徒の親御さんも強盗に襲われた事を忘れており、何故こんなトラウマが生まれたのか、悲しげな顔で首を傾げていた。

ついでというと、強盗事件について忘れたのは生徒や、その親御さんだけでなく、警察や街の住人もそうであるらしく、強盗事件そのものがなかった事になっていた。

だったら、あの強盗達はどうなったのだろうか？

疑問に思い、ルーベンス先生に聞いたが、何故か苦笑いを浮かべるだけで何も教えてくれなかった。

まあ、そんな事をしていた為に、時間がとてもかかり、今日ようやく一息つけたのだった。

「ふう、取り合えず一段落かな？」

ここ一週間の事を思い出して、僕は大きく息を吐き出しながらベツドの上で寝がえりを打った。

そこで僕はようやく、これまでの事ではなくこれからの事について考える事が出来た。

これからの事というのは紛れもなく、修業先の事である。

これから日本の学校で教師をするのか。

事実であるその言葉を俺は改めて噛みしめる。

はたして、自分にそんな事ができるのだろうか？

一週間前だって、強盗が来た時何も出来なかった。

いや、あれは教師の仕事ではないだろうが、それでもやはり何も出来なかったという事実は重く押し掛かってくる。

教師として自分はどれだけの事が出来るのだろうか？

無理やり押し付けられた事だとしても、教えられる側にとってはそんな事は関係ない。

学校では、生徒は残念ながら教師を選べない。

10才にも満たない僕に教えられる生徒はどう思うだろうか？

正直言つて、自分に自信がない。

それも当然だろう。

俺が今までであった教師のほとんどが僕を、ネギとしてではなく英雄の息子としてしか見ていなかった。

それに魔法至上主義で、傲慢で、そして何かにつけて自分に利益がある事しかしない。

なんちゃって魔法学校の教師のほとんどがそんな教師だった。

僕の教師像がそんなものである以上、良い教師を演じられる気は全

くしない。

そして、僕自身も傲慢で、自分勝手に自分の利に聡い人間でしかない。

漫画で見た様な『あの夕陽に向かって走るぞー』的な教師になれる自信もない。

教師になったとしても、ただ淡々と授業を行う教師になるか、それとも無理して重圧と責任に潰れてしまうかのどちらかになる気がしない。

前にアーニヤにこの事を相談した事があった。

「何言ってるのよ、バカネギ。そうやって臆病で無駄にクドクド考え込む所は変わってないわね」

そう小さくため息を吐き出した後に、やさしく笑って言うてくれた。

「あんたに教えられた子供は楽しそうに笑ってたでしょ」

……、確かにそうだ。

僕が子供に教えると、子供は嬉しそうに笑ってくれた。せんせー、ありがとーって言うてくれた。

あの笑顔は本当に眩しいモノだった。

でも、銀行強盗がその全てを壊していった。

子供たちの笑顔を壊して行った。

魔法でその事を忘れさせても、子供の心にはまだ大きな傷が残っている。

「はぁ………」

小さくため息を吐き出す。

僕が何かをすると、何か成果を出すと全てが壊れてしまう気がする。

神か何かがいて、俺が俺自身の手で行動しようとするとなんか壊しに来ているような気がする。

『悪魔襲来』の時もそうだ。

父親に会いたいという気持ちを強く持って、自分なりに行動しようとしていた時、その全てが壊された。

『飛び級』の時もそうだ。

ようやく出来たアーニャ以外の友達も、俺の不自然な飛び級に首



を傾げ、いつの間にか疎遠になってしまった。

『強盗事件』の時もそうだ。

ただ教師になるのもいいかもと考えて、子供たちにただ笑顔を与えたかっただけなのに、その笑顔が壊されてしまった。

はあ……。

僕が何かやろうとすると、何かが悪魔をする。

今度、また僕が授業をしている時に、何か起きた時、僕はちゃんと教師として行動出来るだろうか？

生徒がもし悩んでいる時に、僕は教師として解決してあげる事ができるのだろうか？

そもそも、10歳にも満たない僕が道德というモノを教えられるのだろうか？

考え出せばきりが無い程、不安と疑問が浮かんでくる。

こんな事を言うと、カモさんは呆れるんだろうな。

そして呆れながら『少年は相変わらず精神年齢が高いな。もっと子供らしく生きればどうだ？』と煙草を燻らすと思う。

そんなに僕は精神年齢が高いのだろうか？

同学年の人達よりは大人びている事は分かっている。でも、大人び過ぎているとは思わないんだけどな。

僕の場合は、大人びているというよりも、カモさんの『あの事件』以来、魔法以外の事を考える余裕が出来ただけな気がする。

カモさんにそう言うと、カモさんは決まって『だが、少年の理解能力は通常の人間のモノとは桁が違うぞ?』と言うのだ。まあ、でも自分自身でも自分の理解能力が常軌を逸している気がしないでもないんだけど。

でも、僕は普通の人間として生きたいんだけどな。

はあ、こんな時はアーニヤの顔でもみたいなー。

僕が訪ねると、アーニヤはいつも何か怒った様な顔をしながらも、『まあ、せつかく来たんだしお茶でも飲んでいきなさいよ』と慣れた手つきでお茶を入れてくれる。

あれが癒しだ。

こんな何をやっても中途半端でしかない、僕にアーニヤは笑顔で笑いかけてくれる。

そして、『次は頑張んなさい』と背中を叩いてくれる。

そうだな。

うん、次は頑張ろう。

次、日本で教師になる時、自分の出来る限りを頑張ろう。

まだ教師になる事に納得していないし、出来るとも思わない。実際、さっさと修行なんてやめてどこかで働くか、それとももう一

度今度は普通の学校に通って普通の生活を送りたい。

一応、大学卒業程度の知識はあるし、年齢も年齢だからしばらくゆっくりした後でも職に困る事はそうない筈。

でも、それでも頑張ってみようと思う。

魔法とかそんな事は関係なく、ただの一般教師として、俺は日本で頑張ってみようと思う。

うん、そうだ。

やるぞー！

えいえいおー！

とりあえず、アーニヤの顔でも見に行こう。うん、そうしよう。

会話はドッジボールだと思う。しかも砲丸を用いた危険な競技。(前書き)

今回で原作突入です！

ようやく前回でプロローグが終わったって感じですよ。

えっ？ プロローグ長すぎる？

プロット無しでやってるんだから、仕方がないじゃないですか！

会話はドッジボールだと思う。しかも砲丸を用いた危険な競技。

飛行機を乗り継ぎ、始めて地下鉄というモノに乗り。

僕はようやく、日本の麻帆良学園という場所へとやってきた。

目の前に広がるのは、巨大な城門。

その城門の奥には橋があり、そしてその奥に巨大な都市がある。

これが、あの有名な麻帆良学園である。

この学園のシンボルともいえる巨大な樹。外側から見ても分かる  
発展した街並み。

住人のほとんどが学生だと言うのにも関わらず、物凄く賑わって  
いるのが見て取れる。

「すげー！ でっかいなー！ 都会つてすげー！」

この街並みを見た時、僕は自分でも驚く程大きな声でそんな言葉を  
叫んでいた。物凄くテンションが上がってしまった。

そんな僕の隣で、アーニヤはポカンと口を開けながら麻帆良学園  
を茫然と見ていた。

「何なのよ、これ。もはや一つの国じゃない……」

確かにアーニヤのいうとおり、都市というよりも国に近いかもしれないな。

出入り口にも警備員がいるし、城門の中に都市をぐるりと囲む様に流れている巨大な河。

これは籠城しても、勝てる気がする。何に勝つかは分からないけど。

そんな事を考えながら、ただ都市を見上げている僕とアーニヤ。そんなアーニヤの肩の上で、カモさんが特に何も感じた様子はなく煙草をふかしていた。

色々な所に旅をしていたと言っていたからか、全然驚いてないみたいだ。

都会ってというのはどこも、こんな感じなんだろうか？

若干ビビっている自分自身に、僕はちょっとだけ活を入れると、アーニヤの手を取った。

「行こう、アーニヤ」

気分は物語に出てくる勇者である。未知のダンジョンにもぐりこむのだ！

そんな僕にアーニヤも怖いのか、ぎゅっと手を握り返してくれる。うん、いつもは強気なアーニヤも、呆気にとられている所為か、うん、可愛らしい。

「ね、ね。もしかして、立体映像とかあるかしら？」

「かもしれないね。それにロボットとかいるかもしれないよ？」

「超能力の開発とかしてるかもね！ レベル5とかそんな感じの！」

何となくテンションが上がってしまう。

いや、そんな事ありえないっていう事ぐらい理解してるんだけどね。

何と言つか、ロマン？ まあ、そんな感じ。

「テンション上がりきってる所悪いが、そろそろ中に入らないのか？」

やる気なさそうに煙草を吹かしながらそう尋ねてくるカモさん。

「うん、そうだね。入ろっか」

「ええ」

なんか、この年にもなっておままごとをしているのを親に見つけた子供の心境の様に、気恥ずかしさを隠しながら学園の中に入っていく。

もちろん、手は放しましたよ？

警備員に出入りの手続きをしてもらい、学園長の入門許可書を見せる。

「どうぞ、入ってください」

にっこりと優しい笑みを浮かべる警備員に一礼した後、僕とアーニヤは一度大きく深呼吸をして、麻帆良学園の中に一歩足を踏み入れ、

っ!?!? な、何だ、この感じは!?!?

中に入った途端、突然言葉に出来ないような違和感が僕を襲った。

まるで体中に普段とは違う、特別な空気が張り付く感覚。

そして、その空気が自分の中にゆっくりと侵食していく感覚。

覚えたのは恐怖だ!

反射的に、僕は一歩下がり学園の外に出る。

その途端、先ほどまでの違和感が嘘の様に消える。

「どうしたのよ、ネギ?」

突然バックステップをした僕に、アーニヤは不思議そうに首を傾げる。

「いや、何でも……ないよ?」

俺は身体から噴き出す冷や汗を拭いながら、曖昧な言葉を紡ぐ。そして、その間にも俺は色々な可能性を考える。

恐らく、違和感の正体は魔法的な何かだろう。

アーニヤが気がついていない所を見ると、かなりの凄い魔法使い



がした何かか、それともかなり薄い魔法かも知れない。

一応、僕は魔法に敏感な体質だから気がついたのかな？

危険性だが、恐らくはそんなに高くない筈。

そんなに危険な魔法は、事前に知らせがある筈だし、そもそも学校にそんな魔法を使う必要性は感じない。

だから、何らかの結界か何かだと思う。

「何やってんだ、少年？」

僕が少し考えている間に、カモさんは煙草の煙を吐き出しながら僕にそう尋ねてくる。

煙が僕とアーニヤの周りを包む。アーニヤはゲホゲホと咳き込む。

というか、吐き出された煙はカモさんの堆積の何倍もあるのはなぜだろうか？

あの煙草はここ数年来のカモさんの不思議の一つである。

僕は首を傾げながらも、安全性は問題ないと考え、勇気を出してもう一度学園の中へと一歩踏み出す。

「……あれ？」

思わず、僕はそんな声を上げてしまう。

何も感じない。まるで肩すかしだ。

先程の感覚は夢だったのじゃないかと思う程だ。

「もう、バカネギ！ 何やってんのよ、さつさと行くわよ！」

自分の身体に変な所が無いかをくまなく探す僕にアーニヤは呆れた顔を浮かべながら、僕の手を取り橋をてくてくと歩いて行く。

そんなアーニヤに連れられ、僕は初めて麻帆良学園へと入ったのだった。

麻帆良学園の中はありえない。

ありえない程の都会だ。

田舎者の僕には、右も左も分からない街だよ。いや、さすがに左右は分かるけど。

「でつかいわねー。ほら見てよ、ネギ！ あそこにおっきな時計塔が見えるわよ」

「ホントだ。それに店も沢山ある。なんたる、麻帆良洋品店だったさ。この学園オリジナルの店なのかな？」

上京したてむき出しで、あちこちを見回りながら、目的地を目指す。

「ちょっと！ 何すんのよ！？ きゃあああああ！？」

「アーニヤ！？ アーニヤが人の波にいい！？ 何だ、この人の数

は!？」

色々あったが、何とか二人はおっかなびっくりだったが、電車の切符を買う事が出来た。

外国の切符を買うというのは、意外と緊張する。

「あつ、アーニヤ! これ違う! この電車反対方向に進んでる!」

「ええ! 今更そんな事を言われても!」

色々あったが、何とか目的の駅までやってくる。

もうちよつと目印が分かり易くてもいいと思うんだ。間違えた電車に乗った時、アーニヤなんか半泣きだったし。

「ちよつと!？ なんか向こうの建物が爆発したんだけどお!？」

「うわああ!？ 何々!？ ロボット!？ 何でロボットが暴走してるのおお!？」

本当に色々あった。

この学校が何を研究しているのか知らないけど、あれは明らかにオーバーテクノロジーなんじゃないのかな？

だって、人を乗せて空飛ぶんだよ? 自動歩行どころか爆走するロボットがいるんだよ?

ぜいぜい、と荒い息を吐き出しながらも僕とアーニヤは待ち合わせの場所へとたどり着く事が出来た。

ここが待ち合わせの場所で合ってる筈。

「ようやく着いたのか。お疲れさん」

僕とアーニヤがやっとベンチに腰を下ろした時に、カモさんがそんな声をかけてきた。

「ほれ、ジュースだ」

そして、僕とアーニヤに紙パックのジュースを投げしてくれたので、礼を言ってお受けとる。

かぼつと、紙パックを開けて喉に流し込む。

うん、マズイ。

何のジュースかと思ってパックを見ると、『ご飯ジュース』と書かれている。

どう見ても、ゲテモノだ。

「うええ、何よこれ」

アーニヤもパックを開けて飲んだのか、げえつと不味そうに舌を出す。

ちなみに、アーニヤのパックには『大根絞り141%』と書いてあった。はみ出した41%については触れないでおこう。

まあ、名前を聞いただけでも不味そうなのがすぐに分かる。

「どうしたんですか、これ？」

ゴホゴホと喉を鳴らしながら、カモさんに尋ねると、近くにあって

た自動販売機を指差す。

そこには『THEポークビッツジュース』とか『味覚破壊魔王』とか『飲むなよ！ 絶対、飲むなよ！』とかいう個性的過ぎるジュースのラインナップがそろっていた。

「というか、まともなジュースがないな！」

まあ、折角買ってもらったジュースだし、ちびちびと飲み始める。このジュースの性質の悪い所は、不味い事は不味いのだが、飲めない程の不味さじゃないという微妙な味をしている所だろう。

隣をみると、アーニヤも仕方なしにチビチビと飲み始めていた。

「とりあえず、迎えの人が来るまでここで待っておこうか？ もう動く気は起きないしね」

疲れた顔で僕がそう言うと、アーニヤは二つ返事でOKをしてくれた。

「そうか。二人がここでじっとしているというなら、俺はちょっとこの辺りを散歩でもしてくる」

カモさんはそれだけ言うと、ふらっと消えてしまった。

相変わらず、自由奔放な人だ。いや、自由奔放な小動物だ。

僕とアーニヤはカモさんの行動はいつもの事なので、目線だけでカモさんを見送りながら、不味いジュースをちびちびと飲む作業を黙々と行っていた。

僕達が来たタイミングはどうやら長期休みであつたらしく、平日

の昼間でも生徒があちこちを歩き回っていた。  
元々、学校が始まるタイミングでこっちに来いと言われていたけれど、流石にそれは色々マズイという事で早めにこっちに来させて貰ったのだ。

何と言うか、魔法使いの人はあんまり物事を考えてないんじゃないかと思う。

それから、10分ぐらい経っただろうか。  
ぼけっとベンチで座っている俺達の前に、いつの間にか1人の女の子が近づいてきた。

「おや、こんな所で何しているんだ？」

その声にふと見上げると、そこには黒い髪を腰の辺りまで伸びた中校生ぐらいの女の子がこちらを見下ろしていた。  
一体いつの間に近付いてきたのか、分からなかった。何と言うか、異常な程存在感のない、そんな女性であった。

「始めてみる顔だが、どうかしたのか？ 迷子かな？」

優しく微笑んで、そう尋ねてくる女の子。

親切でそう言ってくれる女の子に、俺は慌てて首を振って言う。

「いえ、ちょっと人と待ち合わせをしてるんですよ」

「ほう、人と待ち合わせか。こんな時期に誰を待ってるのかな？」

「ちょっとした知り合いですよ」

僕の答えに女の方はふむふむと頷き、小さく笑みを浮かべる。

「そうか。それなら、いいんだ。これから頑張るんだね」

女の方はそれだけ言うと、また微笑んでそう言うとクルリと背を向けて帰っていく。

何となく、あの人の笑みは儚そうに見えた。

うん、少なくとも隣でぼけーとした表情でジュースを啜っているアーニヤの顔よりは儚げだよ。うん。

それにしても、態々話しかけてくれるなんて、都会は冷たいって聞いてたのは嘘なのかな？

「いやー、待たせたね。ネギくん！アーニヤくん！」

HAHAHAHAと洋風な笑い声を上げながら、眼鏡をつけたスーツのおっさんが僕とアーニヤの方へと近づいてきた。

あのおっさんの名前はタカミチ・T・高畑。

なんちゃって魔法学校にも関係している人らしく、時々僕とも会う事があった。こっちの学校で教師をしているらしい。

「もう！本当に待ったわよ！いつまで待たせるのよ！」

タカミチの言葉に、アーニヤが頬をぷくつと膨らませてそう文句を言う。そんなアーニヤにタカミチは苦笑を浮かべながらも謝る。

「いやいや、ちょっとこっちの方で手間取っちゃってね」

「まあ、いいよ。タカミチ。それよりも、学園長さんの所に行くんだろ？」

タカミチとは、向こうがタメ口でいいと言っているので、敬語を使わずに喋っている。

ちなみに、このタカミチは僕が知ってる中でもトップクラスのファンタジーの住人でH A H A H Aと笑いながら、滝を割ったりしていた。

うん、完璧にファンタジーの世界の住人だ。

「そうだね。まずは疲れただろうし、早く学園長に挨拶しに行こうか」

タカミチの言葉に、僕とアーニヤは頷きタカミチに連れられ学園の中心へと歩いて行く。

さてさて、学園長はどんな人なんだろうか？

と思っていたけど、まさかの人外とは。

「ふおふおふお、よく来てくれたのう」



異常に長い頭と髭を蓄えているぬらりひょんつばい好々爺が、温和な笑みを浮かべている。これはどう考えても人間の頭の構造じゃないな。

なんかアーニヤがぬらりひょんの顔を見て、驚きの表情を浮かべている。

そんなアーニヤに僕は小さく苦笑を浮かべながら、ぬらりひょんに向って頭を下げる。

「いえいえ、こちらとしても突然のお願いなのに、こうして教師として採用していただきありがとうございます」

ぬらりひょんと言えども、この学園の学園長。礼儀を尽くさなければならぬ。

「ふおおおお、そんなに固くならなくてもよい。わしはこの学園の学園長をやっている近衛 近右衛門じゃ。未永くよろしくのう」

きらりと目を光らせながら、まるで値踏みをするような視線を向けてくる。

恐ろしいのは、そんな視線を向けながらも温和な笑顔を崩していない所だろう。

さすが、何百年も生きた妖怪だ。

そうそう、僕とアーニヤは特に亜人とか妖怪とかに偏見を持っていない。そもそも、カモさんという超変人が近くにいる時点で、そんな偏見は無くなるだろう。

小動物に敬語で話す僕。傍から見ればシユールな光景だろうが、僕としては本当に尊敬しているので、問題はない。

「ふむ、それでいきなりなんじゃが、まずは教師としての話じゃ」

ゴホンと咳払いをして、真剣な顔で僕の方を見てくる爺さん。そんな爺さんに、僕も出来るだけ真剣な表情を浮かべながら爺さんの方を見る。

「はい、僕はどのような仕事をすればよいのでしょうか？」

結構な重労働を働く覚悟はしておく。

何週間か前にいきなり教師にさせてくれと言って、経験もない子供を教師にさせるのだ。

勉強する為にも、それなりの仕事は必要だろう。

ごくりと喉を鳴らし、爺さんに先程の言葉の先を促す。

そんな僕に、爺さんはもう一度、ゴホンと咳払いをすると言った。

「わしとしては中学の2年A組を見て欲しいと思っておる」

「……は？」

爺さんの言葉に僕は思わず、そんな声を洩らしてしまった。

そして、即効で電源を入れ直して爺さんに向き直り言う。

「あの、聞き間違いかと思えますので、聞き返しますが、僕はどのような仕事をすればよいのでしょうか？」

聞き間違いの筈だ。面倒を見ると言う事は、担任とかそんな仕事

だろう。

「こんな子供に、そんな仕事を押し付けるなんてどう考えてもありえない。」

僕はそんな気持ちで、爺さんの顔を見るが、爺さんは蓄えた髭をもふもふしながら同じ様な口調でいう。

「むふ、だから女子中学の2年A組を見て欲しい。本当の担任はそこにいるタカミチ君なんじやが、色々忙しくてのう。じゃから、まだ教員として正式に採用はしないが試験的に2年A組の担任をじやな」

「いやいやいや、試験的過ぎるだろ！」

誰が10才の義務教育なら小学校を卒業していない子供を中学生の教師。しかも、担任にする何て正気の沙汰ではない。

もしかして……、この爺さんも、なんちゃって魔法学校の校長の様にボケたのだろうか？ いやー、なんちゃって魔法学校に決まった時の騒ぎは凄かった。

個人的には凄く気に入ってるんだがな。何かバカっぽくて、魔法の根本を表してる感じがするし。

「どうしたのじゃ、ネギ君？ ネギ・スプリングフィールド君？」

軽く現実逃避をしている僕に、学園長の声が強制的に俺を現実へと戻してくる。

「……あの、申し訳ありませんが今回のお話は辞退させていただきます」

「ふお!？」

僕の当然の言葉に驚いたように変な声を上げる爺さん。やはり、ボケているのだろうか？

「いえ、ですから、僕はまだ10歳にも満たない子供です。教師をしたいという思いもやる気もあります。しかし、これは教師である僕ではなく、教えられる生徒の方に大きな問題があると思います。

僕のような子供に、何かを教えられるという行為は恐らく生徒にとってプライドを刺激される行動なのですから。ですから、残念ながら今回の話は辞退させていただきたく思います」

自分の想いを素直に、ボケ老人に話す。

ここまで言うて理解できないなら、校長と同じ系列の病院に行く事をお勧めする。あそこの精神科は優秀らしい。

「……ふむ、なるほどのう」

僕の言葉に爺さんは髭をもふもふしながら、頷く。そして言った。

「お主が教えるのは、基本的には英語だけじゃ。

後はお主が教師として行動出来るかどうか見るために、HRを担当するだけ。これだけならば、生徒は理解してくれると思うがのう?」

どつやら、この爺さんは引かないつもりらしい。

やっぱりボケているのだろうか？そして、そっちがその気なら、こっちにだって考えはある。

「しかし、担任をするという事は、生徒達に最も近い位置になるという事です。この年頃の生徒は大人に悩みを聞いてもらう事で解決する事が多い筈です。」

残念ながら、僕にはそれほど的人生経験はありません。生徒の為にも、僕はその仕事をお引き受けする事はできません」

「何を言うか。」

教師というのは生徒と悩んでなんぼのものじゃ。一方的に教師がこれが答えだと提示するのは、教師としては愚の骨頂じゃよ。お主はただ生徒と共に、学び悩めばよい。」

そうする事で、よい教師として成長出来るだろう」

「成長するのはよい事ですが、成長する過程でまだ未熟な時に生徒を傷つけてしまう事もあるかもしれませぬ。そうなってしまうえば、

『まだ未熟だった』なんていう言い訳はできません」

「教師だって人間じゃ。ベテランの教師だって失敗する事はある。失敗を恐れていては何も変わらんぞ?」

「僕自身の失敗は構いません。どんどんと糧にしてみせます。」

でも、そこに生徒を巻き込むのは筋違いなのではありませんか?」

「教師とは生徒と共に成長するものじゃ。」

教師として生きて行く以上、どの様な形でも生徒を巻き込んでしまふ。それを恐れていては教鞭は振るえんぞ?」

「それは色々な教師としての過程、教育実習などを乗り越えた教師がするモノだと思います。僕は10才未満です。そのような責任のある立場に立つ事はできません」

「責任がある立場という程のモノではない。元担任のタカミチ君も、副担任と形で教室に残ってくれる。何かあれば、彼に相談すればいい。彼が責任を取ってくれるし、わしも出来る限り力をかそう」

「なら、その力を今貸していただきたい。

僕は少なくとも教師として活動した事がほとんどないのです。担任としての心構えなども知りません。ですので、担任として活動する事はできません」

「心構えなど、持ちようじゃ。経験だつて、やって初めて分かる事の方が多い。何事も理屈ではなく経験なんじゃよ」

息もつかせぬ激しい攻防。どちらかというと押され気味の僕。

アーニヤなんか目を丸くして僕と爺さんの両方をポカンとした表情で見っていた。うん、ごめんね。何かこんな喧嘩腰になっちゃって

取り合えず、ここで一度言葉を区切る。

仕方ない。ここは妥協案を出すしかない。

「僕としては担任を変わる事は納得できません。そして、中学生を教える事も納得できません。僕としては小学生の授業、更にいうなら僕より年下の子供を教えたいのですが？」

「あいにく、その枠はいつぱいでのう。ねじ込めるとしたら、タカミチ君の所だけなんじゃよ」

髭をもふもふしながら残念そうに言う爺さん。だが、教職が用意出来ないからってそんな場所にねじ込む事自体ありえないだろう。

子供だと思って舐めるんじゃないぞ！

子供っぽいと思いながらも、じつと爺さんを睨むように見る俺しかし、爺さんの面の皮はあの後頭部程厚いのか、涼しい顔でもふもふしてやがる。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

ちよつと息を切らしている僕に、ずっと黙っていたタカミチが仲裁に入った。

俺と爺さんは、一端喋るのを止め、タカミチへと視線を向ける。

「確かに、ネギ君の言う事は最もですよ、学園長。

やはり、子供のネギ君にいきなりこんな仕事を与えるのは無理です」

ちらりと僕を確認して学園長にそう言うタカミチ。

うん、そうだ！ いけいけ、タカミチー！

「むう！ 無理って何よ！ ネギはそれぐらいお茶の子さいさいで出来ちゃうんだから！」

そんなタカミチを威嚇するように歯をむき出しにして怒るアーニヤ。気持ちは嬉しいけど、今は黙ってて欲しい。

いや、可愛いんだけどね。

僕がただ黙って成り行きを見守っている事を確認すると、タカミチは少し残念そうな笑みを浮かべた後、爺さんに向き直って言う。

「ですので、ここは一度僕が授業をやっている所を隣で見学するという形をしばらく取る事をお勧めします。そうすれば、ネギ君のい

う経験だつてそれなりに手に入るでしょうし、何より教師という職を肌で感じれますから」

お互いの妥協点的な場所を提案してくるタカミチ。  
確かに、それだけ聞くと悪くない。問題は見学が終了した後なんだが。

ちらりとタカミチに視線を向けると、タカミチは任しておいてと言いたげなウインクを送ってくる。おっさんのウインクは気持ち悪い。頼りになるけどね。

「正式な教職は、この見学が終わった後、改めて双方の意見をまとめてと言う形でいいのではないでしょうか？」

にこりと人の良さそうな笑みを浮かべながら、タカミチはそう締めくくった。

そんなタカミチの言葉に、爺さんも僕も少し考えた後に頷く。

「……ふむ、確かにそうじゃのう」

「僕としては問題ありません」

お互い納得して、小さく笑みを浮かべる。

まあ、僕の笑みは腹黒い笑みだと自覚してるけどね。ただ、この爺さんには負けるけど。

「ふむ、それでアーニヤ君のクラスなのじゃが、先ほど話題に出た2年A組に転入という形でよいか？」

「はい、大丈夫です！」



何の問題もなく元気な笑みを浮かべて頷くアーニヤ。

この爺さん、さつきから2年A組を押しまくってるけど、何かあるのか？

「ふむ、詳しい事はまた後ほどでよいな。

とりあえず、まずはお主たちの寝床の話じゃ」

爺さんがそう言った時、丁度コンコンというノックの音が聞こえた。

すると、爺さんは俺達がいるのにも関わらず『入りなさい』という言葉をかける

「……失礼します」

入ってきたのは4人の女性だった。

ツインテールの勝気な感じの女性と、黒髪でのほほんとした感じの女性、おでこが広い黒髪で何故か刀を持つてる女性に、褐色でバイオリンケースを持った一番年上っぽい女性。

年齢順的に褐色のバイオリニスト>黒髪のほほんの人>おでこ剣士 勝気ツインテール>越えられない壁>アーニヤって感じかな？  
落ち着き度合いから見ても。

何となくそんなランク付けをしていると、黒髪のほほんの人が学園長に向って尋ねた。

「おじいちゃん、用事ってなんなん？」

そんな黒髪のほほんの人に首を傾げられ、爺さんはニコニコと最

上級の笑みを浮かべながら言った。

「ふむ、ここにいる二人、アーニヤ君とネギ君と言うのだが、お主たち二人の部屋にしばらく泊めてもらいたいんじゃないよ」

「……はあ？」

奇しくも勝気ツインテールさんと声が被ってしまった。

「あの学園長。何を言ってるのでしょうか？」

「そもそも、この人たちは誰なのでしょうか？」

勝気ツインテールさんよりも早めにフリーズを解除した僕は、冷や汗を流しながら首を傾げる。この爺さんやっぱりボケたのかもしれない。

そんな僕の視線に、爺さんはにこにここと笑いながら答える。

「ふむ、彼女たちは2年A組の生徒だな。」

お互いのコミュニケーションの向上のためにも、彼女たちが住んでいる寮で、彼女たちとルームシェアをして貰いたいと考えておる。

ちなみに、そちらの龍宮君と桜咲君の部屋をアーニヤ君が使い、そちらの木乃香とアスナ君の部屋をネギ君に使ってもらおう予定じゃ」

「お断りします」

打てば響くといったタイミングで僕は断った。

「……ふむ、何故じゃ？」

理由が分からないとでも言いたげに首を傾げる爺さんに、僕は浮かびあがってこようとすする青筋を隠しながら出来るだけ理性的な言葉で反論する。

「そもそも、僕は教師としてこの場所に来ました」「ええっ、教師!?!」。はい、教師としてです。ですので、過度な生徒とのスキンシップは控えるべきです。「教師ってほんまなん?」「ええ、本当です。何故なら、必要以上にその人を特別視する可能性もありますし、依怙鼻屑に繋がる可能性もあります」

「しかし、ネギ君ならそんな事ならんと思うのじゃがのう」

髭をもふもふしながら、好々爺の笑みを浮かべる爺さん。あの無駄にながい後頭部を折ってやりたい。

「それに、僕はまだ10才未満です」「ええっ、年下!?!」。はい、年下です。9歳です。

ですけど、それなりに異性という存在は理解しているつもりです。「何で年下なのに教師やってんのよ!」。僕が聞きたいです。異性と同居するというのは学校としても問題があるのでは?」

ちなみに発言するたび、驚きの声をあげるのは木乃香と呼ばれた黒髪のほんの人とアスナと呼ばれた勝気ツインテールの人だ。声には出していないが、あまりいい印象を持ってなさそうな表情を浮かべているのが桜咲と呼ばれたおでこ剣士である。

そして、褐色の人は『ふふふ』と言った笑みを浮かべている。

「木乃香の保護者はワシじゃし、アスナ君の保護者はそこにいるタカミチ君じゃ。わしらが問題ないとしている以上、問題はないが?」

「僕自身にあると言ってるんです。これでも僕は男ですよ？ それに発育も同年代よりいいから、中学生ぐらいには見えます。対外的にも問題でしょう」

「保護者が許可している以上、問題はない。それに、この部屋がダメならもう他に部屋が開いておらん。嫌なら野宿をして貰うしかないのじゃが」

「うわー、この人脅してきたよ。」

僕はとんでもない切り札を出してきた爺さんに小さくため息を吐き出しながら言った。

「そっちがその気なら、こっちも切り札をだそう。」

向こうの切り札は『野宿』。では、僕は『羞恥心』を捨て、切り札を発動してやる。

「言いたくありませんが、僕は男ですし、これから先第二次性徴というモノがあります。そして、彼女たちにも第二次性徴というモノがあります。」

「言いたい事は分かりますよね？」

これから僕はより男らしく、彼女たちはより女らしく成長する訳です。その中では生理的な悩みがある筈です。そんな中で、家族でない異性という異分子がいては、僕たちの発育によくありません。

それに第二次性徴を通して思春期というモノもありますし、あまり近くに家族でない異性というモノを置くのは学校としてよいとは言えません」

「こんな僕だが第二次性徴について話すは恥ずかしいんですよ？」

「これ以上、この話が進むようなら具体的にどのような問題が起くるか説明してしまいますよ？ いいんですか？ 僕泣きますよ？」

ほら、黒髪のほんさんはちょっと顔赤くしてるし、おでこ剣士さんなんてそれ以上に顔が真っ赤じゃないですか。

まあ、勝気ツインテールさんはあまり頭がよろしくないのか首を傾げてますし、褐色さんは変わりなく『ふふふ』な笑みを浮かべてますけどね。

「……あー、もう分かったわい。

なら、部屋はどうするつもりじゃ？ 野宿は嫌じゃろ？」

「そうですね、彼女たちの部屋に住むなら野宿を選びますが、それでも野宿よりも普通の部屋に住みたいですからね。ただ当然の事ながら、僕はこの辺りにコネも何もありませんからね」

爺さんと妥協点を探り合いながら喋る俺に、再びタカミチが声を上げる。

「なら、僕の家はどうですか？ 僕は一人で住んでますから、空き部屋がありますし」

「……いや、空き部屋あんじゃねーか。

なんだよ、さっきまでの空き部屋ないから野宿ねのくだりは。

恨みがましい目で学園長を睨むが、学園長は涼しい顔で『そうじやの、そこがあつたか！』的な笑みを浮かべている。

「ふむ、ならばネギ君はタカミチ君の部屋に住むのでよいな？」

「ええ。ですが、あくまで仮の部屋にしてください。

一人暮らし出来る部屋があればすぐに教えてくださいね」

ニッコリと笑みを浮かべる僕に、爺さんは当然じゃと頷く。  
あの白々しい顔にこの拳を突き刺してやりたい衝動に駆られるな。

まあ、その後は今後の事について少し話し合った後、解散といった感じだった。

給料の明細などは後で爺さんと話し合う事になり、仕事については家に帰ってタカミチが教えてくれるらしい。

アーニヤは褐色の人と何やら仲良さげに話している。その後ろでアーニヤの事を見定めるかのような難しい表情でおでこ剣士さんが見ている。というか、睨んでいる。

黒髪のほほんさんは勝気ツインテールさんと一緒に帰り、勝気ツインテールさんは無駄に緊張した声でタカミチと話していた。  
あれはどう見てもタカミチに気があるんだな。

年も離れてるし、憧れに近いのかもしれないけどねー。

とりあえず、今日は疲れたからゆっくりとお風呂に入って疲れを取りたいです。

え？ 風呂は苦手じゃないかって？

子供じゃないんだから、そんな筈ないですよ。

SIDE：学園長

ネギ君たちが帰り、ワシはようやく一安心する事が出来た。

子どもといえども、あそこまでしっかりと話せるとは思えなかった。

柄にもなくワシもつい暑くなってしまったわい。

それよりも、問題なのはネギ君、そしてアーニヤ君に認識阻害の魔法が効いていない事じゃな。

この学園はかなり強い認識阻害の魔法が掛かっている。並みの魔法使いどころか、凄腕魔法使いでも気づかずにかかってしまう程の、薄くて濃い、矛盾したような重度の認識阻害の魔法が。

この魔法があるから、今回の交渉もある程度無茶をしても平気だと思っていた。

『まあ、この学園だから』とか『日本ってそんな国なんだー』とかそんな感じで捉えてもらい、簡単に説得出来たはずなんじゃが。

「特別に認識阻害が効きにくい体質なのじゃろうか？」

資料にはそんな事書いてなかったがな。

ワシは首を傾げながらもこれから先の事について考える。

ネギ君は思ったよりもしっかりした人物じゃった。それに、発育もいい。

少しじゃが、エヴァンジェリンの奴を牽制しておく必要はあるか  
もしれんのう。

そのためには ……、

夜は更けていく。

この学園最強の魔法使いの悪だくみはまだ終わらない。



会話はドッジボールだと思う。しかも砲丸を用いた危険な競技。(後書き)

今回はこの作品においてやりたかった事の一つが出来ました。

そのやりたかった事というのが、この『常識人ネギVS無理難題を言う学園長』という構図です。

魔法使いの無茶苦茶な無理難題を理性的に反論するネギ。

つい、これが書きたくて話がかなり長くなってしまいました。

まあ、学園長も老獪なのでネギ君を言いくるめたりもしてるんですけどねー。

そのうち猫型ロボットが生まれても不思議でないレベル。(前書き)

ついに30話目に入。

そういえば、最近ネギばかり目立ってますが、この作品の主人公はカモさんですので、悪しからず。

そのうち猫型ロボットが生まれても不思議でないレベル。

やあ、カモだ。

ネギ少年と別れ、煙で人間の姿に変身し街をぶらついているカモだ。オコジヨの姿では街の人間に話を聞く事も出来ないしな。

さて、色々と見て回ったが、流石にこの学園は西洋魔術師の東洋進出の拠点となっているだけはあるというモノだ。魔法的にも物理的にもそれなりに強い造りにはなっているし、最低5年以上は籠城出来そうな蓄えと装備もある。

俺の印象としては、『1つの国』といった感じだ。

まるでこの都市を拠点に世界と戦争でもしようとしているんじゃないかと疑いたくなるような強固な造り。魔法陣もあちこちに隠されている様で、例えば電灯の配置を利用した光の魔法陣なんていう魔法世界でもお目にかかれない高等なモノがこれでもかと詰め込まれている。

それにこの街の自治権も恐らくこの街が持っているだろう。警察などの組織は見かけた事がなく、その代わりに教師が警邏を行っている。商店街の方も見回ってみたが、通常の商品もあるがこの学園

で創られた専門の商品が『麻帆良ブランド』として販売されている。それらの事から考えても、この都市の外とは、あまり交流がない様で一種の閉鎖空間の様なイメージがある。

そして、何より特筆するべきは、やはりこの認識阻害魔法だろう。

誰にも気づかれないように薄く、しかし腕の立つ人間にも効くように、物凄く高レベルの認識阻害魔法がこの学園すべてを包み込んでいる。

これはもはや認識阻害魔法というよりも、洗脳魔法に近い。

認識阻害の内容は『違和感のない世界』と言ったところか。

例えば魔法が見られてとしても、まあこの学園だしなと思わせる魔法。

オーバーテクノロジーがあっても、そんなもんだと思わせる魔法。

恐らくこの学園の中では人が一人いなくなっても誰も騒ぎ立てないだろうし、もしかしたら気づかないかもしれない。

魔法で闘っても、後で『映画の撮影だったんですよ』というアナウンスを流すだけで、『なんだー、そうだったのか』と納得させてしまうような程の強力な認識阻害魔法。

つまり、この学園の中で一般人の目があるとは考えない方がいいという事だ。

ちなみに、ネギ少年だがどうやら認識障害魔法に気がついていたようだった。

まあ、気がつくといつても『何かおかしい』程度のモノだったが、取り合えず監視対象が洗脳されても面倒くさいので煙を使ってレジストしておいた。

「……しかし、えげつない真似をするな」

仮にも教育機関でこんな事をするとは、魔法使いの連中は何を考えているのだろうか？

俺は小さく肩を竦めながらそう呟いてしまう。

『まあ、立派な魔法使いのする事なんて基本そんな感じですしなー』

俺の呟きに、どこからかそんな声が聞こえてきた。

声の主は当然、月詠。しかし、通常の月詠の声ではなくこの声は小学4年生で声が幼くなった月詠の声だ。

月詠には俺達よりも数日だけ先に、この学園に潜入し、ここで小學生をして貰っている。

戸籍とかは『桜』の力を使ってごり押しで通した。ちなみに『月詠』だけでは、名前としてアレなので姓をつけようとしたのだが、月詠曰く『ウチは姓を捨てました。だから、名乗るつもりはありまへんえ』との事。

仕方がないので『月野 詠子』という完全偽名を名乗って貰った。月詠的に姓だけつけるのはダメだが完全偽名ならオツケーらしい。

微妙な基準だ。

まあ、そんな訳で月野 詠子はこの学園で小学生をしているのだが、潜入して初っ端に会ったりする訳にもいかないので、月詠には少し離れた場所で念話を通して話して貰っている。

「しかし、目的が分からないな。確かにこの認識障害魔法の為に魔法使いの連中は動き易くなった。だが、それにしてもやり過ぎだ。労力と結果が結び付かない」

これだけ強力で高等な魔法を使うには、かなりの魔力と技術がいる。しかし、それらの労力を払った結果、得られるのが動き易さだけ。

俺から見ると、あまりにもリターンが少ない。

そんな俺の言葉に、月詠は小さく苦笑しながらも、この数日で彼女が調べたと思われる情報を教えてくれる。

『それですけどー、労力と言っても基本的な魔力はあの世界樹と呼ばれてるでっかい樹から転用してるから、問題ないみたいですよー』

月詠の言葉に俺は顔を上げる。

すると街から少し離れた場所に巨大な樹が見る事が出来た。

この学園の中にいる限り、顔を上げれば見える巨大な樹『世界樹』。内包する魔力も凄まじいモノで、離れていてもその存在の大きさはビリビリと俺を刺激する。

「それでも同じ事だつて。これだけの魔力を認識障害魔法に転用す

るなんて何考えてんだか。もつとマシな使い方は出来ないモノかね。俺なら自分のエネルギーに転換する方法を探すね。この魔力なら、エネルギー量的に無理と言われていた時間転移すら出来そうなのに」

『時間転移ですかー。ええですなー。過去の英雄と戦ってみたいですよー』

「止めとけ。お前が行ったとしても過去を変えるだけだしな」

『変えたらあかんのですかー？』

「別にいいが面倒なだけだぞ。自分が歴史上の人物に祭り上げられるんだからな。最悪、英雄になるぞ？」

『あー、それは嫌ですなー』

俺は再び肩を竦めながらそれだけ言うと、再び街の中を散策する。

目的は、この街の調査。

ネギ少年について行き、この学園のトップの顔を直に見るのもよかったのだが、どんな老獪な人間かも分からないからな。先に情報を集める事にしたのだ。

そして、調査の中でも一番気になっているのが、この学園のオーバートテクノロジーに関してだ。

どう見てもこの学園の技術と、それ以外の技術ではかけ離れ過ぎている。

この技術に追いついている組織と言えば恐らくは小動物組織『桜』だけだろう。

桜に関しても俺が助言をして、ようやくあれだけの技術向上が図れたんだ。

ならば、この学園も恐らく何か技術が向上した原因がある筈に違いない。まさか、独自でこれだけの技術を外に知られずに創った訳でもないだろう。

下手したら俺と同じ様に違う世界からの記憶を受け継いだ奴がいるかもしれない。

もしくは、未来から来た未来人とか？ 時間移動が理論的に可能である以上、無い話ではないからな。

色々と思いを巡らしながら、街の中を徘徊する。

パツと見ただけでは分からないが、自動販売機に電車、それにバス。多種多様の機械がオーバーテクノロジーを使って創られている。

この街の住人は、その機械をごく当然のように使用している。

「……つち、いい気分じゃないな」

沢山の現代に合わない機械の数々に囲まれた学園に、俺は自分でも気付かないうちにそんな言葉を洩らしていた。

これは魔法の研究と同時に科学関係についての研究もそろそろ並行して行うべきだな。基本的には『桜』の奴らに任せてるんだが。

俺は煙草を啜えながらそう考える。

この世界でも最も脅威となるモノは魔法だと考えていたが、どうやら科学も魔法と同等の脅威を持ちつつあるようだ。



前世は文明が進み過ぎた世界だったので、ある程度の機械の知識はあるがこの世界の文明発展の仕方によっては理解できない機械が出てくるかもしれねーしな。

何せ、魔法がある世界だ。魔法機械的なモノが出てきてもおかしくない。

そんな考え事をしていた所為だろうか、気がつけば人通りの少ない木々に囲まれた公園にやって来ていた。

自然に囲まれた公園の周りを、ざっと観察してみたが特に変わった様子はない。

「ふむ、街の方に戻るかな」

この辺りの調査は後回しにしようと考え、踵を返す。その時、俺はふと空を見上げた。

ん？ 何か空から来るな。

俺は慌てる事なく煙草の煙を吐き出すと、煙は俺の全身を包み、次の瞬間には煙が晴れ俺の姿はどこにもなくなる。

まあ、なかったと言っても転移して消えた訳ではなく光学迷彩な訳だが。温度感知やその他の感知も聞かない、完全無欠の光学迷彩だけだな。

姿を消した俺は近くにあった木の上に登り、様子を見る事にする。

飛んできている奴は俺の事を感知してやってきたのか、それとも元からここに用があったのか。

まあ、俺の事を感知している奴がいる可能性は低い以上、ここに用があったのだろうが、空を飛んでいるのだから魔法関係者だろう。

もしかしたら、何かここに隠されているのかも知れないな。

そんな事を考えながら、待っていると、数秒も経たない間に飛んできていた物体は俺のいる木の近くの空いているスペースにゴゴゴゴゴッと着陸する。

着陸の影響で、地面の砂埃が舞い上がり、俺が姿を確認する前に視界を塞ぐ。

煙たくなつた周囲に俺は少し眉をひそめながらも、じっと砂埃が晴れるのを待つ。

すると、すぐに五月蠅かつたジェット音は静まり、ゆっくりと砂埃が晴れて行き、段々と着陸してきたモノの姿が見え始める。

そして、

「なっ!?!」

その姿を見て、俺は驚きを隠せずに啞えていた煙草を落としてしまつた。

着陸してきたモノは、人間の姿をしており、人間の女性の服を着ていた。そして、驚くべき事に頭部に至っては、耳以外ほぼ完ぺきな造りであった。

しかし、どれだけ完璧に見えても、その姿は人間ではなかった。

関節部分は雑に繋ぎあわされており、人間というよりもフィギュ

アに近い。それに特徴的なのは本来人間ならば耳がある筈の位置につけられた長い機械。

その姿は、どう見てもロボットだった。

しかも完全自立型で尚且つ人の女性の型をしたロボット。この世界では存在しない筈のロボットだった。

何で、あんなのがこの学園に!?

落ちた煙草を拾う事も忘れて驚愕する俺。

しかし、俺の驚きなど知らずに、ジェットエンジンで降りてきたロボットはいくつかある大き目のスーパールの袋の一つから缶詰を取り出すと、器用に開けた。そして、その中身を地面に置いた皿の上に盛っていく。

すると、周りから猫がにやーにやーと慣れた様子で近づいてきた。

猫に餌をやっているのか?

でも、何故? 猫に餌をやっても、このロボットの開発者は何の得もしない様に思えるが。

俺は首を捻りながらも一挙手一投足を逃さずに、ロボットの動きを観察する。

集まってきた猫は10匹を超え、あのロボットはどこか嬉しそうな笑みを浮かべながら、餌を食べている猫を眺め、時折その手で撫でてやっていた。

俺はその姿を見て、更に愕然とした。

……あのロボットは自律している。

自らの意思で猫の餌を買い、自らの意思で何の対価も求めずただ猫の為に餌をやる。だから、あのロボットは微笑むのだ。

まさか、餌を買って餌をやって微笑むプログラムなんていうものが仕組みられている訳でもないだろう。いや、俺としてはそっちの方がありがたかったのだが。

あの存在はオーバーテクノロジーどころの話ではない。あれは禁忌に近い技術だ。

もしも、あんなロボットがこの学園に大量にいたらマズイ。もしも、そうならば、既に立派な魔法使いの連中に、これだけのオーバーテクノロジーが渡ってしまったと考えると考えなければならぬ。これはネギ少年の監視など言っていられる場合ではない。

早急に、何らかの対策を立てなければならない。

あんなモノが大量にいるのならば、下手すればこの世界は滅びてしまう。いや、あのロボットに抵抗できる手段が一般的に浸透していない以上、攻められれば滅びる可能性の方が高い。

どれだけ綺麗事を並べたとしても、どれだけ機械が人間と同じ様に思考しようとしても機械は機械でしかない。人間がいくらでも作り出せるモノである以上、機械に倫理観というモノが適応される事はない。

つまり、それは立派な魔法使いは死んでも構わない強大な力を持った兵器を、いくらでも作り出せるという事に繋がるのだ。

もしも、大量生産の過程に入ってしまったてはかなりヤバい。

唐突な出来事に頭が混乱する。そして、混乱すると同時に急速に頭は冷え、目まぐるしく回転し始める。

とりあえず、現状を把握しなければならぬ。情報が少なすぎる。こんな少ない情報で機械を相手取る事も難しい。

仮に戦闘になった時、中に核融合炉がありましたー、テヘ 何て事が起きたら目も当てられない。

しかし、現状の把握をするにはどうする？

このまま、あのロボットの後を尾行するか？  
それともあえて、ここで会話してみるか？

尾行しても相手は空を飛ぶ以上、バレない可能性の方が低い。さすがの俺も、空を飛びながらロボットの解析眼から逃れつつも見失うことなく後をつけるのは難しい。

解析眼には熱感知システムや赤外線、五感以外の第六感的なものも備わっている可能性があるのだ。風の僅かな乱れで、俺の姿を感じられては意味がない。

同じ理由で、この場にながらも煙を操り後をつけるという案もありえない。

ならば、会話だが、それも問題あるかもしれない。下手すれば、

俺のこの人間の身体が偽物だとバレる可能性だつてある。

しばらく、悩んだ後、俺は結局会話をしてみる事にする。

下手に追跡をしてバレるよりも、遥かにバレ難いという理由からだ。

相手の装備は熱感知システムや赤外線などの筈。魔力感知機能もあるかもしれないが、俺の隠ぺいスキルを上回る感知システムがあるとは思えない。

仮にバレたとしても、それだけの装備が備わったロボットがいるという情報が手に入るのだ。

そうと決まれば、俺は一度ゆっくりとその場から離れ、人目のつかない場所で光学迷彩を解除すると、何食わぬ顔で公園へと歩いて行く。

今の姿は眼鏡をかけたちよつとダンディーで、知的な匂いを醸し出す優しいオジ様。第一印象で警戒されづらく、尚且つそれなりに高度な知識を持っていても可笑しくない姿なのだ。

俺は煙草を啜えながら、ゆっくりと公園の中に入り、猫に餌をやっているロボットに視線を向けて、少し大袈裟に驚いてみせた。

「おや？ 先客がいた様だね」

あくまでも紳士的に、そして優しげに声をかけた声に、猫に餌をやる事に集中していたロボットはよくやく俺の存在に気づき、顔を上げた。

「あなたは？」

俺の言葉に、ロボットは視線を上げて俺を見つめるとそう尋ねた。どうやら、見知らぬ人間とも会話が出来ようだな。

それにしても名前か。見た目は日本人だから日本人らしい名前がいろいろある。

「おや、これは失礼。私は歩部あゆべと言います。可愛いお嬢さん」

ちなみに名前は『守まも』であり、姓名合わせると『歩部あゆべ 守まも』と何となくアルベール・カモミールに語呂が似ている名前になるので選んだ。

「か、可愛い？」

気障きざうだったらしい俺の言葉に、ロボットは少し頬を赤らめながらも、言葉を反芻するようにそう呟いた。

ふむ、人間との会話に慣れていないのか、それとも単純にお世辞に慣れていないのか。どちらにしても、ロボットのな利益優先の思考ではなく人間の感情優先の思考に近い気がするな。

「ええ、可愛いですよ。失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいですか？」

にこりと出来る限り優しい笑みを浮かべる。

この身体は煙で出来ており、俺の意のままに操れるので表情操作も楽でいい。表情から何か読みとられる事もないしな。

そんな俺の笑みに釣られてか、ロボットはぺこりと頭を下げると名前を教えてください。

「絡繰 茶々丸と申します。歩部さま」

「茶々丸さんと言うのですか、可愛い名前ですね」

カラクリってそのままだな。何て感想を洩らす訳にもいかずに、そう当たり障りも無い褒め言葉を言っておく。

すると、また茶々丸は頬を赤らめる。

ふむ、褒め慣れてないのかな？

それとも起動したてで、会話そのものに慣れていないのか。

まさか、褒められると強制的に頬を赤らめるというプログラムが刷り込まれている訳ではないだろうしね。

それに初対面の俺を様付けで呼ぶって事は、基本的に人間より下位に自分をランク付けしているって事だな。まあ、ロボットとしては当然か。

「あの、どうかしましたか？」

少し考え込みながらも茶々丸を見つめていた俺に、茶々丸は少し恥ずかしそうにしながらもそう尋ねてきた。その声に思考の海から現実に帰った俺は、小さく苦笑しながら冗談めかしに言った。

「いやいや、お嬢さんの顔が余りにも綺麗だったので、見惚れてしまいましたよ」



「私はヒューマノイドです。正確に言えばガイノイドタイプのロボットです。き、綺麗な筈はありません」

ふむ、ガイノイドタイプって事は人造人間に近いのか？

ならば、俺が知っているタイプのロボットというよりも、魔力を活用したロボットに近いのかも知れないな。

「ははは、ヒューマノイドかガイノイドかは知りませんが、そんな事は関係ないよ。」

君はとても美しい。それだけで、いいじゃないか」

「う、美しい!？」

彼女の言葉の端々から情報を読み説きながら、会話を続ける。まあ、もはや紳士的な会話というよりも新手的ナンパに近くなっている気もするが気にしない。

そんな会話をつづけていると、どうやら褒め慣れていなさすぎるのか、顔を赤くしすぎると、ぴーっというヤカンが沸くような音を立て始めた。

どうやら軽くオーバーヒートしてしまったらしい。

しかし、この程度の会話でオーバーヒートするとは、何と云うかハイテクな割には随分とやすい造りだな。肉体と精神に大きな差でもあるのかな？

「あ、あの。私は、用事がありますので。そ、それで!」

そんな事を考えている俺に茶々丸は、周りにある大きなスーパー

の袋を拾うとすぐさま、どこかへ走りだそうとする。

このまま放っておいてもよかったが、会話しやすく情報を読み説き易い彼女から俺はもう少し情報を得ようと思い、彼女の進行方向に割り込み、にっこりと笑顔で呼びとめる。

「まあまあ、お嬢さん。落ち着きなさい。

それにそんなに重そうな荷物を持たせる訳にはいかないよ。どれ、私にも持たせて貰えないかな？」

俺はそう言うと、返事も聞かずに彼女からスーパーの袋を受け取り、持ち上げる。

「あの、しかし、私はロボットですので、その程度の荷物は重くはないのですが」

「ふふ、重い、重くないの問題ではありませんよ。私が貴女に重い荷物を持たしたくなかったというだけです。お嬢さん、どうかこの老いぼれの願いを聞いて、荷物を持たせていただけませんか？」

「うっ……、ですが」

何か気まずそうにしている茶々丸に俺は出来るだけ優しげな笑みを浮かべる。そんな笑みを浮かべる俺に茶々丸は諦めたように、どこか達観した表情になると素直に礼を述べる。

「分かりました。ありがとうございます」

とりあえず、接触は成功、と。後は、この茶々丸というロボットはどこで創られているのか調べてみないと。

しかし、この茶々丸は人間に対して警戒心というモノを一切抱いていないな。

こんなに簡単に荷物を持たせるし。家までついてこさせるし。

これも認識阻害魔法の所為で、平和すぎる街になったこの学園で暮らしている弊害なのかね。悪意を知らないロボットは悪意を持たないからな。

俺より少し先を歩き、俺を道案内してくれている茶々丸を見て、俺はそう考えると小さく微笑んだ。

さてさて、ここから先は鬼が出るか、蛇がでるか、はたまた異能の天才科学者でも出てくるのか。どうなることやら。

そのうち猫型ロボットが生まれても不思議でないレベル。(後書き)

茶々丸のセリフがなかなか難しい今日この頃。

腐っても金髪少女は吸血鬼。(前書き)

いやー、お久しぶりです。本当にお久しぶりです。  
久しぶりの更新です。

でも、短いです。

後、以前の話の色々と変更したりしています。ご了承ください。

## 腐っても金髪少女は吸血鬼。

「誰だ、貴様？」

底冷えする様な冷たい声が聞こえてきた。

場所は絡繰 茶々丸の家があるという森の中。目の前には茶々丸の後姿。辺りには誰もいないにも関わらず、突き刺すような殺気が俺に向ってきていた。

明らかに誰かが、敵意を持って俺の近くにいる事だけは分かった。

周囲に人がいないという事は、一般人の目はどこにもない。

それはつまり、何をしてもばれないという事である。

……誘いこまれた？

心の中でそう考えながらも、俺は一般人のように辺りをキョロキョロと見回した。

「もう一度だけ、問おう。貴様は誰だ？」

「誰かいるのかい？」

冷たい声だが、俺は気にかげず、困ったように首を傾げる俺。そんな俺の惚けた言葉などに耳を貸さず、再び俺の耳にそんな声が聞

こえてきた。

「俺の名前は歩部 守だ」

どこから聞こえてきたか分からない声に、俺はそう答える。

「何のつもりで、ここまで来た」

「いや、何のって言われても」

冷たく凍える様な声に、俺は戸惑った声を上げた。

そんな俺をフォローするように、茶々丸がどこからか聞こえてくる声に向って答えた。

「マスター。この方は」

「茶々丸、お前は黙っている。裏の人間は匂いで分かる」

……ふむ、バレている様だね。だが、俺としてもここで認める訳にはいかない。

怯えた様な顔を浮かべながら、周囲を見渡した。

「あの、誰ですか？ 俺は、ただ彼女の荷物を」

その瞬間、俺の首に何か冷たいモノが当てられた。

首元を見ても、一見すると何も無い様に見えるが、良く見るとこれは細い糸であった。糸は俺の首に巻きつくように、張られ一歩でも動けば、即首と身体がさようならしてしまいそうだ。

「うっ」

「黙っている、不審者が。茶々丸に狼藉を働いた人間の声など聞きたくもない」

声を詰まらせる俺。そんな俺に、冷たい声の主がゆっくりと現れた。

現れたのは、金髪の少女。見た目はアーニヤと同じぐらいだろうか、凜とした姿は人形のようにすら思えるほどの、美少女であった。しかし、幼い姿だが、その少女が浮かべる表情は氷の様に冷く、そして冷酷であった。

「一つ聞こう。お前は何のためにここに来た？」

「……俺の声は聞きたくもないんじゃないか？」

表情を変えず、ただ冷酷に問う少女に、俺は皮肉るようにそう返す。

「そうだったな。では、すぐさまこの首刎ねてもいいんだぞ？」

俺の言葉に少女は少しだけ顔を歪めると、グイツと糸を持つ手に力を入れる。それと同時に、俺の首が絞められるのを感じた。

「べ、別に大した理由などない。ただ彼女を手伝いたくて」

そう答えた瞬間、再びぎりつと糸が締められた感触があった。首からは少しだけ血が流れている。

頸動脈には傷が入っていないだろうが、それでもこのまま糸を絞められたら、そくお陀仏だ。



この煙の人形が。

「御託はいい。本心を言え」

どうするべきか。このまま、ではすぐに煙の人形が殺されてしま  
いそうだ。

だが、まさか絡繰 茶々丸の性能について調べに来ましたと馬鹿  
正直に答える訳にもいかないだろう。

冷酷な表情を浮かべている彼女と対峙し、どうした方がより自分  
にとって都合がいいかを考え続ける。

「マスター、この方は！」

俺が色々と考えている間に、再び茶々丸が俺をフォローしてくれ  
ようと、俺と少女の間に割って入ってくれる。

だが、少女はそんな茶々丸を見て一瞬だけ意外そうな顔を浮かべ、  
小さくため息を吐き出すと抑揚のない声で言った。

「茶々丸、黙っていると言った筈だ」

「……Yes、マスター」

当然ながら機械が主人に逆らう事は出来ずに、茶々丸はすぐに沈  
黙してしまった。

現状のままではどう転んでも自分にとっていい方向には進みそう  
にないな。俺はそう考えると、小さくため息を吐き出した。

仕方ない、少し金髪の彼女にも探りを入れようか。

「人の事を尋ねるには、まずは自分からという言葉を知らないか？」

「ふん、減らず口を」

俺の言葉に、彼女は鼻で笑い、そして冷酷な笑みを浮かべながら答えた。

「だが、いいだろう。私の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。『闇の福音』だ」

さあ、震えあがれとばかりにそう言ってくる、エヴァンジェリン。そんな彼女の自己紹介を聞き、ようやく納得した。

なるほど、彼女があ闇の福音ねえ。それなら、この糸を使った技も理解出来る。

「……なるほど、かの有名な闇の福音さんか」

「さて、自己紹介はすんだな。では、次はこちらの質問に答えて貰おうか？」

ギョツと首を締め付ける冷たい糸に力が入った。

空気が更に冷たくなり、突き刺すような殺気があふれかえる。

「お前は何をしにここに来た。何故、茶々丸に近付いた？」

どうするべきか。少なくとも、こんな状態になっている以上、ただの一般人のフリもはや出来ない。

しかし、ここで誤魔化し続けても、俺の欲しい情報は手にいれられないな。

「……茶々丸さんに興味があつてね」

結局、答えを濁しながらも事実に近い事を述べる。

そんな俺に向つて、エヴァンジェリンは値踏みする様な目を浮かべた後、言った。

「貴様は、研究者だな？」

彼女の言葉に、俺は表情に出さずに驚く。

何故、俺の本質が分かったのだろうか？ 今の俺は煙の人形の中にいる筈なのに。

「貴様の様な人種は何度も見てきた。思い出しても反吐が出るような人種だ」

だろうな。

自分でも、最悪な人種だとは思っているさ。特に真祖の吸血鬼である彼女にとって、俺の様な存在は嫌悪する対象だろう。

「警告だ。これ以上、茶々丸に近付くな。

それを破れば、その首、無いモノと思え」

吐き捨てるようにそれだけ言うと、首に張り付いていた糸が解けるのを感じた。

エヴァンジェリンは見下すような目でこちらを見た後、すぐに踵を返し森の中へと消えていく。

茶々丸は、おろおろとした後、ぺこりと頭を下げたエヴァンジェリンについて、森の中へと消えていった。

ふむ、やつかいだな。

切られた首をさすりながら、俺はそう考えた。

ロボットがエヴァンジェリンの庇護下にある以上、簡単に調べさせてくれそうにないな。

まあ、だからと言って諦めるといふ選択肢はない。

あの様なロボットの存在を詳しく調べずに、受け入れる事など俺には出来ない。

前世の、あの世界の様になりたくはないのだから。

腐っても金髪少女は吸血鬼。(後書き)

ついに登場、金髪ロリババアこと、エヴァちゃん。  
しかし、甘くてイチャラブな展開になるはずもなく。

前略、姉上様。都会の学校は物凄く危険で物騒な場所でした。（前書き）

ペース配分に一切の定評がない作者が再び更新！

今回は引っ越してきたネギ君たちの日常的な話ですよー。

前略、姉上様。都会の学校は物凄く危険で物騒な場所でした。

こんにちは、ネギです。

色々あった結果、中学生の担任になるかもしれないという非常にありえない立場に立たされて、日本人の正気を疑い始めたネギです。

現在は、アーニヤとは別れて、タカミチの家でタカミチと一緒に荷解きを行っています。

向こうから持ってきた荷物は最低限ですが、それでも中ぐらいの段ボール4つ分はあります。こっちの部屋がどんな部屋か分からなかったので、電化製品も一通り持ってきてしまいましたしね。

「おや、ネギ君はサッカーをやったのかい？」

僕が持ってきていた電子レンジを見て、小さくため息を吐き出している、荷解きを手伝ってくれているタカミチが段ボールの中にあるサッカーボールを見つけて、そう尋ねてきた。

今、タカミチが手にしているサッカーボールは僕のチームが、僕にくれた大切なサッカーボールでした。

それを見つけられた事に少し恥ずかしさを覚えつつも、僕は少しだけ胸を張って、笑った。

「1年ぐらいね。こう見えてもエースストライカーだったんだよ？」

「それはすごいじゃないか。君のお父さんも運動神経は良かったんだよ」

ちょっと自慢気に言った僕。そんな僕に、タカミチはそう言って、少し誇らしげな笑みを浮かべました。あれはおそらく、父親の事を思い浮かべて、過去の回想をしているのでしょうか。

まあ、英雄と呼ばれた僕の通さんが運動神経がいいのは当然でしょう。

運動神経最悪の戦場の英雄なんてありえないでしょうしね。

今は英雄になんか興味ありませんから、別にどうでもいいんですけどね。

昔の英雄よりも、今の荷解きの方が何十倍も重要ですし。

僕は小さく苦笑を浮かべながら、段ボールの中身を外へと出していく。

「あつ、そうだ、タカミチ。こっちの段ボールに本が入ってるんだけど、本棚とかあるかな？」

「あー、本棚かい？ 悪いんだけど、あんまり本棚はないんだよね。基本的に出張続きでこの家にいないし」

……え、タカミチって教師だよな？

そんな漠然とした疑問が浮かんだけど、それを口にはせずに僕は少し困った表情を浮かべる。

本はこのまましばらく、本棚の中に入れたままでもいいけど、また読み返したいしな。

「タカミチ、この荷解きが終わったら買い物に行っていないかな？」

「ああ、そうだね。行こうか。僕が案内するよ。」



どこに行きたいんだい？」

僕の言葉に、タカミチはH A H A H Aと笑顔で頷いてくれる。

「そうだね。とりあえず、本棚を買って、後衣類もちょっと買おうかな？」

荷物になるから、あんまり多く持ってこれなかったし」

はあ、空輸もお金かかるからな。船使えばもっと安かったけど、時間かかるしな。

そんな事を考えながら、僕はタカミチに行きたい場所を答える。

「それなら、デパートでいいか。ここの立地は色々複雑だから、今日は買い物も兼ねて色々案内するよ」

それはありがたい。田舎からほとんど出た事のない僕は、知らない町を歩くのが物凄く苦手だからね。

「ありがとう、タカミチ」

にこりと笑って、お礼を述べる僕に、タカミチもにこりとほほ笑んだ。

何というか、ほんの1時間前にあの妖怪ぬらりひょんと口喧嘩していたとは思えない程の、ほのぼのさだ。

うん、やっぱりこつこついう日常が一番いいよね。

さて、闇の福音に殺されかけたカモだ。

さすがにあれ以上、無理やり調べると、色々と面倒臭そうだったので、一旦引いて月詠と連絡とっている。

一応、エヴァンジェリンが茶々丸に関係しているという情報だけでも、それなりの収穫だったしな。

『あー、エヴァンジェリンさんですかー。一応、情報は集めてますえー』

念話を初めてすぐにエヴァンジェリンについて尋ねた俺に、月詠は念話の向こうでそう答えた。

それは有難いな。今は少しでも情報が欲しいからな。俺はそう思いながら、月詠に尋ねる。

「それで、その情報とは？」

少し真剣な表情を浮かべながら月詠に尋ねる。

『そうですねー。公式としては中学1年の入学式に海外から転入してきた事になってますえー。』

でも、おそらくこの学園に封じ込められてから15年の間、ずっと中学生を続けてるんじゃないかと思えます。12年前の女子中学校入学式の写真に彼女らしき人物の姿が映っている写真がありましたし』

ほう、15年も同じ場所に閉じ込められるとは、何とも面倒な人

生を送っているな。

俺は彼女の立場を思い、もしも自分だったらと考えると思わず嫌な汗が流れおちる。

だがまあ、自分の事ではないので所詮は人事。

俺は小さく肩をすくめた後、月読みに更に情報を求めると、月詠は調べて情報を掻い摘んで教えてくれる。

『今はどうやら、大学の工学部や電子研究会などのメンバーと少し関わりがある様です。』

その辺が集まる、工学部大学の建物、通称『テクノロジー塔』に出入りしている姿を時々目撃されてますし』

「なるほど、それがあの絡繰茶々丸と関係しているのか」

合点がいった様に頷く俺。あの茶々丸の能力は、おそらく科学与魔法の融合だろう。

さすがに不死の魔法使いだけあって、技術が凄い。

そして、そんな魔法となんとなく融合できるこの学園の科学も常軌を逸しているな。

『桜』でさえ、まだ科学与魔法の融合は完全には不可能なんだからな。

『そうみたいですよー。その辺りもカモさんなら、興味もつやると思っただけ調べておきました。』

どうやら茶々丸とかいうロボットには、エヴァンジェリンと同じクラスの天才二人が関わってるようですよえ』

「天才二人？」

俺がそう尋ね返すと、月詠は念波の向こうで頷きながら話を続ける。

『そうですね、天才らしいですね。一人は葉加瀬 聡美。名前からして何か、凄そうな人ですね。』

能力も当然天才にふさわしい方みたいですね。工学系の技能に関してはこの学園の大学院生顔負け。』

ロボに関しては、教授すら上回るらしいですね。まあ、この人は一般人ですけど』

なるほど、いつの時代も世界を一步進めるのは天才だからな。良くも悪くもだが。』

しみじみとそんな事を思っている俺に、更に月詠は調べてくれた事を答えてくれる。』

『そして、もう一人の天才が問題みたいですね。名前は超 鈴音。中国からの編入生という事にされてるんですけど、『桜』まで使っていくら調べてもこの人のホンマの過去が出てきませんえ。』

この学園が作った偽の経歴なら出てくるんですけど。正直言って、気味の悪い人ですなー』

「『桜』が見つけれられない？ 随分と穏やかじゃない話だな。それだと、まるで」

『まるで、この世界で生まれ育った人間じゃないように思える………ですか？ うちもそう思いました。』

まあ、カモはんの様な状況はそうそうあり得る話やありませんから、もしかしたら普通に孤児だったのを学園が拾ったっていう可能性もありますけど』

まあ、俺の様に輪廻転生した人間なんて確かに頻繁に存在してもしらしたら困るしな。

まだ実は宇宙人でしたの方が、あり得る話か。

「分かった。とりあえず、こつちでも調べておく。月詠も気になった事は、『桜』を通じて色々調べてくれ」

「分かりましたえー。とりあえず、カモはんが一番気にしてるおーばーてくのろじいーに関して調べてみますえー」

俺の言葉に、月詠は笑いながらそう答えてくれる。  
そんな月詠に俺も小さく笑う。

「悪いな」

『また今度、死合ってくれたら、それだけでええですえー』

いかにもらしいお願いに、俺は苦笑し、答える。

「まあ、また今度な」

『絶対ですえー。楽しみにしてますから。それじゃー、さいならー』  
そう言って切れる念話を確認すると、俺は小さくため息を吐き出した。

オーバーテクノロジー・闇の福音・経歴不明の天才か。

これは色々と面倒な事が起きているな。下手したら、俺すら巻き込まれる可能性が出てきた。

もっ少し調査する必要があるな。

まずはオーバーテクノロジーに関して、どこまで技術が進んでいるのか。

進んだ技術はどのように利用されているのか。まずは工学部から探りを入れるか。

それに、それ以外にも徹底的に洗いなおす必要があるかもしれないな。

魔法的な事も、そうでない事も。

色々と考えながら、俺は街の中を歩き始める。

街の中はやはり学生が休みだからか、人通りが多くオコジヨ姿でチヨコチヨコと駆けていく俺の姿は意外と目立ってしまう。

ふむ、また煙人形の中に入った方がいいか？

色々と思案している俺。そんな俺に、一つの声が聞こえてきた。

「あー、バカカモ！ やつと見つけたわ！」

なんの声かと思い、後ろを振り返るとそこには烈火の如く真っ赤に燃えているアーニヤが俺に向かって走ってきていた。

何か知らないが、凄いテンションの様だ。国外の人間である事もあり、物凄く目立っているが、アーニヤは気にせず俺の元へと猛ダッシュでやってくる。

「きゅっ?」

とりあえず、街の中なのでただのオコジヨのフリをする俺。だが、

そんな俺の演技など、アーニヤは気にもかけずに、いきなり俺をつかみ上げると、いつものようにブンブンと振り回してくれる。

おおお、世界が廻る。

「ちょっと、聞いてよ！ あのバカネギの奴！

女子中学生の担任になるかもしれないのよ！ 私は生徒なのに！ しかも、私があ**の**バカネギの生徒って、ありえないでしょーが！」

今日は一段と振り回すな。なんか、もう慣れたけど。

ブンブンとおもちやの様に振り回してくれるアーニヤに俺は小さくため息を吐き出すと、周りには聞こえないように小さな声で、彼女をなだめる。

というか、周囲の人が変な目でこっちを見ているのだけれども？

「お嬢さん、まずは落ち着きなさい。そして、私の尻尾から手を離しなさい。

話はそれからだ。愚痴だろうが、何だろうが聞いてあげるよ。それが、使い魔の役目だしね」

『ぶ。ぶ。ぶ。』

おや、念話は切った筈なのに月詠の笑い声が聞こえてきた気がする。そんなに、俺の台詞面白かったか？ というか、そろそろ俺が使い魔をしてる事に慣れるよ。

そんな事を考えながら、俺はアーニヤの手から素早く脱出し、彼女の肩に乗った。

「どつやら、落ち着いたようだねお嬢さん。ここは街なかだ、オコ

ジヨに話しかける変な女の子と思われなくなかったら、携帯電話で話しているフリでもしてくれないかい？」

俺の言葉に、アーニヤはようやく自分たちが注目されている事に気が付き、こほんと咳払いをし、そそくさとその場から逃げだす。そして、人目のつかないところで、携帯電話を取り出すと自分に耳に当てながら俺に向かって言う。

「そ、そういう事は早く言いなさい！ おかげで恥をかいちゃったじゃないの！」

「ふむ、まあ恥をかいただけでよかったじゃないか」

「よくないわよ！」

アーニヤは顔を真っ赤にしながら、俺に向かって怒鳴ってくる。

いやいや、責任転嫁もいいところだけど、あまりその事について話しても仕方がないので、適当に謝って場を濁す。

そして、アーニヤが怒っている言葉を思い出して、もう一度尋ねた。

「それよりも、お嬢さん。確か、ネギ少年が、中学生の担任になっただったって？」

「そうなのよ！ いえ、正確には『なるかも』だけど！

でも、中学生の担任になるかもしれないのよ！ ありえないですよ！」

まあ、確かにあり得ないな。

いくらネギ少年が大人びているとはいえ、身体も9歳にしては大



きいとはいえ、まだまだ子供なんだからな。魔法学園の奴らは何を  
考えているんだろうか？

首を傾げる俺に、アーニヤも力強く同意する。

「そうなのよ！ それに、生徒の部屋で生活するって話もでて！」

生徒の部屋で子供とはいえ、仮にも教師が？  
しかも、女と男だぞ。

「それは本当なのか？」

あまりにも常識外れな言葉に俺は自分の耳を疑った。

正直言つて、この学園がネギ少年に何をさせたいのかが全くもつ  
て理解できなくなり始めてきた。

「いえ、話が出ただけで、ネギがその……色々話ってくれて今はタカ  
ミチの部屋に行く事になってるんだけど！」

ふむ、まあそうだろう。

あのネギ少年が、アーニヤ以外の女性の部屋に泊まる事なんてあ  
りえないだろうしな。

何故か顔を赤くしながらそう答えるアーニヤに、俺は小さく肩を  
すくめる。

「まあ、それはそうだろう。いくらなんでも、生徒の部屋での生活  
なんてありえないだろうし」

俺が呆れながらも、そう答えるとアーニヤも憤慨しながら言う。

「もう、とにかくあのぬらりひよんは、ボケてるのよ！ おじいちゃんと同じくらい！」

この学校もそのうち、ぬらりひよん学園とかになるんじゃないかしら！ そしてらもう最悪よ！」

「ぬらりひよん？」

何で、こんな所で東洋の妖怪の名前が出てくるんだ？

首を傾げる俺に、手振り身振りを加えてアーニヤが説明してくれる。

「あのね、これー！ーくらい長い頭のおじいちゃんが、校長だったのよ！」

あれって絶対にぬらりひよんだと思うわ！ だって、人間としてあり得ないじゃない！ 仙骨ってレベルじゃないし！」

アーニヤが両手をめいっぱい広げ、校長の頭の大きさを教えてくれる。

いやいや、いくらなんでもその大きさは人間の範疇を超えてるだろう。1メートルは超えてるぜ？

だがまあ、アーニヤの誇張表現を抜きにしても、随分と後頭部が長いらしい。

魔術的な何かが理由なのか？

後頭部に魔法陣を加えた結果、頭が延びたとか？

あり得ない話じゃないが、どんな魔法陣を加えたんだよ。

「もう、とにかく都会ってやつは田舎の常識が通じない所よ！」

「いや、都会だからって訳じゃないだろうけどな」

少なくとも1メートル超えの後頭部を持つ校長は、この学園にかいないだろう。

大きくため息を吐き出すアーニヤに、俺は呆れながらもありあえずそう答えておいた。

「あつ、アーニヤ！ カモさん！」

そんな話を話していると、話題の主が（ぬらりひよんではない）俺たちに向かって声をかけてきた。

振り返ると、そこにはネギとその隣にガトウに雰囲気が似た男が立っていた。

煙草を燻らす姿も、眼鏡姿も、常にポケットに手をいれている姿も、なんとというか雰囲気がガトウにそっくりだった。

男はネギと一緒に俺たちに近づけると、笑顔を顔に浮かべながら少し物珍しげに俺を見ており、俺も繁々とガトウっぽい男の表情を観察していた。

二人で顔を眺め合っていると、ネギが気を利かせて紹介してくれる。

「あつ、カモさん。この人はタカミチ・T・高畑さん。」

僕が見学する事になったクラスの担任なんだ。それで、これから、

彼の部屋で生活する事になったよ」

なるほど、こいつがガトウの弟子のタカミチか。話には聞いていたが、本当に雰囲気がそっくりだな。

まあ、ガトウの様にいつも仏頂面ではなく、このタカミチには笑顔が張り付いているが。

「それで、タカミチ。こっちがアーニヤの使い魔のカモさん。旅のオコジヨで、今はアーニヤの使い魔をしてるんだよ」

ネギが俺の事をタカミチに紹介してくれる。

そして、紹介が終わると俺はニコリと笑い、タカミチに向かって話す。

「いやいや、よろしく。こんな有名人に会えるとは光栄だよ」

「いや、有名人ってほどじゃないけどね。こちらこそ、よろしく」

社交辞令を言って、とりあえず挨拶をする。こんな所で変に睨まれたくないしな。

タカミチの奴も微笑みながら俺の挨拶に答える。

表面上はともさわやかに見えるだろう。だが、タカミチのその目はあまり笑っておらず、値踏みするような目線をくれてくれる。腐っても英雄で、ガトウの弟子だ。初対面の相手をいきなり信用する訳もないだろう。

並みの人間には見抜けない表情の変化だしな。

俺はそんな事を考えながらも、タカミチとは違い目すらも笑顔で挨拶を終える。

水面下でお互いの情報を探り合っている俺たち。そんな俺たちを  
しり目に、ネギはニコニコと笑いながら言った。

「そうだ、アーニヤ。これからタカミチがこの街を案内してくれる  
らしいから、一緒にいかないかな？」

「なっ、何で私がバカネギと一緒にいかないといけないのよ！」

微笑みながらアーニヤを誘うネギ。そんなネギの誘いに打てば響  
くタイミングでそう答えるアーニヤ。

アーニヤは基本的にネギに誘われると、何も考えずにまず断る人  
間だからな。

断られたネギは断られ慣れているせいか、笑顔のままアーニヤに  
向かって少し真剣な口調で言う。

「一緒に行つて欲しいな。僕はアーニヤと一緒にいきたいんだよ」

「なっ……。そ、その。えっと。」

べ、別に行かないなんて言つてないでしょ！ ネギがどうしても  
つて言うなら、その、……。行つてあげてもいいわよ」

ネギ少年のド直球な言葉に、後半は小声になりながら、真っ赤な  
顔でそう答えるアーニヤ。

そんなアーニヤの返事を聞き、ネギは嬉しそうな屈託のない笑顔  
を浮かべる。

「じゃあ、どうしてもだよ、アーニヤ。僕はどうしても大好きなア  
ーニヤと一緒に、この街を回ってみたい。

まあ、タカミチと一緒にだけどね」

「H A H A H A、僕はお邪魔虫だったかな？」

相変わらず笑顔で女殺しな台詞を吐くネギ。そんなネギの言葉に、アーニヤは更に真つ赤になってネギをぽかぽかと叩き、タカミチは洋風な笑い声をあげていた。

さて、そんな事があって俺たち一行は麻帆良の中を回り、大きな広場の前までやってきていた。

ここに来るまで、まあ色々であった。

何があったかといえば、基本的にはお上りさんなネギ少年とアーニヤがあちこちを見てテンションを上げまくったり、タカミチが言い争いをしている不良を拳で沈めたり、サーカス団から逃げ出したライオンにアーニヤが気に入られて連れて行かれそうになったりと、まあ色々だった。

そのたびに、アーニヤは悲鳴を上げ、ネギ少年は困った顔になり、タカミチは洋風に笑っていた。

まあ、何とか濃いうか濃いメンツだから、引き寄せられる厄介事も濃くなってまうのだろう。

とりあえず、一通り暴れ終われ、疲れた俺たちは色々あり休憩するために、この広場までやってきたのだった。

「へえ、広いね、ここ」

辺りを見回しながら、タカミチにおごってもらったジュース『青汁1・2%』を喉に流すネギ少年。

何というか、残りの98・8%が何なのか果てしなく気になるジュースだ。

ネギ少年の言うとおり、今いる広場は先ほどまで歩いていた道からぼつかりと広がった様な広々とした空間であった。

遠くの方では子供たちが遊んでおり、大柄な男や、スーツ姿の男性、ナース服やチャイナ服を着た女性まで多種多様な人物がここで思い思いに時間を過ごしていた。

「H A H A H A。まだまだこんなもんじゃないよ、この学園は。あの大きな樹、世界樹って呼ばれてるんだけど、あの木の根元にはもっと大きな広場があるんだ」

缶コーヒーを飲みながら、タカミチはネギに向かってそう教える。タカミチが指さした先には、どう考えてもあり得ないくらい大きな樹がそびえたっている。

この学園のシンボルで、強力な魔力を秘めている巨大な樹。

「ねえ、あの樹ってなんなの？」

タカミチの説明にアーニヤの言葉が誰もが考えるであろう、当然の疑問を浮かべた。

だが、その言葉に、タカミチは小さく首を傾げる。

「何ってどういう事だい？」

「どういう事って、そのままの意味よ。あんなにバカデカイ樹なんてありえないじゃない。」

それに、あの変な校長の後頭部もあり得ないわよ」

そこまでアーニヤが言う校長の後頭部も少し見てみたい気がするな。

そんな事を考えながら俺はタカミチの返事を待つ。もしかしたら、この学園の謎を解く何らかのヒントになるかもしれないからな。

少し期待した目でタカミチを待つ俺たちを見て、タカミチは少し考えた後に、困ったような笑顔を浮かべた。

「うーん、あり得ないって言われても、この樹はこの樹だし、あの人はあの人だよ。」

多少変でも、そんなものだよ」

「……答えになってないような気がするわ」

タカミチの言葉に、アーニヤが呆れたようにそう答えた。そんな二人を見て、ネギが小さく苦笑する。

そんな時だ。

鈍く何かをぶつたたく様な音が、広場の中で響いた。

「えっ、何の音？」

真っ先にアーニヤが驚いた顔を浮かべ、辺りを見渡す。



彼女が見渡した先には、一人のチャイナ服を来た少女と、倒れて目を回している大男と拳を構えているスーツ姿の男がいた。

うん、状況が分からない。

アーニヤとネギは理解が追いつけずにいるのか、声も上げずにただチャイナ服の少女に視線が釘づけになりる。

そんな風に注目されている事に気づいていないのか、チャイナ少女は倒れている大男には目もくれず、スーツ姿の男へ視線を向ける。

男はボクシングでも齧っているのか、一般人にしては鋭いジャブを放ちながらチャイナ少女に向かって近づいていく。

そんな男に、少女は小さく息を吸い込むと流れるような動作で、思いつき男の顎を蹴りあげた。

「弱いアル！」

人体の急所を蹴りあげられ、なすすべもなく倒れるスーツの男性に向かってそう言い切るチャイナ少女。

そんな少女を見て、タカミチが小さく微笑んだ。

「ああ、彼女は古 菲といってね。ネギ君が担当し、アーニヤ君が転校するクラスの女の子だよ」

「色々とツツコミのいれどころはあるけど、とりあえず僕は担当しないよ」

まるで日常風景のように現状を説明するタカミチに、ネギが呆れながらそう答える。

タカミチはネギ少年とアーニヤが驚いているのを見て、何に驚いているのかと、少し考えた後に小さく微笑みながら言った。

「ああ、彼女はあの年で中学武術研究会の会長をしていてね。

時々、他のクラブの人間が彼女を倒す為にああやって闘っているんだよ。元気だね」

「いやいやいや、タカミチ！ さすがにダメでしょ。だって今、凄い音がしたよ！

鈍い音なのにすごく轟いたよ！？」

何でもない事のように答えるタカミチに、ネギが再び大声でそうツッコミを入れる。

まあ、認識障害魔法の力でそんなに大事になっていないが、他の学校なら日常的に喧嘩をしているなんて大問題だからな。

「H A H A H A、とりあえず僕は仲裁に行くよ。ネギ君たちもおいで」

ネギの渾身のツッコミをスルーしてタカミチはそう言うと、チャイナ少女の方へ向かって歩いていく。

あまりの展開についていけなくなったアーニヤとネギだが、このままここで座っている訳にもいかず、お互い顔を見合わせ小さく頷くと、あのチャイナ少女の方へと駆けて行った。

「古 菲君、あまり無茶はしてはいけないよ」

大男とスーツの男をコテンパンにした少女に向かって、タカミチがそう言った。

「あいやー、タカミチ。大丈夫アルよ。そんなに無茶はしてないヨロシ」

さっそうと登場したタカミチに、古は驚いた様な表情を浮かべながらも、フルフルと手を振ってそう答えた。確かに見た感じ、綺麗に脳震盪を起こしているようだ。

ある意味技ありの一撃を決めた古に、タカミチは笑顔のまま言う。

「H A H A H A、元気なのはいいことだよ。でも、喧嘩も良いけど勉強もしないとね」

「うっ、手厳しいアルなー」

タカミチの言葉に、古は苦い笑いを浮かべながら頭を掻く。そんな古に、タカミチも苦笑を浮かべる。

何というか、本当にこれがこの学園の日常なのだろう。

そして、そこでタカミチの隣にいる二人に気がついたのか、古が首を傾げた。

「おや、その二人は？」

「ああ、こっちはネギ君で、こっちはアーニヤ君。ネギ君は教師になる為に日本にきて、アーニヤ君は君と同じクラスだよ」

タカミチの言葉に古は嬉しそうに顔をほころばせる。

「おお、同じクラスアルか！」

「アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです。よろしくね」

初対面の彼女に、相変わらずの猫かぶりで、アーニヤはにっこりとお上品に笑う。

そんなアーニヤを見て、ネギは苦笑を浮かべ、タカミチは少し驚いた顔を浮かべた。

「私は古 菲アル。えっと、あんな・ゆーな・ここあ？」

名前を覚えなかったのか、古は頭の上に3つ程クエッションマークを浮かべながらそう尋ねる。

そんな古にアーニヤは小さく上品に微笑みながら答える。

「アーニヤでいいですよ。皆、そう呼んでくれますし」

「それは良かったアル。よろしくアル、アーニヤー！」

「ええ、よろしくお願ひしますね。古さん」

「私の事は古で良いアルよ」

がしつと握手を交わす二人。

とりあえず、お互いのファーストコンタクトはそれなりにいいものになったようだ。

そして、握手をし終わると、古はアーニヤの隣にいるネギにも声

をかける。

「えっと、そっちの少年はネギだったカナ？ そっちもよろしくアル。」

その年で教師の道を目指すとはすごいアルな！」

「ええ、まあ強制的にというか、まあ頑張ります」

アーニヤとは違い少し曖昧な笑みを浮かべるネギ。そんなネギに、古は小さく首を傾げた。

そんな2人を見て、アーニヤは小さく微笑みながら、古に向かって言った。

「あのですね、古。ネギは教師を目指しているというよりも、

「「おうおうおう、こんな所にいたのか中国武術研究会会長さんよう！」「」「」

少し勘違いしている古に、ネギの事を説明しようとするアーニヤの声を遮り、そんな大声が聞こえてきた。

声の方へ視線をやると、そこにはまるで戦国時代のように武器を持った男たち数十人がこちらにむかって歩いてきていた。

「我らの名は、戦国合戦研究会！ お主ら中国武術研究会の持つ、最強の名を頂きにきた！」

「な、何なんですか、あれは！？」

突然の時代錯誤もいい所の集団の登場に、驚きの声を上げるネギ。アーニヤは声を上げるところではなく、思考停止してしまっている。

まあ、突然警察がいたら補導間違いなしの仮装をした男たちが来たら、普通固まるだろう。

何というか現実離れしすぎてるしな。

「また来たアルか。私は誰の挑戦だつて受けるアルよ」

そんな状況についていけない二人を放置し、古はいつもの事でも言いたげに、そう言うときささとかかかってこいと敵を呼ぶ。

じりつと腰を深く落とし、相手の動きを観察する古。

いかにも一触即発の状態だ。

「いやー、困るね。そんな大人数での喧嘩なんて」

やる気満々の古と時代錯誤集団に少し困ったような笑みを浮かべながらタカミチが割り込んだ。

割り込んできたタカミチを見て、時代錯誤集団は驚きの声を上げる。

「お、お前は！ デス眼鏡！」

……なんだ、その微妙な名前は。俺の鬼畜オコジヨと同レベルのひどさじゃないか。

思わず心の中で俺はそう呟いてしまう。

まあ、とにかくタカミチの登場で焦ったような表情を浮かべる時代錯誤集団。どうやらタカミチはこの生徒たちから恐れられてる存在らしい。

まあ、並みの身体強化した魔法使いさえ手も足もでないタカミチだからな。この程度の素人はどうってことないのだろう。

だが、勇敢なリーダーらしき人物が動揺を隠しながらも、同じメンバーに向かって叱咤激励を送る。

「か、かまうな！ デス眼鏡を打ちとれば、俺たちの部は更に最強に近づけ、昇格できるぞ！」

いや、教師打ちとつたら昇格どころか、下手したら廃部だろう。俺はそう思ったが、向こうの連中はリーダーの励ましを聞き、やる気満々にみなぎらせる。

「そうだ、俺たちが勝てば！」

「部は昇進！」

「部室にクーラーがつく！」

「女子マネージャーだって入るぞ！」

何か盛り上がり始める時代錯誤集団。とりあえず、その格好で女の子を襲っている以上、女子マネージャーはあきらめた方がいいと思うがな。

「いくぞおおおおお！」

一人がホラ貝を吹き、ブオオオオオという音と共に突撃してくる集団。

「やれやれ、お灸をすえないとな」

「誰の挑戦でも受けるアルよ！」

そんな時代があった集団に向かってタカミチは笑顔で、ポケットに手をいれ臨戦態勢をとり、古も嬉しそうな顔をしながら中国拳法独特の構えをとる。

「うおおおおおおお!!」

「H A H A H A」

「まだまだ弱いアルね!!」

「うわあああああ!!」

雪崩のように突っ込んでくる集団を、タカミチは拳圧で弾き飛ばし、古は流れるような連続技で次々と戦闘不能に追い込んでいく。そんな戦闘を観戦している俺に、ようやく再起動したアーニヤはぼつりとつぶやいた。

「……都会って怖い所ね」

「うん、そっだね。アーニヤ」

ネギとアーニヤの喧騒が喧騒の中に消えていった。



前略、姉上様。都会の学校は物凄く危険で物騒な場所でした。（後書き）

別に古ちゃんがヒロインという訳でもない。  
好きだから出しただけです。

中略、姉上様。都会の夜は意外とロマンチックでした。（前書き）

ペース配分に定評がなさすぎる作者が再び投稿！

書けるときに書いて、書き終わったらすぐさま投稿だ！

今回は前回の続きです。

中略、姉上様。都会の夜は意外とロマンチックでした。

こんにちは。いえ、もうこんばんはかな？  
とにかくネギです。

あの広場での合戦騒ぎの後、僕はアーニヤや力毛君と一緒に夕ご飯を食べる事になったネギです。

よく考えたら、ここについてから飲み物しか飲んでなく、まともな固形物を食べていない事に気がついたので、タカミチに晩御飯をおごってもらいました。

僕たちとしては、別にタカミチの家で晩御飯を食べても良かったんだけど、タカミチ曰く『いやー、僕は基本的に出張続きで家事とかしないからなー』との事で断念しました。

という事で、タカミチさんお勧めのご飯屋さん連れて行ってもらう事にしたのです。

「ほら、ここだよ。超包子ってお店だね。僕の行きつけさ」

ニコリと笑って席を引いてくれるタカミチに僕とアーニヤは、素直に従いつつも辺りを物珍しげに見渡した。

「へえー、お祭りでもないのに屋台なのね」

「まあね。でもちゃんと衛生的だし、何より味も抜群だよ」

にっこりとほほ笑みながらそう言うってくるタカミチ。高給取りで

ある筈のタカミチがそう進めてくれるからには期待が持てる。

僕とアーニヤは顔をほころばせつつ、オーダーに目を通す。種類も豊富で、値段も手ごろだった。これを見ると、確かにこれで美味しかったら、流行るに決まってるなと思いつつも、僕はオーダーを斜め読みしていく。

「タカミチ、何かお勧めはある？」

安い物だったら『チンジャオロースの肉抜き』から、高い物だと『燕の巣のスープ』まで何というか種類が豊富過ぎて選べる気がしない。

とりあえずタカミチが勧める物を食べようと思って尋ねた僕の問題に、タカミチは少し考えた後、小さく笑った。

「うーん、ここのお店は何でもおいしいからね。好きなものを頼んだらいいよ」

好きなものって言われると逆に迷うんだよな。

とりあえず、『チャーハン』とこの『エアドロップ』っていうのにしようかな？ 後者の奴は名前だけだと、どんなモノか理解できないけど。

「私は『激うま、春雨スープ』と何か分からないけど『貴婦人のたしなみ』かな。あつ、あと小皿一つください」

僕の注文の後にアーニヤも注文する。

最後の小皿は、ずっとアーニヤの肩に乗っているカモさんにもあげるための物だろう。色々と言っている割にはアーニヤはち

やんと、カモさんの事を考えている。

「それじゃあ、僕は『エリキシル剤』と『アードラ石晶』、後は『ピュアオイル』と『ヒーリングベル』をもらおうかな」

タカミチに至っては、何を頼んでるのか一切理解できない。それって食べ物なのだろうか？

僕が少しひきつった顔で、すらすらと注文していくタカミチを眺める。その視線に気づいたのか、タカミチは少し小首を傾げながら、僕に微笑み返してくれる。

うん、別にタカミチが幸せならそれでいいんだけどね。

「それにしても混んでるわねー」

ちょっと冷たい汗をかいている僕に、アーニヤが周囲を見渡しながら、そんな事を言った。

改めて見回してみると確かに、アーニヤの言うとおり、いろんなお客さんがお酒を飲んだり、ご飯を食べたりして、楽しそうに笑っている。

何というか、凄く雰囲気がいいお店だ。

ほんわかというか、まったりというか、くつろぐには本当にいいお店だと思う。

「はい、注文のチャーハンと春雨スープとエリキシル剤お待ちアルよ。」

エリキシル剤は激熱だから気をつけるヨロシ」

そんな事を考えていると、料理が僕たちのテーブルの前に置かれ

る。

うわー、凄く美味しそうだな。お腹が凄くすいてたから早く食べたいよ。空腹を訴え続ける胃袋に負け、僕は熱々のチャーハンをレンゲですくい、すぐに口へと運ぼうとする。

「そんなに急いで食べたらずけとするアルよー」

って、今の声はどこか、凄く最近に聞いた覚えがあるんだけど？

僕がチャーハンを口へと運ぶレンゲを、ぴたりと止め顔を上へと上げる。

すると、そこにはほんの数時間前に広場であつたあのチャイナ服の古さんがこっちを向いてニコリと笑っていた。

「数時間ぶりアルね、ネギ坊主にアーニヤ」

人懐っこいような笑みを浮かべる古さんに、僕とアーニヤは驚いた表情を浮かべ、タカミチはただニコニコとした笑みを浮かべている。

チャイナ服を少しだけウェイター仕様にチェンジした服を着ている古さんに、僕は驚きながらも声をかけます。

「古さんじゃないですか。どうしてここにいますか？ 一人ですか？」

こんな時間に中学生が一人で出歩くなんで、あまり良い事ではありませんよ。

少し怪訝な表情を浮かべながら僕がそう尋ねると、古さんまるで当然の事と言いたげな口調で言った。

「どうしてって、ここが私のバイト先だからアルね」

なぜか胸を張ってそう答える古さん。

その姿は何となく可愛らしくて似合っていますが、そういう問題じゃないんですよ？

「バイト先ってもう、9時ですよ？ 中学生がこんな時間までバイトしてていいんですか？」

「あいやー、まるで教師の様な事をいうアルね。

でも大丈夫アルよ。ここのオーナーもコックも同じクラスメイトあるから」

少し困ったような表情を浮かべながらそう答える古さん。でも、それ大丈夫な理由になってませんよ。

「というか、えええええ！ このお店、中学生の方が運営してるんですか！？」

古さんの物凄い暴露に、僕とアーニヤは飛び上がる程驚いた。

だって、そりゃ驚くでしょ。中学生だけが働いてるお店が夜の9時過ぎまで開いているって、これだけ聞いても問題山盛りな気がしますよ？

「だ、大丈夫なんですか、タカミチ。その色々と」

物凄く微妙な表情で、彼女たちの先生であるタカミチに尋ねる。

すると、タカミチは何故かとてもさわやかな笑みを浮かべ、ぐっと親指を立てると言った。

「H A H A H A、何を焦ってるんだい。大丈夫だよ」

何か胡散臭い程の笑顔でそう断言するタカミチ。

いや、まあ、教師であるタカミチが大丈夫っていうのなら、問題ないんだろうけど。

僕はまだ納得ができずに、でも口出しする訳にもいかず縮こまってしまう。

そんな僕と交代するように、隣で驚きつつもちゃっかりと熱々春雨と格闘していたアーニヤが声を上げた。

「あれ、ちょっと待って。という事は、ここのオーナーさんもコックさんも私と同じクラス？」

ああ、そういうえばそういう事になるね。ついでに、僕が見学するクラスのメンバーにもなる。

何というか、まだ数人しかあってないけど、物凄く変わっていて濃いメンツだよな？ 僕もアーニヤも人の事言えないけど。

いや、そもそも最近の中学生はずっとこうなのかな？

悶々と考えている僕をしり目に、アーニヤと古さんはニコニコと笑顔で会話を続ける。

「当然アル。それ以外にも向こうで働いている茶々丸だって同じクラスアルから」

何、その文化祭的なノリは？



僕は驚きつつも、周囲を見渡すと古さんと同じようにウェイターの格好をした、ちょっと耳が長い女性がローリースケートを履きながら、大量のお盆を運んでいました。

いやー、本当に濃いメンバーですね。というか、ロボットですよ？

さすが日本ですね、ロボットも勉強するんですか。

「あの方は茶々丸さんというんですか」

ふむふむと必死に覚えようとするアーニヤ。積極的なアーニヤだからこそ、色々な人とかかわりたくて、まずは人の名前を覚えようとする。

そういう明るい所が、アーニヤの長所ですね。

「そうアル。茶々丸アルよ。それで、このオーナーが超鈴音という言つアルよ」

「おや、私に何か用かネ？」

古さんが言い終わったと同時に、そんな声が聞こえてきた。

声のする方へ眼を向けると、そこには黒髪を三つ編みにした古さんとは違う黒っぽいチャイナ服を着た女の人が笑顔で立っていた。

「そちらが古が話していた、同じクラスのアーニヤに、教師を目指しているネギ坊主あるな」

にこりと人を惹きつけるような笑みを浮かべながら、そう尋ねる超鈴音さん。

そんな超鈴音さんの顔。僕はどこかで見た事があるような気がし

た。

「えっと、超鈴音さん」

「超鈴で良いネ。皆、そう読んでるネ」

僕の言葉に、超鈴さんはにっこりとほほ笑みながらそう答える。  
そんな彼女に僕はつられるように小さく微笑みながら、再び口を動かした。

「では超鈴さん。あの……、僕たちどこかで会った事ありませんか？」

疑問を口にした途端、一瞬だけカモさんから視線が突き刺さった気がしました。

S I D E : カモ

やあ、カモだ。

基本的に一般人の目がある所なので喋る事が出来ずに、大人しいペットのフリをし続けているカモだ。

うん、暇だ。

そんな事を考えながら、俺はアーニヤの肩につかまり、タカミチによるこの学園の案内を受けていた。

そして、事件が起きたのは、ネギたちが夕食をとるために入った飯屋であった。

まず、そこに居たのは数時間前にあつたあのロボがいた。

あのロボ本体かどうかは、分からないが、あれほどのロボは量産できないだろうし、おそらく本人だと思う。

とにかく、あの茶々丸というロボがいたのだ。

それだけでも、かなりの驚きだったが、その後はこの飯屋のオーナーという少女が現れた。

エヴァンジェリン程ではないが、まだ幼さの残る顔立ちをした少女だったが、問題はその名前であった。

超鈴音。

物凄く聞いた事がある名前だ。

というか、間違いなく月詠が言っていた茶々丸の関係者らしき人物の名前だ。過去の情報一切不明、国籍も年齢も、詳しい事は全く分からない謎の少女だ。

そして、そこで問題なのが、この少女とネギ少年がもしかしたらどこかであっているかもしれないという事だった。

「どこかで会った事ありませんか？」

ネギ少年が何故か絞りだすような口調で、そう超鈴音に話しかけた。その言葉に、俺は思わずネギの方に視線を向けてしまう。

もしも、ここでネギ少年と何らかの関係があるとすれば、この少女の危険度合いは更に跳ね上がるだろう。

だが、そんなネギの言葉に、何を言われたかよくわからないでも言いたげに少しだけポカーンとした表情を浮かべ超鈴音、その後  
にすぐ噴き出すように笑みを浮かべた。

「くくく、なんネ？ あつていきなりナンパかネ？」

「それはありません。僕が愛しているのはアーニヤだけですから」

おどけたような口調でそう答える超鈴音に、ネギ少年はいたって  
真面目な表情でそう答えた。

いや、素直なのはこの場合美德だが、となりで嬢ちゃんが真っ赤  
になつてゐるぜ？

「こ、このバカネギイイイ！ いきなり、なんて事を言つてんのよ  
！」

案の定、真っ赤になつたアーニヤにぼかぼかと殴られるネギ。

そんなネギを見ながら、俺は少しでも超鈴音の情報が得られない  
かと耳を澄ます。

「いや、そのごめんね。こんな場所で言うのは問題だと思うけど、  
でも僕の気持は」

「このバカネギイイイ！ もう良いから、お願いだから黙つてよ  
おおお！」

これ以上言えば必要以上に恥ずかしい事を真顔で言いそうなネギ  
に、アーニヤは真っ赤になりながら、そう答えると、不機嫌そうに  
ふんつと鼻をならして春雨をフオークでつつき始める。

「おやおや、ナンパというのはどうやら勘違いダタカ？ どうやら、可愛い彼女がいるらしいネ」

「ええ、勘違いするような事を言ってしまったって申し訳ないですが、さっきのはナンパではないです。

本当にどこかで貴方に会った事がある気がするんです。そんなに昔じゃない、最近になって」

必死に思いだそうとしながらも、首を傾げ超鈴音にそう尋ねるネギ。

そんなネギに超鈴音は、少し考えた後、小さく笑うと言った。

「ふむ、やっぱり心当たりはないネ。まあ、私はどこにでもいそうな美少女アルから、テレビでみたアイドルとでも見間違えたネ」

おうおう、随分な自信だな。

俺は呆れ、ネギはどう反応しているのかわからずに乾いた笑みを浮かべながら肯定も否定もしなかった。

「まあ、とにかくゆっくりと食べていってほしいネ。

それに休みが明けたらアーニヤは私のクラスメート、これはサービスネ」

超鈴音はそう言って、どこから取り出した肉まんをぼんつとテーブルの上に置いた。

「そっちの無口なフェレットも、肉まんの皮なら食べれるヨロシ」

フェレットではなく、オコジヨだな。

俺に向かつて超鈴音はそう言うと、にこりと笑い俺たちに背を向け、屋台の中へと帰っていく。

「ゆっくりしていくアルねー」

ブンブンと少し大きさに手をふり、屋台の中へと消える超鈴音。

あまり大した情報は得られなかったが、あの女からはどこか不自然な魔力を感知する事が出来た。本当に微量だが、通常の魔力の流れとは違う強引な流れ。

何らかの魔法か、それとも魔法陣か。

とにかく、魔法関係者とみて間違いはなさそうだな。

これは本腰入れて、調べてみないとやばそうだ。

S I D E : ネギ

お腹いっぱいにご飯を食べ、大満足した僕たちは夜の街をアーニヤの部屋がある女子寮に向けて歩いていった。

時間は10時過ぎ。辺りはうす暗く、少し古風な電灯が辺りを照らしている、良い9歳児は寝ている時間です。

アーニヤは眠い目をこすっているし、僕も欠伸を噛み殺し始めていました。

後はお風呂に入って寝るだけです。

「H A H A H A、お疲れの様だね」

目頭の涙を指ですくい取っていると、タカミチが苦笑しながらそう尋ねてきました。

「僕たちも都会に出てきて、はしゃいじやったからね。ふああつ、眠いや」

まあ柄にもなくはしゃいでしまいましたからね。それに会った人は年上の人ばかりで、疲れてしまいました。なんちゃって魔法学院にいた頃から、自分より年上の人って苦手なんですよね。

再び欠伸を噛み殺しながら、そう答える僕に、タカミチはもう一度苦笑する。

「まあ、今日は帰ったらすぐに寝ればいいよ。仕事に関しては明日、改めて説明するから」

「ありがとう、タカミチ」

そう言ってもらえるとありがたいよ。今は仕事の話ができる程、頭が回る気がしないから。

僕も微笑みながら、タカミチにお礼を言う。このタイミングで、あのぬらりひよん後頭部のおじいさんに、無理難題言われたら、拒否しきる自信がないしね。

そんな時、タカミチの胸元から少し軽快な音楽が流れ出した。

「おっと、ごめんね」

タカミチは一旦、歩きながら胸元から携帯を取り出すと耳をあて

る。

「はい、高畑ですが。 はい、はい。 ですが、今

分かりました」

電話をしていく間に、どんどん困ったような表情になっていくタカミチ。

「では、20分後 え、では 分かりました、すぐに向かいます」

最後には渋柿を口いっぱいに放り込まれたような顔になり、電話を切りました。

何かあったんでしょうか？

表情から見て、ちょっと厄介事っぽいんですけど。

僕がそんな事を考えていると、タカミチはポケットに携帯をしまいいこみ、ガシガシと頭を搔くと僕に向かって本当にすまなさそうな顔で言う。

「あー、ネギ君。 ちょっと大至急行かなければならない仕事が入ってしまったね」

仕事の電話でしたか。というか、この時間に呼び出される話って、教師の話ではなく、もう一方の話っぽいですね。それだったら、ここは、関わらないのが吉です。

「このまま君たちを送っていけそうにないんだ。だから、僕と一緒に」



「そうなんだ、仕事って大変だね！ それじゃあ、僕たちは先に帰るよ。」

タカミチの家の鍵は預かっている奴でいいんだよね？」

何か巻き込まれそうな気がしたので、僕はタカミチが何か言い終わる前に、押し切るようにそう答えます。そんな僕に、一瞬だけ呆気にとられるタカミチ。

「いや、しかし、夜中に子供だけで出歩くのは危険だしな」

渋い顔をしながら、そういつてくるタカミチ。

心配してくれるのは嬉しい。でも、僕にとっては多分このままタカミチに連れて行かれるほうが、嫌な予感しかないんだよね。

具体的には、ついた先はあのぬらりひょんが待っていて、今度は『魔法使い』として仕事の契約をさせられそうな、そんな予感。

「大丈夫だって、家までもうすぐでしょ。ここの地理は大体覚えちゃったし」

正直言っつて、今は今朝の様に舌戦を繰り広げれる気がしないし、このまま帰った方が、僕にとっては限りなく安全な気がする。

うーん、でもなつと頭をガシガシと掻きながら、渋るタカミチ。

そんなタカミチに、少し先を歩いていたアーニヤが自慢げに胸を張って言った。

「大丈夫よ、タカミチ！ この私がついてるんだから！」

「……まあ、そういう事だから」

根拠のない自信満々なアーニヤの言葉に、僕は苦笑しながらそう答える。そんな僕たちにタカミチも小さく苦笑すると言った。

「うん、分かったよ。だから、寄り道せずに戻すすぐ家に帰るんだよ」

「もう、私は子供じゃないわよ！」

にこりと笑うタカミチに、アーニヤが少し拗ねたようにそう答える。いやまあ、僕たちどう見ても子供なんだけどね。そんな僕たちを見て、タカミチは再び苦笑する。

「それじゃあ、僕は行くね」

それだけ言い残すと、シュタツとジャパニーズ忍者のようにその場から消えてしまった。魔法って極めるとああなるんだな、と思いながら僕はアーニヤの方を向く。

「それじゃあ、行こうか」

「そうね。同室の桜咲さんや龍宮さんが心配するし」

僕の言葉に、アーニヤも笑顔でそう答える。

そして、僕たちは顔を見合わせ、小さく笑うと、お互いの手をゆっくりと握り歩き始めた。

周囲には誰もおらず、うす暗い闇と少し洋風な建物、そしてそれらを照らす街灯だけがあった。

うす暗い闇がアーニヤの顔を隠し、その表情まではよく見えなかった。でも、おそらく今のアーニヤは顔を赤く染めているのだろう。

手をつないで帰るなんて、ずっと前からしているのにアーニヤは  
いまだに顔を赤くする。

そんな意地っ張りで可愛いアーニヤを見て、僕は小さく笑っ  
た。

「そういえば久しぶりだね。アーニヤと二人っきりで出かけるのっ  
て。

本当はもっと一緒にあちこちでかけたかったんだけどね」

アーニヤの手をやさしく握りながら、僕はそう言う。

そんな僕の言葉にアーニヤは少し焦ったようにびくっと身体を震  
わせて、小さくため息を吐き出すと答える。

「つつ、このバカ……」。

でも、そうね。私は日本語の勉強でこもりつきりだったし、  
ネギも色々大変だったみたいだしね。

私だって、色々でかけたかったわよ」

その言葉はいつもの強気なアーニヤではなく、素直な気持を答え  
てくれる。

そんなアーニヤの言葉に、僕は嬉しくなる。

「そうだね。でも、まだまだ時間はあるよ」

ゆっくりとアーニヤの部屋に向かいながら歩く僕たち。

遠くにある街灯がぼんやりと薄く光り、大きな月が僕たちを照ら  
してくれた。レンガ造りの家が建ち並び、冷たい風が僕たちの頬を  
撫でていった。

何というか、周りの少しアンティークで洋風な雰囲気も合わさって凄くロマンティックな気分になる。

このまま二人つきりですっと歩いていたい気分だ。アーニヤの肩にはカモさんが乗ってるけど。

「おいおい、お二人さん、盛り上がってる所悪いが、ちょっとした朗報だ」

そんな僕たちに今までずっと黙っていたカモさんが声をかけた。

「なっ、ななななな！ このバカオコジョ！ いつの間に！」

肩の上にあったカモさんに驚くアーニヤ。というか、ずっと肩の上にいたのに『いつの間に』は無いと思うんだけど。

真っ赤な顔をしながらアワアワとしているアーニヤ。そんなアーニヤに僕は苦笑しながら、少し真面目な顔でカモさんに尋ねる。

「朗報って何ですか？」

「ああ、この道の先は物凄くヤバい感じがするんだ」

いつの間にかどこから取り出した煙草をくゆらしながら、そう答えるカモさん。いつもの事ですけど、随分唐突な話ですね。

「ヤバいってどういう事ですか？」

煙を吐き出すカモさんに、僕が尋ねると、カモさんは小さく肩をすくめながら答えた。

「そのままの意味だよ。嫌な予感がする。」

俺の予感が外れた事ってあったか？」

「残念ながら、ないんですよね」

カモさんの予感は、ほぼ百発百中だった。今までも、その予感のおかげで助かった事が多い。

そんな事を考えながら、街灯の光とレンガ造りの家しかない道の先へと目を凝らす、僕の視力では何かあるようには思えない。

「俺は他の道を行く事を進めるぜ。主人を守るのも使い魔の役目だしな」

少し苦笑気味にそう言ってくれるカモさん。カモさんは気ままな風来坊だけど、本当に助けが欲しい時は僕たちを助けてくれます。だから、僕たちはカモさんを信用してるし、信頼してます。

でもですね、カモさん。僕たち帰る道って、この道しか知らないんですよね。

飄々としているカモさんを見ながら、僕は小さくため息を吐き出した。

……はあ、何かすごく面倒な事に巻き込まれる予感しかしない。

中略、姉上様。都会の夜は意外とロマンチックでした。（後書き）

本当は最後まで書きたかったんだけど、長くなったので一旦ここで区切りまーす。

後略、姉上様。麻帆良学園に平和の文字はない様です。（前書き）

ははは、ハイペースで続きを投稿だ！  
燃え尽きる気しかないぜ。

後略、姉上様。麻帆良学園に平和の文字はない様です。

この世の物とは思えない奇声が僕たちの耳へと届いた。

その声は明らかに、この世の生物のモノではなく、耳を劈くような気持ちの悪い奇声だった。

「カ、カモさん、こっ、これが嫌な予感ってやつですか？」

進むべき道の暗がりの向こうから聞こえてくる声とも音とも区別のつかない奇声に僕とアーニヤはとても嫌な顔を浮かべる。

西洋風のレンガ造りの建物、満月の夜、灯る街灯。先ほどまではロマンチックだったこの情景が、奇声の一声で、どこかのB級ホラーのような状況に早変わりしてしまった。

「ああ、あれだろうな。それもとびつきりな嫌な予感の正体だろう」

違ったら嬉しいなと発言した僕の言葉に、カモさんは無慈悲にも煙草を燻らしながらそう肯定する。

僕もどう考えても嫌な予感しかしません。カモさんの言葉に、僕は小さく息をのむと、アーニヤを守るようにギュッと抱きしめると、奥にある通路をにらみつける。

「ちよっ、ちよっとなギ！」

「アーニヤ、今は黙ってて」

抱きしめられた事で、真っ赤になり胸の中でもゴモゴモ言っている



アーニヤに、僕はそれだけ言うと、アーニヤを連れてすぐに近くの建物の影に隠れる。今は緊急事態であり、アーニヤを守るのを最優先しなければならぬ。その次は僕とカモさんの命だ。

まあ、旅オコジヨのカモさんは色んな経験をしてるから一人でも大丈夫だと思うけど。

おそらく迫ってきているだろう、謎の嫌な予感の正体の事を考え、僕はどうすればいいのかと頭を回転させる。

下手に逃げ回っても地理の知らない僕たちが安全な場所に行けるとは思えないし、迷ってしまつては最悪だ。逃げ回るとするのは悪手だろう。

だからと言って戦うという手段は元から存在していない。最悪の場合、僕が盾になつてでも守るが、それは本当に最後の手段ではない。

……僕が死んでしまつたら、アーニヤも悲しむだろうし。

惚気でもなんでもなく、ただ事実として僕はそう考える。アーニヤが僕の事が分かるように、僕だつてアーニヤの考えてる事が分かるのだから。

だから、今はよくわからないカモさんの嫌な予感の正体を隠れてやり過ごすのが一番いいだろう。

僕はそう判断し、アーニヤを抱きしめながら身体を小さくし、出る限り誰にも見つからないようにする。アーニヤの肩の上にいるカモさんはまだ煙草をくゆらしながら、現状を見守っていた。

「……来る」

カモさんがポツリとつぶやいた。その声と同時に耳を劈くような轟音が僕たちの近くで聞こえてきた。まるで、何かが爆発した様な音だ。その音に僕とアーニヤは怯えながらも音がした方へと目を向ける。

「っ、あれは……」

轟音を発した存在を前に、アーニヤは涙目になり、僕は思わず絶句し、そしてカモさんも驚いたような声を洩らした。

暗がりの中、街灯に照らされるように映し出されたのは、異形の生物だったのだから。

それは、動物と動物を子供がこねくり回したように、不気味で不揃いな、生物だった。

いや、生物というのは正しくないかもしれない。アレは生物でも無機物でもない、ナニカかだった。

そのナニカはそのそと何かに導かれるように、ゆっくりと歩き出した。

歩く度に肉片のような物が地面に落ち、落ちた肉片がまるで磁石に集まる砂鉄のように、再びナニカの身体に付着していく。

時折、脳を直接揺らすような奇声を空に向かって咆哮し、口から濃い紅色の煙を吐き出していた。

「っ！」

どう考えてもまともな存在ではない。

あの存在を目に入れるだけで、僕の背筋が冷たくなるのを感じる。

もはや心的障害化<sup>トリアップ</sup>してしまっている、あの悪魔襲来の日を思い出させるような、そんな化け物だった。

フラッシュバックしてきそうになる過去の記憶を、僕は必至で押しとどめ、今の状況を出来る限り理解しようと頭を動かす。最悪の事態も想定し、少しでも情報を集めようととにかく目を凝らした。

化け物が先ほどの脳を揺さぶる咆哮をあげる。

僕は力強くアーニヤを抱きしめ、身体を小さくし、少しでもバれない確率を増やす。

アレが何なのか分からないが、どう見ても友好的には見えない。そもそも、理性がある様には見えない。絶対に見つかってはいけない。

僕の本能が警鐘を鳴らす。

見つかつたら、十中八九殺されてしまう。

喉の奥からのぼってくる恐怖を飲み込み、アーニヤを抱きしめながら僕たちは、声を殺し、息をするのも忘れ、僕たちはあの化け物が通り過ぎるのを待ちます。

喉が異常なほど渴きを訴えてくる。

心音がこれ以上ないくらい大きくなり、震えるアーニヤを抱きしめる。

一秒一秒がとてつもなく長く感じる。

一步、一步とゆっくりながらも、僕たちに気づかずに通り過ぎていく化け物。

そして、化け物は完全に僕たちの隣を通り過ぎた。  
安堵しますが、まだ気は抜けない。通りすぎたとはいえ、まだ近くにあの化け物がいるんだから。

息を殺し、感覚器官を研ぎ澄ませ相手の事を観察しながら、僕は化け物がどこかへと消えていくのを待つ。化け物は何も気づかない。

これは、何とかなるんじゃないか。僕がそう考えた時、

化け物の身体が見えない何かに貫かれました。

ガラスを引つかくのような甲高い悲鳴をあげて、その場に倒れる化け物。

えっ、ええ？

突然の展開についていけなくなる僕。というか、この学園についてから展開についていけた事がない。

そんな事を考えている間に、倒れた化け物に向かって良く分からない衝撃波の様なものがいくつも飛んできて、化け物を細切れにしていく。

何があったのかわかりません。でも、ここで声を上げるようなミスは起こしません。

声を上げようとしているアーニヤの口をふさぎながら僕は息を殺します。

化け物を倒した奴が、味方だとは限らないのですから。

「これで最後だな」

ぶつ切りにされた化け物の近くに黒いスーツにサングラスという、どう見ても不審者の格好をしたオールバックの男の人が降ってきました。

その人の隣に日本刀を持った髪の毛の長い女性もやってきます。

「そうみたいね。向こうは高畑先生が行ってくれた様だし」

髪の毛の長い女性は、少し疲れたように髪を掻きわけながらそう呟きます。

とりあえず、登場してくれた人が人間である事に安堵し、女の人が言った高畑先生という言葉に更に安堵しました。どうやら、この学園の人間の様ですね。

「それにしても、ここ最近多い」

「ええそうね。これも関西の方が活発になっっている証拠かしら」

「早めに手を打たないとな」

相談する様に二人はそう話します。僕はそんな二人の相談に耳を澄ましながら、どうするべきかを考えます。僕の見立てでは、彼らはおそらくこの学校の魔法使いだろう。

それならば、ここで保護して貰った方が一番安全だと思います。

ですが、もしこの学校の魔法使いではなかったとしたら、それは非常にマズい事態です。

「どうでしょうか、カモさん。おそらくこの学園に所属している魔法使いだと思いますけど」

僕はアーニヤの肩に乗っているカモさんに話しかけます。アーニヤは何かもがもが言っていますが、物凄く興奮しているようなので、まだ少し黙ってもらいます。ここで変に声をあげられても困りますから。

そんな事をしている僕に、カモさんは少し考えた後に答えてくれました。

「そうだな、問題はなさそうだ」

カモさんの言葉に僕は安堵しました。これでどうにかなりそうです。

僕は小さく息を吐き出し、アーニヤの口をふさいでいた右手をのける。

「ちょっと、バカネギ！ 何してくれてるのよっ！」

「誰かいるのかっ!?!」

その途端、先ほどまで黙らされていたアーニヤが大声をあげ、相談していた不審者風の男の人たちに気づかれてしまいました。

男の人たちは警戒しつつも、こちらへと向かってきます。ですが、僕は今は男の人たちよりもアーニヤをなだめる事を先決する。

「と、とりあえず、落ち着いて。もう危険はないんだから」

「こっ、この超ウルトラスーパーエクセレントオオバカネギ！いきなり抱きしめるなんて何考えてんのよ！しかも、あんな時に口をふさぐなんて！」

顔を真っ赤にしながら、そう怒鳴るアーニヤ。

そんなアーニヤに僕は困ったような表情を浮かべつつ、興奮して今にも暴れ出しそうなアーニヤに話しかける。

「お、落ち着いて、アーニヤ。あの時は仕方なく」

「そこに誰かいるの「仕方ないですって！これだからバカネギは！」！」

あうあう、どうしましょう。物凄く怒ってます。こちらに近づき声をかけてくれた男の人の言葉をかき消すぐらい大声を上げています。

僕はおろおろしつつも、とりあえずアーニヤを宥め様とする。

「だから、あの時は危険だったから」「うおおっ!?!」

仕方なかったんだ、僕はそう言おうとした瞬間、アーニヤは物理的に燃える拳で僕を殴りつけました。

突然殴られた僕は吹っ飛び、驚いた声をあげる男の人の目の前を通り過ぎ、2メートル程先にあった建物に激突します。

壁に叩きつけられ、一瞬何が起こったのか分からずアーニヤを見上げる僕。

そして、アーニヤの顔を見て、僕は驚きました。

暗がりにはいましたが、アーニヤが泣いている姿がはっきりと見え  
たのです。

「……アーニヤ」

思わずそう呟いてしまう僕に、アーニヤはゆっくりと僕に近づくと、やさしく僕を抱きしめてくれました。

「……バカネギ。少しは私も頼りなさいよ」

「っ……っ、ごめん」

先ほどとは逆に優しくアーニヤに抱きしめられる僕。ポツリとつぶやくように言われたアーニヤの言葉に、僕は謝る事しかできませんでした。

そうでした。アーニヤは僕に守られるだけの存在じゃないんです。

今さっきまでアーニヤを守ろうとしていた自分に、そしてアーニヤに助けを求めなかった自分に、僕は小さくため息を吐き出します。どうやら、先ほど僕は物凄くテンパっていた様です。そんな基本的な事も忘れてしまっただなんて。

僕が英雄を目指すのを辞めた、あの日。

自分だけで生きているのではなく、多くの人に支えられていた事に気がついたあの日。

あの日に気がついた事だったのに、僕は。



「心配したんだから、ネギ」

涙を流しながら、優しい手で抱きしめてくれるアーニヤ。

どれほど、僕の事を心配してくれたのでしょうか。

どれほど、僕を助けてくれたかったのでしょうか。

「ごめん、アーニヤ」

痛いほど伝わってくるアーニヤの気持ちに僕はただ謝る事しかできませんでした。

そんな僕をアーニヤは更に優しく抱きしめてくれ、ゆっくりと首を振りました。

「分かればいいのよ。それに、ネギが無事で本当に良かった」

「うん……」

「……あー、その盛り上がってる所悪いんだけど、ちょっといいかしら。」

「というか、ガキの分際で甘いラブロマンスをかもし出してんじゃないわよ！」

そんな僕たちにそんな女性の声が割り込みました。

一体何の声かと僕たちが視線を向けると、そこには刀を持った何

故かちょっと般若の様に怒っている女性と、オールバックでサングラスの男性が困ったような顔を浮かべている男性が立っていました。

あー、そういえば彼らの存在をすっかり忘れていました。

「こんな時間に街を出歩くなんて、何年生！？ 名前は！？」

何故かぶつけるように質問してくる女性。物凄く怒っているようです。

そんな女性に、隣にいた男性が小さくため息を吐き出し、抑えてくれます。

「葛葉、ちょっと落ち着け。質問は俺がするから」

「だけど、こいつら！」

「愚痴なら後できいてやるから。落ち着け」

尚も暴れようとする女性に、男性は呆れたような表情を浮かべながらも何とか女性を押さえつけてくれました。そして、小さくため息を吐き出しました。

「あー、すまん。だが、こんな時間に一体どうしたんだ？ 名前は何？」

「あつ、すみません。僕の名前は……っ！ ネギ……スプリングフィールド」

あれ？ 僕が名乗る前にオールバックの男性が驚いたような顔を浮かべました。

えっと、どうして僕の名前を知っているのでしょうか？

首を傾げる、僕とアーニヤに男性は少しだけ考え込むと言いました。

「いや、すまん。まずは自己紹介をしよう。」

俺は、この学校の魔法先生をしている神多羅木だ」

「同じく、魔法先生をしている葛葉 刀子です」

魔法先生？ 僕は首を傾げる。

そんな僕に神多羅木さんはふむと考えながら、教えてくれます。

「魔法先生というのは、この学園で……まあ魔法関係のトラブルを処理する教員の事だ。」

こつ見えても、この学園は西の呪術協会と仲が悪いからな」

……なんて危険な所。

物凄い事実を暴露してくれた神多羅木さんに、僕はおそらく物凄く嫌そうな顔を浮かべている事でしょう。というか、そんなに仲が悪いのに一般人もくる学校組織を作ろうとしたのか理解ができません。

「君たちはネギ・スプリングフィールド君とアンナ・ユーリエウナ・ココロウア君で間違いないね」

「ええ、そうですけど」

何故知っているのか疑問を抱きながらも頷く僕に神多羅木さんは仏頂面を崩す事なく教えてくれた。

「何故知っているのか、疑問に思っているんだろ。」

君たちの話は学園長から聞いたんだ。ネギ・スプリングフィールドがくると魔法先生たちには大々的に宣伝していたしね」

うわー、あのぬらりひょん。なんつーことをしてくれたんだ。

僕は痛くなる頭を押さえる。そんな僕に神多羅木さんは小さく苦笑すると言った。

「まあ、だからと言って何かしてくる様な奴らもない。気にする事はないさ」

そうでしょうか？　なんか、色々と嫌な予感がするんですけど。

だって、中学の担任教師をやれなんていう無茶をいうぬらりひょんが学園長で、色々と僕たちの知っている常識とはずれている学園で、おまけに化け物が出るなんて、どう好意的に見てもマイナス評価でしょう。

不安を拭いきれない僕に、神多羅木さんは小さく笑いました。

「ははは、本当に話通りの様だな、ネギ・スプリングフィールド君」

「話通り？」

神多羅木さんの言葉に首を傾げる僕。そんな僕に神多羅木さんは小さく肩をすくめる。

「いや、こつちの話だ気にしないでくれ。」

それよりも葛葉。俺はこのまま学園長に報告に行くから、お前は彼らを家まで送っていつてくれ」

「分かったわ。」

「さあ、家を教えて頂戴。案内するわ」

指示を出す神多羅木さんに、素直に頷く葛葉さん。

そんな葛葉さんに僕たちは今日決まった家を教えると、葛葉さんはそのまま家に送ってくれる。

「ほら、早く来なさい。子供は寝る時間よ」

そう言っただけで先へ進む葛葉さんに、僕は小さく苦笑しながらも、サングラスをしたままゆっくりと月を見上げている神多羅木さんに言った。

「あの神多羅木さん、ありがとうございました」

「いや、いいさ。気をつけて帰れ」

「本当に置いていきますよ！」

いつの間にか先に行っている葛葉さんとアーニヤ。そんなアーニヤたちを追いかける僕。

神多羅木さんか、なんか渋い感じの人だったな。

タカミチを『陽』の渋さだとしたら、神多羅木さんは『陰』の渋さって感じがするな。

でも、良い人そうだし良かった。

僕はそう思いながら、急いでアーニヤたちを追いかける。

……ってあれ？ アーニヤの肩にカモさんが乗ってないんだけど、

またどっかに行ったのかな？

S I D E : カモ

行ったか。

家へ帰っていくネギ少年たちの背中を見ながら俺は少年たちが完壁に姿が見えなくなるのを確認すると、少年たちから離れ一人残り、サングラスをかけながら空を見上げている神多羅木に言った。

「何の用だ？」

「…………いや一度、ネギ・スプリングフィールドのお目付け役と話をしたくてね」

神多羅木は空を見上げながら、苦笑する様にそう答えた。

そんな神多羅木に俺は、疑り深い目を向ける。

「…………お前は」

「ああ、レジスタンスの一員さ」

何でも無い事のように答える神多羅木。そんな神多羅木に俺は怪訝な顔を浮かべる。

「いいのか、俺に話して？」

そんな俺の言葉に神多羅木は小さく肩をすくめると言った。

「問題ないさ、俺の仕事はアルベール・カモミールの監視なんだからな。」

それに当然だが、俺以外にも仲間はある」

ふん、正体を話しておけば正々堂々と監視ができるって訳か。

「そう、嫌そうな顔をするな。一応、お前は仲間なんだろう？」

「仲間じゃねえ。お前らは所詮、依頼人でしかないからな」

俺の言葉に神多羅木は小さく肩をすくめる。

「噂通りの男だな、お前は。まあいい、どうやらお前は仕事を果たしている様だしな。」

俺も仕事に戻るとするよ。これ以上話していると、あのぬらりひよんに見つかりそうだし」

そう言っただけ軽く手を上げると、ゆっくりと闇の中へと消えていく神多羅木。

そんな神多羅木に俺は不満げに鼻を鳴らす。

ふん、やはり、奴らの仲間が潜入していたか。

それにしてもあの神多羅木とはな。どうやら、奴らは本気でこの土地に何かしようとしている様だ。

「くそ、面倒だな。それに、」

俺は吐き捨てるようにそう言うと、先ほど神多羅木達に細切れにされた化け物の死がいへ目を向ける。

「関西の奴らの仕業……ねえ」

ゆっくりと闇に解けるように消えていく化け物の死がい、俺は小さくため息を吐き出した。

「どうやら、人知れず何かが動いているようだな」

完全に無へと帰った死がい、俺はそう呟くと、ゆっくりと空を見上げた。

空には嫌になるほど大きな満月が輝いていた。



後略、姉上様。麻帆良学園に平和の文字はない様です。（後書き）

ようやく物語が動き始めました。

というか、これでようやく麻帆良に来て最初の一日が終わりです。

うん、長い。

見た目は子供、頭脳もどちらかと言えば子供。(前書き)

最近、月詠成分が足りなくなったので補充しますぜ。

見た目は子供、頭脳もどちらかと言えば子供。

冬空というのも中々乙なものですなあ。

うちはよく晴れた冬の空を見上げながら、麻帆良学園の中をただ歩いた。

理由は麻帆良の地理を理解するため。

麻帆良の中は物凄く広くそれで入り組んでいますから、まだ数日前に来たうちには、全部を理解しきれっていまへん。せやから、こっやって街をぶらぶらと歩きながら、気になつた事をメモする。

この学園を調べるのが、カモはんには任せられた仕事ですからなあ。

戦闘が主な仕事のうちですが、こういった潜入任務程度なら朝飯前どす。それでも、何年もカモはんについていた訳ですから、嫌でも仕事はできる様になりますえ。

そんな事を考えながら、あの大きな樹の広場を通り抜け、店が立ち並び賑やかな場所へと足を運ぶ。この場所は、まだ学校も休みですから、色々な人が街の中を歩いていきますえ。

相変わらず賑やかですな。学生の人があちこちを楽しそうに歩いております。

それにしても、学生ばっかですなあ。ちょっと変な感じがします。

多少の違和感を感じ私はメモに『学生多い。変』と書きこむ。ほんの少しの違和感からでも、何かの糸口が見つかるかも知れまへんからな。

ちなみに書きこんでるのは、子供が持つような人気キャラクターの絵が書かれた自由帳。

今のうちの姿はただの小学生やから。

「詠子さーん！」

そんな風にあちこちを練り歩いているうちに、そんな声がかげられた。

何の声かとうちが振り返ると、そこには変な格好をした小学生低学年ぐらいの女の子が走ってきていた。

ほえ、あの姿は確か……。

「なんや、望はんですかー」

あまり興味がなかったの、それだけ呟くと再び足を動かす。

これが武器を持って襲ってくる人間や、魔法をぶちかましてくる化け物とかやったら血が滾ったのに、非常に残念ですえ。

服の中に隠した小太刀の感触を確かめながら、うちは小さくため息を吐き出した。

当然ですが、この麻帆良に来てからほとんど戦闘は行っていません。うー、やっぱり、小学生暮らしはストレスがたまりますえー。

「ちょっと待ってー！ 気づいたんなら待っててくれてもいいだろー！」

そんなうちの後ろから、望はんが涙目になりながら、追いかけてきます。

それにしても、この学園は変わった所ですなー。ちょっと調べた

だけでも出てくる情報は常識外れも良い所ですえ。それも、裏だろ  
うが表だろうが関係なくですえ。

裏で言えば、まずは闇の福音が最初に挙げられますなあ。

まあ、魔法世界を代表する大悪党の一人でありますから。何を考  
えてこの麻帆良にとどまっているのか。できれば殺し合ってみたい  
お人ですえ。

サウザン下マスター

噂では千の魔法の男に封じられたという話ですが、本当の所は分  
かりません。『桜』の情報で調べた、ナギ・スプリングフィール  
ドはただの馬鹿で封印術なんて使えなかったという話ですし。

そして、闇の福音を調べると芋づる式に出てくる存在が絡繰 茶  
々丸。

簡単に言ってしまうえば、機械ですえ。おうぶあーてくのろじいと  
いう奴ですー。

カモはんからしてみたら、ただの吸血鬼よりもこっちの存在の方  
が重いでしょな。

未知というモノを徹底的に嫌うカモはんですから。

カモはんの前世とも違い、『桜』とも違う機械の存在は気になる  
筈ですえ。

そうそう、カモはんの前世の話は随分と前に聞かされました。と  
いうか『桜』を結成した時にうちや幹部の連中に話してくれました  
え。

詳しい話は聞けてまへんけど、随分と物騒な世界やったらしいで  
す。

あー、一回行って暴れまわりたいですえー。

「聞いてるかー？ 無視か！？ 年下だからって私を舐めんなよお  
おお！？」

絡繰 茶々丸の存在、というかおうぶあーてくのろじいに関して  
は表でも有名ですえ。

それはもちろん絡繰 茶々丸の様な高性能な機械ではなく、もつ  
と程度の低い機械ですが、それでもこの学園は他の国と比べても高  
い技術力を持っておりはります。一部では麻帆良ブランドとして熱  
狂的なファンもいるとか。

他にも裏では、紅き翼のメンバーでガトウはんの弟子でもあつた  
高畑・Ｔ・タカミチや、魔法の導き手と呼ばれた近衛 近右衛門、  
黒きハイエナと呼ばれた神多羅木など人物だけで言っても一度は殺  
し合いたい、かなりの曲者が揃っていますえ。

うーん、これは一度ガトウはんに連絡いれて、高畑・Ｔ・タカミ  
チの情報だけでも調べて貰った方がええ気がします。もしかしたら、  
何か知ってはるかもしれまへんし。

「よーしこうなったら、必殺、望ダイブだ！

説明しよう、望ダイブとは超人的なパワーを有して空高く飛び上  
がら、相手の元に力強く落ちる事で、相手にダメージ&抱っこして  
貰える素晴らしい必殺技なのだ。

という事で、とおー！」

ひょいっと、降ってきた望はんを避ける。

べちんという子供には痛そうな音を発てて、アスファルトにぶち  
当たる望はん。というか、受け身ぐらいしたらええのに。

何となく降ってきた望はに目を向けるうち。

望はんは、しばらく落ちたままの体勢で動かなかったが、むくりと顔を上げて言った。

「……、泣かないもん」

「偉いですなー。そやけど、とりあえず鼻から出てる血は拭いた方がいいと思いますえー」

なんだなんだと人が集まってきたてしまいます。

このまま放っておいたら、どんどん目立ちそうやから、うちは小さくため息を吐き出してポーチに入っているハンカチを差し出す。

「うっ、ありがとう」

望はんは、礼を言ってハンカチを受け取り、鼻の下をふきふきする。

そして、恐る恐る自分の鼻を触ってもう血が出ていない事を確認すると、何故かびしっとポーズを決めて叫んだ。

「うっ、涙は女の勲章だ！」

「泣いてないんじゃないやありまへんでしたっけ？」

よくわからない事を言う望はん。ちょっと涙目になってますえ。

「泣いてない！」

「そっどすかー」

うちはそう言って、さつさと他の場所に行こうとするが、そんなうちの服を望はんが掴んで離しまへん。少しため息を吐き出して、周囲に目をやると、望ダイブがあった所為でいろんな人が奇異の目でこっちを見てきます。

「仕方ないどすなー」

このまま無視し続けても目立つだけやし、絶対に後をついてくるやろうから、うちは仕方なく望はんを連れて、話を聞くために近くの喫茶店に入りました。

「おお、単身で喫茶店に突入できる！　これが大人の世界！」

「感動してる所悪いですけど、別に大人の世界ではないですえー」

うちが入ったのは、特に変哲もない普通の喫茶店。

店内には微かにジャズが流れ、大学生ぐらいの男の人がマスターをやっていました。

「望はんは、何を食べはります？」

渡されたメニューを眺めながら、望はんはそう尋ねるうち。

そんなうちの質問に、望はんは元気よく答える。

「チャーハン！」

「……すみませーん、チャーハンっておいてはります？」

とりあえず、マスターにそう尋ねるうち。



そんなうちに、マスターは小さく苦笑しながら『特別だよ』とい  
って作ってくれる事になりました。

何でも言ってみるもんですな。ちなみに、うちは普通にコーヒー  
ですえ。

「うわうわ、私知ってるよ、それはブラックコーヒーだ！」

飲みきる事が出来たら大人と認められる、特殊な墨汁だな！」

「全然違いますえー」

コーヒーを飲んでいるうちに、何故かテンション高くそんな事を  
言ってくる望はん。

そんな望はんは、うちは小さく肩をすくめる。

「そう言えば、うちに何か用があったんですか？」

一口コーヒーを飲み、うちは望はんは尋ねます。

「えっ、用って何だ!？」

うちの言葉の意味が分からなかったのか、望はんは首をひねる。  
そんな望はんは、うちは小さくため息を吐き出します。

「さっき、うちを呼んでたから何か用事でもあったんやろかと思っ  
ただけですえ」

「それは、式集院先生に詠子さんに接触しろとっじゃなくて！ ち  
よっとタイム！ 今の無しで！」

えっとその、えっと、そう！ たまたま詠子さんを見つけたから  
で！ そういう事で！」

隠してるつもりなんやろか？　　うちは首をひねりながらも『そうですかー』とだけ呟く。

この子の名前は宇佐美　望といいうちより2つ下の学年の女の子ですえ。

すごく元気で、明るく一直線の女の子で、まあ今の言葉で分かる通り魔法生徒をやってはります。一応、うちには隠してるつもりらしいですけど。

「……そういえば、望はんの夢ってなんでしたっけ？」

「世界一強くなって、世界で一番の魔法っじゃなくて、えっと、ま、ま、薪割り職人になる事！」

隠せてまへんな。

ちなみに、現在のうちは月野　詠子としてこの学園の女子初等部4年に編入しました。

一応、魔法を知らない一般人という名目ですが、設定としては『ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグの友人であるメガ口政府の役人が保護した戦争孤児で、両親は優秀な魔法使いだったが本人は魔法の事を知らずに育っている。魔法に関する事は出来る限り教えないように』という事になっています。

せやから、ちょっとぐら魔法の知識があつたり、常人外れの身体技術があつても何とかごまかせるというお得な立場ですえ。

余談やけど、私がこっちに来てる事はカモはんの依頼人であるレジスタンスの人たちにも教えてますえ。情報を教えとかないと、変にブッキングしたりしたら問題ですからな！。

まあそういう訳で、ここの魔法使いが警戒してか、それとも心配してか知りませんが、2つ下の望はんと、もう一人、灯はんがうちのお目付け役となっております。灯はんも年下ですえ。

年下ばかりですな。何というか、この学園は人材不足なんやるか？

ネギ・スプリングフィールドを迎え入れたのは、もしかしたらただの人材補給なんやないかとすら思ってしまうすなあ。

「そつ、そんな事より、詠子さんは何してるんだ。何か用事でもあったのか？」

望はんは幼いなりに、この話題はダメだと理解したのか慌てるように話題を変え、そう言うってくる。別にうちも望はんを魔法使いだと暴きたい訳ではないので、その話題に乗って答えます。

「別に用事なんてありまえへんえ。」

「まだまだこの学園に来たばかりやから、どこに何があるかを調べてるんですえ」

「そんな事か！ だったら、私と灯が案内してあげるよ！」

うちの答えにどんと胸を叩く望はん。

そして、強くたたきすぎた所為かちょっとむせ、涙目になる望はん。

「うちとしては一人で回りたいんですけどなー」

「遠慮すんな！ 私はこう見えても顔が広いんだから！」

さすがに偵察したいから一人にさせてくれとは言えずに、言葉を濁すうちに望はんはお得意のハイテンションでそう言い切りませう。お子様には、遠まわし過ぎて理解してもらえへんな。

「どうやって断ろうと考えているうちに、望はんは力強く言います。

「灯と一緒にあちこち歩いているから、色々知ってるんだよ！

図書館島とか、中等部、高等部とか」

「うーん、そうですね。色々と例をあげて終わってくれる望はんは、うちは少し考える。」

「ちょっと一般的な魔法生徒がよく行く場所も調べてみましょうか。まあ、けして望はんが一般的かどうかは置いておいたとして。」

「うちはそう考えて胸をどーんと叩き続けている望はんに言います。

「分かりました。それやったら、案内してもらいますえ」

「うん、任せちゃってよー！」

「うちの言葉ににへへと少し照れたように笑う望はん。」

「はいよ、チャーハンお待ち」

「そんな事をしていると、マスターがチャーハンを持ってきてくれました。」

「とりあえず、望はんはそれを食べるころから始めまひよか。」

「っというわけで、灯！ さあ、探検だ！」

「えっ？ そういうわけってどういうの、望ちゃん？ 顔怖いよ？ というか、近いよ？」

チャーハンを食べ終わり、喫茶店を出た後、望はんと一緒にまずはもう一人のうちの目付け役でもある灯はんの所へとやってきました。そうそう、どうやって灯はんがいる場所が分かったかと望はんに聞くと『勘だ！』と元気に答えてくれました。

チャーハンを食べた所為か、何故か物凄くハイテンションな望はんに、灯はんは涙目になる。

ちなみに、この灯はんは幼稚園生どす。

望はんの2つ下で、望はんとは違いちよつと内気な性格どすなあ。

「どういうわけもない！ 詠子さんにこの街を案内するんだ！  
それもあんなところやこんなところまで！」

「あつ、あんなところやこんなところ！？ それは大変だね！」

あんなところやこんなところってどこなんやるか？  
ハイテンションの望はんと、何故か物凄く驚いている灯はんに、  
うちはついてきた事は早くも後悔し、大きくため息を吐き出します。  
せやけど、子供だからうちの気持ちは全く察する事なく、望はんはぐつと力を入れると言った。

「じゃあ、まずはいつも私たちが遊んでる広場から！」

「う、うん、そうだね。望ちゃん。頑張るよ」

えいえいおーと拳を突き上げる望はんと、何を頑張るのか分かりまへんが頑張ると答える灯はん。

そんな二人は早くも帰りたくなっただうち引き連れてどんとどんと歩いていきますえ。

気分はドナドナどすなあ。

「あつ、おばちゃん達！ こんにちはー！」

「あら、望ちゃんに灯ちゃんに、こんにちは」

「やあ、望に灯じゃないか！ こんな所でどうしたんだい？」

「えっと、広場に遊びに……」

遊びにいく訳やありまへんえ？

道にいる人にどんとどんと声をかけていく望はんに灯はん。なんと  
いうか、顔が広いというのはほんまかもしれまへんな。まあ、年の  
割にですけど。

ニコニコと微笑みながら色々な人に挨拶をする二人を見て、うち  
はそう思った。

この調子で、誰か重要人物の所に連れてってくれまへんやるかな  
！。

そんな淡い希望をいだきつつ、しばらく歩いてついたのは、大き  
な広場だった。

近くには体育館が建ち、バスケットゴールやサッカーゴール、何  
故か土俵まである大きな広場ですえ。

芝生が茂るその場所で、灯はんは小さく笑うと教えてくれます。

「え、えつとですね。ここは、基本的に遊ぶものなら何でもあるんです。

ブランコとか滑り台とか。だから、詠子さんもここで遊べばいいと思いますよ」

モジモジとしながら、そう説明してくれはる灯はん。確かにその説明通り、遊び道具も多く、遊んでいる人もたくさんおります。

「そうだぜ！　そして今一番熱いのは、7メートル超えのジャングルジムだ！

あの頂上に登り切った奴はその日の英雄になれるんだ！」

随分危ないもんがありますなあ。

何故か自慢げにそう説明してくれる望はんのうちにはそんな感想を抱きながらあちこちに目をやります。

確かに小さなビルよりも大きなジャングルジムがあったり、4メートル越えの滑り台があったりと種類は豊かなようどすな。

そんな風に見渡した後、大きく聳える大きな体育館を指さして尋ねる。

「あそこには何があるんどす？」

「気になるのか！　じゃあ、見に行こう！」

うちの質問に、望はんは随分と行動的な答えを言いはります。

別にそこまで気になった訳やあらへんのですが、ハイテンションな望はんを止める気も起きずに流されるように、体育館までついでいきますえ。

せつかくついてきているんやから、機嫌を悪くして帰られてもア  
レですしなあ。

連れて行かれた体育館の中は随分と広く、中では何十人と活動的  
に動いてはります。

望はんは中をキョロキョロと見渡すと、少し考えた後に、うんと  
頷き言った。

「おー。今やってるのはフットサル部とセパタクロー部に、リフテ  
イング同好会、蹴鞠部、後は剣道部だな！」

随分と変わった部活もあるんどすなあ。望はんの説明にうちはそ  
んな事を思う。というか、見ただけで何部か分かる望はんも凄いと  
すな。

そんな事を考えているうちに、望はんはにっこりと笑って言った。

「よし、せつかくだから見学してこよう！」

うちの返事など聞かずにうちの手をとり体育館の中へと進んでい  
く望はん。

そんな望はんはに、うちは苦笑しながら仕方がないので一緒に歩い  
ていく。

体育館は熱気にあふれ、中学生やら小学生やらが掛け声をあげな  
がら練習をしています。

一生懸命な様子を何となく観察する。

「……………これは」



その時、凜とした気配をうちは感じた。

熱気の中で、熱気には相容れない気配。

それは獣が研ぎ澄ました様な荒々しさと、日本刀のような鋭さが混じった気配。

常人が発する事の出来ない、冷たく鋭く荒々しい気配。

そんなに強い印象を受けなかった気配でしたが、ただその気配を感じた瞬間にうちは思いました。

斬りたいなあ。

背筋がゾクリとなり、押さえつけていたうちの衝動が暴走しそうになります。

ここ最近、戦闘を行っていなかったせいか斬りたいという衝動が身体の奥から生まれます。

カモはんといてからあまり感じなくなった衝動。狂気に近い衝動が激しく身体の中で暴れます。

強いから斬りたいとかではありまへん。ただ、斬りたい。斬りたい。斬りたい。

思わず手に持ちそうになった小太刀をうちは抑え込み、大きく深呼吸します。

そして、ゆっくりと小太刀から手を離し、うちはもう一度だけ大きく深呼吸をし、どうにか落ち着きます。

どうやら、この気配はうちの昔から住んでいる狂気の衝動と相性がええみたいどすな。下手したら殺してしまいそうですな。

うちはそう考えます。

相手の強さなど関係なく、ただただ相手を切り刻みたい衝動。せやけど、今ここで衝動のままに暴走すればカモはんはんに迷惑をかけてしまいます。

誰が紡ぎ出す気配かしりまへんけど、今は我慢や。  
もう一度、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出します。

「どうかしましたか？」

その場で立ち止り、心を静めているうちに、灯はんが首を傾げます。どうやら気づかれてはいない様どす。

ただ不思議そうに首を傾げる灯はんは、うちは小さく笑うと言いました。

「いえ、何でもありませんえ」

「そうですか？　じゃあ、早く行きましょつ。  
じゃないと、望ちゃんが、怒っちゃつよ。つうつうつ」

うちの言葉に灯はんは納得してくれたようで、先を歩いている望を追いかける。

「遅いぞ、二人とも！」

「い、ごめんね、望ちゃん」

追いついたうち達に望はんはそう言っちょつと怒ったような顔

をする。そんな望はんに、灯はんは少し涙目になりながらそう謝る。

「大丈夫だ、気にすんな！」

そして何故か励ますようにぐつと親指を上げてそう答える望はん。なんとというか、望はんはほんまにテンションだけで会話してはりますなあ。

良い笑顔で笑う望はんをみて、うちは呆れながらそう思う。

「詠子さん！　まずはあそこが、剣道部だ！」

そんな呆れているうちに、望はんが少し先を指さして教えてくれます。

望はんが指さした先を見ると、確かに剣道着をきた人たちが元気よく竹刀をふっていました。まあ、基本的に素人の立ち捌きですけどな。

殺し合いでは相手にならなそうな、人たちを見てうちは小さくため息を吐き出します。

あんまり強い人がおりまへんな。

おったら、おっただで襲ってしまいそうで困りますけど。

「あっ、刹那だー！」

「あ、本当だ。刹那さんだ」

そんな事を考えているうちに、嬉しそうな二人の声が聞こえてきます。

その声に、顔を上げるとそこには剣道着を着て、ただ目を閉じ正座をしている女性がおりました。精神を統一するように、浅い呼吸で何にも反応する事無くただ黙っている女性。

ただその女性を見ただけで。

「っ！」

気がつくとうちの手は服の中にある小太刀を握りしめていました。慌てて握りしめた小太刀から手を離します。そして、手を離しながらうちは確信しました。

この人や。

さっきの気配の主。うちにあの衝動を抱かせた人物。

いつの間にか、涎が出そうになるのを拭う。

美味しそうな肉の塊が目の前にあるようなそんな気分になる。

動悸は早くなり、自然と息も荒くなっていきます。

落ち着け。

うちは心の中で自分自身に怒鳴りつけます。

ここで暴れたら、あきまへん。もっと慎重にならんと。

こんな所で暴れたら

「うん、望に灯か。どうしたんだ？」

女性が目を開き二人に声をかけ、ゆっくりと立ち上がるうとします。

しなやかな身体の動き、発せられる汗の臭い。そして独特の雰囲気。

もはや我慢などできなかった。

乱雑に胸元に隠した小太刀に手をやり、女性の喉元を掻っ切る為に、

「おとつと、どうしたんだい？」

走ろうとした瞬間、小太刀を持ったうちの腕を止めるように手がおかれ、そんな声が聞こえました。

その声に、うちは水をかけられたように熱い心が冷め、正気を取り戻し、顔を上げます。

そこにはジャージを着た一人の男性が立っていました。

「……誰ですか？」

「あー、兄ちゃん！」

首を傾げるうちに、望はんがそんな声をかけ、勢いよく抱きつきました。

そんな望はんは、男の人は嬉しそうな笑みを浮かべると、望はんを強く抱きしめます。

「おお、望ー！ 元気にしてたかー！ 3時間ぶりじゃないか！」

「当然だよ、兄ちゃん！ 望は元気が取り柄だからな！」

まるで感動の親子再開の様なテンションで抱きしめ会う二人。そんな二人に、うちはどう反応していいのか分からず、灯はんは苦笑を浮かべていました。

「おおっと、自己紹介が遅れたな！ 俺の名前は宇佐美 勝信！ この剣道部のコーチをやっている！ そして、そこにいる超絶ブリティーな望の兄でもある！」

あー、テンションが高い所もそっくりですね。  
望はんの兄である、勝信はんは持っている竹刀を振り回しながら、そう答える。

その答えに呆れているうちに、勝信はんはゆっくりとうちに近づくこと小声で、

「そしてレジスタンスの一員だ。

アルベール・カモミールの奴、随分と危険な狂犬を飼ってるな」

……なるほど。にやりと笑う勝信はんに、うちは納得します。

そして、小声で答えます。

「感謝しますえ。先ほど止めてくれたこと」

「じゃあ、貸しーだ」

小さく笑いそう答える勝信はん。そんな勝信はんに、うちは小さく肩をすくませました。

めんどろな所で借りができましたな。

「なんだー、内緒話かー？」

小声で話しているうち達に、望はんがそう言って乱入してきます。そんな望はんは、勝信はんは笑いながら答えます。

「ははは、胸元がはだけているのはレディーとしてはしたないと教えただけさ」

勝信はんの言葉に、自分の胸元を見る。

ああ、そういえば何度も手を出し入れして、随分大胆に開きます。

「兄ちゃんのえっちー！」

「ぐはっ!？」

笑いながらそう言った勝信はんは、望はんが思いつき蹴りを食らわします。そして、何故か蹴りをくらいなんか必要以上に回転しながら吹っ飛ぶ勝信はん。随分と元気な人どすなあ。

「……勝信さん。その人は？」

吹っ飛び終わり、帰ってきた勝信はんは、先ほどの気配の女性が尋ねました。

「ああ、この娘か！ この娘は月野 詠子といって望の友達だ！」「私の友達だ！」

ぐつと兄妹そろって親指を上げる二人。何とか似た者同士ですなあ。

そんな事を考えながら、うちは女性の方に目をやり尋ねます。

「どちらさんどすか？」

「桜咲 刹那といいます。……それでは」

それだけ言いぺこりと頭を下げると、床に置いてあった竹刀を拾い、すぐにどこかへと行ってしまふ刹那はん。あの歩く姿だけを見ても、何故か斬りたくなる衝動がふつつつとわきあがってきます。

「刹那……センパイどすか」

歩いていく刹那はんを見てうちは小声でつぶやきます。

刹那センパイ。

刹那センパイ。

刹那せんぱい。

呟けば、呟くほど斬りたくなりますえ。ごくりと喉が鳴る。

異常な程、喉の渴きを感じますな。

ああ、カモはんに会いたいな。

ただただ、うちはそう思いました。





見た目は子供、頭脳もどちらかと言えば子供。(後書き)

月詠さんの話は、次回に続きます。

行け、我ら美少女探偵団！ 第2話『秘密基地で大事件！？』（前書き）

月詠さんの話の続きです。  
長くなりすぎました。

行け、我ら美少女探偵団！ 第2話『秘密基地で大事件！？』

「そして、ここが教会だ！ ここにはシスター・シャークティ達がいるぜ！」

物凄い高いテンションで目の前にある建物を指さし、望はんがそう叫ぶようそう言います。

そういう訳で、体育館を離れ、勝信はんと別れた後、うち達は今教会の目の前までやってきました。

さっきの広場から30分程歩いた所にある、そんなに大きな教会ではありませんが、綺麗に手入れされた教会ですえ。あまり人はおらずに、静かで場所ですー。

「ここは私たちの秘密基地なんだ！」

「そうなんですか。でも、秘密をばらしていいんですかー？」

「ぬおっ、しまった！」

教会を見上げているうちに、望はんがどうだ凄いだと胸を張り、うちの言葉で落ち込みます。

ほんまにテンションのめまぐるしい人どすなあ。

「でも大丈夫、森の中にある秘密基地は秘密だからな！」

「森の中にあるんですかー」

「ぬおおお、しまったー！ おのれ、孔明！」

孔明やのうて、詠子どす。本名は月詠どすけど。

頭を抱えて悔しがる望はん。そんな望はんを慰める灯はん。何と  
いうか、いつも通りどすなあ。

「おろ、望に灯じゃん。何してんのー？」

そんな事をしている二人に、誰かの声がかけられましたえ。声が  
した方へ視線をやると、そこにはシスターの服を着た女性がかり  
と笑って、こつちに手を振ってました。

シスター服の割には、変にスカートが短いんどすけど、まあ常に  
変な麻帆良の中やと目立ちまへんけど。

「あつ、美空じゃん！」

「美空さーん」

スカートの短い女性の登場に、望はんと灯はんが嬉しそうにそう  
呼んだ。

そんな二人に美空と呼ばれた女性もニコニコと笑いながら、手を  
挙げて近づいてきます。

「はいよ、皆さん大好き美空さんですよー。おや、そっちのおチビ  
ちゃんは？」

へらへらとした笑いを浮かべながら近づいてくる美空はんは、う  
ちに気がついて首をかしげます。そんな美空はんに、うちは人当た  
りがええ様に見える微笑みを浮かべて、頭を下げます。

「はじめまして、月野 詠子ですー。以後お見知りおきおー」

「おー、これはご丁寧に。私は春日 美空。春の日の美しい空豆と書いて、春日 美空だよ」

空豆ですか？ 軽い感じで笑いながらする美空はんのよくわからない自己紹介に、首を傾げるうち。

そんなうちを見て、ニコニコと笑いながら美空はんはふと何かに気がついたように言った。

「あつ、詠子ちゃん。ちょーっとストップね」

美空はんは両手でTの文字を作り、タイムタイムと言いながら望はんと灯はんを呼び集めます。何やら秘密の相談を始める3人に、うちは気にしていないフリをして、そつと聞き耳を立てます。

うふふ、戦闘が専門の人間にこの程度の小声では、内緒話になりまへんえ？

「えつと、詠子ちゃんはどっち？ 魔法の関係者？」

ぼそぼそとした声で美空はんがそう尋ねます。どうやら、この美空はんも魔法関係者の様どすなあ。

うちは見られていない間に、自由帳を取り出して『春日 美空豆：魔法関係者』と書きこみます。

「えつと、違います。魔法の事は知らないらしいですよ」

知ってますけどなあ。

小声で美空はんに、そう話す灯はん。そんな灯はんの言葉を更に

強く望はんが肯定します。

「そつだぜ！ 私たちの事はバシてないぜ！」

うちに聞かれてるとも知らずに、小声で相談し合う3人。というか、望はんは小声じゃなく丸聞こえなんどすけど。それでも、うちは聞こえないフリをして青空を見上げます。

うーん、やっぱり綺麗な空どすなあ。

うちは、青い空と血の雨が降る空が好きなんどすえ。

「あー、そつかそつか。それなら安心、安心。

よし、タイム解除！ よろしくね、詠子ちゃん！」

「ええ、よろしくお願いします〜」

胸元で作っていたTの形を解除し、美空はんはニコニコと笑いながら右手を差し出す。そんな美空はんのうちも微笑みながら握手を返します。

「おおー、関西の人だね。転校してきたの？」

うちの言葉づかいを聞いて、大げさに驚くような反応をする美空はん。そんな美空はんのうちには微笑みながら答える。

「関西やないんですえー。昔の事はあんまり覚えてまへんのやけど、両親がいないうちを拾ってくれた人が教えてくれた日本語が、こういう言葉やったから」

設定では、この関西弁はうちを拾った人間が関西弁やったから、

そのまま関西弁を覚えたという設定です。潜入任務なのに、ほんまの出身を言う訳にもいきまへんしな。

「あー、そうなんだ……。なんというかごめんねー」

うちの口から出た予想以上の重い過去に美空はんは、困った様な表情を浮かべながら、謝ります。そんな美空はんに、うちは小さく笑って首を振る。

「気にしてまへんえ。拾ってくれた方は良くしてくれはりましたから」

何となくうちの言葉で、空気が重くなってしまいましたな。

でもまあ、うちの過去設定を印象付けるのは上手くいった筈です。変に疑われたくもないどすしなあ。

「あー、えっと。そうだ！ 望に灯、あんたたちは今日も遊びに来たのか？」

でも、残念ながらココネはシスター・シャークティと一緒に出てくるよ。もうすぐ帰ってくると思うけど中で待つ？」

「よし、じゃあココネと遊ぶぞ！」

「えっ、違うよ、望ちゃん！」

ぼんつと手をたたき空気を変えようと笑いながら望はん達にそう尋ねる美空はん。そんな美空はんに、望はんは何も考えずに力強く肯定し、それを慌てて灯はんが否定します。

「私たち、詠子さんに麻帆良を案内してるの。さっきは大広間に行ってきたんだよ」



えへへと笑いながら嬉しそうに灯はんが美空はんに説明します。  
そんな灯はんの言葉に、美空はんは感心したような表情を浮かべました。

「へえ、麻帆良の案内か。それじゃ、最低でも3日はかかるな」

「当然だぜ！ 明日も明後日も案内するぜ！」

えっ、聞いてまへんで？

いきなり明日と明後日の予定を決められた事に、驚くうち。別に学校も始まってまへんし、これといった用事もないからええんどすけど。

何となく遣る瀬無い気持ちになるうち。そんなうちを置いて、楽しそうに笑う望はん達。

そんな時、また誰かが声をかけてきました。

「あら、美空。何をやっているんですか？」

「……ミソラ」

聞こえた声のうちが振り返ると、そこにはシスター服の年上の女性と年下の女の子がこちらへ歩いてきていました。やってきた女性を見て、うちはくんと鼻を鳴らすと、微かな硝煙の臭いを感じます。

拳銃使いはんでしょうか？ 少なくとも魔法関係者の様どすな。ということ、あの女の子もそうやるか？ もしかしたらこの教会は魔法使いの拠点の一つかもしれないな。

色々と考えながら脳内にメモをとるうち。

そんな事をしていると美空はんが、二人に目をやり、うわっという表情を浮かべました。

「げっ、シスター・シャークテイ」

「『げっ』とはなんです、『げっ』とは。まさか、言いつけておいた教会の掃除」

「いやいやいや、やりますよ！ これからやるうとしてましたとも！ ただちよっと、地域住民のみなさんと交流するのも聖女たる務めだったりするんじゃないかなーと思いつつですね。この子たちと一緒にお茶でも飲みについていいんじゃないかなーとか思いつつですよ」

何やら怒ったようなオーラを紡ぎ出す女性に、美空はんは怯えながら慌てるようにその首を振ります。

そんな慌てまくっている美空はんに、女性は大きいため息を吐き出します。

「ミソラ」

そんな事をしていると、シスター服の女の子がトコトコと美空はんの下にやってきて、ぴょんつと美空はんの肩の上に乗りました。飛び乗られた美空はんは肩の上の女の子を見て、嬉しそうに微笑みます。

「ココネ、お帰りー」

「ただいま、ミソラ」

女の子も嬉しそうに少しだけ頬をほころばせて、そう言います。そんな女の子を見て、望はんと灯はんもニコニコと笑いながら挨拶しますえ。

「ココネ！ 久しぶりだな！」

「一昨日会った」

美空はんの肩に乗っている女の子に、望はんは嬉しそうにそう答え、女の子は無表情のままそう答えました。無表情な女の子ですなあ。

「全くあれほどサボるなど言っておいたのに。今度お仕置きですからね。ってあら、そちらの女の子は？」

美空はんの事で再び大きなため息を吐き出す女性。そして、そこでようやくうちの存在に気付いたのかそう尋ねる。そんな女性に、うちは小さく微笑むとぺこりと頭を下げる。

「はじめましてー。月野 詠子ですー」

頭を下げるうち。そんなうちを見て女性の方は、何かに気づいたように少しだけ目が泳ぎ、その後何もなかったようにニコリと微笑むと、頭下げます。

どうやら、この人はうちの偽りの経歴を知ってるみたいだなあ。

「ええ、はじめまして、私はシスター・シャークティよ」

「ココネ」

肩に乗っているココネはんもそう言って自己紹介する。

「それで、詠子さんは何の御用で教会にきたのかしら？」

にこりと微笑みを崩さずにシャークティはんがそう尋ねます。

そんなシャークティはんは、うちが答えようとすると、それを遮って望はんが言いました。

「詠子さんに麻帆良を案内してるんだ！」

やはりいつもの様に自慢げに胸を張ってそう答える望はん。そんな望はんは、シャークティはんは少し安心したように微笑みを浮かべます。

「そうなの。それじゃあ、ゆっくり案内してあげてね。」

美空、私は教会の中にいるから、何かあったらお願いね」

「へいへーい」

シャークティの言葉に美空はんは二つ返事でそう答えます。そんな美空はんの返事に、シャークティは少し心配そうにしながらも、教会の中へと入っていきました。

「ふう、仕方ないなー。掃除するかー。」

「ココネー、箒とってきてー」

「うん」

教会の中へと入っていくシスター・シャークティを見送った後、美空はんはため息と共にココネはんにそう頼みました。その頼みに、ココネはんは小さく頷くと美空はんの肩から降りて教会の中へと入っていきます。

「そういえば、美空はん」

改めて教会を見上げながら、うちは美空はんに声をかけます。

「はいはい、美空はんですよー」

「ここは何の教会なんですか？」

ニコニコと笑っている美空はんに、うちは首を傾げながらそう尋ねる。外装やら何やらはキリスト教に近い感じもするけれど、魔法使いが集まる教会どすからなー。

何となく気になりしたうちの質問に、美空はんはぽりぽりと頭を掻きながら困ったように曖昧に答えます。

「えーっと、なんというか、世界を作った唯一神を祭る教会かなー」

「……キリスト教ですか？」

「うーん、何というかそうじゃなくて、というか難しい言葉知ってるねー」。

えっとね、ここは、こっちの宗教じゃないというか、何というか。まあ、そんなところかな？」

全然要領のつかめない美空はんの言葉に、うちは更に首をかしげ

ます。そんなうちに、美空はんは困ったように、なははと乾いた笑みを浮かべました。

「ミソラ、箒」

そんな風な笑みを浮かべ続けている美空はんに、教会から戻ってきたココネはんが箒を渡します。

「おっ、ありがとね、ココネ」

「うん」

箒を受け取り、美空はんはにこりと笑って礼を述べると、ココネはんも嬉しそうに微笑みました。

そして掃除をやり始めた所で、美空はんはふと何かに気がついたように望はんの方を向くと尋ねました。

「そつえば、望たちは観光案内しないでいいのか？」

「ああああ、忘れてた！」

ああ、忘れてはったんですか。大声をあげて大げさに驚く望はんに、うちは小さく肩をすくめます。

「よし、教会なんかには用はない！ 者ども、行くぞー！」

「ははは、教会なんかって、一応私の務め先なんだけどなー」

力強く拳を突き上げる望はんに、苦笑する美空はん。

そんな望はんを見て、灯はんは困ったように笑いながらぺこりと

頭を下げる。

「それじゃあ、行ってきますね、美空さん。

あつ、ココネちゃんも行く?」

灯はんの言葉に、ココネはんは少し考えるように黙り込みます。そんなココネはんはんに、美空はんはニコニコと笑う。

「行つといでよ、ココネ。私はここで掃除しなきゃならないんだから、うっうっう」

泣くフリをしてる美空はんはんに、ココネはんは少し考えた後に頷くと、ぴよんつと美空はんの肩から降りると言った。

「行く」

「うん、じゃあ行こう。詠子さんも」

「わたりましたえー」

そう言つて私たちは先へ先へと歩いていく望はんたちを追いかけて、また街の中を歩き始めました。

「ここが初等部と高等部合同の教員室だ! 通称、スーパー職員室! ここには式集院先生とか、グラヒゲもいるぞ! 今はいないけど」

「うっう、残念」

次に突入したのは、初等部と高等部が合体した校舎の中です。何故、中等部と一緒に合体していないのが謎の建物です。

ハイテンションで望はんがそう説明し、灯はんが辺りを見渡しなから少し残念そうにため息を吐き出した。ココネはんは、何も感じていないのか無表情で望はんの服をつかんでいます。

「あれ、望ちゃんに灯ちゃんに、ココネちゃん。どうしたの？」

そんなうち達に声をかけたのは、スーツを着た青年でした。場所と格好から察するに教師の方の様です。

「ああ、瀬流彦だ！ 詠子さん、こいつは瀬流彦だ。所詮、瀬流彦だから気にしなくてもいいんだぞ！」

「……ははは、すごい言われようだね。」

えっと、君が今度初等部に入ってくる月野 詠子ちゃんだね。よろしく」

望はんの言葉に、瀬流彦はんは力なく笑いながらそう言ってくる。

「僕は中等部の担当だから、この建物にはあんまりいないけど、また気軽に声をかけてね」

それじゃあ、と言って部屋から出ていく瀬流彦はん。

「よし、次行ってみようー！」

そんな瀬流彦はんを目で追った後、望はんは両手を力強く上げてそう言った。



そしてついたのは、賑やかなショッピングモールの様な場所でした。

「ここは、麻帆良の中でもそれなりに大きい買い物する所、通称、麻帆良デパート12号店！」

初等部は、ここ以外のデパートは行っちゃダメって言われてるから、買い物はここでするんだよ！」

「ほえー、大きな建物どすなあ」

というか学園に12店舗もデパートがあるとは、何を考えてはるんやろか？

同店舗だったら、競争率もあんまりあがらへんやろーし。

そんな事を考えながらデパートの中を歩き回るうち達。

「だから、私は中学生でござるよ！」

「はいはい、もういいから。ちゃんとお金を払ってくれないと」

「違うでござる。この学生書をよく目に焼き付けるでござるよ！」

「ほー、よくできたオモチャだ。とりあえず、本当の年齢を言うてくださいいな」

「だーかーらー中学生でござるよー！」

何やら映画館の前で変な騒ぎがありました。スルーして歩いていきます。

「うん、次行ってみよー。の、望ちゃん、これでいい？」

恥ずかしそうにモジモジしながら、控えめに手を上げる灯はん。それじゃあ、次に行きまひよか。

「ここは図書館島だ！ 通称、図書館島！ そのままで！ 色んな本とか罨とかがてんこ盛りの島だぜ！」

本は分かりますけど、罨って何でしょうか？ 言っている意味が分かりまへんねんけど。

「えっと、幼稚園生は地下1階までで、小学生は地下2階まで、中学生は地下3階までしか行っちゃだめな事になってるんです」

大きな島に、でーんつと聳える大きな建物の中に入り辺りを見回すうち。

そんなうちに、灯はんは小さく微笑みながらそう教えてくれた。

それにしても、大きな建物どすなあ。蔵書もジャンルを問わずに結構あるみたいどすし。カモはんが見たら、2か月は中から出てきまへんえ。

「何でも地下にはすげーお宝があるって話だけど、まだ誰も到達した事がない前人未到の地なんだぜ！」

「前人未到なら、宝物はどうやって置いたんやろかね？」

何故か自慢げに胸を張る望はんに、うちは苦笑しながらそう答える。

「というか、地下って何階まであるんやろか？ 受付に置いてある地図を見ても、地下5階までしか書かれてまへんのに、地下5階にはハッキリと下へ降りる階段が書かれています。」

「おや、宇佐美たちじゃないか」

そんな事を考えているうちに、またまたそんな声がかげられまたその声ができる方へと目をやると、そこにはオールバックに黒いスーツと、サングラスをかけた男の人が立っていました。

「あー、グラフィゲだ！ こんな所でなにしてんだ！」

「神多羅木先生、こんにちは」

現れた男の人に、望はんは嬉しそうにそう答え、灯はんはぺこりと頭を下げます。ココネはんは相変わらず望はんの服を掴んでいます。

「おや、そっちは」

神多羅木と呼ばれた男の人はうちの方に目をやり、そう尋ねる。そんな男の人にうちは、本日何度目か分からない自己紹介を行い

ます。

「はじめまして、うちは月野 詠子ですえ。よろしくお願いします」

「月野 詠子か。ああ、よろしく」

どこか意味ありげにうちの名前を呟く神多羅木はん。そんな神多羅木はんに、うちは小さく肩をすくめます。

「グラフィゲはここで何してるんだ？ 本なんて似合わないぞ！」

「あのなあ、宇佐美。俺はこう見えても教師だぞ？」

ここに来たのは少し調べ物があったからだ」

ニコニコと笑ってそう言う望はんに、神多羅木はんは少し呆れたようにそう言いながら、手に持った数冊の本をちらりと見せます。その持っている本にはほんの少し魔力を感じました。おそらく、魔法関係の本でしょう。

「また調べものか！ 最近多いな！」

「調べ終わらないんだよ。お前らも早く帰れよ」

望はんの言葉に、神多羅木はんは少し疲れたような顔を浮かべながらもそう言って図書館島から出ていきます。そんな神多羅木はんを見送った後、ココネはんが言いました。

「次」

そうですね。次に行きますか。

もう日も沈みかけている夕暮れ。うち達は近くにある森に来ました。

「ここは私たちがよく修行……じゃなかった、遊びにくる森だぜ！  
通称は特にない！」

「ほえ、森ですか」

その名の通り、多くの木が生え、草が茂る大きな森。

そこに一步入るだけで、都会とは別世界にやってきた様な感じがします。動物たちの気配も多く感じ、まるでまだ開発されていない森の様な感じがします。

「うん、森だよ。あんまり奥に行っちゃダメだけど、ここでいっつも頑張ってるんだ」

少し恥ずかしがりながらも、そう言うてにっこりと笑う灯はん。  
何を頑張っているのかは深く聞きまへんけどな。

そんな事を言い合いながら、森の中を歩いていく。

すると、少し歩いた所に廃材なんかで組み合わせた家もどきが現れました。そんなに大きくなく、天井も低い変な建物ですえ。

その家を不思議そうに繁々と観察しているうちに、望はんはふふっと自慢げに笑いながら言った。

「何を隠そう、これが私たちの秘密基地その2だ！」

「隠してた方がいいんじゃないんですか？」

「しっ、しまったー！」

秘密を暴露する望はんはその場で落ち込んでしまいます。それを見て苦笑する灯はんに、ノーリアクションのココネはん。

その時、森に満ちる殺気を感じました。

そんなに強い殺気ではありませんが、この3人なら束になっても勝てないぐらいの腕はある殺気です。

一瞬だけ、うちの心がざわつきます。先ほどの刹那センパイの件もあって、相手を斬りたい衝動に駆られます。

せやけど、その衝動を飲み込みうちは3人に言います。

「……そろそろ、日も沈みますし帰りませんか？」

殺気を感じていない3人にうちはそう尋ねます。うちの案内をしてくれた3人が死んでしまっただけ、どう考えてもうちが疑われまじいな。

そしたら、カモはんに迷惑かけますしな。

「えー、まだいいじゃん。この秘密基地の中を見せてやるから！」  
せやけど、そんなうちの気づかひもむなく、望はんは楽しそうにそう答えます。

あー、どうしまひよか。このままこの子たちを見殺しにしたら、困りますしなあ。といってもノリノリで秘密基地の方へと歩いていく望はんを平和的に止めるのも至難の業ですし。

うち、そんなに口がうまくありませんし。

こついうとき、子供ってのは困りますな。カモはんならもつと上手い事するんでしょうけど。

一瞬だけこの場から消えて、殺気の主を殺して帰ってくるという方法も考えましたが、あんまり上手くいきそうにありませんし。

「ほらほら、詠子さん。何ぼーっとしてんだよ、こつちこつち

うちの気も知らずに、ニコニコと笑いながらそう言う望はんは、  
うちは小さくため息を吐き出します。

あんまり言葉で人を誘導するのは得意やありませんし、このままなるようにしまひよかな。

最悪、見ていない間に仕留めるのもありますし。この子たち程度なら、バレずにできいるでしょ。

うちがそう心に決めた瞬間、待っていたかの様に獰猛な咆哮が森の中に響き渡りました。

「っ！ 詠子さん、こっちに！ 早く来てください！」

いち早く反応したのは灯はんでした。灯はんの呼び声にうちは、秘密基地の方へと駆け足気味に歩いていきます。

「どうしましたんですかー？」

先ほどの咆哮を聞いたにも関わらず、わざとらしく首を傾げるうち。

そんなうちに、灯はんは真剣な顔つきで言います。

「何かいます。詠子さん、しばらくこの中にいててください」

押し込めるように秘密基地の中へと入れられるうち。

「えっ、何かってなんですか？」

そんな灯はんはんに、うちはそう言って秘密基地から出ようとしてますが、

「ダメ」

うちの前にココネはんが立ちはだかります。

さて、どうしまひょか。

「そうだぜ、詠子さん！ ここは私たちに任せな！ 何者か知らないけど、私たちがコテンパンだぜ！」

悩んでいるうちに、どんっと胸を叩いて自信満々にそう言う望はん。



なんというか、望はんは魔法を隠す気があるんやろか？

そんな風に疑問に思っているうちに、灯はんは真剣な表情でうちに言いしました。

「大丈夫ですよ、詠子さん。ちょっと私たちが辺りを見てくるだけですから。」

さっきの鳴き声聞いたでしょ。最近ここらへんに野犬がでるんです」

「それやったら、うちも」

そう言っただけに出ようと思いますが、再びココネはんに止められます。

うう、このままついて行ってサポートしたいんやけどなあ。

「大丈夫ですって。私たちは慣れてますし、それに」

につこりと笑い、そして真剣な目で灯はんが言って小さく息を吸うと、覚悟した様に言いしました。

「詠子さんは私たちが守りますから」

ぞくつと背筋が凍ります。

灯はんの目は確固たる意志を持ち、うちを守ろうと必死な目でした。

その目を見た途端、うちの衝動が再び再燃しました。

思わず胸元にある小太刀に手をやってしまいます。

確固たる意志を持った灯はん。切り刻みたいとい衝動が心の底で

疼き始めます。

周囲を見ると、望はんもココネはんも同じような瞳をしています。  
うふふ、うふふふふふ。

うちはそんな事を考えながらも、ゆつくりと小太刀から手を離します。

まだ早いぞす。たとえ切り刻むとしても、もっと強くなってから。  
どす黒い笑みを浮かべそうになるのを、必死で押さえながらうちは優しげな微笑みを浮かべます

「わかりましたえ。気をつけてくださいな」

ものわかりが言い返事をするうちに、望はんたちは力強く頷くと秘密基地から出ていきます。

秘密基地で、どこからか拾ってきたであろうソファーに座りこみながら、うちは考えます。

ここで殺されるには惜しい存在ですえ。

うちはそう考え、周囲の様子を探り、望はん達がここから離れていくのを感じると、胸元から小太刀を抜きます。今日、何度も抜こうとした小太刀は、何の抵抗もなく引き抜かれます。

鈍く光る刀身を見ながらうちは思います。

強くなるかどうかは分かりませんが、強くなったあの子たちを斬ったら楽しそうぞすなあ。

もしかしたら、来るかもしれないそんな未来を思い描きながら、  
うちは秘密基地からゆっくりと出ました。

うふふふふ、もっと美味しくなるまで、死んだらあきまへんえ。

落ち葉を踏みしめながらうちは、彼女たちの気配を追いかけました。

S I D E : 望

「灯、ココネ！ 気をつけるよ！」

私はその声をかけながら、急いであの不気味な鳴き声がした方へと走る。

走っている間に、私の冷静な部分が『ここは逃げて人を呼びに行け』と叫ぶが、そんな心を押さえつけて、私はとにかく走った。

私だつてしっかりと修行してきたんだ。

それに、私たちが逃げて、誰かが襲われたらどうするんだ。

しっかりしろ、宇佐美 望！

ぐつと拳を握りしめ、私は自分自身に叱咤激励をしながら走り続けた。

大丈夫、大丈夫だから。自分自身を励ましながら、私は走る。

「いた」

そんな私はココネの声を聞き、足を止める。

「どこにいましたか？」

灯も足を止め、茂みに隠れるようにしながらココネに尋ねます。そんな灯に、ココネはゆっくりと茂みの先の方へ指をさす。

その指の先には、不気味な化け物が森の中を徘徊していた。歪な肉のつき方をし、こぼれるように肉が地面に落ちると、その肉が生き物のように再び化け物にひつつき、歪な形を構成する。

「……あれは」

驚いている灯。私も当然驚いている。

でも、あの姿は。

「アレは兄ちゃんの言っていた、西の化け物」

「西の!？」

私の言葉に、灯がそう叫ぶように言います。そんな灯に私は頷き、答える。

「うん、確かに西の化け物だ。兄ちゃんの言った通りの姿だ」

寝る前に聞かされた化け物の話。まるでホラー映画のようで、一人でトイレに行けなくなる事もしばしばだったけど、とにかくあの姿は兄ちゃんが語っていた化け物の姿と一緒だった。

「あつ、ひ、秘密基地のある方向に向かってますよ!」

灯の言葉に、私はぱんつと頬を叩き気合いを入れると叫ぶように言う。

これは本当に躊躇している暇はない!

「っ、行くぞ!」

「はい!」

灯も気合いを入れるように頷き、ココネも力強く頷いた。

気合いの入った私たちはその場から飛び出した!

化け物も飛び出した私たちを発見し、咆哮を上げながらこっちへと向かってくる。

「ココネ、頼んだぞ!」

そんな化け物を見て、私は化け物の方に走りながらココネに指示をだす。

その言葉に、ココネはこくりと頷くと大きく息を吸い、

「G A A A A A A A A A ! ! ! ! !」

雄たけびを上げた!

落ち葉が舞い散り、衝撃波にも似た声の力が化け物に向かって飛んでいく。

その雄たけびに、少しだけ怯み、こちらに来るのを戸惑った化け物。

よし、行ける!

「灯!」

「わ、分かってます!」

こちらに来るのをためらっている化け物を見て私は頷くと、灯に指示を飛ばす。

私の言葉に、灯も頷き魔法を唱える。

「リリカル・マジカル・スピリチュアル。

幻想の世界よ。偽りのモノに偽りの命を与えよ。偽りの世界を紡ぎあげよ。

魔法は幻想となり、幻想は真実へと変わる。偽りの世界!」

灯は持っていたタカミチの形をした人形を空へと放りあげる。その瞬間、人形は大きくなり実物大のタカミチになった。

「い、いけ! 高畑先生!」

灯の言葉にタカミチはH A H A H Aと笑いながら、化け物に近づ

き化け物を蹴りあげる！

化け物はその蹴りを何とか避け、タカミチに体当たりするが、タカミチはそれを避けて攻撃を続ける。

「げ、幻覚魔法が効いてるよ！」

「よしっ！」

灯の言葉に私はガッツポーズをとる。

灯の魔法はその名の通り幻覚を使った魔法で、相手を幻覚の世界に閉じ込める。

今回のは準備ができずに、閉じ込める事はできなかったけれど、タカミチ人形を本物のタカミチの様に思わせて、化け物の足を止めさせる事はできた。

効果は強いけど、欠点は発動に時間がかかるのと、強い相手には聞かない事。だけど、足止めには最適の魔法だ。

ココネがした咆哮は、ココネの音楽魔法。

魔法で強化された声を上げる事で、相手を怯ませるのだ。これはダメージは与えられないけれど、魔法媒体もなく、詠唱無しで発動できる牽制には最適の魔法！

そして、私が得意なのは、火炎魔法！

大きな溜めが必要で命中率も高くないけど、足止めした相手には効果抜群！

ぱちんっともう一度両頬を叩き、気合いを入れなおす。

行くぞ！

「ファイヤー・ファイガ・アポカリプス！  
契約執行、宇佐美 望！ ものみな焼き尽くす浄北の炎！ 破壊  
の王にして再生の徴よ！

我が身体に宿りて、 敵を焼き尽くせ！ 我は紅き焰を纏う者！  
うおおおおおおおおお！！！！！！」

私は魔法を唱えると、自分自身に気合いを入れる。  
身体が熱くなり、周囲に熱気が膨らんでいくのを感じる。

この魔法は自分自身に魔法を送りこんで、自分自身を燃やす技。  
欠点は、燃やすまでが遅いのと、自分自身が突っ込まなければな  
らない事。

それでも！

完全に魔法が身体に回った事を確認し、私はぐつと膝に力を入れ  
て跳躍する！

「いくぞ！ 必殺、望ダイブウウウウウ！  
説明しよう！ 望ダイブとは、全身に纏う炎の力を受けながら、  
相手に大の字のまま突撃し、相手を焼き払うというある意味大文字  
焼きの必殺技なのだ。ちなみに抱っこはしてほしくないいいいい  
い！」

聞こえていないだろうけど、そう叫びながら私は化け物に向かって急降下していく！



そしてっ！

SIDE：月詠

色々と見ていましたけど、あの子たち見た目の割に中々いい連携をしますなあ。

一人が怯ませて、もう一人が足止め、そして、最後にとどめ。見事に役割分担をしますえ。

ただ、惜しいのは後一手足へん事です。

おそらくあの化け物には、望ダイブとやらでは殺しきれまへん。

望はんが落ちた途端、幻覚が解けて望はんが殺されて、後は攻撃に欠く二人も殺される。

年齢からの修行不足ですな。何とも惜しいどすなあ。

「うああああああ！！！」

叫び声をあげたまま落ちていく望はんを見て、うちは心の底から微笑むと、呟きます。

「もうちょっと強くなってからお姉ちゃんと遊ぼな？」

うちは抜いた小太刀を望はんがぶつかったタイミングで振るう。

小太刀からは衝撃が飛び出し、化け物に最後のダメ押しを与える。

与えた衝撃は斬撃ではなく打撃。ここで刀傷を与えて、ばれたら困りますしな。

断末魔を上げて、倒れる化け物を確認した後、うちはさっさと秘密基地に戻る事にしました。

ああ、まだまだ斬り足りまへんえ。

S I D E : 望

か、勝った……のか？

望ダイブを決めた後、おっかなびっくり辺りを振り返るとそこには綺麗に焼け焦げた化け物の姿があった。ちよつと、ビビりながら焦げた化け物に蹴りを入れてみる。

うん、動かない。

「……、勝った？」

ぼつりと灯がそう呟いた。

その呟きが、ゆっくりと私の頭に染み込んでいく。

そして、

「やったあああああああああ！……！」

私と灯は大声を出して喜び、ココネも疲れたようにため息を吐きながら嬉しそうに微笑んでいた。

「おーい、大丈夫か！」

その時、そんな声が聞こえてきた。

声が出た方に視線に視線をやると、そこには式集院先生とタカミチが走ってこっちに来ていた。

「あつ、お父さん！」

えっほえっほど、こっちに走ってくる式集院先生を見て、灯が嬉しそうに飛びついた。

「灯、心配したんだよ。大丈夫、怪我はない？」

「うん、大丈夫！ 私たちが勝ったんだから！」

灯にしては珍しくテンション高めにそう答え、その答えを聞いて式集院先生は一瞬だけ驚いた顔をした後に、優しく灯の頭を撫でてあげていた。

「よく頑張ったね。でも、もう無茶しちゃダメだよ」

ぎゅっと抱きしめて言う先生の言葉に、灯は嬉しそうに頷いた後に、『「ごめんなさい」と呟いた。

「しかし、これは本当に君たちが倒したのかい？」

そんな事をしている式集院先生をしり目に、タカミチは私が焦がした化け物へ目をやった。

化け物はもう闇へと解け始めて、原型が分からなくなり始めた。

「そうだよ！ 私たちが倒したんだ！」

すごいだろうと胸を張る私に、タカミチは小さく苦笑する。

「凄いね。でも、あんまり無茶しちゃダメだよ」

「無茶なんかしてないよ！」

困ったように笑うタカミチに、私はそう答える。

「ははは、まあ無事だったならいいさ。さて、子供はもう帰る時間だよ」

ポケットに手を入れながらそういうタカミチ。その言葉に改めて辺りを見回すと、もう日は沈みきっていた。

それに気がついた私に、タカミチは再び苦笑しながら言う。

「それと、今回の事は君のお兄さんやお父さんに報告するから、こつてりと絞られるんだよ」

「えーっ、なんでだよ！ 勝ったんだぜ！」

「危なかったのには変わりないんだ。もしかしたら死んでたかもしれない。

まあ、僕が怒るよりも宇佐美先生に怒ってもらった方が望君には

聞くだらうけどね。

ココネ君もシスター・シャークティに報告が行くよ」

うー、なんでだよー。

せっかくなにかつこよく決めたのに。

涙目になる私とココネに、タカミチはH A H A H Aと笑う。

うー、怒られるの嫌だなあ。でも、帰えらないと。

洋風な笑いを浮かべながら歩いていくタカミチにドナドナ気分でついていく私たち。

うう、格好良く決めたつもりだったのになあ。

あつ、詠子さん、忘れてた！

気がついたのは、こつてりと絞られて拳骨を喰らった後、兄ちやんと一緒に風呂に入っている時だった。

ごめん、詠子さん。

行け、我ら美少女探偵団！ 第2話『秘密基地で大事件！？』（後書き）

……長いですよね。

いえ、これでも短くしたんですよ？ 元々の長さなら5話分ぐら

いありましたから。

いや、どっちにしてもすみません。

あのぬらりひょんの頭をもうでやりたい今日この頃。(前書き)

次話投稿です。

やはり、今回も長いです。本当に毎日更新してる作者の方々はすごいですね。



あのぬらりひよんの頭をもいでやりたい今日この頃。

色々あつてしたくもない大充実をってしまった麻帆良初日が終わり、朝になると早々に僕は学園長に学園長室に呼び出されていた。何でも大事な話があるそうです。

やってきたのは、無駄に大きな学園長室。

よく日光を取り入れられる部屋の作りをしている所為か、朝日に照らされて頭部が必要以上に輝く学園長。とても眩しいです。とうか、何度も言いますが後頭部長すぎですよね？

誰も疑問に思わないんですか？

「ふおふおふお、よく来たのう、ネギ君」

よく手入れされてそんなサラサラな髭を撫でながら、威厳に満ちた表情でそう言ってくる学園長。

そんな学園長に、僕は小さくため息を吐き出しながら少し警戒気味に尋ねます。

「……それで、何の御用でしょうか？」

「これこれ、こんな善良な老人を捕まえて、そう警戒するでないわ。ふおふおふお」

いえ、これでも警戒したりないぐらいですよ。光る後頭部を目にやりながら、僕は何も言わずに小さく肩をすくめます。そんな僕を

見て、学園長は気にしないように『ふおふおふお』とバルタン星人の様に笑う。

「いやー、今日来てもらったのは他でもないわい。

昨日話したお主の担当である2・Aの話じゃよ」

学園長はそう言って、一冊の黒い本の様なものを僕に渡す。

本というには薄すぎる感じで表紙と背表紙しかない感じですけどね。

「これは？」

中身を見ずに尋ねる僕に、学園長は笑いながら答える。

「それは、お主が見学する2・Aの名簿じゃよ。目を通した方がいじやろ？」

その言葉に、僕は黒い本を開けるとそこにはたくさんの女の子の写真と名前、そしていくつかの書き込みがありました。

昨日ここであった、ツインテールの女性や黒髪の女性、おでこ剣士さんたちの写真も載っています。

「……近衛 木乃香ですか。これは学園長の」

「孫じゃよ。かわええじゃろ？ 見合いでもしてみるか？」

「結構です」

にへらと笑って親馬鹿を隠そうともせずになんな事を言ってくる学園長。そんな学園長に僕はため息交じりにきっぱりと断ります。

僕はアーニヤを愛していますから。

それにしても、学園長の孫ですか。確かに、昨日来た時に学園長に『おじいちゃん』と呼びかけていたような気がします。気をつけた方がいいかもしれません。

まあ、この学園長を見る限り、学園長の血縁とかかわりたくないっていうのが本音ですけどね。

内心そんな事を考えながら、僕は更に名簿に目をやり尋ねる。

そこには、英語や中国語で書かれた名前が結構あります。

「後、外国籍の方が多いようですが、この学園は1クラスにそんなに留学生を入れているのですか？」

これが全クラス平等だったら、何という国際化学園だと思う。

「いやいや、留学生というモノは心細いじやろうて、同じ仲間を同じクラスに入れ、支えあわせるのは当然じやろうて」

僕の疑問に、学園長は髭を撫でながら飄々とした笑顔でそう答えます。嘘を言っているようには見えませんが、本当に当然なんではないのか？ そのあたりは詳しくないので、僕にはよくわからない。そもそも学園長が話せば、最早何もかもが胡散臭く聞こえます。

そんな事を考えながら、再び名簿に視線を落とす。

「……ロボットがいる様に思っていますか？」

絡線 茶々丸と書かれた所を見て僕はそう言う。

これは誰がどう見ても、ロボットじゃないだろうか？ いえ、ロボットですよ？

「ふおおおお、ロボットの筈がないじゃろう。まあ、彼女はある特殊な事情があつてのう。何かあつたら書きこまれてる所に電話を入れて欲しいのじゃ。そこは工学部につながるからのう。

例えば、暴走したときとか」

だから、ロボットでしょう。っていうか、暴走つて。

髭をもふもふしながら、平然とそう答える学園長。本当に息を吸つて嘘を吐く人ですね。

僕の中で学園長の信頼ランクがぐつくりと底辺まで落ちます。まあ、もともと底辺だつたんですけど。

それにしても、これ以上、この人について聞いても何も答えてくれそうにないですね。

後で他の先生やタカミチ辺りに尋ねようと考えながら、また名簿に視線を落とします。

「この相坂 さよさんの、1940」といふのは何ですか？

この書き方では1940年生まれと解釈してしまうんですが」

「ふおおおお、その解釈で間違いないぞい。ちなみに幽霊じゃから席は動かさんようにのう」

「あの、ぬらり いえ、学園長。言ってる意味が分かりませんが」

やっぱりボケたのだろうか。というか、ボケててくれた方が僕としてはありがたいです。

思わず本音を洩らしそうになりながらも、僕は必至で堪え学園長にそう問います。

「ふおおおお、ネギ君は幽霊じゃからと差別するのか？」

あー、そんな事を言ってきましたか。

少し悲しげな視線でそう言ってくる学園長に、僕は小さくため息を吐きだします。

「……そう言う話をしている訳じゃありません。

ただ、何故幽霊がいるのか。もし幽霊ならば、クラスに受け入れられているのか。

もしも受け入れているというのならはこのクラスは全員が魔法関係者なのか。

そういう事をお聞きしたいのですが？」

幽霊がいるという事実には驚きを隠せませんが、そんな事よりも彼女の立ち位置が重要なんです。

まさか、誰にも気づかれずにとこの席にいる訳じゃないでしょうし。

「ふむ、魔法関係者は数人おるが、全員という訳ではないぞい。

そして、相坂君は残念ながら2 - Aの生徒にはほとんど見えておらんようじゃ」

馬鹿じゃないのでしょうか、このぬらりひよんは。

誰にも気づかれずにクラスに置く意味なんてないでしょうに。それじゃあ、クラスにとっても相坂さんにとってもマイナスでしかないじゃないですか。

あまりにも意味がわからな過ぎるクラス事情に、僕はもう国に帰りたくなってきました。

「あの、後頭、いえ学園長」

「お主、今ワシの事を部位で呼ぼうとせんかったか？」

「気のせいです」

学園長の言葉をばつさりと切り捨てると、僕は尋ねます。

今はその激しく自己主張する後頭部よりも、相坂さんの話が必要です。

「相坂さんについてどうするつもりなんですか？」

「最悪でも現状維持、できればクラスに受け入れられるようにしたいのじゃがのう。」

まあ、ネギ君は気にせんでよいわい」

幽霊という時点で万人受けは無理そうですね。それに気にするなと言われても、知ってしまった以上は気になるに決まってるじゃないですか。

小さくため息を吐き出す学園長に僕はそう考えながらも、まだ名簿に視線を落とし、一人ひとり指でなぞりながら名前を読んでいきます。

というか、何か大人っぽい人から子供っぽい人まで、色々なバリエーションがありますが、今はそんな事を気にせず、ある程度まで名前を読んでいき僕はある場所で指を止めました。

この人は、一番最初に気になったけれども、今まで怖くて聞けませんでした。聞かなければいけませんね。

僕は覚悟を決めて口にします。

「あの後頭部、最後にこのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルというのは、もしかして」

外れて欲しいという意味を込めて、学園長に尋ねる。

「うむ、この際もはや部位でワシの名前を呼んだ事は気にせん。彼女はお主が思っている通りの本人じゃよ」

あ、あなた馬鹿でしょう！ というか馬鹿ですよな！

あのエヴァンジェリン・A・K・マクダヴェル。闇の福音が中学生やっってるって！

何考えてるんですか！ そして、何を考えて闇の福音も中学生やってるんですか！？

まるで意味が分かりません！ 実家に帰りたいです！

「ふおふおふお、そう恐れずともよい。彼女は15年間もこの学園で生徒をやってくれておる。暴れる様な事はない」

「15年間生徒をやっけていてまだ中学生という時点で既に地雷な気がするんですが？」

「ふおふおふおふおふお」

この後頭部め！ 笑ってごまかせるつもりですか！  
その見事に90度に曲がっている後頭部を無理やり、180度に正してやりたい感情を押さえつけ、僕は学園長に更に詰め寄ろうとしたその時、

タイミング悪く扉が叩かれました。

「ふむ、開いておるぞ」

先ほどまで馬鹿笑いを上げていた後頭部は、瞬間的に威厳がある表情に変わりノックした人間の入室を許す。くそっ、追及のタイミングを逃しました。

「失礼します、学園長」

そう言っつて、中に入ってきたのは四角い眼鏡をかけスーツを着たおじさんでした。

おじさんはぺこりと一度頭を下げると、部屋の中へと入ってきました。

何というか、学園長より威厳があるちょっと怖そうなおじさんです。

「おや、新田君じゃないか」

入ってきたおじさんに、学園長はにこりと笑う。

そんなおじさんは学園長に挨拶をすると、僕の方を見て何故か物凄く笑顔になりました。

えっ、何で笑顔になるんですか？

驚く僕が何か言う前に、おじさんは嬉しそうに口を開いた。

「おお、君がネギ・スプリングフィールド君だね！

いやー、学園長から話は聞いているよ。君の熱い教育魂には私も感心したよー！」



えーっと、何の事でしょうか？

意味が分からない贅辞に僕は首を傾げる事しかできません。

そんな僕におじさんはにっこりと笑いながら喋り続けます。

「ははは、確か君はオックスフォードの教育学部を出て学級崩壊していた小学校のクラスをまとめ上げたそうじゃないか」

初耳ですよ、そんな経歴？ ありえませんかよ、そんな経歴？

だって、僕はなんちゃって魔法学院という、馬鹿らしい名前の学校しか卒業してませんし。

僕は傾げた首を更に曲げ、何か言おうとして言葉が出ずに酸欠の金魚のように口をパクパクさせます。

「それを見込んだ学園長が君をこっちにスカウトしたと聞いた時は、正直君みたいな子供が教育なんてできるのかと疑問に思ったものだよ」

僕も思ってますよ、現在進行形で。そして、すでにくじけそうです。

何か一人でヒートアップしてしまっているおじさんに、僕は何か言おうとするけど、口をはさむ隙がありません。おじさんはただただ、にこやかに笑いながら言います。

「しかも、昨日学園長室に乗り込んで、年上を教えるのか彼女たちのプライドに触るから、まずは見学する事で彼女たちと打ち解け、彼女たちを手助けしてあげたいという話をしたと聞いた時に私は驚いたよ。」

まだ若干9歳の君がそこまで考えているなんて」

似たような話でしたが、そこまで熱意的に押し込めた訳じゃないんですよ？ あくまでもこちらの都合上、そういう言い方をしただけなんですか。

昨日の会話を捻じ曲げて伝えたであろう学園長に、僕は恨みがましげに目をやりますが、あの後頭部は無駄に目立つ後頭部をこちらに向けるだけで、目を合わせようとしません。

「いやー 決められた通りにしか動けない教育に価値はなく、人は育たない。僕のような年が近い人間だからこそ、頼ってくれる事だつてあるんだ」だったかな。さすがだね」

言った覚えがありませんよ、そんな熱い台詞。

おじさんは僕にどんなキャラを求めているのでしょうか？

最早開いた口がふさがらない状態の僕に、学園長はぬけぬけと笑顔のまま言います。

「ふむ、では新田君。ワシの話は終わったから、職員室に案内してやってほしい」

「ええ、分かりました、学園長。さあ、ネギ君。いや、ネギ先生。職員室まで案内しましょう。そこで貴方の熱い教育論を聞かせてください」

ニコニコと笑いながら僕の手を引き学園長室からでていく新田さん。そんな新田さんに引きずられながらも、髭を撫でて物凄い笑顔を浮かべている学園長を睨みつける事しかできませんでした。

今度会ったら、とりあえず殴ってやろうと思います。

新田先生と（さん付けよりも先生呼びの方がいいと言っているので、そう呼んでます）熱い教育論を5時間程聞かされた後、僕はようやく解放されフラフラとした足取りで、タカミチの家へと向けて歩いていました。

なんとというか、まだ午後の4時過ぎですけど、家に帰って眠りたい気分です。

そんな事を考えながら、とぼとぼとした足取りで歩いていると、

「おっと」「きゃあ」

ちゃんと前を見ていなかった所為で曲がり角で人とぶつかってしまいました。

「す、すみません。ちゃんと前を向いていなくて」

慌ててぶつかった人の方へと目をやります。すると、そこには尻もちをついているツインテールの女性がいました。あれ、この人って確か昨日学園長室であつた。

「だ、大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

とにかく、倒れたままでいてもらっては困るので僕は女性に手を差し出す。

「痛たたた、大丈夫よ、こっちも前を見てなかったからって、あんたは昨日の!」

僕の手をとり、立ちあがった所でようやく僕の事を視界に入れたのかツインテールの女性は大げさに驚いています。

「ええ、昨日ぶりですね。僕はネギ・スプリングフィールドといいます」

にこりと微笑み自己紹介をする僕。何はともあれ、自己紹介は大切ですからね。

人と人をはじめにつなぐのは、自己紹介です。

そんな事を考えている僕の顔を、ツインテールの女性は繁々と眺めてきます。

「なんででしょう? まさか、後頭部が伸びてませんよね!」

学園長風あんなにはなりたくない、僕は慌てて後頭部を触ります。

良かった、後頭部は伸びてません。というか、そもそも後頭部は伸縮しませんね。

この学園に来てから僕の常識が崩れ始めているのを感じて、僕は泣きたくなくなってきました。

「ねえ、あんた、どっかで私と会った事ない?」

「ですから、昨日会いましたけど?」

涙が出るのをこらえながら、彼女のよくわからない質問に、僕はそう答える。

そんな僕に女性は『うーん、そうよねー。でももつと前にあったような無いような気がしないでもないようなこともないようになって、あれ、今どっち?』と一人で呟きます。変わった方ですね。

「えっと、大丈夫でしょうか?」

頭とか打つてませんよねと思いつながら尋ねる、僕に女性ははつと気がついたように僕の方を見る。そして、両手をぐつと上げて元気をアピールしながら答える。

「あはは、大丈夫よ。こつ見えても毎日新聞配達で鍛えてるんだから。」

えっと、私の名前は神楽坂 明日菜よ」

「神楽坂さんですね」

「明日菜でいいわよ」

「では、明日菜さんで」

僕の言葉に、明日菜さんは微笑みながらそう答える。そんな明日菜さんに僕も小さく微笑みました。

うんよろしいつと言っておかしそうに笑う明日菜さんに、僕もつられて笑ってしまいます。

何というか、先ほどのぬらりひょんとの会話があった所為か、こついう普通の会話は癒されます。

「あつ、ヤバい。私、そろそろ行かないと！」

しかし、いつまでも和んではいられず、腕時計に目をやった明日菜さんはそういつと慌てて荷物を拾うと言います。

「それじゃあ、私用事があるから！」

「あつ、はい。さようなら」

そう言つて普通の人とは思えない速度で走つていく明日菜さんを見送り、僕はこの学園にまともな人はいないんじゃないかと改めて思いました。

そして、僕はふと地面に目をやると、そこには携帯電話が落ちていました。

これは、明日菜さんののでしょうか？

携帯電話を拾つて眺めながら僕は考えます。

多分、明日菜さんのですよ。転んだ時に落したんでしょう。

届けてあげなければと思いますが、風のように去つていった明日菜さんに、地理に明るくなく、彼女がどこを目指しているのかわからない僕には見つけようがありません。

魔法を使えば、見つけれるのですが、こんな事で魔法を使うなんてバカな事はしませんし、そもそも魔力の都合上使えません。

……仕方ないですね。中を見てしまつて、ごめんなさい、明日菜さん。

僕は心の中でそう謝り、携帯電話のボタンを押します。  
とりあえず、誰か適当な人に電話をかけて携帯電話が落ちていた  
事を伝えましょう。

あまり携帯電話の操作に詳しくない僕は、とりあえず一番最近に  
あった着信先に向かって電話しました。携帯を耳をあてると、電話  
の向こうで電子音がしばらく鳴り、そしてガチャリと電話が取られ  
ました。

「あつ、アスナー。どうしたん？ 新聞配達の時間ちゃうん？」

「あつ、すみません。この携帯電話の持ち主の知り合いの方でしょ  
うか？」

聞こえてきたのは明るい少し訛りのある女の子の声。その声に僕  
はそう尋ねる。

多分、日本語は間違っていないはずだ。

「えっと、私はアスナーの知り合いですけど？」

僕の言葉に困ったようにそう返してくる女の子。そんな女の子に  
僕は安心させるような口調で答える。

「すみません、僕はこの携帯電話を拾ったモノなんですけど」

「えっ、そんなんですか。もー、明日菜はおっちょこちよいやから」

電話の向こうで困ったような、怒ったような、呆れた様な、そんな口調でそう呟く女の子。そんな女の子に、僕は苦笑交じりに言う。

「それで、もし今日中にでも明日菜さんに会えるのでしたら、そうですね、女子中等学部の教員室この携帯を預けておくので、取りに来るように伝えて頂けませんでしょうか？」

あの新田先生がいる教員室に戻りたくはないんだけど、今僕が知っている場所ってそれぐらいですし。

そんな事を考えながら言った僕の言葉。そんな言葉に、女の子は言います。

「あつ、それなら今いる場所言ってくれたら、私に取りにいけますえ」

そんな提案をしてくる女の子。そんな女の子に僕は苦笑します。

うーん、何というか警戒心がないというか。まあ、こんな学園だし、危ない事はないのかもしれないですけど。もしも、僕が悪い人だったらどうするんでしょう？

そう考えながらも彼女の提案に、僕は少しだけ思考します。

うーん、新田先生がいる場所に戻るよりはましかなー？

教員室に行くか、こっちに来てもらうか。

ちよつと考えたけど、結局あの教員室に行つてまた5時間教育論を語られたくないという気持ちの方が強かった僕は、女の子に来てもらう方を選択した。

「じゃあ、お言葉に甘えてもいいですか？」

「りょーかいやで。えっと、今どこにおるん？」



何かおかしそうにクスクスと笑う女の子。電話の向こうでニコニコと笑っている雰囲気伝わってくる。そんな女の子に僕は辺りを見渡しながら答える。

「えっと、僕この学園に来たばかりですからあんまり地理に明るくなくて。」

目の前には3階建くらいの時計塔があつて、その下でカフェをしている所なんですけど」

「ああ、そこはサンマルコ広場や。そんじゃ、ちよつとそこで待っていてくださいな。」

10分ぐらいで行きますから」

サンマルコ広場つて。何とも仰々しい名前ですね。女の子の言葉に呆れる僕。

そして、『ほな』と言って電話が切られそうになつたので慌てて尋ねる。

「えっと、そちらのお名前を教えてくださいませんか？」

僕はネギ・スプリングフィールドといいます」

名前も知らなければ、会う事も出来ませんしね。できれば、目の様なモノがあればいいんですけど、そんなものありませんし。

そんな事を考えて言った僕の言葉に、女の子も小さく笑いながら答えました。

「あつ、外国人さんなんや。えっと。うちの名前は、近衛 木乃香  
つていいですよえ」

にこりと電話の向こうで笑つたのが分かります。

へえ、近衛 木乃香さんっていうんですね。

近衛 木乃香さん……？ ……え？

サンマルコ広場で紅茶を飲みながら、僕は小さくため息を吐き出しました。

まさか、こんなタイミングであのぬらりひよんのお孫さんに会う事になるとは。

名簿で顔を確認したから、後頭部が伸びていない事は知っていますが、あんまりあの人の血縁には会いたいとは思いません。

はあ、とため息をもう一度吐き出し、僕は少し冷めてしまった紅茶を喉へと流す。

それにしても学園って、なんとというかすごく賑やかな所ですよね。思考を変えるように辺りを見渡しながら僕はそう思いました。ここは学校施設が立ち並んでいて、この喫茶店以外は、遊ぶ場所が訳ではないのに人の姿がたくさんあります。

「賑やかというか、何というか」

どれだけこの学園に人口が住んでるんでしょうね。

僕はそんな素朴な疑問を浮かべながら、もう一度紅茶を口に含み

ます。

それにしても……

お孫さんの近衛 木乃香さんの事は置いておき、僕は今朝の学園長の話进行い出します。

留学生が多いクラス。

ロボットがいるクラス。

幽霊がいるクラス。

どれもこれも問題ですけど、一番は彼女ですよ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェル。

魔法を知ってる人間ならほとんど知らない人はないような有名な名前です。

言ってしまうば、日本でいう『ナマハゲ』と同じ存在ですかね。

とにかく悪の魔法使いの代名詞であり、多くの絵本や昔話なんかに登場する悪の女王で、本当に彼女には関する多くの逸話があります。

曰く、一国を一人で滅ぼした。

曰く、鬼神兵を氷漬けにした。

曰く、ドラゴンを片手で捻り潰した。

「何というか、どの話でも物騒ですよ。」

実際に会った事がないから、どんな人物かは僕にはわかりませんが、多分魔法使いとしては凄腕でしょう。何というか、今まで凄腕の魔法使いと会ってほとんどいい思い出はないんですよ。

あの学園長しかり、僕の父親しかり。

それに何ですつと学生をしているのか分かりませんし。

学園長曰く15年間も学生をしてきたらしいです。

これって、普通に考えたら幼稚園を3年、小学校を6年、中学校を1年と考えても5年余る計算なんですよね。それに、あの有名なエヴァンジェリンさんが幼稚園を通つてとは思えませんし。積み木でだーだーと遊ぶ闇の福音。うん、ありえないでしょう。

それだとしたら、僕は紅茶を飲みながら考えます。

「……もしかしたら、学園長が嘘をついている？」

そんな可能性ぐらいしか今の僕には思いつけません。そもそも本当にあのエヴァンジェリンさんなのか、僕にはわかりませんしね。

できれば、学園長の法螺話であつて、実は同姓同名の女の子でしたというのを期待しますけどね。

どちらにしても一度会つてみないと分かりませんね。

エヴァンジェリンさんがどんな人なのか。

できたらまともな人であつて欲しいんですけどね。

紅茶を飲みながら僕は深いため息を吐き出しました。なんと  
いうか、色々といっぱいいっぱいです。

「えっと、貴方がネギ・スプリングフィールドさんですかー？」

そんな時、そんな声が聞こえてきました。

ふと、顔を上げるとそこにはあの名簿通りの顔をした近衛 木乃  
香さんが立っていました。

ぼーっとしてしまっていた僕は彼女を見て慌てて立ちあがります。

「あっと、すいません。そうです。そちらは、近衛 木乃香さんで  
すよね」

一応知っているが、確認の為にそう尋ねる。

そんな僕に、近衛さんははんなりと笑いながら頷きました。

「そやで、うちが近衛 木乃香やで。ネギ君」

ニコニコと楽しそうに笑っている近衛さん。その笑顔はとてもい  
い人そうで、なんというか、本当にあの後頭部の血が流れているの  
か疑問に思います。

そんな事を考えながら僕は彼女に言います。

「それじゃあ、これは明日菜さんの携帯です」

「ありがとーな、ネギ君」

僕は机の上に置いておいた、携帯電話を差し出すと、近衛さんは  
にっこりと笑って携帯を受け取りました。

「いえ、明日菜さんにぶつかつた、僕が悪いんですし。わざわざ、取りに来てもらってすいませんでした。助かりましたよ」

「ええねんって、うちも元々こつちに来る用事もあつたんやし」

そういつて近衛さんはニコニコと笑つたままこつちを見る。僕もにっこりと笑う。

そんな僕を見て、さらにニコニコと笑う近衛さん。

ちよつと首を傾げながらも、笑う僕。

それでもまだニコニコと笑う近衛さん。

えつと、帰らないんでしょうか？

目的の携帯電話も受け取つたのに、ずっと笑つたままこつちを見ている近衛に僕は首をかしげます。

そんな僕に近衛さんは、口元を隠して上品に笑います。

「そういえば、ネギ君って、その年やのに教師なんやってね」

「ええ、そうなりますね」

ニコニコと笑いながらそういつてくる近衛さん。そんな近衛さんに僕はどう反応していいのかわからずに、そんな言葉しか返せません。

そんな僕に、彼女は更にニコニコ笑いながら尋ねてきます。

「しかも、うちのクラスやとか」

「え、ええ、教師というか教育実習生見習いといった感じなんです

が

僕の答えにニコニコと笑う近衛さん。

その笑顔に何故か圧倒されてしまい、冷や汗が頬から流れる僕。

な、なんででしょう、この感じ。笑顔なのに、何だか凄い圧力を感じてるんですけど。

「へー、そうなんやー」

ニコニコと、ただニコニコと笑いながらそう呟く近衛さん。

そして、彼女の目はジッと僕の事を見えています。

「こ、近衛さん？」

その圧力に負け、そう尋ねる僕に、近衛さんは少しむっとした表情を浮かべて言います。

「木乃香や」

「え？」

言っている意味が理解できずに、そう問い返してしまふ僕。

そんな僕に、近衛さんはニコニコと笑いながら言います。

「うちの名前、木乃香でええで。アスナの事はアスナって呼んでんねやし」

「えっ、あっ、はい。木乃香さん」

笑顔の圧力とでも言うのでしょうか。正直、学園長以上にやりにくいです。

そしてまた、ただはんなりと笑うだけに戻る木乃香さんに僕はどうしていいのか分からずに、泣きそうになります。

そんな僕を見て、木乃香さんはくすりと笑うと言いました。

「ふふふ、新学期が楽しみやなー。絶対に皆驚くえー」

「そ、そうですね？」

木乃香さんの言葉に、僕はそう返す事しかできなかった。そんな僕に木乃香さんはクスクスと笑うと言いました。

「それじゃあ、うちはこれから行く所あるから。

携帯電話ありがとうなー」

ニコニコと笑いながら手を振る木乃香さんに、僕もあいまいな笑みを浮かべながらも手を振り返します。そして、木乃香さんがいなくなっただのを確認してどっかりと椅子に腰をおろしました。

……疲れました。

休憩の意味を込めて、紅茶のカップを手に取り、口をつけながら僕は思います。

中学生って怖い。



それから、しばらくして紅茶を飲み終え、僕の気力が回復すると、タカミチの家を指して歩き始めました。なんというか、早く帰って寝たいです。

体力的には全然疲れていませんが、気疲れという奴なのか身体が凄くだるいです。

「あれ、君はネギ君！」

そんな重い足取りでタカミチの家を指していた僕に、そんな声がかけられました。

今度は誰だろうと、ゆつくりとその声ができる方に視線をやると、そこにはスーツを着た知らない男性が立っていました。

「……貴方は？」

多分会った事がない人物を前に首を傾げる。

そんな僕に男性はにこやかに笑いながら言います。

「ああ、自己紹介がまだだったね。僕は瀬流彦。」

女子中等学部の教師をしてるんだ。まだ新人だけだね」

という事は、同僚さんですか。苦労してそうですねえ。

そんな事を考えながら、僕は瀬流彦さんの方へと改めて目をやりました。

あれ？

こつちにやって来る瀬流彦さんに僕は大きな違和感を覚えました。違和感の正体は分かります。瀬流彦さんの魔力が一般人よりも明らかに低いんです。

僕の魔力と同等程度。つまり小動物程度の魔力。ほんとうに微かにしかありません。

「ん？ どうしたんだい？」

繁々と瀬流彦さんを観察している僕に、瀬流彦さんはにこやかに笑いながらそう尋ねます。

おっと、こんなに眺めていたら失礼ですよ。そもそも、魔力なんてあるのが無かるのが一般的な生活を送るにあたってさほど問題はありませんし。

「いえ、何でもありませんよ。」

改めて自己紹介しますね、僕の名前はネギ・スプリングフィールドです

思考を切り替えて、自己紹介をする僕。瀬流彦さんは『よろしくー』と言いながら握手をする。

「それで、何かご用でしょうか？」

僕は首を傾げながら瀬流彦さんにそう尋ねる。すると、瀬流彦さんは小さく苦笑しながら頭を掻く。

「うーん、用事って程でもないんだけど、学園長に伝言を頼まれてね」

学園長という時点で嫌な予感しかしません。  
僕は身構えながら、瀬流彦さんの言葉に耳を傾けます。

「明日、また話があるから来てほしいだって」

なるほど、明日再び話し合いをするんですね。

とりあえず、明日は朝一でぬらりひよんの顔面に拳を叩き込む事にしましょう。

僕はそう心に決めて、頷きました。

「分かりました、明日ですね」

「うん、そうだよ。っていうか、何かどす黒い笑みを浮かべてるんだけど大丈夫かい？」

体調でしたら、物凄くだるいです。帰って寝たいです。

ですが、そうハツキリという訳にもいかずに、ちよつと怯えている瀬流彦さんに僕は努めて普通の笑顔を浮かべて言いました。

「いえ、大丈夫です。では、明日一番に学園長室に行きますね」

「う、うん、確かに伝えたよー。今日は早く帰って寝た方がいいよ」  
気を使っただか、瀬流彦さんはそう言ってくれど、学校の方へと歩いて行きました。

なんとというか、この学園にいるのに普通の人って感じですね。魔力が凄く低いのが、変な所ですけど。

とことこと歩いていく瀬流彦さんを見送りながら僕はそう思いま

した。

「やー、悪いなネギ君！ 遅くなってしまって、さっそく何か食べに行こうか！」

家に帰って、しばらくしているとタカミチが帰ってきました。タカミチは今日は朝一でどこかに出張に行っていた筈ですけど、早い帰りですね。一体どこに出張してきたんでしょうか？

そんな事を考えながら、帰ってきたタカミチに僕は言います。

「あつ、タカミチ。おかえりなさい。ご飯なら作ってるよ」

「えっ？」

僕の言葉に驚いたようにそう漏らすタカミチ。

そんな少し失礼なタカミチに僕は小さく肩をすくめて、説明します。

「悪いと思ったけど、冷蔵庫の中見たんだ。それで、ほとんど何もなかったから買い物して、ちゃちゃっと作っちゃったよ。まあ、簡単なモノだけだね」

机の上に並べてラップをしてある料理を見せる僕。

作った料理は、シーフードパエリアです。そんなに難しいレシピじゃないし、材料と炊飯器があれば簡単にできる料理です。付け合わせに、簡単なサラダとスープも作りました。

って、あれ？　なんかタカミチが固まってるんですけど。

「どうしたんですか、タカミチ？」

再起動しないタカミチに僕が、そう尋ねると、タカミチはようやく起動して驚いた顔で僕を見ます。

「本当にネギ君が作ったのかい？　ネギ君が料理ができるなんて」

失礼ですね。料理ぐらいできますよ。というか、レシピ通りに計って作れば、誰でも出来ますよ。

大げさに驚くタカミチに僕は、少し憤慨する。

「いやあ、悪い悪い。本当にネギ君が料理作れるとは思わなかったから」

怒っている僕の雰囲気を感じたのか、タカミチは少しごまかすようにそう言っただけで笑う。

そして、少し遠い目をしました。

ああ、この目は。

僕は何となくタカミチが何を考えているのか分かりました。

この目は、よくなんちゃって魔法学院の校長がしていた目。僕じ

やなくて、僕の父さんを見ている目です。

「……僕が料理できるの意外だった？」

「ああ、ちよつとね。あの人は作れなかったからな」

僕の言葉に無意識のうちかそう呟くタカミチ。そして、すぐには  
つと我に返りH A H A H Aと洋風に笑った。そんなタカミチに僕は  
何でもないように小さく笑いながら言う。

「じゃあ、ご飯温めるから待ってて。僕もまだ食べてないんだ」

慌てるように僕はラップをしているお皿を電子レンジに放りこみ  
ます。

そして、ボタンを押してレンジが動いているのを見ると、今度は  
コンロに火をかけてスープを温めなおします。

しばらく、カラカラと鍋をかきまぜながら僕は小さくため息を吐  
き出しました。

タカミチは僕の事を見ていない。

僕はスープをかき混ぜながら、そう思います。考えないようにし  
ようとすればするほど、そんな思考が僕の頭のなかに流れ込みます。

タカミチ以外の人、僕の父さんを知っている人は皆僕を見ていな  
い。

確信はありませんが、多分そうなんでしょう。向こうの学校の校  
長だってそうでしたし、ネカネお姉ちゃんもそうです。

カラカラと鍋をかきまぜる音だけが、部屋の中に響きます。

僕の父さんはどんな人だったんでしょうか。

何となく疑問に思います。

どれほど凄い人だったら、こんなにも色んな人に影響を与えるんでしょう。

「……英雄か」

僕は吐き出すようにそう呟きます。

幸いなことに、タカミチの耳には僕の呟きは聞こえなかったようでした。

「ご飯を食べ終え、お風呂に入った後、僕はようやくベッドに寝転ぶ事が出来ました。

なんとというか、今日も凄く疲れました。というか、ここに来てから疲れっぱなしです。

ごろりと寝がえりをうち、僕は自分の部屋へと視線を向けました。

そこにはいくつか整理された家具と、まだ荷解きしきれていない段ボールがいくつもありました。

僕はゆっくりと立ち上がって、段ボールを開きます。

中には大きな杖と、オモチャの銃の様なモノが入っていました。

この銃は卒業の日に校長代理のカルロツテ・ハハリさんが泣きながら『これは魔法銃よ。少しでもあなたの役に立つ事を願っています。私の名前を、そう私の名前を刻んでいますから、ぜひ使ってください！ 絶対ですよ！』と渡してくれたモノです。

正直、魔法銃なんて使い道がなくて、邪魔にしかありませんが捨てる何か呪われそうなので、まだ持っています。

そして、もう一つの荷物。杖です。

この杖はあの日に父さんが僕に渡した杖です。

『こんなものしか残せないが』

父さんがそう言って僕に渡した杖。

僕はその杖をただ静かに見つめます。

杖と言っても、ただの変哲もない木の棒。魔法媒体だろうが、何だろうが今の僕には木偶の坊でしかありません。

「……こんなものいらなかった」

気がついたら、僕の口からそんな言葉が出ていました。

気がついたら、僕の目から涙が零れ落ちていました。

いけない。慣れない環境の所為か、マイナス思考になっている。

僕は慌てて思考を切り替えようと思いました。一度開いた想いは決壊したダムのように流れ出します。

僕には父さんが何を考えていたのか分かりません。



僕はただ、帰る家があつて家に帰れば母さんが『おかえり』と言つてくれて僕が『ただいま』と言うそんな家庭。父さんが帰つてきて『おかえり』と僕がいい、父さんが『ただいま』といそんな家庭が欲しかったのに。

英雄。

今の僕にはとても薄く感じる言葉。良い面も悪い面も全てを混ぜて、ごまかす為に作られたように思えます。

英雄とはなんなのか、僕には理解できません。

父さん。

窓へ目を向けると、満月が空に浮かんでいました。

僕は持っていた杖をゆっくり、段ボールの中に戻すと呟きました。

「どうして、英雄になんかなつたんですか？」

答えが返つてこないそんな問いかけは、誰もいない静かな部屋の中に解けていきました。



あのぬらりひよんの頭をもいでやりたい今日この頃。(後書き)

慣れない環境の所為か、ちょっとネガってしまったネギ君。

さて、これからどうなるのやら。

それは、ある男たちのハードボイルドな物語。（前書き）

『皆さんの感想が作者の元気につながります』でお馴染みの作者です。

今日も元気に更新です。

それは、ある男たちのハードボイルドな物語。

S I D E : 神多羅木

眩しいぐらいの日光は閉め切られた窓に遮られ、部屋はうす暗く彩られていた。

騒がしいぐらいの生徒たちの声は分厚い壁に阻まれ、静寂だけが部屋の中を支配していた。

闇に閉ざされ、騒音から離れた小さな部屋の中で、くわえた煙草の火だけが赤く光っていた。

その光は部屋に飾られた小さな鏡に反射し、ぼんやりと照らされた俺の顔だけが浮かんでいた。

「……ネギ・スプリングフィールドについて？」

口にはさんだ煙草を弄びながら、俺は誰もいない暗がりの向こうに問いかける。

そんな俺の問いかけに、光のない闇の中から小さく笑ったような声が聞こえる。

「ああ、そうじゃ。あの紅き翼のリーダーであった千の魔法の男の息子ナギ・スプリングフィールドのネギ・スプリングフィールド。父親の血を色濃く受け継いだ幼子じゃよ」

この声の主は俺の雇い主であり、上司である男の声だ。

雇い主といっても、この学園の長である老獺爺とは違う、この俺が唯一忠義を誓う男。

しがない傭兵だった俺を拾い、育ててくれた変わり者だ。

「何故、俺が？」

聞こえてきた声に、俺は肺を満たしていた煙を吐き出しそう尋ねる。

「あんたの信用している、あのオコジヨがついているんだろ？」

煙がゆっくりと立ち上り、灯った煙草の火を白く濁す。

そんな様子に目をやりながら、俺は闇の向こうにそう尋ねた。

「そう言うな。ワシとしてもアルベル・カモミールを盲目的に信用している訳じゃない」

俺の言葉に、くくくと笑いを噛み殺しながらその声はそう答える。そんな声に、俺は何も答えずに闇に視線をやりながら肩をすくめる。

……盲目的に信用している訳じゃない、ねえ。

灰皿に煙草の灰を捨てながら、俺は心の中で呆れたように考える。

そんな俺の考えを読んだかのように、闇の向こうから声がかける。

「あの男、アルベル・カモミールは危険な男じゃ。」

下手に放しておくよりも、今のうちに首輪をかけておいた方がよい」

何かおかしいのか声は上機嫌のままそう答える。

そんな声に、短くなつた煙草を灰皿にこすりつけながら、俺は小さくため息を吐き出した。

「……首輪ねえ。あの男が契約や魔法書程度で本当に飼いならせるとは思えないが」

「心配はいらん。どちらにしてもあの男の力は必要なのじゃからな」

何かを考えながら、そう答える声。その言葉に俺は静かに思考を巡らせる。

アルベール・カモミール。

この名前に聞き覚えがある奴らは少ないだろうが、こいつの二つ名を知らない人間はいないだろう。

ある意味伝説の存在。紅き翼のメンバーと並ぶほどの二つ名だ。

胸元から新しい煙草を取り出し、啜え、火をつける。

再び暗い部屋に微かな光が灯る。

俺はもう一度、肺に煙を満たし、それを吐き出すと、話題を変えるように言った。

「まあ、いい。英雄の息子の件も受けてやるよ」

どの道、あなたの依頼なら断れないしな。

出かかったそんな言葉を飲み込みながら、俺は闇の向こうに視線を送る。

「ああ、感謝するぞ。こちらはいつも通り姫さんと計画を進めておく。」

そつちも 「

「ああ、分かっている。調べ物は進んでいるよ」

向こうの声を遮り、俺はそう答える。

この後はいつもの定時連絡だ。態々、同じ言葉を何度も聞く必要はない。

「相変わらずじゃな」

そんな俺に闇の向こうで声が笑う。

「面倒が嫌いなだけだよ」

啜っていた煙草を灰皿に擦りつけると、俺はゆっくりと立ち上がる。

闇が広がる部屋の中で、パチンッと指を弾く。

その瞬間、蛍光灯に電気が戻り、部屋に光が戻ってきた。

明るくなった部屋の中で、俺はいつものサングラスをかけると、もう誰もいない真っ白な壁に向かって呟いた。

「全ては主の思うとおりに……」



そう言った俺の声は、あの人には届かなかった。

S I D E : ガトウ

眩しいぐらいの日光は開けられた窓から、部屋へと入り込み。  
騒がしいぐらいの街の生活音も開けられた窓から、部屋の中へと  
入ってくる。

とても、清々しい朝に、いつものブラックコーヒーとただトース  
トという朝食を前にしながら俺は携帯電話に向かって話しかけた。

「えっ、高畑・T・タカミチについての情報？」

口に挟もうとしたパンに味がない事に、俺は少し嫌な顔をしながらも、携帯電話の向こうにそう尋ねる。そんな俺の言葉に、携帯電話の向こうで相手が頷く。

「そつどすえー。紅き翼のメンバーやっただって話やないですか。何故この学園におるのか、何を考えておるんか、その辺り分からへんかと思いまして？」

この声の主は俺の友達であるカモの、助手をしている月詠の声だ。助手と言っても今は麻帆良の中で、小学生をしているらしい。そ

して、月詠の上司のカモは俺の友達だ！

カモは友達がいなかった俺に声をかけ、友達になってくれた大親友だ！

「なんで、俺に？」

聞こえてきた声に、トーストに誰にも見つからないようにマイ莓ジャムを塗りつけながら、そう尋ねる。

「こう見えても俺は死んだ事になって、タカミチとはもう何年も会ってないんだけど？」

コーヒーカップから湯気が立ち上り、俺の眼鏡を白く曇らせる。

そんなカップに、俺は机にある限りのミルクをつぎ込みながらそう言った。

「そう言われましてもなあ。麻帆良学園に闇の福音やら何やら切刻みたいな人物がたくさんおるんですえ？ 何か訳があると考えるのが普通ですよ。あー、斬りたい、斬りたい、斬りたいわあ。」

もっお預け生活はたくさんですえー。はやく、血沸き肉躍るような闘いを」

俺の言葉に、うふふとどす黒い笑い声上がり、刀を抜く音が聞こえる。

そんな音に、俺は冷や汗をかきながらも何も答えずに、砂糖を加えたコーヒーカップに口をつける。

ああ、久しぶりに我が親友カモに会いたいな！

いい感じの味になったコーヒーの味を楽しみながら、俺は心の中

でそう叫ぶ。

そんな俺の考えを読んだかのように、正気に戻った月詠が携帯の向こうから声をかける。

「残念やけど、カモはんは、今はネギ・スプリングフィールドにつきっきりであえまへんえー。」

うちだって会えへんねんから、公式で死んでるガトウはんが会えるはずないやないですか」

残念やなあ、と月詠は不機嫌そうにそう答える。

そんな彼女に、俺は小さくなったトーストを喉に流し込みながら、人の目も気にせず大きく叫んだ！

「そ、……それでも会いたい。だって、友人だから、友達だから、親友だからああ！

そうだろ、カモ！ 俺たちは親友だあああああ！」

「はあ、禁断症状ができましたかえ。それやったら高畑・T・タカミチの知ってる事を話してくれはったら何とかできるかもしれまへんえ？」

何か考えがあるのか、そう答える声。その言葉に俺は静かに思考を巡らせる。

俺が、彼女にタカミチの事を教える。彼女が、カモにタカミチの事を教える。カモが、タカミチと友達になる。俺が、カモと感動の再会が出来る。皆友達。

うん、完璧な理論だ！ 一部の隙もない！ 全員が幸せになる！

残ったコーヒーを胃の中に流し込みながら、俺は一息つく。  
まだ曇ったままの眼鏡が、俺の息で更に白くなる。

俺は一度、眼鏡を外し、それを拭きながら、携帯に向かって力強く頷いた。

「何でも教ええよう！　それが、俺のためであり、タカミチのためだからな！」

それに、カモと会えるなら元から断る気ないしな！  
当然の事だと俺は頷きながら、携帯にそう話かける。

「一応、感謝しますえー。というか相変わらず簡単なお人ですなあ。そうや、高畑・T・タカミチと一緒に」

「ああ、分かっているよ。ゼクトさんの事だろ、ちゃんと調べてるよ！」

向こうの声を遮り、俺はそう答える。

カモはレジスタンス、そしてゼクトに関してあちこちに手を尽くして調べているからな。

俺もいくつか情報を仕入れている。

「相変わらず、無駄に優秀ですなあー」

久しぶりにカモに会えるかもしれない事実にはテンションが上がり切っている俺に、電話の向こうで月詠が笑う。

「当然だ！　友達に会いたいただけだからな！」

昔に政府の犬をやっていた経験が生きるなんて、何て幸せな事なんだ！

持っていたカップを机におき、俺はゆっくりと立ち上がる。

広いその場所で、俺は手をあげる。

その瞬間、ボーイが俺のもとにやってきてレジへと案内してくれる。

金を払いレストランから、外にでた俺は曇りをとった眼鏡をかけ、もう切れてしまっている携帯を開くといつものカモへのメールを打ち始めた。

「ああ、友達がいる生活っていいよな！」

そんな俺の事を見て、指さして笑う子供がいたけど俺は気になどしなかった！

「……ふむ、これが」

昼間の教師としての仕事を終わらし、軽く昼食をとった後、俺は最近もはや行く事が日課になっている図書館島へと足を伸ばした。

向かった先は、図書館島の地下44・4階。

44階と45階の間にある、一般人はおろか、並みの魔法先生でも近付かない秘蔵書が置いてある部屋だ。至る所に危険な罠がしかけられ、観葉植物の代わりに肉食植物が根を張っている、入るのも出るのも苦勞する危険な部屋だ。

俺は今日も目当ての本を手にとり、近くにあった椅子に腰かけるとページをめくる。

書かれているのは日本語でも英語でも無い。それどころかこの世界にあるどの国の言葉でもない。

必要な言葉が巧みに隠され、一見ただけでは読み解く事のできない複雑な暗号でできた本なのだ。

一応、魔法書としては簡単な類で、解読ワードを入手しなくても、読み解く事が出来るらしいが。

「……ふっ」

俺は大きなため息を吐き出した。

今は仮の姿として教師という職業をしてはいるが、こつ言った頭脳労働は実の所、そんなに得意ではない。傭兵として、瓦礫と悲鳴の中で暮らし、本の読み方よりも、人を殺す方法の方を先に覚えた人間だからな。

必要な事を人間から聞き出すのは得意だが、必要な情報を本から探し出すのは専門外だ。

……あの人には順調に進んでいると言ったが。  
俺はもう一度本に視線を落としてため息混じりに呟いた。

「ふう、まだ15%程度しか解読できてないな」

「おや、何かお困りですか？」

「っ!?!?」

誰に言うでもない俺の呟きに、そんな声が返ってきた。  
油断していた自身に舌打ちをしながら、俺は慌てて椅子から立ち上がり、声が出た方へと視線をやる。

「そう警戒されなくても大丈夫ですよ」

そこにはローブで顔を隠した男が立っていた。  
男は僅かに見える口元を愉快そうに歪めながら俺を見ていた。

「……誰だ？」

油断せず、いつでも攻撃が仕掛けられるように構えながら俺は男に尋ねる。

そんな俺に、男は更に楽しそうに口元を歪めながら答える。

「ですから、警戒しないでください。私の名前はクウネル・サンダースと言います。」

「この図書館島の司書をやっています」

「司書だと？」

この学園に来てもう数年も経つが、そんな話は聞いた事ない。クウネル・サンダーズと名乗った男に俺は更に警戒を強める。そんな俺に、クウネルは小さく苦笑する。

「あらら、余計に警戒されてしまいましたか」

クウネルは小さく舌を出して、そう言うと、突然その場から掻き消えた！

「っ！？」

「ほう、魔法書の解読を行っていたんですね」

次の瞬間に、クウネルは俺の背後に立ち、俺が先ほどまで手にしていた本を眺めていた。

今度は油断していた訳ではない。相手の一挙手一投足を逃さずに目に焼き付けていた。

それなのに、反応する事すらできなかった。

こいつ、何者だ。

「ですから、警戒しないでください。私はただの図書館島の司書。ここにある本の事なら何でも教えて差し上げますよ」

おどける様に肩をすくめてそう答えるクウネル。そんなクウネルに俺は睨みつけ、そこで気がつく。



「……お前は、幻影か？」

「あらら、気づかれちゃいましたか？ さすがですね」

俺の呟きに、もう一度舌を出しておどけるクウネル。

その仕草で俺は確信した。

そこにいるクウネルは本体ではなく幻影だ。ここまで密度の濃い幻影は初めて見たな。

まじまじと見つめる俺に、クウネルは微笑みを浮かべ続ける。

幻影は東洋の神秘とされている、分身の術とはその根底から違う。分身はメリットとして密度を簡単に上げられ、本人と見分けをつかなくする事はできるが、デメリットとして分身本体が脆いという側面を持つ。

だが、幻影は密度を上げる事が困難であり、密度を上げた状態でも幻影だとバレてしまうが、そのデメリットの代わりに幻影には実態がなく幻影自身をかき消す攻撃以外どんな攻撃も喰らわないという反則気味のメリットを持った技だ。

「……観察は終わりましたか？ いやー、熱い視線で困ってしまえますねえ」

「っち」

今の俺にこの幻影をかき消すだけの、装備は整っていない。

俺は吐き捨てるように舌打ちをすると、どかりと椅子に腰を下ろした。

いざとなつたら逃げ出す事は出来る。  
それまでは、こいつが何故、俺に近づいたのかを見極めなければ  
ならない。

「それで、何の用だ？」

「ですから、本で困った事があつたら司書に聞くのが一番ですと教  
えにきたのです」

ぶつきらぼうに言う俺に、クウネルは苦笑を浮かべながら俺が持  
っている本を指さした。

そんなクウネルの態度に、俺は軽い怒りを覚えながら言う。

「手伝いなどいらん」

「まあまあ、そう仰らずに」

俺の言葉など聞かずにクウネルは俺の手から本を取り上げると、  
ペラペラとページをめくり始める。

「ほう、重力魔法に関する魔法書ですか。随分とマニアックなモノ  
を持ちだしましたね」

「お前の気にする事ではない」

ニコニコと笑っているクウネルに、俺はそう言って切り捨てる。  
しかし、そんな俺など気にもかけずにクウネルは最後まで本をめ  
くり終わると言った。

「この本でよろしければ、解読方法をお教えしましょうか？」

「……」

唯一見えている口元を楽しげに歪めながらそう尋ねるクウネルに、俺は沈黙する。

確かに今はこの本の解読が必要だが、こんな胡散臭い奴の言葉など信用できる筈がない。

「ふふふ、この本はですね。一種のアナグラムになっていまして、必要なワードを探しだした後に」

黙っている俺に、クウネルは本を指さしながら説明を始める。

最後まで聞かなければ解放してくれそうにないクウネルに、ため息を吐き出し俺は本の方へと目をやった。

……なるほど、そう考えるのか。

しばらく説明を聞いた後に俺は改めて本へ視線を落とす。

「どうですか、解き方が分かれば、理解できるでしょ？」

ではここの所を、読んでみてください」

自慢げに胸を張るクウネルに、俺は再びため息を吐き出しながら、クウネルが指さした個所を解読する。

「ふむ、ここでこの公式を使用し読み解けるな。ということは、この文章は……『金髪幼女に猫耳スクミズは俺のジャスティス』？」

「ええ、その通りです。読めたじゃないですか」

俺の言葉に、はい大正解ですと答えるクウネル。

「……………は？」

開いた口がふさがらないという状態になる俺。そんな俺の反応を見て、クウネルは楽しそうに更に本を指さす。

「ちなみにこっちは『ポニーテールの美少女が、まだ凹凸の少ない身体で着る身体のラインを強調するチャイナ服は反則気味の強さを持つ』と書いています。って、あれ、どこに行くんですか？

まだ、本は全部解読してませんよ。おい、聞いてますか？ 帰るんですか？ まだ、あの『アルビレオ・イマ』著書の本の解読が終わってませんよー？」

そんな事を言ってくるクウネルを無視し、俺は痛くなる頭を押さえながら、図書館島を後にした。

無駄な時間を過ごしてしまった。

あいかわらず、この学園は非常識な奴ばかりだ。

SIDE：ガトウ

「ふむ……、これか」

今、俺が息を潜めているのはレジスタンスのアジトの一つであった。

旧世界の廃棄された地下施設が奴らのアジトになっていたのだ。

施設の大きさは、それなりにある。

アジトの大きさや収容人数の多さから見ると、今まで掴まされてきたトカゲの尻尾ではなく、それなりに重要な拠点の一つであるようだ。至る所に配置された罾や魔法陣を避け、襲ってくる凶暴な番犬をかわしながら、俺はアジトの奥深く、おそらくこのアジトのボスがいるであろう部屋に足を踏み入れていた。

そんな場所で、俺は魔法でロックされていた机の引き出しの中から一冊の本に手に取った。

どうやら上司に報告する報告書の類の様である。

その報告書のタイトルに書かれた文字に目をやる。

『火星調査』

ただ単純にそう書かれたタイトル。

そのタイトルに俺は首を傾げながらも報告書を開いた。

「……これは」

書かれていたのはただ単純な業務報告ではなかった。

「魔法機械の製造……？」

俺は更に首をひねり、書かれている報告書を読み進める。

魔力を動力にし永久的に使用可能なエンジン。

魔力を原料に必要な元素から物質を作りだす機械。

機械の補助により、魔法エネルギーを効率化させるシステム。

「……なるほど、新技術というやつだな。

まだ構想の段階のようだがな」

魔法でも機械でもない、その中間に位置する魔法機械。たしか、我が大親友であるカモの奴も、その辺の研究をしていたな。

そう考えながら、俺は胸元にあるボールペン型のカメラで、すばやく報告書を撮影していく。

そんな時、扉の向こうから人の声が聞こえた。

俺は慌てて、報告書を引き出しに、元通りロックを掛けると、音が聞こえてきていない方の扉へと身を隠した。そこはどうかやら倉庫になっていたらしく、出入り口は今入ってきた扉しかなかった。

しまった、閉じ込められたな。

息をひそめながら、心の中でそう呟き、俺は外の様子に耳を潜める。

その瞬間、向こうの扉が開かれ何人かの人間が入ってきた。足音から察するに二人か。

「ですから！ フェイルズは甘いというのです！

あのような東洋人に任せて大丈夫だと思っているのですか！」

最初に聞こえてきたのは、女性の声。その声に、もう一人がため息交じりに答えた。

「東洋の事は東洋人が一番理解している」

「だから甘いんです！ 今はようやく計画が始動し始めた時なのに！」

東洋。我が大親友のカモがいる麻帆良学園の事か？

それに、計画だと？ レジスタンスの奴らは何をたくらんでいるんだ？

一つも単語を取り逃さないように耳を澄ます俺。

「落ち着け、エスレア。俺たちは必要な事をやればいい。

手の届かない所にケチをつける暇があったら、訓練でもやっておけ。俺たちは弱い」

「っ！ ……分かってるわよ、フェイルズ」

フェイルズと呼ばれた男の言葉に、エスレアが一瞬だけ言葉を詰らせ、そして渋々といった様子で頷いた。だが、どうやらエスレアは部屋から出ていかずに、置かれたあつたソファに腰をかけたようだった。

まいったな。

しばらく居座りそうな二人に俺は、心の中でそう呟く。

このままでは予定時間を過ぎてしまいそうだ。

俺は自分の腕時計へ目をやった。腕時計は現在2時過ぎを指している。そろそろ3時だ。

ここに潜入したのが、12時ジャスト。潜入してからもう三時間も経とうとしていた。

潜入は3時間以内に終わらせる。

それは俺がメセンブリーナ連合の捜査官であった時からの、自分で決めたルールであった。

このルールのおかげで俺は今まで生き残る事が出来ていた。必要以上に潜るのは、それだけ死ぬ可能性が増えるのだから。

それに、もうすぐ3時だ。

我が心の友であるカモへの3時のメールを送らなければならない。これは何よりも重要な使命だ。

……仕方がない、あの手を使うか。

しばらく考えた末に、俺は心の中でそう呟き、ポケットに手を入れるとそこにあった小さなスイッチのボタンを押した。

その瞬間、大きな爆発音が聞こえた！ 前もって俺が仕掛けておいた爆弾が、玄関の辺りで爆発したのだ。

「っ、エスレア！」

「分かってるわよ！」



爆発音を聞き、すぐに命令を出すフェイルズに、そう答えるエスレア。

扉はすぐに開き、外へと走っていく。

俺はその音を聞いてから、3分ほど待つとすばやく部屋から飛び出る。そして、気配を遮断しながら俺はこの地下アジトから脱出する事に成功した。先ほどの爆発が誘導となり、玄関以外の出口の警備は手薄になっていたしな。

まあ、手薄といっても人はそれなりにいたが。

なんとか騒がしい地下から地上へと逃げのび、俺は安堵のため息を吐き出す。

そして、胸元から煙草を取り出すと、口にくわえ、火をつける。肺の中に煙を満たし、外へと吐き出した。腕時計へと目をやる。

時間はまだ2時55分。友であるカモへのメールは間に合いそう  
だ。

ミッションコンプリートといったところかな。



それは、ある男たちのハードボイルドな物語 (後書き)

そういえば、原作に入ったと思っていましたが、新学期が始まっていないので厳密にはまだ原作前なんですよね。  
いやー、長い。

あと突然ですが、一つアンケートがあります。  
この作品とは直接関係がありませんので、活動報告の方に書かせていただきます。  
良ければ、答えてください。

「利用するにしても何にしても計画的なのが一番だ」という話。(前書き)

書けたのでサクサク投稿。

作者に書き溜めるといふ考え方はありません。

「利用するにしても何にしても計画的なのが一番だという話。」

「ななななな、なんですって!? クラスメイトに闇の福音がいるですってえええ!?」

人通りの少ないお昼過ぎの公園に、アーニヤの大声が響き渡った。その大声に地面に落ちていた餌をつついていた鳥たちは逃げまどうように空へと羽ばたき、僕の足元にきていた白と黒の斑模様の猫も毛を逆立たせふーっと威嚇する。

「ア、アーニヤ! も、もっと、声を落として」

今は人がいないけど、いつ来るか分からないから! 猫も怯えるから!

まだ叫び足りなさそうだったアーニヤの口を僕は慌ててふさぎます。だけど、口をふさぐ事で、更に興奮し暴れ出すとするアーニヤ。お願いだから、落ち着いて。

あつ、どうも。ネギです。

今日は麻帆良学園に来て3日目のお昼です。今朝にあの後頭部に会ったんですが、また僕が反論しようとした時に来客があり結局うやむやのまま今に至ってしまうネギです。

あの後頭部をいつか、殴りたいです。

そんな事よりも、今はアーニヤの方が問題です。

「アーニヤ落ち着いて」

しばらく興奮してフガフガとしていましたが、人の目があるかも知れない事を思い出したのか、僕の言葉にコクコクと頷きました。そんなアーニヤを見て落ち着いたのを確認すると、僕は口をふさいでいた手をゆっくりとのけます。

「……大丈夫、アーニヤ？」

「げげげほ、もう！ 手で口をふさぐのは止めてって言うてるですよー！」

口をふさぎすぎてしまったのか、少しむせてしまっているアーニヤに、僕は持っていたジュースを差し出す。ジュースには『エターナルブリザード12%配合』と意味が分からない事を書いていましたが、味はそれなりだったので、安心です。

「うぐ、何か変な味……」

渡したジュースを口に含み、ちよつと嫌そうな顔を浮かべるアーニヤ。でも、この前飲んだ『ロボビタミンB』よりはマシだったよあれって、ただの海水みたいな味がしたし。よくあんな需要が無さそうなジュースを売ってますよね。

飲み物を飲んだ事でちよつと落ち着いたアーニヤ。

ふうつと息をつくアーニヤは何か可愛らしいです。そんな事を考えながらアーニヤを見て、僕は小さく微笑えます。僕の視線に気がついたのか、アーニヤは少し顔を赤くしながらふいつとそっぽを向いてしまいます。そんな姿も可愛いですね。

「あつ、それでエヴァンジェリンさんの事なんだけど」

「そうよ、それよ！ 一体どういう事！ ていうか、何の悪夢よ！」

いつまでもアーニヤを愛でていたのですがそういう訳にもいかないのです、僕は最初の話に戻しました。そんな僕の言葉に、アーニヤは再びテンション高くそう叫びます。今度は一応周りに配慮してくれたのか、若干トーン落とし気味ですが。

「どういう事って言われても正直な話、僕にも何も分からないんだよな。」

学園長はごまかしてるし、タカミチも教えてくれないし」

足元にじゃれ付いてくる猫を撫でながら、僕はため息混じりに答えます。

今、この学園で僕が知っている魔法関係の先生は、学園長とタカミチ、後はこの前の夜に会ったサングラスをかけた神多羅木さんに、刀を持ってた葛葉さんぐらいしかいません。

学園長とタカミチは教えてくれず、この広い学園で神多羅木さんの居場所も、葛葉さんの居場所も見つけられる筈がありません。あの時に、連絡先ぐらい聞いておけばよかったですと思います。

「ちょっと待ってよ！ 教えてくれないってどういう事よ！」

そこはどう考えても懇切丁寧に教えてくれる場所でしょうか！」

「うん、そうなんだけどね」

そう言って小さくため息を吐き出します。僕だって何で教えてくれないのか理由が分かりません。

何というか、この麻帆良が変なのか、それとも日本という風土がこういうモノなのか。日本には『ハッキリと話さない文化』というモノがあるそうですし。

話さないというのは日本人的で美德にもなると教えられましたが、今回に限っては美德どころか悪徳です。悪徳商法で厄介事をおしつけられた気分ですよ。

「どっちにしても、頼りになる人がいないっていうのが問題なんだよね」

本人に問題があるうがなかるうが、闇の福音がいる時点で僕たちからしてみたら大問題ですから。

少しでも情報や頼れる人が欲しいところなのに。

僕はジューズをちびちびと飲みながら、そう呟きます。ちなみにこのジューズは『鰹節荒削り炭酸』です。簡単に言えば味噌汁が口の中で爆発するような味ですね。考えた人間の頭も爆発してそうです。

「あれ、そういえば、カモさんは？」

僕はふと気が付き、そう尋ねました。こういう時に良い知恵をくれるカモさんは今日はアーニヤの肩に乗っていませんでした。アーニヤの肩を見ながら尋ねる僕に、アーニヤは困った様な顔で答えません。

「それがあいつ『嬢ちゃん、俺はちょっと出かけてくるからいい子にしてるんだぜ、へっへっ』とか言ってる今朝早くからどこかにでかけたのよ」



微妙にカモさんの真似をしながらそう教えてくれるアーニヤ。でもカモさんは『へっへ』とか悪人っぽい笑顔は浮かべませんよ。それにしても、カモさんがいないのですか。それは残念です。いろんな経験があるカモさんなら、もしかしたらエヴァンジェリンさんの事を知ってるかもしれないのに。

「……どうしよっか？」

エヴァンジェリンさんの事が分からない以上、どうしようもありません。正直言ってもう打つ手が思いつかない僕は、諦めたような表情を浮かべ、青い空を見上げながらアーニヤに尋ねます。

カラツと晴れた冬空には、小さな雲が流れていき、どこからか鳥のさえずりが聞こえてきます。足元には猫がじゃれ付いてきますし、何とというか平和って感じですよ。

……この学園に来て、初めて平和を感じた気がします。

平和を実感しながら、ぼーっと空を見上げている僕。その所為で、僕は何やら決心したようなアーニヤの声を聞き逃してしまいました。

「……しかないわ！」

「え？」

肝心な部分が聞き取れなかった僕は、アーニヤにそう聞き返します。アーニヤは何故か力づくよく拳を握り、アーニヤはぐっと立ちあがると僕の方を見て言いました。

「会ってみるしかないわ！ 闇の福音に！」

拳を天高く突き上げ、興奮気味に叫ぶアーニヤ。勢いが余りすぎ

て、少しいつもの長いスカートが翻ります。それを見て、顔を赤くしてしまった僕は悪くありませんよね？

幸い、アーニヤはそんな僕に気づいていなかったようですが。

「……っていうか、待ってよアーニヤ！ エヴァンジェリンさんに会いに行くってどういう事!？」

アーニヤが言った言葉の意味を理解して赤くなった顔が、今度は青くなっていくのを感じます。

そんな僕にアーニヤはギロツという怖い目で僕を睨みつけてきました。

「ビビってんじゃないわよ、ネギ！ 会ってみないとどんな人か分からないなら、会いに行くまでよ!」

「いやっ、そうだけど」

力いっぱいそう言ってくるアーニヤに、僕は声を詰まらせます。確かにアーニヤがいう事は一理あります。実際問題、まだ問題は起きていませんし、今のうちに会っておいて相手がどのような人なのかを見てみるという手は良い手です。というか頼れる人間がいな以上、その手ぐらいしかありません。

ベストとまではいかななくても、ベターといった所です。

「だけどさ、アーニヤ……」

それでも会いたくないという気持ちが腰を重くし、僕を立ち上げさせません。正直言って、最近は魔法使いにいいところを見いだせずにありますからね。その中で、最強の部類に入る闇の福音はもしかしたらかなりの変人かもしれないのです。

それに、今回は気苦労だけではなく、危険だっけ付きまといまふ。何と言つても相手はあの闇の福音なんですから。

「ネギ、しゃきつとしなさい！ お尻上げる！ 背筋伸ばす！」

どうしようかと色々考えている間に、アーニヤの声に、無意識に反応して腰を上げて背筋を伸ばしてしまう僕。……なんというか、尻に引かれているの丸出しですね。

ちよつと涙目になりかけている僕に、アーニヤは諭すように言います。

「いい、ネギ。曲がりなりに教師を目指すつもりだったんでしょ。小学校教師の目標が中学校教師になつてしまつて、生徒があの闇の福音だからといつて、なよなよしてどうするのよ！ しゃきつとしなさい！ 胸を張れ、ネギ・スプリングフィールド！」

叫ぶようにいつたアーニヤの鼓舞が僕の心に突き刺さります。

確かに卒業証書で教師と出た時、人を導く仕事に少しだけ憧れを感じました。

今まで教師というモノにいい印象を持っていなかった僕でしたが、だからこそ嫌な教師にならないで人を導くのも一つの道じゃないかと感じたりもしました。

それに、実際に街のボランティアで教師をやつてみて、小さな生徒と一緒に笑つたり考えたりするのは楽しかったのも事実です。生徒はみんな一生懸命で、僕が言つた事を必死に理解しようとしている様子は微笑ましくもあり、嬉しくもありました。

そんなボランティアをしばらく続けていて、将来は、一般人の生

徒を教える一般の教師になるのもいいなと思っていました。

大人になった僕が黒板に向かい英語や算数を教え、子供たちがそれを頑張つて解く。

悪戯をする子もいたり、するけど皆仲良く笑っていられる教室。

そんな夢を見た事もありました。

だけど、

それが、年上を教える事になったり、闇の福音だったりすると話は別じゃないでしょうか？

当然ですが、僕はそう思います。

これは差別とかではなく、区別です。そもそも生徒はどんな奴でも生徒なんていう教師レベルの高い事は、まだ新人教師にすらなっていない僕には言えませんし、責任なんてとれません。

人を教えるという土台ができていない僕には、どう考えてもハードルが高すぎます。これはやってみなくちゃ分からないというモノではなく、やったら結果を出さなければならぬ事なんですから。

僕が失敗して、生徒の人の人生を悪い方に変えてしまったら目も当てられません。子供だからではすまされない事です。

なので、僕は一度大きく息を吸い込むと、諭すようにアーニヤに言う。

「……アーニヤ、落ち着いてよ。会いに行くって僕たちだけだったら危険なんだよ」

ここに他の教師の人、タカミチ辺りがついてきてくれるなら有難いんですが、そうでないのなら眠っている獅子がいるかもしれない穴に子供二人が突入するようなものです。

生きて帰ってこれない可能性が以上、その手は打つべきではないのです。

「そ、それは……、そうだけど！ でも！」

反論しようと、そう言ってくるアーニヤ。今日のアーニヤはアグレッシブですね。

そんなアーニヤに僕は微笑みながら言います。

「それにアーニヤ、エヴァンジェリンさんにだって都合つてもものがあるよ。」

もし行くとしても、いきなり尋ねるなんて事は常識知らずだよ」

いきなり会いに行ったら、追い返されるのがオチですからね。

「そっ、それはそうだけど」

うつとたじろぎ、少しテンションが下がり始めるアーニヤ。

そんなアーニヤに僕は、少し考えてから言います。

「僕としては、あんまり気は進まないけれどエヴァンジェリンさんに会うのはありだと思っっている。」

「だけど、何も考えずに会いに行くのは、無計画すぎると思うんだ」

「会いたくないというのは僕の個人的な感情だからね。」

「会いに行くのがベターならそれをするしかありません。このままじっとしていたらバットですしね。バットのまま放っておいて、そのまま新学期になってバットエンドを迎えるなんて結末は困りますからね。」

「そんな事を考えて、発言する僕に、アーニヤは何か言おうとして口を開き、そしてしばらくパクパクとさせた後、ふうとため息を吐き出して言いました。」

「ふう、確かにそれは、正論よね。ごめん、ちょっと焦ってた」

「僕の言葉にアーニヤが少し落ち込みながら頷きます。」

「ちゃんと僕の話が分かってくれたようで良かったです。アーニヤだって伊達になんちゃって魔法学院を高い成績で卒業した訳ではありませんしね。」

「ちゃんと考えたら理解してくれます。だって、相手の迷惑や、自分たちの立場を考える事ができるんですから。この学園の長と違って！」

「ノリだけで行動したらいい事なんてありませんよ、本当に。」

「それじゃあ、魔法先生が同席が可能な日程を決めて、エヴァンジェリンさんに連絡しようか。」

「できれば担任のタカミチがいいんだけどね。まあ、とにかく初めはタカミチや、気は進まないけど学園長に相談しよう」

落ち着いたアーニヤに、僕は微笑みながらそう答えます。そんな僕に、アーニヤも頷きます。

「そうね。大人の人がついててくれれば安心ね。もちろん、私もついていくから、勝手に行くんじゃないわよ」

ふんつと鼻を鳴らしながら怒り気味にそう言ってくるアーニヤ。そんなアーニヤに、僕は真剣な顔で頷きます。

「分かってるよ。もうアーニヤを泣かせたりしないから」

あんなアーニヤの顔なんて見たくないからね。

一昨日の夜の事を思い出し、自己嫌悪しそうになるのを必死で押し込めながら、そういう気持ちを込めて僕は言いました。

そんな僕を見て、アーニヤは見る見るうちに顔を赤くしていきます。僕も少し顔が赤くなるのを感じます。僕としても、結構な勇気つぎ込んで言った言葉ですからね。

これで、無愛想に『あつそ』とか言われた日には、一生部屋に引きこもって泣いて暮らしたでしょう。

赤くなっているアーニヤに僕は微笑みかけ、アーニヤの手を取ります。

そんな僕に、アーニヤは混乱しているのか物凄く慌てながら言います。

「も、もう、何言ってるのよ！　こんな所でそんな恥ずかしい事言わないでよ！

そりゃ、嬉しいか嬉しくないかで言ったら、嬉しいけど、そうじゃなくて、もっとモノには順序とか、そういうものがあるのよ！

って何言ってるのよ、私！ もう知らないわよ、バカネギっ！」

「ごふっ!？」

下腹部に物凄い痛みが走りました。何が起きたのか視線をやると、実際に赤く燃えているアーニヤの拳が僕の右わき腹に突き刺さっていました。

ひ、久しぶりに喰らった気がします。アーニヤの必殺技、アーニヤナツクルボンバー。

照れ隠しなのか顔を赤くしながら、僕の急所を的確に打ちぬくアーニヤ。

サッカーで鍛えた腹筋とかそんなものを鼻で笑いながら突き抜けてくるダメージはかなりのモノです。

そんな痛みを感じながら、僕は思いました。

ああ、多分一生尻にしかれるな、と。

さて、そういう訳だったのですが2日後、僕は電話の前で物凄く緊張しながら立っていました。

この2日間色々ありました。



学園長と話をしようとしたら学園長が居留守使ったり、学園長と話しているとタイミングの悪い時に来客が来たり、学園長に聞いたとしても笑うだけで何も喋らなかつたりと、大変でした。

この2日間で学園長との遭遇率が一番高いです。泣きたいです。もっと話がスムーズに行けば、アーニヤと会える時間が増えるのに！

まあ、そんな事はさておき、僕は緊張しながら受話器を手に取ります。当然ですが、受話器は何の抵抗もなく持ちあげる事ができました。さて、ここで注意するのは息が荒くなつてはいけません。相手にただの悪戯電話だと思われるてしまいますから。

僕は受話器を持ったまま、一度大きく深呼吸をし、少しだけ緊張を和らげると、電話のボタンを回します。なんでもいいですけど、なんでタカミチ宅にある電話は黒電話なんでしょう？

小さな疑問を浮かべながら、僕は電話をかけました。

電話の相手は、もちろんエヴァンジェリンさんです。

二日前に僕たちは思い立ったが吉日と、学園長やタカミチとエヴァンジェリンさんと一度話したいと相談したところ、一度会うのも悪くないだろうと納得してもらえ、タカミチが付き添いでエヴァンジェリンさんと会つのを許してもらえました。許可してもらつのに、2日も必要だったのはもはや御愛嬌だと思います。

だから、今さっそく僕は緊張しながらエヴァンジェリンさん宅に電話をしているのです。

ちなみに、僕の目の前にはアーニヤがいて、じつとこっちを見ています。彼女も緊張しているのに小さな声で『頑張つて』と僕に行ってください。

ちなみに、タカミチは出張との事で、明日の朝にしか帰ってきてきません。ですので、この家にいるのは僕とアーニヤだけです。

タカミチは『H A H A H A H A、何かあったら学園長を頼るんだよー』と言って風のように去って行きました。

そんな事を思い出している間に、電子音がしばらくなり、ガチャリと電話が取られました。

「あの、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんでしょうか？」

僕は事前にエヴァンジェリンさんが一人暮らしなのを聞いていたので、電話の向こうにそう尋ねます。

そんな僕の言葉に、電話の向こうから返事が返ってきました。

「いえ、私は絡繰 茶々丸ですが」

……間違えたー！？ えええ、緊張しすぎでいきなり間違えた！？ どうしよう、この空気！ 目の前で『頑張つて』と応援してくれるアーニヤに何て言おう！

それに、絡繰 茶々丸つて名簿に載っていたあのロボットっぽい人ですよー！？

僕は心の中で焦り混乱しながらも、とりあえず一縷の望みをかけて電話の向こうの絡繰さんに話かけます。

「えっと、絡繰さんですね。僕はネギ・スプリングフィールドという者なんですけれど、エヴァンジェリンさんはいらっしやいますか？」

できるだけ丁寧に喋る僕。そんな僕に、絡繰さんは答えます。

「マスターですか？ マスターはただいま街に中古ソフトを買いに出かけられていますか」

良かった、エヴァンジェリンさんの家で間違いなかったようです。それにしても、中古ソフトですか。意外と庶民的なんですね。なんとというか、それだけの事でほんわかとしてしまう自分が情けないです。

おつといけない。そんな変な考え僕は首を振って追い出すと、さつそく本題を喋ります。

「あの、それではエヴァンジェリンさんにお伝え願えませんでしょうか。

もしよろしければ、次の木曜日か金曜日のどちらかの日時に僕たちと、会っていただけませんか、と。もしも会っていただけるのでしたら、折り返し電話をかけてくださいと伝えてください」

僕たちが都合のいい日を喋ると、電話の向こうで絡繰さんが頷きました。

ちなみにこの日時は、僕たちの都合というよりもタカミチの都合です。それ以外の日は全部出張で学園にいないとか。出張続きといっていました、本当に大忙しですね。

「了解しました。確かにマスターにお伝えいたします」

「あつ、はい。お願いします」

電話に出てくれたのが、絡繰さんで良かったかもしれません。もしも本人が出てたら緊張してちゃんと喋れなかったかもしれませんから。

そんな事を考えながら、電話を切ろうとした僕に絡繰さんが止まりました。

「あの、失礼ですが、ネギ・スプリングフィールド様は、マスターとどのようなご関係が？」

絡繰さんの言葉に、僕は慌てます。

そういえば、名前を名乗ったきり、自分の立場を説明していませんでした！

「あつ、失礼しました！僕はネギ・スプリングフィールドといいます、今度2-Aの教育実習生見習いをする事になりました。

ですので、一度エヴァンジェリンさんと話がしたいと思い電話させていただきました」

教育実習生見習いという随分長い割には、格好悪い肩書きだが、これも学園長との長いディスカッションで手に入れた称号だった。

初めは『別に教師で良いのではないかのう』とか、『では、教育実習生でどうじゃ』とか言ってきた学園長を叩きのめして、手に入れた正確に自分の立場を表す肩書きです。本当にあの後頭部は何を考えているのでしょうか、教師でいいはず無いじゃないですか。

「……了解しました。教育実習生見習いのネギ・スプリングフィールド様ですね。

では確かにお伝えいたします。それでは」

絡繰さんはそう言って、電話を切りました。

電話がきちんと切れたのを確認して僕は受話器を下ろします。そして、一気に緊張の糸が切れると、僕はぐったりとその場に座り込みます。

「どうだった、ネギ！」

今までずっと応援してきてくれたアーニヤがそう尋ねてきます。そんなアーニヤに僕は座りながら弱々しい笑みを浮かべながら言います。

「とりあえず、用件は伝えたよ。後は折り返し電話がくるのを待つだけ」

「よかった！ ネギが電話越しに氷漬けにされちゃうんじゃないかって冷や冷やしてたんだから」

……やめてよ。ちょっと本当にありそうだから。

物騒な事を言ってくるアーニヤに、僕は乾いた笑みを浮かべる事しかできませんでした。

とりあえず、僕に出来る事はやりました。後は、アーニヤ、タカミチと一緒にエヴァンジェリンさんに会いに行けばいいだけです。……だけと言うか、それが一番の問題なんですけどねえ。

僕は心の中で大きくため息を吐き出しました。

それからほんの1時間後の事でした。

タカミチ宅のあの黒電話が鳴り響きました。

もしかしたら、エヴァンジェリンさんかもしれない。僕は緊張しながら受話器を取り、アーニヤはそんな僕の方を心配そうに眺めています。

ちんつと言つ音を立てて受話器を耳に当てると、僕は言います。

「はい、高畑の代理のモノですが」

もしも、タカミチ宛ての電話だったら困るのでそう言つて電話に出る僕。

そんな僕の言葉に聞こえてきたのは、絡繰さんの声でした。

「教育実習生見習いのネギ・スプリングフィールド様でしょうか？」

早く聞きたかったような、永久に聞きたく無かったような彼女の声に僕は頷きます。

「あつ、絡繰さんですか。はい、ネギ・スプリングフィールドです」

「はい、音声から本人と照合できました。

では、ネギ・スプリングフィールド様。マスターからの返事を伝えさせていただきます」

いきなり本題に触れてくる絡繰さんに、僕は緊張を隠せないでいた。

ちなみに、音声から照合とか、その辺りはスルーします。そんな事でいちいち止まっていたら、この学園では過ごせない事に気がついた。

重要なのは何が重要かを理解する事です。今は、絡繰さんが口ボツトかどうかよりも、エヴァンジェリンさんと会えるのかどうかの方が重要なのです。

だから僕は電話から聞こえてくる声を聞き洩らさないように、集中します。

「……マスターの………」

「ごくりと喉を鳴らす僕。

何故が必要以上にタメを入れる絡繰さん。

どこからか、ドラムロールが聞けてきそつな雰囲気です。

雰囲気飲まれかけている僕に、絡繰さんはこう言いました。

「マスターの返事は『会いたければ日時など指定せずに今すぐこちらに向いてこい!』との事です。

ちなみに、それ以外の日程では断固として合わないと申しております。ですので、本日におこしくださる事をお勧めさせていただきます。

「……あの、ネギ・スプリングフィールド様？ 聞こえていますか？ 電波障害をキャッチできませんが、何か不備でもございましたか？」

ああ、色々と終わった気がします。

だって、今日これから会いに行くという事はタカミチがついてこないって事ですから。僕とアーニヤだけで行く事になるって事です

から。

電話の向こうで絡繰さんが何か言っているのが聞こえます。でも、何を言っているのか僕の頭では理解できません。

もう、いつそのまま倒れてしまおうか。そんな事を考えながら、最後の気力を振り絞り僕は礼を言って電話を切りました。

もう、泣いてもいいですよね？



「利用するにしても何にしても計画的なのが一番だ」という話。（後書き）

今回も長くなってしまったので、後編に続きます。

（訂正：2部構成ではなく3部構成になったので後編ではなく中編になります）

欲しいのは建前ではなく本音であり、保護ではなく協力である。(前書き)

うう、すみません。前回で後編と言ったのですが、まだ続きます。

途中まで書いていた内容を、誤って消してしまったんですよ！。

ううう。

なので、今回は短いです。

欲しいのは建前ではなく本音であり、保護ではなく協力である。

「こ、こんにちは、ネギです。」

エヴァンジェリンさんの家に行かなければならない事になって愕然としているネギです。

ちよつと本格的に泣きそうなネギです。というか、すでにちよつと目がうるみ始めています。

「ど、どうしたのよ、ネギ!? まさか、電話回線を伝って呪いが送られてきたとか!？」

絡線さんからの死刑宣告にも似た伝言が告げられ、ふらふらとへたりこんでしまう僕に、アーニヤが驚きながら僕を揺さぶります。無抵抗のまま、がくがくと物凄い速度で前後に振られる僕。うつぶ、気持ち悪いです。

それでも僕は抵抗する事も出来ずにアーニヤになすがままに振られ続けながら、しばらく頭の中で考えます。

さつきは何を言われたか。

もう一度だけ、ゆっくりと思い返します。

『会いたければ日時など指定せずに今すぐこちらに出向いてこい!』

言われた言葉を思い返しました。

あつ、ダメだ。また泣きそうになってきた。

「ちよ、ちよつと、本当に大丈夫なの、ネギ!」

がくがくと振り回され、何度も頭の中で言葉を思い返し涙目になりながら、アーニヤに呟くように言います。

「どうしよう、アーニヤ。エ、エヴァンジェリンさんが、今すぐ来いだって……」

「なっ!?!」

僕の呟きにもにた言葉に、アーニヤが驚愕の表情を浮かべそのまま固まってしまいました。

伝説の魔法使い直々の呼び出しです。日本伝統の『お前ちよっと校舎裏に來い』をエヴァンジェリンさんが言ってきたのです。

カツアゲとかそんなレベルの話ではありません。はっきり言って、生きて帰ってくる自信がないです。

「な、なんで……そんな事を……」

フリーズが直ったのか、僕と同じように腰が抜け、へなへなと廊下に座り込み、何やらブツブツと呟き始めるアーニヤ。何だか怖い光景ですが、気持ちは分かります。

僕だって、今すぐにあのぬらりひょんが『ドッキリでしたー』という看板を持ち、バルタン星人の様な笑顔で乱入してくるなら、そっちの方がまだマシというモノです。今ならあの後頭部をノコギリで切り落とすぐらいで許してあげます。

あの学園長なら実際に登場しそうですが、辺りを見回しても残念ながら無駄に目立つ後頭部すら見えません。

「ど、どうしよう、アーニヤ」

泣きそうになりながらそう尋ねる僕。正直言って僕自身どうすればいいのか分かりません。

何かヒントになるような事でもいいから、教えて欲しいという気持ちでアーニヤの方を見ますが、アーニヤは『なんで、どうしてよ。何が悪かった訳。闇の福音は私たちを殺そうとしている。タカミチがいなければ私たちなんてどうってことないって訳、なめてくれるじゃない……ふふふ』と小声で呟き何も答えてくれません。どうやら現実逃避の真つ最中の様です。

本当にどうすればいいのでしょうか。

正直言って僕も自分の世界に閉じこもりたいのですが、アーニヤがこうなってしまった以上、僕が踏ん張るしかありません。誰かが冷静に次の手を考えなければならぬのですから。折れかかる気持ちを何とか持ち直し、僕は一度大きく深呼吸をすると思いを巡らします。

タカミチがいない今、一体どうすればいいのか。僕たち二人だけでエヴァンジェリンさんの家に行くというのは、最終手段です。できれば、もっと僕たちの安全を確保した状態で、話し合いに臨みたい。

せめて大人、出来れば魔法使いの先生が話し合いの席に同席してくれれば一番いいのですが。

まあ、そもそもエヴァンジェリンさんが僕たちを襲ってくるかどうかなんて分かりませんが、希望的観測だけで足を向ける程馬鹿ではありません。予防策はいくらあっても困らない筈です。

なので、タカミチがダメだった以上、次に頼れるのは、学  
園長……だけ？ あれ、他に誰もいない？

驚愕の事実が浮かび上がります。

頭の中でふおふおふおと笑う学園長の顔が浮かんできます。八つ裂き光輪を投げつけて縦に真つ二つにしたくなる笑い声です。

大丈夫なのだろうか、信用できる気がしません。というか、あの学園長には業務以外で関わりたくないというのが本音です。

僕の中で、あの後頭部には頼りたくないと思わずにこねる感情と、頼らなければならぬと冷静に告げる理性とで、気持ちが揺れ動きまわります。しかし、さすがに背に腹は代えられません。

このまま二人で行くよりは、あの無駄に大きな後頭部を盾に出来る分、一緒に行った方がいい筈です。それに腐っていても、この学園長。安全面は確保してくれる可能性が高い……筈です。

「……今は、行動する時だよね」

僕は小さくため息を吐き出して、そう呟くと、気持ちを切り替えます。

そして黒電話の受話器を持ち、僕はボタンをジー、ジーと回しました。もちろん、かけるのは学園長の所です。あの常時、暇そうな学園長なら何とかしてくれると信じています。

しばらく電子音が続き、電話がとられます。

「あつ、学園長ですか？ ネギ・スプリングフィールドです」

取られた電話に、僕は心を落ち着かせながら、そう言います。

とりあえず、まずは用件を言わなければなりません。そしたら、年の功とかで何とかしてくれないでしょうか。

果てしなく希望的観測ですが、そんな事を考えながら、僕は用件を喋ろうとしましたが、その声を電話の主は止めました。

「いえ、ただいま学園長はでかけております。ですので、伝言があればお伝えいたしますが？」

……はあ!?

いや、だって、ええっ？　だって、ほんの数時間前に学園長室に乗り込んで、エヴァンジェリンさんの家にタカミチと行く許可を取ってきたばかりなんですよ。一体、どこに行ったって言うんですか！

いや、落ち着こう。でかけたと言っても、散歩とかそんな感じでしょう。

居場所を聞き出して、会いに行けば済む事です。

ぼつきりと折れそうな心を必死につなぎとめ、一度大きく息を吸い、吐き出すと僕は努めて冷静な声を絞りだします。

「あの、学園長はどちらにいらっっしゃいますか？」

「いえ、それが『学外で大事な会合がある』としか仰らなくて、携帯電話も置いて行っているようですし、申し訳ありませんが現在どこにいるのか分かりません」

あの後頭部使えなさすぎます。頭でつかちとはこの事です。

「そ、そうですね……、いえ、でしたら、あの、えっと、学園長にもげろ』と伝えてください」

テンパリながら、僕は受付の方にそう言います。それ以外、言い残す事は思いつきません。

本当に、あえてどこの部分とは言いませんが、もげてくれれば嬉しいです。少なくとも、よくバカツプルに送られる『モゲロ』とは意味する部位が違う事だけは言っておきます。

「はぁ……、もげる、ですか？ 分かりました、伝えておきます」

そう言って切られる電話。隣では何か呟いているアーニヤ。本格的に泣きそうな僕。

もはや、打つ手なしはこの事です。

へなへなへなと、今度こそ立ち上がれない程のダメージを受け、へたり込んでしまいます。

「どうしよう、アーニヤ……」

もはや折れかかる気持ちを繋ぎとめるものではありません。

僕は一縷の望みをかけてアーニヤにそう尋ね、アーニヤの方を見ました。

すると、アーニヤは何故か不敵な笑みを浮かべていました。

あれ、これはもしかすると、何かいい案でも浮かんだのでしょうか？

「ふふふふふふふ、いいわよ！ やってやるうじやないの、闇の福音！

私たちだって、ただ殺される訳にはいかないわよ！ ありっただけ





のです。

それは『使用者の命と引き換えに突き刺した生き物を必ず殺してくれる槍』でした。

かなり物騒なモノで、それが届いた時は驚いたモノですが、届けられたアーニヤも自身もすごく驚いていました。なんでも、まほネツトのオークションで間違えて落としてしまったらしく、本当は『どんなに食べても無くならないチョコレート』を買うつもりだったらしいです。

その話を聞いた時は、なんて物騒なモノと間違えたんだと思ったり、そんなものをオークションで販売するなとも思いました。まあ、魔法使いがネツトで注文するには、あそこしかないのですが、あそこはいい話を聞かないですよ。

惚れ薬とか非合法なモノも『観賞用』とか『インテリアとして』とって販売してる所ですからね。

「落ち着いてよ、アーニヤ！ 大丈夫だから！ 僕がついてるから！」

だから、アーニヤがいう自爆特攻が何をさしているのかは、火を見るより明らかです。槍を持って特攻に決まっています。アーニヤに、そんな事させるぐらいなら、僕はオコジョになった方が何百倍もマシです。

「放してよ！ ネギだけは絶対に守ってみせるんだから！」

「アーニヤ、アーニヤ！ 落ち着いてよ、アーニヤっ！ お願いだから、アーニヤっ！！！」

アーニヤの言葉に僕は気が付いたら、アーニヤを強く抱きしめていました。

胸元にアーニヤの頭をおしつけるように、抱きしめながら僕はアーニヤの名前を必死に呼びかけます。

「……ネ、ギ？」

ようやく落ち着いてくれたのかアーニヤが僕の胸の中で、呟くように僕の名前を呼んでくれました。

その事に、安堵しながらも僕はアーニヤを強く抱きしめ続けます。

なんとか安心してくれる言葉をかけようと、僕は回らない頭で必死に言葉を紡ぎあげます。

「大丈夫だから。絶対に、何とかしてみせる……ううん、違う。一緒に何とかしよう。」

その、僕は、何かあったら僕がアーニヤを守るなんてかっこいい事は言えない。魔法は捨てたし、頭でつかちだし、頼りないしね。でも、だけど……」

口から紡ぎあげられたのは、何とも弱々しい言葉でした。もっと安心させる事を言おうと思いますが、僕の口はそんな建前とは違う言葉を吐き出しました。

「……いや。だから、だね。だから、僕はアーニヤと支え合うパートナーになりたい。」

僕に何かあったらアーニヤに支えて欲しい。そして、アーニヤに何かあったら僕に支えさせて欲しいんだ。えっと、その、これじゃ、ダメかな？」

プロポーズみたいな言葉なのにもかかわらず、なんとも締りのない言葉だと自分自身でも思います。もっと『守ってやる』とか『任せろ』とか投げかけられる言葉は色々あったんですけど。……でも、これが僕の嘘偽りのない等身大の言葉です。

「……かつこ悪い台詞ね。ヒーローなら、『俺が何とかする』って  
いう所よ」

胸の中で落ち着いたのか、アーニヤがぐすりと笑って、そう言いました。そんなアーニヤに僕は何て言っているのか分からずに、困ったようにポリポリと頬をかきまします。

そんな僕にアーニヤはもう一度、微笑むと言いました。

「でも、そんなかつこ悪い所があんたのいい所なのよ。

ヒーロー何かじゃない、あんたが私は好きなの」

そのアーニヤの微笑みは本当に見惚れる程、美しく可愛らしかった。  
た。

うっ、顔が赤くなるのを感じます。

そんな僕にアーニヤはクスクスと笑います。そして、言いました。

「それじゃあ、一緒に何とかしてみましようか。私の大切な旦那様」

パートナーさん

なんとというか、面と向かって言われると、物凄く恥ずかしいですね。

でも、そうですね。アーニヤとなら、どんな事でも何とかしてくれる気がします。

例え相手が闇の福音であろうともです。

さて、それじゃあ何か方法を考えないといけませんね。

僕がそう考えて時、家のインターフォンが鳴らされました。

「高畑先生ー、いらっしやいませんかー？」

それはまさに、天の助けというやつでした。

欲しいのは建前ではなく本音であり、保護ではなく協力である。(後書き)

という事で、後半に続きます。

さて、天の助けとは誰でしょうか？

**いざ、突撃！ エヴァンジェリン家の晩御飯事情（前書き）**

さて、今回こそ後編です。

今回も長いです。

エヴァンジェリン家にネギ君たちが突撃しますよー。

## いざ、突撃！ エヴァンジェリン家の晩御飯事情。

「高畑せんせい！ あれ、おかしいな。また急な出張では入ったのかな」

高畑先生の家のインターフォンを押しながら、僕はしきりに首を傾げていた。

あいかかわらず、あの高畑先生って出張多いよな。そりゃ、悠久の風のエース格だから仕事が多いのも分かるけど、あくまでも本業は教師なんだからもうちよっと考えて欲しいよな。

学園長もちよっと働かせすぎだよ。

僕はそんな事を考えながら、小さくため息を吐き出した。

あーあ、今日こそは新田先生に頼まれていた『2 - Aの活動報告書』の提出を催促しに来たのに。

うー、文句言われるのは僕なんだよな！。

なまじ、同じ魔法先生としてよく喋るから、高畑先生がらみの面倒事をよく押しつけられるんだよ。新田先生っていい人なんだけど、厳し過ぎるっていうか。まあ、この緩すぎる麻帆良には丁度いいと思うけど。

はあ、と大きいため息を吐き出す。こりゃ、また怒られるな！。

そして、もう一度だけインターフォンを押してみるが返事はない。やっぱり留守みたいだ。

「仕方ないな、また明日来ようっと」

僕はそれだけ呟くと、高畑先生の家に背を向けて職員室に向けて



帰ろうとした。

「ちょ、ちよっと、待ってください!」

その時、僕の背後から僕を呼びとめる声が聞こえた。

誰の声だろうと、振り返ってみるとそこには泣いた後なのか何故か目を赤くした顔のネギ君が立っていたのだった。

あれ、ちよっと嫌な予感がするんだけど気の所為かな？

こういつ時の僕の勘って基本的に当たるんだよな。僕はそのため息を吐き出して、ネギ君の方へと向き直る。

こんな時、さっさと尻尾を巻いて逃げだせる性格をしていたら楽なんだろうけどね。泣いてる子供を見て、逃げる先生なんていないからね。例え、相手が子供先生でも。

「あれー、どうしたんだい、ネギ君？ 泣いてたのかい？」

僕は出来るだけ落ちつける様に極めて明るいテンションのまま、生徒に相談された時の口調でネギ君に話しかける。僕のその言葉に、ネギ君は少し安心した様な顔を浮かべる。

まあ、9歳の子供なのに先生をやるなんて大変なんだろうな。ホームシックとかもあるだろうし、なんたって受け持ちは2・Aだからね。不安な事も多いんだろうね。

そう考えながら、ネギ君の方を見る僕。ネギ君はじっと僕の方を見ている。

どうやら何か相談ごとがあるみたいだね。

しばらく、何か言おうとして途中で口ごもるネギ君。そして、ついに覚悟を決めたのかネギ君が重い口を開いて、言った。

「あ、あの。エヴァンジェリンさんの家に行くのについて来てくれませんか？」

「おう、いやー、想像の斜め上を行ったねー。」

いきなり驚きの発言をするネギ君に僕は冷や汗を流しながら、そう答える。

多分、今は、ネギ君が2・Aの生徒であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんは、闇の福音だと分かったの言葉だよな。

「えっと、エヴァンジェリンさんの家に行くんだよね。なんでか理由を聞いてもいいかな？」

「ちょっと困ったような笑みを浮かべながら僕はネギ君に尋ねる。」

まさか英雄らしく『退治しに行きます』とかじゃないよね。

もしそう言われたら、僕はネギ君を殴っても止めないとダメだしね。嫌だよ、子供殴るの。」

「それは、あの。えーっと、何て言うか、えっと、その」

僕の言葉にネギ君は何か考えるようにそう言いよどむ。その姿を見て僕は少し考えて、すぐ合点がいった。そして、周囲に誰もいない事を改めて確認するとちらつと舌をだす。

「ああ、大丈夫だよ。僕も魔法先生だから、ね？」

「そ、そうなんですか？」

ちよつと驚いた表情を浮かべるネギ君。

やっぱりあれかな、僕の魔力が物凄く低いのに魔法先生なのが吃驚してるのかな？ でも、逆に僕ほど魔力が少ない人間が魔法に関係していないって方が変なだけだねー。

ニコニコと微笑みながら僕は驚いているネギ君にそう答えます。

「うん、そつだよー」

というか、あれだよ。この学校の教師の三分の一は基本的に魔法先生だしね。

伊達に日本の魔法中心地じゃないからね。西とも争ってるし、魔法先生や魔法生徒は結構多いよ。

「それで、改めて聞くけど、世間一般的に闇の福音と言われているエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんに何の用事で会いに行くのかな？」

少し警戒しながら僕は尋ねる。

ネギ君は魔力も多いしね。僕程度で止められるか不安だよ。

お願いだから、バカな考えは起こさないよー。

僕はそう考えながら、ネギ君の答えを待つ。そんな僕にネギ君は答えた。

「エヴァンジェリンさんがどんな人かを確かめに行くつもりです」

とりあえず、問答無用で殺すとか言わなくて良かった。

心の中で安堵しながら僕はまだ警戒を解かず、ネギ君に問いか

けます。

「……もし、確かめて世間一般で言われている噂通りの悪い人だったらどうするのか？」

ちよつと意地悪な質問だったかな。極悪非道の大魔法使いだったら、どうするかという問いかけ。

普通なら十中八九は『倒す』というだろうね。もしも、そう言われたら僕は殴って縛って、学園長の所に持っていかなければならない。

いくらなんでもネギ君がエヴァンジェリンさんに勝てる筈はないだろうし。

心の中で小さくため息を吐きながら言った僕の問いかけに、ネギ君は少しだけ考えて、覚悟を決めるような表情を浮かべるとハッキリと言いました。

「もしも本当に悪人だったら、……僕は学園長に直訴して、生徒に悪影響が行かないようにしてもらいます。

後、僕は教育実習生見習いを辞めます。アーニヤも生徒を辞めさせます」

「……ぷぷっ」

ネギ君の予想外の回答に、思わず嘖き出してしまった。そんな僕を見て怪訝そうな顔をするネギ君。

「いやいや、ごめんね。でも、本当にネギ君は予想の斜め上に行くね。だって、ねえ？」

その解答は、偉大な魔法使い見習いとしては不正解だよ。

でもまあ、見習い教師としてなら及第点かな。

ふう、と僕は息を吐き出すとまだ怪訝な表情を浮かべ続けているネギ君に言います。

ネギ君みたいな子には教師を辞めてもらいたくないしね。僕もちよつとだけ一肌脱ごうかな。

「分かったよ、ネギ君。君がその気なら、僕も喜んで君のお供をしようかな。」

出来る限りの安全は守ってあげるよ」

まあ、あくまで出来る限りだけどね。

ああ、改めまして僕は瀬流彦です。

普段は、麻帆良学園女子中等部の魔法先生をしていますよ。

まあ、そういう訳で僕とネギ君とアーニヤちゃんはエヴァンジェリンさんの家に向かって歩いていきます。

ああ、もちろん新田先生に頼まれていた書類は職員室に置いてきましたよ。新田先生にはお小言を頂戴したけど、ネギ君もフォローしてくれたお陰でお説教はいつもよりは短めだったかな。

どうやら、新田先生もネギ君には甘いみたい。前の朝礼で学園長が大袈裟な事を言ったからな！。

特に、あのハーバード大学の学級崩壊を止めた時の話は凄かった

な！。

何と言つか涙なしでは語れない、教師と生徒の強い絆の物語だったよ。『例えどんな君でもあろうと、僕は君を受け入れる。先生だからとか、そんな理由じゃない。僕は一人の人間として、君を受け入れよう』という台詞が印象的だったね。

その所為か、他の一般の先生たちも子供を先生を反対しなくなつたからね。情に脆い新田先生は涙浮かべてたし。

まあ、そんなこんなでエヴァンジェリンさんの家に向かっているんだけど、その前に色々してたからね。時間はもう夜の七時過ぎ。

家庭訪問にはちよつと遅いけど、仕方がないよね。ネギ君の話では向こうから『さつさと来い』って言ったとの事だし。

というか、よくネギ君も闇の福音の呼び出しを素直に受けるよね。聞いた話では武器も防具も装備してないとの事だったし。

『エヴァンジェリンさんが信頼できるかは分かりませんが、でも話し合いに武器や防具を持参していく人は僕は信用できませんから。まあ、実際の所武器も持ってないだけですけどね』

最後は照れたように笑ったネギ君。うん、なんというかやっぱりいい子だよな。

それにアーニヤちゃんも勝気な所もあって、押しの弱そうなネギ君にはびつたりだと思つよ。

僕がそう言つと、何で付き合つてるのが分かったのかと尋ねてきたけど、それぐらいすぐに分かるよ。

それっぽい会話はしてなくても雰囲気ですでにカップル、というより夫婦に近いからね。

あー、僕も彼女欲しいな。でも、彼女作るなら西とのゴタゴタを

解決した後だよねー。

小さくため息を吐き出す。

「大丈夫ですか、瀬流彦さん？」

「ああ、大丈夫だよ。緊張とかじゃなくて、君たちを見てみると、僕も早く彼女が欲しいなって思ったただけだから」

「「な、何でそんな事考えてるんですか！」」

吐き出したため息が緊張からだと思っただのか、そう尋ねてくるネギ君に、僕がそう返すとアーニヤちゃんと言を合わせてそう言うてくる。なんとというか、本当にうらやましいな。

もう、魔法先生なんて辞めて、何か別の職探そうかなー。

そしたら命の危険もないから、お嫁さん探しもできそうだし。

って、あれ？

僕は一旦考え事を止めて辺りを見回す。でも、今回りにあるのは木と草ばかりだ。

んー、おっかしいな。

「どうしたんですか、瀬流彦さん」

きよろきよろと見回す僕に、ネギ君は首を傾げてそう尋ねてくる。

「ん、どうしたって言うか。誰かに見られていた気がするんだけどね」

僕の言葉にネギ君とアーニヤちゃんが辺りを見回す。でも、そこには誰もいないどころか、小動物の影すら見えなかった。

「誰もいませんけど？」

「そうなんだよね。おっかしいなー」

自慢じゃないけど僕は魔力が少ないからね、魔力が少ない分辺りの様子を探るのに適しているだよ。

魔力が多い人は自分の魔力が邪魔をして感知するのは難しいけど、もともと魔力なんて欠片しか残っていない僕は感知には適してるわけ。

えっと、あれだよ。水面に大きな石を入れると、波紋が立って見づらくなるけど、小さな砂粒だと影響はほとんどなくクリアに水の中を見通せるって感じかな。うん、ちょっと分かりづらい説明だったかな。

「まあ、気の所為ならいいんだ。それより、早くエヴァンジェリンさんの家に向かおう。」

僕はお腹すいちゃったしね」

朝の11時に朝昼兼用でサンドイッチ食べてから何も食べてないからねー。

やっぱり教師割引してくれる食堂が長期休暇の所為で閉まっているのは痛いよね。懐的にも。

ニコニコと笑ってそういう僕に、ネギ君も頷く。



「そうですね、あんまり遅くなってもエヴァンジェリンさんにも、瀬流彦さんにも悪いですしね」

ふふふ、やっぱりいい子だな、ネギ君は。

子供なのに気を使ってくれるネギ君に、僕は少し機嫌を良くする。

「ありがとね」

僕のお礼にちょっと照れたのか、少しだけ顔を赤くするネギ君。

うん、やっぱりいい子だ。

そんな事をしていると、ようやくエヴァンジェリンさんの家に到着して。いつ見ても立派なログハウスだ。僕も隠居したらこんな家に住みたいな。

さて、今の時間は8時を少し過ぎたぐらい。

なんとというか、高畑先生の家からここまでつて遠いなー。女子中学校を中心にして対極の場所にあるし。何でわざわざ、麻帆良の最高戦力である高畑先生をエヴァンジェリンさんから離すのかね。

学園長の考えは僕には分からないよ。

まあ、そんな疑問はこの際、どうでもいいや。

僕は思考を切り替え、隣を見るとネギ君は少し難しい顔をしていた。緊張してるのかな？ まあ、闇の福音に会いに来たんだから当然だよ。

そんなネギ君に、僕は出来るだけ明るい笑顔を浮かべながら、ネギ君の背中をたたく。

「さあ、ネギ君。今回は君が主役なんだよ」

家の前で少し躊躇していたネギ君に僕はそう声をかける。今日の  
主演はネギ君に違いないからね。

もう一人の主演はエヴァンジェリンさん。ヒロイン役はアーニヤ  
ちゃんかな。それだと僕は、騎士役<sup>ナイト</sup>って所かな。頼りない騎士だけ  
どね。

「そうですね。ここで逃げ帰る訳にもいきませんし」

僕のそんな声に、ネギ君は小さく頷くと、覚悟を決めて、インタ  
ーフォンを鳴らした。

変哲のない電子音がログハウスの中に響く。そして、すぐに扉は  
開けられた。

「はい、ネギ・スプリングフィールド様ですね」

鳴らしてすぐに、ガチャリとドアを開けて現れたのは大きな耳を  
した茶々丸ちゃんだった。そんな茶々丸ちゃんを見て、ネギ君とア  
ーニヤちゃんは驚いたような顔を浮かべる。やっぱり珍しいのかな  
僕は茶々丸ちゃんに手を挙げて挨拶しながら、そう思う。ロボッ  
トで学園の外にはいないしね。でも、いい子なんだよ？

茶々丸ちゃんは、僕とアーニヤちゃんを見て少し驚いたような表  
情を浮かべる。ははは、やっぱり予想外だったのかな？ たぶん、  
騎士役として高畑先生辺りが来るのを予想してたんだろうね。

「ごめんね、僕の様な騎士で。」

「そちらは、瀬流彦様ですね。もう一人の方は」

「いやー、様付けなんてやめてよ。瀬流彦でいいよ。それがダメな  
ら先生とかそんな感じで」

相変わらず仰々しい茶々丸ちゃんに僕は笑いながらそう言った。そんな僕に茶々丸ちゃんは『いえ、教師の方に無礼な発言はできませんから』と答える。うーん、相変わらず固いよね。あんまり、そんな事気にしなくていいのに。

「わ、私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウアよ。今度2・Aに転校する事になったの。」

だから、クラスメイトのエヴァンジェリンさんに会いに来たのよ」

少し警戒しながらも、茶々丸ちゃんにそう答えるアーニヤちゃん。そんなアーニヤちゃんを見て、茶々丸ちゃんは頷いた。

「了解しました。登録いたします。」

アンナ・ユーリエウナ・ココロウアさんですね」

「アーニヤでいいわよ」

アーニヤちゃんの名前を登録する茶々丸ちゃんに、アーニヤちゃんは少しぶっきら棒気味にだけどそう言った。

「分かりました、ではアーニヤさんと呼びします。」

さて、ネギ・スプリングフィールド様、瀬流彦様、アーニヤさん。マスターがお待ちです。どうぞ、おあがりください」

ペこりと一礼し、家の中へと招き入れる茶々丸ちゃん。そんな茶々丸さんにネギ君は一瞬だけ躊躇するけど、力強く頷くとゆっくりと家の中へと足を踏み入れた。

さて、もう一人の主演のお出ましたね。どうなる事やら。

うん、この魚のパイは絶品だね。  
それにこっちのトマトスープも凄く美味しいよ。

「いやー、こんな美味しい料理なんて久しぶりに食べたよ。やっぱり茶々丸ちゃんはすごいね」

「ありがとうございます、瀬流彦様」

テーブルの上に並べられているのは、サラダとスープと、メインディッシュ。僕は半分ぐらい食べたけど、ネギ君とアーニヤちゃんはあるまり手をつけていない。

うん、やっぱり緊張してるのかな。それとも、命をかけて臨んだ話し合いに晩御飯が出てきた事が意外だったのかな？ ネギ君は前者のようで、アーニヤちゃんはどうやら後者のようだ。

ははは、ごめんね。話し合いの前に僕のお腹が鳴っちゃって。

ネギ君たちが覚悟をしてお邪魔した時は、エヴァンジェリンさんは食事中だったみたい。そんなエヴァンジェリンさんを見て、僕のお腹の音が鳴っちゃったんだよね。

それを聞いて茶々丸ちゃんが『せっかくだから』と料理を作ってくれたんだ。

いやー、美味しいね。

「どうしたんだい、坊やたち？  
なに、毒なんていれてないさ」

少し不満気味にそう言ったのは、エヴァンジェリンさんだった。  
ブスリと乱暴に魚のパイにフォークを突き刺しながら、あまり食べ進めていないネギ君たちに視線をやる。その眼はまるで品定めをする肉食獣のような眼だった。

残酷で冷酷で、それでいて深い闇のような視線。その視線を受けて、ネギ君は答える。

「……いえ、少し緊張してまして。」

でも、美味しい食事で緊張はほぐれましたよ」

小さく苦笑しながらそう答え、スープに口をつけるネギ君。大した度胸だね。今のエヴァンジェリンさんの目の前で笑えるって。

そんな笑みを浮かべたネギ君に、エヴァンジェリンさんは不機嫌そうに鼻を鳴らすと魚のパイを口の中へと運んだ。

そして、しばらく租借し飲み込むと言った。

「それで、何の用なんだ？ 2-Aの教育実習生見習いのネギ・スプリングフィールド先生？」

威圧するように一文字一文字区切りながら、エヴァンジェリンさんはそう尋ねる。試合で言えば、エヴァンジェリンさんが先制のジャブを入れたと言った所かな。

そんなエヴァンジェリンさんに、ネギ君も怯むような事はなく、小さく微笑みながら答える。

「いえ、エヴァンジェリンさんは良くも悪くも有名ですからね。一度、お会いしたくて」

先制パンチにも怯まずに、ネギ君にエヴァンジェリンさんは一瞬だけ意外そうな表情を浮かべると愉快そうに微笑んだ。うん、悪役っぽいね。

そして、にやりとしか言いようのない笑みを浮かべるとネギ君に尋ねる。

「それで、どうだった。この闇の福音である私をみた感想は？」

「まだ分かりませんね」

エヴァンジェリンさんの言葉に、ネギ君はすぐに苦笑交じりにそう答えた。

「ふん、詰らんな」

ブスリっと、もう一度魚のパイにフォークを突き刺しながら、エヴァンジェリンさんはそれだけ答える。そんなエヴァンジェリンさんにネギ君も苦笑の笑みを浮かべると、魚のパイを食べ始めた。

しばらく無言で食卓を囲む僕たち。

カチャカチャと食器の音だけが、静かに部屋の中に響いていく。重い空気というのはこういう事を言うのかな。何と云うか、ご飯が胃袋の中に入っていない感じがするよ。いや、美味しいけどね。

最初にその沈黙を破ったのは、ネギ君だった。

「そういえば、エヴァンジェリンさんは2 - Aの生徒だと学園長か

ら聞いたんですが。

どうでしょうか、エヴァンジェリンさんから見たクラスの感想は「？」

第二ランドに入り、エヴァンジェリンさんの出方を窺うように尋ねるネギ君。

そんなネギ君の行動にエヴァンジェリンさんは少しだけ眉を上げると、全く動じずに答える。

「なんだ、そんな事を聞きに来たのか？ それなら、担任のタカミチにでも聞けばいいだろ。」

何故、私の口から語らなければならぬのだ？」

ははは、完全に拒否してきたね。

エヴァンジェリンさんの回答に、ネギ君は少し困った様な笑みを浮かべる。

「……そうですね。出来れば聞きたかったですかね。エヴァンジェリンさんの感想が」

尚も食い下がろうとするネギ君。

「くどい」

しかし、エヴァンジェリンさんが一刀両断した。

お互いまだまだ様子見と言った所かな。ネギ君は相手の様子をつかがいながら、エヴァンジェリンさんは王者の風格を漂わせながら、お互いがどう出るかを見定め合っている。

空気が重い。というより痛い。

「アーニヤさん、パイのおかわりはいかがですか？」

「えっ、じゃあ貰おうかな」

「だけど、そんな中で、喋る事のないアーニヤちゃんは黙々とご飯を食べ進めていた所為か、すでに料理を完食し、茶々丸ちゃんにおかわりをもらっていた。うん、やっぱり子供はちゃんと食べないからね。」

「あつ、僕も貰っていいかな？」

「ええ、もちろんです」

慌てて残っていたパイを口の中に頬張ると、僕は空になった皿を茶々丸ちゃんに渡す。

そんな僕を見て、エヴァンジェリンさんは不機嫌そうに睨みつけてきた。おお、怖い。でもいいじゃん、こんなに美味しい料理なんだから。

エヴァンジェリンさんの視線に僕は苦笑で返す。そんな僕に、エヴァンジェリンさんは不機嫌そうにまた鼻を鳴らすと、言った。

「それにしても、坊や。この闇の福音と云われた私を前にして大した度胸だな。」

「まあ、このバカ程ではないが」

僕の方をフォークで差しながら、エヴァンジェリンさんはネギ君に言う。

「ははは、馬鹿は酷いなー」



「ふん、黙っている」

僕の言葉に、エヴァンジェリンさんは頭ごなしにそう言うようにやりと悪そうな笑みを浮かべてネギ君に言った。

「思わなかったのか。」

私に殺されるのではないか？

血を根こそぎ抜かれるのではないか？

氷漬けにされるのではないか？

無残に引き裂かれるのではないか？

そうは考えなかったのか」

エヴァンジェリンさんの言葉はまるで魔法の様に響き、周囲を恐怖へと変えていく。

血みどろの、暗い闇に囲まれてしまったようなそんな雰囲気だ。

ぶすりと、音を立てて魚のパイを突き刺すエヴァンジェリンさんは、歌を紡ぐように話を続ける。

「どうだい、感じなかったのか。」

私と会う恐怖を、痛みを、絶望を。

逃げ出そうとは思わなかったのか？

引き返そうとは思わなかったのか？

その余計な勇気が、自分の死期を早めるとは考えなかったのか？

今、この手でお前の首を引きちぎり、生き血をすすっても私は構わぬのだぞ？」

ぐつと一度だけ力づよく拳を握るエヴァンジェリンさん。その拳はゆつくりと解かれ、闇の福音の異名が可愛く思える程の深い闇に染まった瞳をネギ君に向けた。

僕もアーニヤちゃんも動けない。エヴァンジェリンさんは魔法も使わずに、ただ語っているだけなのに、深い闇の中に僕たちを誘っていく。

エヴァンジェリンさんの言葉に、ネギ君は真剣な表情で少しだけ考えると言った。

「……思いましたよ。貴女に殺されるのではないかと。」

それも残忍に冷酷に、この首を刎ねられるんじゃないかとさえ思いました」

「ほう、では何故私の前に現れた？」

意外なネギ君の言葉にエヴァンジェリンさんは興味深げに嗤う。

そんなエヴァンジェリンさんの笑みを受け流しながら、ネギ君は語る。

「言いませんでしたか、僕は貴女に会ってみたかったですよ。いや、会わなければならなかった。」

この学園で働く事になった魔法使いとしてではなく、2 - Aの教育実習生見習いとして……ね」

しっかりと自分の言葉で語るネギ君。エヴァンジェリンさんの挑発するような視線を真っ向から受け止めながら、ネギ君はエヴァンジェリンさんへ視線を向ける。

エヴァンジェリンさんは、そんなネギ君に射抜くような視線をしばらく向けた後、ふいにどこかへと視線をずらした。

「やはり、爺の騙<sup>かた</sup>った人間では無い様だな。ネギ・スプリングフィールド」

「爺……？ 学園長の事ですか？」

エヴァンジェリンさんの言葉にネギ君は首を傾げる。そんなネギ君に、エヴァンジェリンさんは愉快そうに笑いながらネギ君の言葉には答えずに言った。

「『正義感が強く、真面目で、礼儀正しい子供。頑固で子供らしい面もあるが、偉大な魔法使いとしての素質は十分。魔力も体力も問題ない。まさに未来の英雄にふさわしい人間だ』  
爺はそう言いふらしていたな。だが、……ふん、英雄ねえ」

そう言えば、学園長はそんな事を魔法先生たちに言いふらしてたな。

まさに千の魔法の男の再来だつて。  
サウザンドマスター

エヴァンジェリンさんは確かめるような眼で、ネギ君の目をじつと見つめる。そして愉快そうに口元を歪めた。

「確かに魔力は十分だ。体力的にも平均よりは数倍はありそうだが……その目は英雄の目ではないな」

何も答えないネギ君。

そんなネギ君に、エヴァンジェリンさんは続ける。

「その眼は、闇を知り、闇に怯え、闇から逃げた者の眼だ。そして、光を知り、光に向かい、光に縋った人間の眼でもある。

お前は英雄ではない、偉大なる魔法使いでもない、ましてや戦士でもない。

その眼は、英雄を嫌う、反逆者の眼ではないか。

ふふふふ、愉快だなネギ・スプリングフィールド。

お前はその眼で何を見てきた？

何故、どれほどの闇をその年で体験したんだ？

そして、闇を見て何を思ってきたんだ？

なあ、ネギ・スプリングフィールド」

紡がれるその言葉はネギ君の本質を表しているのだろうか。僕には分からない。

だけど、その全てを見透かすような瞳で語るエヴァンジェリンさんに、ネギ君は何も答えようとはしなかった。

そんなネギ君に、エヴァンジェリンさんは更に笑みを深めた。

「くくく、本当に愉快だ。貴様のような人間は久しぶりに眼にした。

どうだ、ネギ・スプリングフィールド。闇を嫌う眼をした坊や。

私の下に来ないか？ 貴様が見てきた闇の全てを覆してみたくはないか？」

エヴァンジェリンさんはそう言った。

ただただ深い闇の中へとネギ君を誘う。

闇に生きる王者として、気品ある氷の女王として、ネギ君を闇の中へと誘おうとする。

しばしの沈黙が部屋の中に流れた。

もはや、食器を動かす音さえも静まりかえり、完全な無が部屋の中にあふれかえっていた。

誰もが何も話さない。ただ、ネギ君の返事を待つ。

ごくりと誰かの喉がなった。

言いようのない緊張感が部屋の中を支配していた。

ネギ君はしばらく啞然とした表情を浮かべた後に、少し考えてから言った。

「闇の福音と言われた貴女に誘われるとは嬉しいお誘いですね。

……ですが、僕はすでに誰と共に生きるか決めているんです。

闇の中でもなく、光の中でもない、光も闇も混じった世界の中で、僕たちは生きると決めました」

きつぱりとそう答えるネギ君。

その答えに、僕は苦笑し、アーニヤちゃんは少し顔を赤らめ、エヴァンジェリンさんは不愉快そうに眉をひそめた。そんなエヴァンジェリンさんを視界に入れながら、ネギ君は続ける。

「僕は異端な人間かも知れませんが、反逆者ではありません。

世界の闇にも光にも興味はありません。

僕はただ最終的に僕と彼女が幸せであれば、それでいい」

じっと、確固たる意志を持った視線でエヴァンジェリンさんを見つめ返すネギ君。

「私の誘いを拒む事が何を意味しているかを知って、その言葉を吐いたのか？」

「……」

ネギ君は何も答えない。その沈黙が答えであった。

エヴァンジェリンさんはそのネギ君の答えに、小さく息を吐き出した。

そして、その瞬間、エヴァンジェリンさんの指が動くのを僕は感知した。

何かがネギ君の下へと迫る。

「痛うつー！」

鮮血がテーブルの上へとこぼれおちた。驚きでネギ君もアーニヤちゃんも何も答えられなかった。

ただそんな様子を、不愉快そうにテーブルに流れ落ちる血液を眺めながら、エヴァンジェリンさんは尋ねた。

「……何の真似だ、瀬流彦？」

手を伸ばし、ネギ君に向かって飛んで行った糸を力づくで掴み取った僕に、エヴァンジェリンさんは殺気の混じった視線でそう尋ねる。手のひらが切られ、糸を伝い、血はテーブルの上にたまっていく。

「何の真似って言われてもね。これが僕がここにいる理由だから」

手の痛みも、恐怖も全てを押さえつけながら僕は小さく微笑む。  
主役の危機に、騎士が動かない訳にはいかないからね。

「……たかが小動物程度の魔力で、この私に挑むのか？」

「挑むつもりはないよ、僕はただネギ君を守るだけ」

僕はただ微笑みながらそう答える。アーニヤちゃんは驚きの表情を浮かべ、おろおろとし始める。

そんなアーニヤちゃんに、僕は安心させるような微笑みを浮かべた。

微笑む僕を見て、エヴァンジェリンさんは不愉快そうに顔を歪ます。

「その命を、刈り取られてもか？」

「どうだろうね？ どっちにしても、僕は目の前で優しい子が殺されるのを見ていられないから。」

教師として、そして僕個人としても子供を守るのは当然だと思っているよ」

未来ある子供が死ぬ所なんて、教師なら誰でも見たくないだろうしね。それを止めれるなら、僕の腕なんて安いモノだよ。

ギリツと持っていた糸に更に力が入る。僕もその力に負けないように糸をつかみ取りながら答える。

「エヴァンジェリンさん。暴力は反則だよ。」

今日は話し合いにきたただけだからね。誇りある闇の福音として、

手を引いて欲しいな」

ニコニコと微笑みながらそう答える僕。

そんな僕に、エヴァンジェリンさんは少し考えて、ゆっくりと手を下ろした。

シュツという音と共に、引きちぎろうとしていた糸から力が消える。僕はそれを確認し、ゆっくりと糸から手を放した。

「感謝するよ、闇の福音」

「……ふん、確かに今のは私の落ち度だ」

不機嫌そうにエヴァンジェリンさんはそう言つと、糸をどこかへとしまい、ネギ君の方を見た。

先程の事があつたにも関わらず、じつとネギ君はエヴァンジェリンさんの視線を受け止める。

「そうだな。勇気ある坊やに敬意を表して、お前が欲しかった情報をくれてやろう。」

私は、クラスの連中には興味など持っていない。数人を除いて、いてもいなくてもどうでもいい存在だ。だから、理由がない限り私から手出しはしない。

これは闇の福音の名をかけて誓ってやろう」

「……、安心しました。ありがとうございます」

ほっとした様子で安堵の息を吐き出しながらネギ君はそう答える。そんなネギ君に、エヴァンジェリンさんはに不愉快そうに笑いながら続ける。



「ふん、だがこれだけは言っておいてやるう。  
理由があれば、私は躊躇なく貴様を殺してくれる。闇の福音として正々堂々と、貴様のその首から全ての血を飲みほしてやるう。  
今日の貴様を見て私は確信した。油断などしない、手加減もせん。もしも、その時がきたら、貴様を一人の敵として残忍に冷酷に葬り去ってやるう」

エヴァンジェリンさんはそう言って声に出して笑う。

「そ、そんな事させないわよ！ 黙って聞いていたら、好き勝手喋って！」

私とネギは絶対にあんたなんかには負けないんだから！ 私たちには強い絆があるんだからっ！」

高笑いするエヴァンジェリンさんに、アーニヤちゃんが口を開いた。

キツと睨みつけるような視線をエヴァンジェリンさんに送る。そんなアーニヤちゃんに、エヴァンジェリンさんは意外そうな眼を向けた。

「ふん、何だ小娘。喋る事も出来たのか。

……だが、良い覚悟だ。小娘と坊やの絆とやらを砕き切ってやるのも面白そうだな」

そんなアーニヤちゃんに、エヴァンジェリンさんはそれだけ言う。最後の魚のパイを口の中に放り込む。そして、それを乱暴に飲み込むと、ゆっくりと席を立った。

「ネギ・スプリングフィールド。その時を楽しみにしているぞ」

「……、僕は永遠に來ない事を望んでいますよ」

挑発的なエヴァンジェリンさんの笑みに、ネギ君は零すようにそう言った。

そんなネギ君に、エヴァンジェリンさんは不敵な笑みを残すと、部屋を出て行った。

残ったのは、ただ黙って座っている茶々丸ちゃんに、小さく安堵しているネギ君と、むっとした顔をしているアーニヤちゃん、そして血がとめどなく流れる手のひらを必死に止血している僕だった。

「瀬流彦様、手の止血を行いましょうか？」

茶々丸ちゃんがそう言うってくれる。そんな茶々丸ちゃんに僕は小さく微笑むと言った。

「うん、じゃあお願いしようかな」

頷く僕に茶々丸ちゃんは救急箱を取り出して手当をしてくれた。いやー、気を使ってくれる女の人っていいよね。料理もおいしいし、こんなお嫁さんが欲しいよ。

ああ、残った料理はちゃんと全部食べたよ。  
いや、冷めてもおいしかったね。本当は暖かいうちに食べたかったんだけどね。

また、茶々丸ちゃんの手料理食べに来ようかなー。

いざ、突撃！ エヴァンジェリン家の晩御飯事情。（後書き）

もう少ししたら休みが明けて原作に入る予定です。  
多分、あと3話後ぐらいかな？

ハイエナはただ理想を求め、オコジヨはただ思考を巡らす。(前書き)

今回は本編というよりも、オマケ的な話ですかね。  
だから、短いです。

ハイエナはただ理想を求め、オコジヨはただ思考を巡らす。

「……無事だったか」

暗い森の中で唯一光を放つログハウス。

その場所から出てきた3人組を見て、安心したような声を洩らす神多羅木。

「随分、少年の事を心配しているな」

そんな神多羅木に、俺は煙草の煙を吐き出す。

白い煙は俺たちの周りを漂うようにしばらくまとわりつき、すぐに空気に馴染み溶けていった。

俺の言葉に、神多羅木はサングラスで隠した瞳をこちらに向け、肩をすくめながら答える。

「心配はするさ。お目付け役であるお前がそばについていないのだからな」

「何、どう転んでも少年は死にはしなかったさ。

まあ今回は俺の出番は無かったようだが」

少し批難するような口調で言ってくる神多羅木に俺も小さく肩を

疎めながらそう答えた。

例え、あの闇の福音だと言っても力を押さえられている状態なら何とでも出来る。出なければ、来てすぐに少年の下から離れたりはしない。

皮肉げに微笑みながら答える俺に、神多羅木は吐き捨てる様に言う。

「……信用できないな」

「してもらう必要はないな」

俺の言葉に、神多羅木に一瞬だけ怒気が膨らむ。

そして、神多羅木は小さくため息を吐き出すと、懐から煙草を取り出し、ゆっくりと火をつけた。

静寂が周囲を包み込む。

口から吸い込んだ煙を吐き出した後、神多羅木は言った。

「アルベール・カモミール。あの人が信用しているお前の仕事に口を出すつもりはない。だがな」

啜えていた煙草を吐き捨てる。

吐き捨てられた煙草は、ゆっくりと重力に従い落下し、地面に落ちる前にパンつという音を立てて爆ぜる。それを見ながら、神多羅木は感情の無い声で言う。

「あの人を裏切るような真似だけはするな」

風が森の中に吹き抜ける。

その風を感じながら、俺は小さく鼻をならした。

「……ふん、随分な忠犬ぶりだな。黒き鬣犬ハイエナと言われたお前が」

俺の言葉に、神多羅木は無言で空へと視線を向けた。

空には、大きな月が浮かび、いくつもの星が輝いていた。

「あの人の夢を実現したいだけさ」

「ロマンチスト  
理想主義者な奴だ」

神多羅木の呟きに、俺は興味を無くし小さく肩をすくめた。  
そんな俺に、神多羅木は何も答えずじつと空を眺めていた。

また冷たい風が吹き抜けていく。木が揺れる音が森の中に響き、  
消えていく。

煙草に口をつけ、ゆっくりと煙を肺の中へと満たしていく。

「……それで、いきなり俺に接触してくるなんてどういっつもりだ？  
そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか？」

煙を吐き出しながら、俺はそう尋ねた。

今朝、月詠と連絡を取り合っていた時に神多羅木が俺に接触して  
きたのだ。

俺は、エヴァンジェリンと電話すると意気込んでいた少年達の事  
もあり、万が一今日中に接触する事になれば問題だと接触を拒んだ。  
しかし、神多羅木の奴は、それならエヴァンジェリンとのやり取  
りを俺にも見させると言ってきた。

その提案を拒んでも良かったのだが、一応依頼人の組織である為、



その程度の条件は受け入れる事にしたのだ。

その結果が、今であった。

無事に少年たちが、闇の福音の下から解放された今、残るのは仕事の話だけだ。

俺の視線に、神多羅木は空を見上げながら言った。

「……俺たちは、お前の頭脳を借りたい」

「嫌だね」

言ってきた神多羅木の言葉を俺は、問答無道に却下する。

そんな俺に、神多羅木は静かに俺を見ながら尋ねる。

「理由を聞いても？」

「お前が俺を信用していないように、俺もお前たちを信用していない。」

「そんな所に、何を教える必要がある？」

少なくとも目的も、計画も何もかもを教えない組織を信用するつもりはない。

例え、何が報酬であろうとも、認めるモノと認めれないモノの境界線はきっちり存在する。

そんな俺を見て、神多羅木は小さく笑った。そして煙草をくわえ、火をつけると言った。

「別に今すぐという訳ではない。」

こちらの準備も必要なんだ。2か月、いや3か月後の話だ。

教える知識、秘匿しておく知識はお前が区別してくれればいい。お前が必要のない知識でも俺たちにとっては値千金のモノになるかもしれないからな」

「……考えておこう」

煙を吐き出しつつ言うてくる神多羅木に、俺はそれだけ答えた。

3か月後の話ならば、別に今答える必要はない。

こいつらの組織に入り込む事が出来れば、こいつらの目的も見えてくるかもしれない。

この麻帆良学園でさえ、これほどの技術力を持っているのだ。下手したら、ここ以上の技術を極秘裏に作り上げている可能性だってあるんだからな。

「話はそれだけか？」

最後まで吸いきった煙草を俺は放り投げ、神多羅木にそう問いかける。

そんな俺に、神多羅木は無言で頷いた。

「それなら、俺は帰らせてもらう」

地面へ落ちた煙草が異常な程、煙を吐き出し始めた。それはその煙を使い、その場から移動しようとする魔力を集める。

「アルベール・カモミール。お前は

」

そんな俺に、神多羅木は呟くように問いかける。

「お前は、ネギ・スプリングフィールドを何に育て上げるつもりだ？」

答えなど求めていないだろう神多羅木の問いかけに、俺は小さく微笑むと言った。

「ただの凡人さ」

煙が俺を包み、一瞬の浮遊感の後、煙が晴れる。

そこは先ほどの森ではなく、西洋風の住居が入り乱れる住宅街であった。

俺はそれを確認するとアーニヤの家を目指す。

冷たい風がまた吹き抜けた。俺はそれを感じながら空を見上げた。そこには明るい満月と、いくつかの星が光っていた。

そんな夜空を見上げながら、俺はただ呟いた。

「さて、何を考えているのやら」

誰が何を考えているのか。それを読み切った人間こそが勝者なのだろう。

レジスタンス。

麻帆良学園。

メガロ政府。

そして、それ以外の人間たち。

彼らは何を求め、何を理想とし、何を起こそうとしているのか。

鍵となるのは、ネギ・スプリングフィールドだろう。

自分の立場を知らずに、ただ今を生きようとしている少年が一体何を握っているのか。

「……ままならないものだな」

新しく煙草に火をつけ、俺は肺の中に煙を満たした。

吐き出された俺の呟きは答えなど返るはずもなく、煙草の煙と共にただ住宅街の中へと溶けていった。

ハイエナはただ理想を求め、オコジヨはただ思考を巡らす。(後書き)

本編には登場せずに、オマケに登場する我らが主役、アルベール・カモミール。

一応、カモ君も活動しているよっという話でした。

さて、話は変わりますが、そろそろバレンタインデーの季節です。

番外編として過去のネギとアーニヤのバレンタインデーの話を書

こうかなーっと思っっているのですが、どうでしょうか？

読みたいという人がいれば書きたいと思うのですが。

- 1：読みたい
- 2：早く本編進めろ
- 3：バレンタインデーなんて滅びればいい。

上記の3つの中から解答していただければ嬉しいです。

その男たちは、騒ぐぬらりひょんの掌の上で騒ぎを騒る。(前書き)

ふおふおふおふお。

今回は後頭部ごとく、ぬらりひょん視点の話ですぞい。

その男たちは、囁くぬらりひよんの掌の上で踊りを踊る。

「ですから、学園長。エヴァンジェリンさんに電話をする許可をいただきたいと何度もお願いしているのですが」

ワシの前に、ネギ君が真剣な表情でそう言ってきた。決して声を荒立たせるような物言いではなかったが、その声には明らかに怒気が孕んでいた。睨みつける程の不敬な目ではなかったが、それでも戯言を許さないと射抜くような目線をワシへと向けてきた。

そんなネギ君を前に、ワシは困ったような表情を浮かべ、少し考えるような仕草で髭を撫でる。

しばし無言が訪れる。

何も語らず、ただ困った笑みを浮かべているだけのワシに、ネギ君は更に怒気を含めて尋ねる。

「もし、許可をいただけないのであれば、どうして許可していただけないのか、納得のいく理由を教えてくださいただけないでしょうか？」

ここで『エヴァンジェリンが危険じゃから』などと答えてしまえば、何故危険なエヴァンジェリンを手元に置いているのかを糾弾してくるじゃろうのう。

そんなありもしない未来を考えながら、ワシは小さく微笑む。

じゃから、もしワシがネギ君をエヴァンジェリンに会わせなくするには、生徒として登校している危険のないエヴァンジェリンという女の子に教師として会ってはいけない理由を述べ、納得してもらわなければならん。

その場合は何と言えよいのじゃろうか。教師が特定の生徒と会う事は鼻屑につながるとか、エヴァンジェリンが嫌がっておるとか、後はネギ君本人にまだ彼女に会う資格がないなどかのう。

まあ、どちらにしても言葉尻を突かれそうな言い訳じゃな。ここは黙り込んでおるのが吉じゃ。

それにワシはエヴァンジェリンと会う事を否と言っておる訳じゃないからのう。

「学園長、何か発言してください」

色々と思考しながらも、表面上は飄々とした笑顔を浮かべるワシを見て、ネギ君は睨みながらそう言ってくる。

まあ、怒るのは無理無いのう。もう2日もエヴァンジェリンについての話を行っており、その間ワシは大した返事をせずにのらりくらりと逃げているのじゃからな。

「学園長！」

ついに我慢しきれなくなったのか、大声でそう叫ぶネギ君。

そんなネギ君に、ワシは小さくため息を吐き出した。そして、ちらりとネギ君にはバレないように時計に目をやる。時間は午後4時を過ぎた所じゃ。

この時間なら問題は無いじゃろう。



ワシはそう判断すると、もう一度だけ大袈裟にため息を吐き出してネギ君に言った。

「……仕方がないのう」

呟いたワシの言葉に、ネギ君が目を輝かせた。

それはそうじゃろう。何て言ったって2日も待った待望の返事じや。例えどんな返事でも、議論は進むから、今よりはマシになるだろうしのう。

全く悪びれもせずになんか考えながら、ワシは少し態と長めに間をとった後に重い口を開く。

「タカミチ君もついていくとの事じゃし、許可しよう」

本当に仕方なく根負けしたような口調で、ワシはそう言った。

その言葉に、ネギ君は嬉しそうな笑みを浮かべる。その笑みは年相応のモノで、あの男譲りの好青年っぷりであった。これなら存分にモテてくれそうじゃ。

「ありがとうございます、学園長」

微笑みながら頭を下げるネギ君。そんなネギ君にワシも小さく微笑みながら答える。

「まあ、仕方ないしのう」

少し拗ねたようなワシの答えに、ネギ君は苦笑すると、すぐに部屋から出ていった。

おそらく今すぐ、エヴァンジェリンの家に電話をするんじゃないだろう。この時間はエヴァンジェリンはおそらく街に出かけておる。

返事が来るのはおそらく1、2時間後じゃろう。それだけ時間があれば問題ないわい。

さてと。

ワシはそう考えながら、手元にある書類に目を通し始めた。

ノックする音が聞こえる。ワシは目を通していた書類を机に置き、入ってよいと声をかける。

先ほどのネギ君との会話を終え、30分ほど過ぎた時だった。

「失礼いたします、学園長」

部屋の中に入ってきたのはタカミチ君だった。頭を下げるタカミチ君に私は小さく笑う。

「ふむ、準備はできたようじゃのう、タカミチ君」

今のタカミチ君は普段のスーツよりも上物のスーツを身につけておる。

上物と言ってもワシが今着ている着物よりは程度の低いスーツであるが、全身オーダーメイドの品じゃ。大事な仕事には着ている為に、身体に良く馴染み、普段よりも風格がある仕上がりとなってお

る。

ふむ、及第点じゃのう。

ワシはそう判断し、大きく頷くと答える。

「それじゃあ、行くかのう」

ニコニコと笑うタカミチ君にワシはそう言うと、書類を机にしまいいこみ、立ちあがり、ゆっくりと歩く。そんなワシに、タカミチ君は笑いながら扉を開ける。

その扉からワシは外に出ると、学校の廊下を微笑みながら歩き始めた。

特に目立った所のない廊下を歩く。この女子中学校は目立ったモノは確かに置いていない。

じゃが、それは見た目だけであり、中身は随分と変わっておる。

まずは強度。

通常の教室の数十倍は頑丈で、中で大規模魔法を唱えても何とか持ちこたえられる程度の頑丈さじゃ。

そして、警備。

メルディアナ魔法学校、今はなんちゃって魔法学校じゃったかのう。とにかく、そこで使われているモノと同程度の魔法陣を設置しており、学校関係者と登録されておらん人間を捕縛する仕組みじゃ。

それ以外にも色々仕掛けをしておる。

まあ、あの2-Aがある教室じゃからのう。仕掛けは足りない事はあっても、余る事はあるまい。

ワシはそんな事を考えながら、廊下を歩いていく。すると、何人かの女生徒に声をかけられ、ワシは笑いながら返事をする。

こつ見えても、ワシはそれなりに人気があるからのう。変な頭のお茶目な学園長という感じじゃからのう。

微笑みながら廊下を歩く。

そして、ふとある教室の前でワシは足をとめた。

その教室はネギ・スプリングフィールド君が教師として配属される2-Aの教室であった。

他の教室とほとんど変わりはないが、よく目を凝らして見てみると、部屋の中には魔力や気など様々な目に見えないモノが僅かに残っており、随分と混沌としておるのう。

ある種の人間が見たら、驚愕するような様子に仕上がっておる。

全国各地から選りすぐりの女の子を集めてきた甲斐はあったというモノじゃ。

「気になりますか、学園長？」

じつと教室の中を見ておるワシに、タカミチ君はそう声をかけてきた。

そんなタカミチ君にワシはいつもの笑い声を上げるだけで何も答えはしなかった。

何も答えないワシを見て、タカミチ君は小さく肩をすくめた。

視線を教室から外し、ワシはゆっくりと廊下を歩く。目指したのは、教員室じゃ。

「しずな君はおるかのおう？」

部屋の中に入り、ワシはそう尋ねる。すると、部屋の奥から一人の女性がやってきた。

この女性は源 しずな先生じゃ。生徒たちからも、教師陣からも人気の高い女性じゃのおう。

「何かご用ですか、学園長？」

につこりとほほ笑みそう尋ねてくるしずな君。そんなしずな君にワシは小さく笑いながら答える。

「ふむ、すまんのう。実はこれから学外で大事な会合があるんじゃない。もしも、ワシ宛ての電話などがあればそう伝えてくれんかのおう」

「大事な会合ですか？ いつ頃御戻りですか？」

ワシの言葉にしずな君は小さく首を傾げる。そんなしずな君にワシは神妙な表情を頷く。

「うむ、とある用件でのおう。どこかは言えんのが、少し時間はかかると思うぞい」

「分かりました。では、学園長宛ての電話にはそう伝えておきますね」

少し納得のいっていない表情だったが、すぐにつこりと笑いそう頷いてくれるしずな君。

「ああ、頼んだぞい」

そんなじずな君にワシは頷くと、タカミチ君を連れてすぐに教員室から外へとでた。

これで当面は問題なからう。ワシはそう考えながら、隣に立っているタカミチ君に声をかける。

「ふおおふおお、さて早く行かんとう」

ワシはそう言って歩を進める。

女子中等部から外へ出ると、タカミチ君が玄関に停めておいてくれた車があった。車の種類には詳しくないから、分らんがそれなりな値をした車じゃ。

こんな仕事をしている以上、金をかけなければならぬ所にはかけておいて損はない。

それだけで、三流の人間は震えあがるのじゃからな。そう思えば安いものじゃ。

ちなみに、ワシが今着ている着物もかなりの上物じゃ。当然ながら、タカミチ君の服よりも数倍も高いモノで、随分と前に入れたワシの外での仕事着じゃ。

「どうぞ、学園長」

扉を開けてくれるタカミチ君にワシは軽く礼を言いながら車へと乗り込む。

車に乗り込んだ後に、タカミチ君は小さく微笑むと、運転席へ腰を下ろした。そしてすぐにエンジンをかけ、いつでも発車できる状態にしてくれる。

「出発してくれ」

準備が整ったタカミチ君にワシはそう言う。

タカミチ君は無言で頷くとアクセルを踏み、車はゆっくりと動き出した。

車は麻帆良学園の中を進んでいく。

通る道は少し昔の西洋の建物をイメージしたレンガ造りの建物が立ち並ぶ道路。路面電車なども通り日本の情緒もきちんと配備された、風情にあふれる街並みじゃ。

洋風な街並みは日本の人間を喜ばせ、日本の情緒は外国の人間を喜ばす。

人を集めるにはまずは見た目が必要じゃからのう。ある意味、テーマパークを作るのと同じモノじゃ。見るモノの目を奪う図書館島や、大賑わいの商店街、それに工学部の巨大な塔など中身もそうじゃが、まずは圧倒的な姿で目を楽しませる造りとなっておる。

美しい場所には自然と人が集まり、人が集まる場所には職が生まれ、そしてそこには金が動く。

その全てを握っておれば、自ずと学園を好きな方向へと持っていく事が出来る。全ては入念な下準備があつてのモノじゃ。

車はしばらく進み、学外へとつながる橋に向う。

ワシはただ微笑みながら座り、タカミチ君も笑みを浮かべながら黙って運転をしている。

沈黙が車の中にあふれる。二人とも何も喋らん。

喋る必要など無いからのう。

微笑みで溢れた車は橋を超え、門を超え、学外へと出ていった。

「そういえば、今日、ネギ君がエヴァンジェリンに電話を入れるそうですね」

しばらく車を走らせていると、ふいにタカミチ君が口を開いた。ぴくりとワシの眉が動く。そんなワシに視線を送らず、ただ前を見てタカミチ君は話を続ける。

「エヴァンジェリンの事ですから、すぐにでもネギ君を呼びだすでしょうね」

どこで今日電話すると知ったのか、知らんが随分と心配しておるようじやのう。

ほとんど感情のない口調で言うタカミチ君の言葉からワシはそう推察し、髭を撫でながら頷いた。

「そうじやのう。相手は奴を封じ込めた男の息子じや。  
黙って指定された日にちを待つほど、気は長くないじやろ」



まあ、当然じゃ。今頃ネギ君は困っておるじゃろうのう。それにタカミチ君もワシもおらんのじゃ、さて一体どうするかのう。その様子を想像し、ワシは小さく微笑みを浮かべる。

そもそも、今回の一件でワシがネギ君とエヴァンジェリンを会わせるのに渋っておった理由は、ネギ君やエヴァンジェリンの問題ではなくワシの方に問題があった。つまり、エヴァンジェリンとネギ君の会合にワシやタカミチ君などが顔を出さないようにする必要があったのじゃ。

ネギ君とエヴァンジェリンが会うのは一向に構わんが、そこにワシやタカミチ君が出張ってしまえば話は変わってくる。そうなってしまえば、色々と計画が台無しじゃ。

じゃからと言って、助けを求めてくるネギ君を突っぱねるのは、学園長としての立場が危うくなる可能性がある。なにせ英雄の息子に単身でエヴァンジェリンの家に突撃せよと言っておると同じじゃからのう。能天気な魔法使い共もさすがにそれは怒るじゃろう。

結果として、ワシたちが出かけている間に、エヴァンジェリンとネギ君が会ってしまうという構図が一番望ましいのじゃ。

思案しながら、ワシは小さく笑う。

「いくらナギの息子だからといっても、危険ではありませんか？」

そう尋ねるタカミチ君。こちらからでは表情は見えんが、おそろく笑ってはおらんじゃろう。

そんなタカミチ君にワシは小さく笑いながら尋ねる。

「心配かのう。何しろネギ君は、あの男の息子じゃからのう。」

過保護になるのも分かるわい」

心にもない言葉を述べるワシに、タカミチ君は何も答えず運転する。

そんなタカミチ君に、ワシは小さく笑う。

「じゃが、あの男の息子じゃから、大丈夫だとワシは信じておるよ」  
「……そうですか」

納得したのかどうかは分からんが、タカミチ君はそれだけ言うとまた運転に集中し始めた。

そんなタカミチ君にワシは微笑みながら、口には出さずに心の中で思う。

まあ、どっちにしろネギ君が殺されるような状況にはいかんじやろうしな。

エヴァンジェリンは子供を殺すような事はせん。それに、仮にエヴァンジェリンが殺そうとしても誰かが守るじやろう。

この学園にも政府の人間やそれ以外の人間が入り込んでおる事は確かじゃ。それに噂では随分と頼りになる用心棒が随分前から、ネギ君についておるとか。

それは誰かまでは分からんかったのじゃから、素性を調べれんという事は頭も腕も良い人間である事は確かじゃろうな。

そのような奴らに守られておるのじゃ、力を失ったエヴァンジェリンにどうこうされる筈は万が一にもありはせんわ。

だからこそ、ワシはネギ君の安全など気にせずにくらでも、命

令する事は出来る。

頼りになる護衛がおるのじゃ。命の危険なぞある筈もない。

ネギ君についているのが、誰だか知らんが、感謝するぞい。お陰で、ネギ君を早く英雄にする事が出来るのじゃからな。

思わずワシは小さく笑ってしまう。

笑い声が車の中に響く。そんなワシに、タカミチ君は何も答えずに、ただ車を運転していた。

車がゆっくりと停まる。停まったのはとある大きな屋敷の前じゃった。

「どうぞ、学園長」

タカミチ君が扉を開けてくれる。そんなタカミチ君にワシは礼を言っ、ゆっくりと外へとでる。

まだ冬の冷たい風がワシの頬を撫でていきおる。

顔をゆっくりと上げると、目の前には大きな門があった。明らかに一般の人間の家とは違う、威圧感あふれる門構えじゃった。

タカミチ君は門の前におった男に何か喋ると、男はすぐにどこか

と連絡をとる。

すると、目の前にあった大きな門がゆっくりと開き、黒いスーツを着た男たちがワシらを出迎えてくれた。ワシとタカミチ君はそんなスーツの男たちには何も言わずに、中へと入っていく。

歩くワシたちに、スーツの男たちの中には明らかに敵意のある突き刺すような視線を向けてくる者がおった。しかし、ワシらが、そんな視線になど気にする筈もない。

敵意ある視線に、目もくれずに、ゆっくりと威厳を漂わせながら歩いていった。

少し歩くと、ワシの前にとある男が立っていた。上物のスーツに身を包んだ、白髪の男じゃった。

こやつは前に会った事あるのう。確か原田とかいう男じゃったのう。

頭の中で、この男の事を思い出す。確か先々代からこの家につかえておる、古株じゃったのう。

そんな事を考えながらワシは原田の前で足を止める。すると、原田は小さくぺこりと頭を下げた。

「よくいらつしゃいました。麻帆良学園の学園長殿。中で会長がお待ちです」

原田はそう言って、頭を下げる。その仕草は無駄な所はなく、礼儀もすっかりとしておる。

相変わらずの様じゃのう。

「ふむ、すこし遅れたかのう?」

「いえ、そのような事はありませんよ」

ワシの言葉に原田は首をふり、そう答えてくれる。  
そんな原田にワシは微笑みと言う。

「そつかのう。では、案内してくれるか？」

「はい、こちらです」

原田が少し前を歩き、ワシたちを案内してくれる。相変わらず、  
屋敷はどこもかしこも和風じゃのう。

ワシはそんな事を考えていると、原田の足がぴたりと止まり、ワシに言った。

「こちらです。すでに会長がお待ちしております」

「うむ、すまんのう」

ワシは小さく微笑みながら、案内された部屋へと足を進める。

部屋の中は随分と大きな部屋であった。何十畳もあるその部屋には、20人程度のスーツに身を固めた男が座っており、その男たちに守られるような場所に、一人の若い男が座っていた。

スーツの男たちはいかにもという強面の顔をしており、若い男は優男とまではいかんが、随分と爽やかな顔の人間じゃ。

じつくりと観察しておるワシに、若い男は小さく微笑むと言った。

「近衛 近右衛門さんですね。お初にお目にかかります。」

私はこの佐賀組当代の佐賀 松次郎です。以後、お見知りおきを  
ぺこりと頭を下げる松次郎と名乗る男。その言葉に、ワシは小さ  
く微笑むと答える。

「ワシは麻帆良学園の代表をしておる、近衛 近右衛門じゃ。  
よろしく頼むぞ、松次郎殿」

少し尊大に言ったワシの答えが気に入らなかったのか、松次郎は  
少しだけ不機嫌な表情を浮かべる。

じゃが、すぐに表情を元の笑顔に戻す。

「いえ、こちらも末長くよろしくしたいモノです」

につこりと笑う松次郎にワシは何も答えずに笑う。腹芸は苦手な  
様じゃのう。

そんなワシに、松次郎はごほんと一度咳払いをすると言った。

「まあ、何はともあれくつろいでください」

松次郎がそう言うとパンパンと手を叩く。すると、すぐにワシと  
タカミチ君の前に料理の膳が運ばれてきた。膳の中身は純和風のモ  
ノで中々に豪華な品ぞろえじゃった。

煮物や何やらと素朴な味付けが生かされるワシ好みの料理ばかり  
じゃった。

運んできた女性が、こちらもどうぞと言って醤油なども置いてい  
つてくれる。ワシはそんな女性に礼を言って松次郎の方へと視線を  
向けた。

「さあどござ、遠慮せずに食べてください」

「ふむ、すまんのう」

進めてくれる松次郎に、ワシはそう言っていると料理に箸をつけた。どれも良い素材を使っておるのか、薄味ながらに美味であった。

「先代からはよく近衛さんの話を聞かされたモノです。まあ、そのほとんどは貴方の悪口でしたけれども」

食を進めていると、松次郎がニコリと笑いながらそう言った。

「ふむ、先代とはあまり仲良くなかったからのう」

「私とは仲良くしてもらいたいものです」

何でも無いように答えるワシに、松次郎はそう言う。ワシは何も答えずにただ笑っていた。

他愛のない話をしながら、しばらく料理を食べ進める。

そして食事も中盤になった頃に松次郎が本題を切り出してきた。

「それですね、我々も数か月前に代替わりした所で、犬山組との小競り合いなどで色々大変でしたね。ぜひ、近衛さんに力を貸していただきたいと思っっているんですよ」

微笑みながらも、松次郎の目が一瞬だけ強くなった。

そんな松次郎にワシは小さく笑うと惚けたように首を傾げた。

「……ふむ、具体的にはどういう事かのう?」

何も分からないフリをしているワシに、松次郎はワシに聞こえない様に小さく舌打ちをすると、にこりと微笑んで言った。

「ずばり、麻帆良祭ですよ。聞いた話では数日で何億も動くそうじゃないですか」

「生徒たちが頑張ってくれておるからのう。金は所詮結果でしかすぎんよ」

ニコニコと好々爺の笑みを浮かべながらワシはそう答える。

その笑みに、松次郎もにこりと笑うと言った。

「ええ、麻帆良学園の生徒さんたちが素晴らしい事は私も十分存じております。

そして、そこで相談なんです、私たちもその麻帆良祭に一枚かませていただきませんかね。

具体的には必要な資材などの調達を任せて頂けないかという話です。

失礼ながら麻帆良祭の動きを調べさせていただきましたが、随分と出費が多いようですね」

興が乗ってきたのか、突然饒舌になりだす松次郎。何も答えぬワシ。

それに、更に笑みを深くすると松次郎は言った。

「それではせっかくの祭りがもつたいたないと思いませんかねえ?



私たちには資材を扱う業者とも関わりがありますからね。出費を抑え、収入を今の数倍にして差し上げる事ができます。どうでしょうか？」

ニコニコと笑う松次郎。その笑みは断られる事など考えていない笑みじやのう。

そんな松次郎にワシは大きく息を吸い込み、柔らかく微笑むと言った。

「すまんが、それは断らせてもらう。生徒たちも多く関わる麻帆良祭じゃ。」

お主たちの様なものを関わらせる訳にはいかん」

「なっ！」

きっぱりと断るワシに松次郎は驚いた顔を浮かべる。そのまましばらく固まってしまふ松次郎。

ワシはそんな松次郎を気にせずに、煮物を口へと運ぶ。

ふむやはり素朴な味わいがよいのう。

「な、何故ですか？ 数倍ですよ！ これはこちらの仲介料を引いた金額です。」

これだけ収入が増えれば、それだけ設備を充実させたりできるじゃないですか」

ようやくフリーズが解けたのか、松次郎は弾かれたようにそう言ってくる。

じゃが、ワシは小さく首を振る。

「今のままでも十分利益は上がっており。設備投資にしても何に  
しても困ってはおりん」

はつきりと首を振ったワシに、松次郎の顔が赤くなっていく。  
断られるなんて考えもしておらんかったようじゃからのう。じゃ  
が、ワシはその程度の説得で頷く程安い人間じゃないわい。

「それに設備よりもワシらは生徒の安全が大切じゃ。お主らのよう  
なヤクザ者を麻帆良祭に噛ませる訳にはいかん」

「……っ！ な、何を考えているんですか！」

ついに怒鳴り声を上げる松次郎。

顔は怒りで真っ赤になり、歯をむき出しにしながら怒鳴りつけて  
くる。今までの好青年の仮面はもはや剥がれ落ちかけておる。

「あなたは、モノを分かっているんです！ 麻帆良祭がどれほど  
経済に影響しているのか、それを分かっているからそんな口を叩  
けるんです！」

ふーふーと肩で息をしながらそう叫ぶ松次郎。

そんな松次郎に、ワシは小さくため息を吐き出すと、

「喝っ！！！！！！！！」

そう叫んだ。

魔力の乗ったワシの喝は、ビリビリと空気を揺らし、怒気を漲らせていた松次郎を素に戻す。

松次郎が素に戻ったのを確認すると、今度はワシが出来る限り怒気をみなぎらせながら叱りつけるように言った。

「モノを分かかっておらんのはお主の方じゃ若造！ とってつけたような経済の知識でそのような事を語りおって、恥をしれ！」

「っ、なにを。私が何を分かかっていないというんだ！ 何も分かかっていないのはお前の方じゃないか！」

ワシの言葉に、松次郎はまた怒りが振り返したのかそう叫ぶ。

そんな松次郎にワシはこれ見よがしにため息を吐き出すと、近くにあつた醤油瓶を手に取り、手元にあつた料理の上にかけていく。

先ほどまで白かった里芋が、大量の醤油にまみれ茶色く色づけられていく。

「な、何をしてるんだ」

ワシの行動に、松次郎は意味が分からなかったのかそう尋ねてくる。

何も分かかっていない松次郎に、ワシはまたため息を吐き出すと言った。

「モノを分かかっていないと言ったのじゃ。これを見てみる、せつかくの料理が台無しじゃよ」

「それはお前がした事だろうが！」

茶色く染まつた芋が入っている皿を松次郎の方へと見せると、松次郎は大声でそう叫んだ。

そんな松次郎に、ワシは更に魔力を込めた言葉で叱りつけた。

「分からののか！　そもそも、今回のような料理に醤油やらなんやらの調味料をつけてきた事がモノを分かっておらんという証拠じゃと言っておるんじゃ！　過剰な装飾は全てを台無しにする！

わびさびや礼儀も知らん青二才に任せられる事などある筈がなからうが！」

「っ！　な、何言つてんだよ！　醤油をつけただけじゃねーか！　それだけで判断するんじゃねーよ！」

ワシの言葉に松次郎は一瞬だけ言葉を詰まらせたが、すぐにそう反論してくる。好青年の仮面は完全に剥がれおち、その表情はヤクザ者のそれじゃった。

そんな松次郎にワシは大きくため息を吐き出すと、席を立つて言った。

「ふん、先代も先代なら当代も当代じゃな。

気分が悪い、帰らせててもらおう」

「ちょ、ちよつと待てよ！　まだ話は終わってないだろ！」

立ち上がったワシに、そう言って掴みかかってこようとした松次郎。じゃが、そんな事を許す筈もなく、ワシは迫ってきた松次郎を合気的要領で放り投げた。

どかんという大きな音を立てて畳の上にぶつけられる松次郎。

叩きつけられた松次郎を見て、今まで黙っておった護衛の男たちが一斉にワシに向けて銃を構えた。

だが、ワシはそんな拳銃おもちゃなどには目もくれずに倒れている松次郎に言う。

「もう一度だけ教えておいてやろう、小童。貴様は何も分かつてはおらん。

たった二人の客人を前に、これほどの護衛をつけ、あまつさえ銃を持たせておるのじゃからな」

「っ……、僕はモノを分かかってないなんて事はない！」

ぎろりと威圧する視線を送るワシに、言葉を詰まらせるがすぐに子供の様な反論をしてくる松次郎。

ワシは小さくため息を吐き出すと言った。

「じゃったら、まずはその分厚い防弾チョッキを脱ぐ事じゃな。

せつかくのスーツが膨れ上がって、見苦しい事になっておるぞ」

ワシの言葉に松次郎は自分の身体をスーツの上から触る。

膨れ上がっているといつても、そんなに物凄く膨らんでおる訳じゃない。じゃが、ほんの少し膨れ上がっただけでもオーダーメイドのスーツの良さは崩れてしまう。

そんな事もしらん、小童に何かモノを言う資格などない。

ワシはそう言うと、向けられた拳銃などモノともせず部屋から出ていく。

「まっ、待てよ！ このまま帰ったら後悔するぞ！」

お前の所の生徒だつて！」

「底が知れたぞ、小童。所詮、脅ししかできん男じゃな」

ワシはそれだけ言い残すと、もう振り返る事もせず、屋敷を後にした。

「どうするおつもりですか？」

車に乗り込み、しばらく車を進ませた後にタカミチ君が尋ねてきた。

そんなタカミチ君にワシは小さく笑うと、言った。

「犬上組の方とワシが上手くいっておるといふ噂を流す。

そうすれば、奴らと仲の悪い佐賀組は小競り合いを続けるじゃろう。犬上組と小競り合っているうちは、奴らはこちらに手出しして  
こん」

こちらの生徒が傷つけられたとなつたら、敵対組織にワシらが与するからのう。物も然り、金も然り、人も然りじゃ。

それがもつとも怖い奴らには、敵対組織を潰しきるまでは生徒たちには手を出してはこない。

そのためには、ワシは相手と険悪な関係になる必要がある。

険悪であればある程、『敵対組織と上手くいっている』という情

報が入れば、敏感にならざるおえんからのう。まあ、それで佐賀の小童を態と怒らせたのじゃし。

「分かりました。では、その様な噂を流しておきます」

ワシの言葉に、タカミチ君は頷いた。

まあ、それ以外にも理由はいくつかあるのじゃがな。

まあ、裏が関わらない組織がワシらと険悪な関係であれば、色々と便利なんじゃよ。ドンパチの理由にもなるし、裏の奴らにこれは表の事情だと騙す手も使えるからのう。

そんな事を考えながら、ワシは小さく微笑むとタカミチ君に言った。

「うむ、そうしてくれ。では、今度は犬山組に向かってくれ」

さて、今度は犬山組の爺を怒らせに行かんとこのう。

車は再びワシらに乗せて、夜の街を走って行った。





その男たちは、囁くぬらりひよんの掌の上で踊りを踊る。(後書き)

アンケートはまだ続けています。

アンケートの締め切りは2月9日の午前0時とさせていただきます。

現在の所、『バレンタインデーなんて滅びればいい』が有利の様です。

……もしもになったら、どつしよつかな？

上司が無能だと、部下の気苦労は絶える事がないと知れ。(前書き)

今回は難産でした。

そして、また長い割に進んでません。

上司が無能だと、部下の気苦労は絶える事がないと知れ。

こんにちは、ネギです。

麻帆良学園に来てからというものの、普段よりも気苦労が津波の如く襲ってきている様に思えるネギです。これなら、まだなんちゃって魔法学校の方がマシだったと思える程です。

まあその気苦労の原因はエヴァンジェリンさんと学園長なんですけどね。特にあの後頭部は一度泣かしてやりますよ。

ふう、と僕はため息をもらします。

今日はエヴァンジェリンさんとの胃が痛くなる話し合いを終えた次の日です。

まだ眠りたりないと訴えてくる目を擦りながら、僕はもぞもぞとベッドから降り、小さく欠伸を噛み殺しました。時計に目をやると、もうお昼を過ぎていました。

普段は目覚まし時計なしでも7時には目を覚ますのですが、今日は13時間も寝てしまいましたね。昨日が精神的にどれくらい疲れていたか、睡眠時間でもよく分かります。

『もしも、その時がきたら、貴様を一人の敵として残忍に冷酷に葬り去ってやるっ』

寝ぼけた頭の中に昨日のエヴァンジェリンさんの言葉がちらつき  
ます。

あの時のエヴァンジェリンさんの笑みは心を凍らせるような冷た  
い笑みが自然と頭の中に浮かびます。

僕はあの言葉を前に何も答える事ができませんでした。

その時は受けて立ちます、それは勘弁してほしいですね、返すべ  
き言葉は色々と思いつきますが、あの時の僕は何も答える事が出来  
ませんでした。

身体が頭が鮮明に覚えています。

凍りつくようなエヴァンジェリンさんの笑みを、

突き刺すような緊張感を、

零れ落ちる鮮血を、

心臓を鷲掴みにされた様な恐怖を。

あの言葉はエヴァンジェリンさんの本心だった筈です。

だから、僕はその言葉に飲まれ、何も答える事が出来なかった。

今までどれほど自分が頭でっかちだったかと思ひ知らされました。  
どんなに冷静なフリをして、自分を騙していても、結局僕は全て  
を失うかもしれない恐怖を前に何もする事はできませんでした。

あのウェールズを襲った悪魔の日から、必死で英雄を目指した僕。  
あの力モさんが見せた恐怖の日から、英雄ではなく普通を目指し

た僕。

けれども、年齢や両親の問題から魔法は捨てられず、流されるように麻帆良学園マホウリョウガクエンに来てしまった。そして、ここでまるで英雄の様に、あの悪の魔法使いである闇の福音に『敵』だと宣言されたのです。

中途半端な自分が嫌になります。

自分でも何がしたいのか、分からなくなってきました。

僕は普通に生きたいだけ。

でも、両親もおらず自立も出来ない僕は魔法使いが作った流れには逆らえない。流され続けるしかないのです。

本当に何もかもが中途半端で、何がしたいのか分からない僕。

泣きたくなってきます。

子供の様に意固地になって魔法は使わず、だけど結局何も出来ない。

頭でっかちで、何も分かっていない自分が泣きたくなるほど腹立たしい。

本当に、本当に泣きたくなってきます……。

大きくため息を吐き出します。吐き出したため息は寒い部屋の中で白く彩られ、すぐに空気へと溶けていきました。

ちらりと机の上に置かれている写真立てに目をやりました。そこには、なんちゃって魔法学校の卒業式間近の時に撮った写真が飾ってありました。

アーニヤがちょっと拗ねたようにそつぽを向きながらも照れ笑いを浮かべ、僕も小さく照れながらアーニヤの横に立っている写真。

『私とネギは絶対にあんたなんかには負けないんだから！』

昨日のアーニヤが答えてくれた台詞も僕の頭の中が思い返され、少しだけ顔をほころばせます。

あの時に言ってくれたアーニヤの言葉。

確かにそうだと、思う。

例え闇の福音だろうが、何だろうが、今の僕が持っている最高の幸せは渡すつもりはありません。

泥にまみれようが、身体を引き裂かれようが、血を飲み干されようが、それだけは決して譲ってやる気はありません。

僕は、アーニヤと笑っていらればそれでいいんです。

そのためには、何だっしてやります。それが例え、この場所での教師でも。

決して危険などない、ありふれたごく普通の世界の中でアーニヤと幸せに生きていく為に、僕は今は堪えなければなりません。せめて、後数年は堪えましょう。

それまでは闇の福音だろうが、ぬらりひょんだろうが相手をしてやります。

せいぜい、今のうちに笑っていたらいいんです。必ず、僕たちの幸せはもぎ取ってやりますから。

改めて自分自身に闘志を燃やさせ、僕はキッチンへとやってきました。

人の気配が全くしない事を見ると、どうやらタカミチは帰ってこなかったようです。僕は小さくため息を吐き出すと、食パンをトースターに放り込み、同時にヤカンにお湯を沸かせます。

お湯を沸かせている間に、僕は玄関に向かうとタカミチが取っている新聞をポストから引き抜きました。

「……まほら新聞？」

僕は首をかしげます。

日本の新聞会社の事はよく知りませんが、多分メジャーな新聞じゃないですよ？

まあ、いいかと深く考えずに僕はキッチンに戻るとお湯が沸くまで新聞に軽く目を通します。

書かれている記事は『麻帆良の台所、麻帆良市が拡大予定！』『不況の煽りをうけ、まほらデパート紳士服売り場縮小』『今年新設噂の一芸入門クラスに密着』など、全て麻帆良学園に関する事だけでした。

学外の事に関してはほとんどと言っていい程書いてないですね。まあ、地域密着型とでも言えばいいでしょうか。どっちでもいいですけどね。

新聞に興味を無くした僕は、タイミング良く沸いたお湯を使い紅

茶を入れ、焼けたトーストにバターとジャムをつけると、すぐに齧り付きます。

お腹がすいていた為に、トーストを一枚ぺろりと食べてしまいました。昨日の晩はご飯が胃に通っていった気はしていませんでしたからね。それにご飯どころではなかったですし。

食後の紅茶を飲みながら、僕は小さくため息を吐き出しました。また昨日の夜の事が浮かび上がってくる頭を、僕は大きく首を振り脳内から追い出しました。

暗くなってもしかたがありません。アーニヤに怒られてしまいますからね。

そんな事を考えながら、僕はこれからの事を考えます。

後2日もすれば、この学園の新学期です。

つまり、僕の教育実習生見習いの仕事が始まるという事です。

名簿に目をやりましたが、目立った人物は主に3人です。

幽霊である『相坂 さよ』さん。

ロボットである『絡繰 茶々丸』さん。

伝説の吸血鬼である『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』さん。

まあそれ以外にも、やけに子供っぽい人や大人っぽい人がいたり、留学生の方がいる事に疑問を感じますがね。といっても、そんな問題見だらけの変わり者だらけという訳ではないでしょう。



変わり者と言えば、9歳で教育実習生見習いをしている僕の方が、随分と変わり者ですしね。それに、魔力が少ないと言っても魔法使いですから、変わり者度合いはかなり上位でしょう。

さて、泣いても笑っても、あと2日で教育実習生見習いとしての仕事が始まります。

エヴァンジェリンさんとは話し合えましたし、最低限の下準備はしたつもりです。

本当は相坂さんや、絡繰さんの事ももう少し詳しく調べたり、話したりしたかったんですが、学園長が何も教えてくれませんしね。実は一昨日に教室に行ったりしてみたんですが相坂さんには会えませんでしたし、絡繰さんはエヴァンジェリンさんの所にいるので会いに行けそうにないですし。

ですので本当に最低限ですが、一応下準備をしました。これでおそらく、安全な学園生活を始める事が出来る筈です。多分。

「上手くいけば、いいんですけどねえ」

誰に言うでもなく僕はそう呟き、紅茶に口をつけます。

少し冷めた紅茶はそんなに美味しくありませんでした。

お昼の3時を過ぎた頃、僕はやる事もなくベッドの上で寝転んでいました。

よく考えたら、この学園に来て初めて暇になりました。

こんな時に、何をすればいいのか不安になります。

それは別に暇のつぶし方が分からないとかでは無いんですが、何と云うか、この学園に来てからというものの色々と早めに手を打っておかなければ安心できない気分になるんです。

変にぽっかりと時間が空いてしまえば、何か気苦労が絶えない事が起きるのではないかと思ってしまうんです。

何と云うか、染まりたくない形でこの学園に染まっていく自分が激しく不安です。

そうは言ってもやらなければならぬ事は思いつきません。

早めに手を打っておく必要がある事など今のところは思いつきませんね。

あるとしたらあの学園長絡みでしょうか？

幽霊の事やロボットの事、それに僕の嘘の経歴の事、後はこの学園の魔法使いの把握に、魔法生徒の把握、闇の福音程ではなくても危険人物はいないか等ですか。ああ、他にも夜に襲ってきた怪物の事などもありました。

……あれ、かなりやる事あるんじゃないでしょうか？

改めて考えると次から次へと生まれてきた疑問に、僕は愕然とします。

エヴァンジェリンさんの事に気を取られ過ぎて、その辺の事は全然考えていませんでした。

額から嫌な汗が流れおちます。それも尋常じゃない程。

と、とりあえず、最低でも魔法関係者の事だけでも聞いておかなければなりませんね。

それに忘れていましたけれど、エヴァンジェリンさんと話し合いをした事も報告しておかなければなりません。うああ、やる事がいっぱいだー。

「……うう、不安だ」

僕はそう呟きながらもすぐに身体を起こします。

そして、タカミチ家にある黒電話を取ると、学園長室へと電話をかけました。

しばらく電子音が鳴り、ガチャリと電話が取られます。

「あの、ネギ・スプリングフィールドですが」

「ああ、昨日電話を頂いたネギ先生ですね。ごめんなさい、まだ学園長帰ってきてないのよ」

聞こえてきたのは、学園長の声ではなく女性の声でした。

……あの後頭部、ダメすぎます。

全く使えない後頭部に僕は小さくため息を吐き出します。

「えっと、いつ頃戻るか分かりますか？」

「いえ、それがまだ分からないんです。おそらく明後日の朝には戻れると思うんですが」

困ったようにそう言う電話の女性。というか、明後日って僕の仕事初日じゃないですか。

うわー、最悪だー。またなし崩し的に、学園長にごまかされそう

だよー。

頭の中で笑う学園長を思い出し、僕は力無くうなだれます。

「……うつ、どうしようかな」

思わずそう呟いてしまった僕。そんな僕に電話の女性は優しく言いました。

「あのネギ先生。私に分かる事でしたら、お教えできると思っています」

気を使ってそう言ってくれる電話の女性に僕は困ったように笑います。

この電話の女性が魔法関係者だったらすぐに聞くんですが、まだ分かりませんからね。ここでまさか、貴女は魔法関係者ですかとは聞けませんし。聞いた場合、魔法関係者なら秘密漏えいでオコジョの刑、そうでなかったら病院につれて行かれそうです。

それでは、どうしましょうか。この学校にいる魔法使いで知り合いの方はいましたっけ？

タカミチは出張。学園長は放浪。エヴァンジェリンさんは……ダメでしょうね。

僕は頭の中で知り合いの方を思い出していきます。

あのサングラスの神多羅木さんと、女剣士の葛葉さんですが、残念ながら居場所も知りませんし、どんな方かも分かりませんからねー。という事は、後は瀬流彦さんだけですか。

昨日の夜にも瀬流彦さんにお付き合い願いましたし、あまり頼り

過ぎるのは心苦しいんですがね。

小さくため息を吐き出します。ですが、さすがにここで黙ってる訳にはいかないでしょう。

僕はそう考えると電話の女性に尋ねます。

「あの、では、瀬流彦さんがどこにいるか知っていませんか？」

「瀬流彦先生ですか？ 瀬流彦先生なら多分この時間は大広間の方にいると思いますよ」

大広間ですか。僕は頭の中で女性の言葉を反芻して思う。うん、どこか分かりませんね。

というか、僕ってまだ全然この学園の地理を理解してないじゃないですか。まあ、急いで調べ上げる必要はないですけど、やっぱり早めには覚えておきたいですよ。

そう考えながら、僕は申し訳なさそうに電話の女性に言った。

「すいませんが、大広間の場所を教えてくださいませんか？」

「うふふ、そうですね。ネギ先生はまだ赴任したばかりでしたね。

えーとですね、大広間なんです」

女性が大広間の場所を丁寧に説明してくれ、僕はそれをしっかりとメモにとる。

彼女の説明によると大広間とは、かなり大きめの広場で遊具やら何やらがたくさんある場所の様だ。休日にかかなりの人間がやってきているとの事でした。

「はい、分かりました。ありがとうございます」

「いいえ、また何かありましたら連絡してくださいね。」

あとで、学園長にはちゃんと『もげろ』と伝えておきますから」

……もげろ、はもう伝えなくてもいいんですけどね。

曖昧に僕は笑いながら、お礼を言つと電話を切つた。

うーん、大広間ですか。

僕は小さく考えます。頭の中には引つ越しと共に持ってきたサッカーボールが浮かんできました。

ここ最近気苦勞ばかりで運動もろくにしてませんでしたね。少しストレッチ発散したい所です。

「そうですね、久しぶりに身体も動かしましょうか」

一度大きく伸びをすると僕は自然と笑みを零して、そう呟きました。

そして、特に迷う事もなく僕は大広間と呼ばれている場所にやってきました。

いやー、ここは本当に広いですね。そしてとても賑やかですね。それに変わった遊具もたくさんあります。とにかく活気が溢れる場所ですよ。

さて、そんな感想を抱きながら僕はキョロキョロと辺りを見回しながら考えます。

瀬流彦さんと会うためにここに来たものの、この沢山の人のなかから見つけられる自信はないですね。ぱっと見渡しただけで野球をしている人、走り回っている人、相撲をしている人など多種多様な人がいますから。この中から見つけるとなると至難の業ですね。

せめて、この場所で何をしているのかが分かれば、探しやすいのですけど。というか、瀬流彦さんって本当にこんな所で何してるんでしょうか？

……サッカーしてる、とか？

一瞬だけ、サッカーで汗を流す瀬流彦さんを想像しましたが、ちょっとイメージと違う気がします。どっちかというと、目的もなく散歩しているとかそっちの方がイメージに合いますよね。

まあ、ここでいくら考えていても仕方ありませんね。とりあえずぶらぶらと歩いてみましょうか。

最悪見つからなかったら、また明日電話すればいいですし。

手元にあるサッカーボールを弄りながら、僕はそう考え、少し足を進める。

それにしても活気が溢れていますね。この情景だけを見ると、闇の福音が住んでいたり、夜中に怪物が出たりする学園のようには見えませんね。

「まあ、平和な事はいい事なんですけどねー」

薄氷の上の平和の様な気はするんですよね。何かの一つでも狂えば、この学園が全て壊れてしまうような、そんな気がします。まあ、それを防ぐために魔法関係者がいるんでしょうけど。

自分のその一員である事に、僕は小さくため息を吐き出します。そして、ふと顔をあげると、そこには大きな建物が建っていました。おや、あれは体育館ですか。

もしかしたら、中に瀬流彦さんがいるかもしれないな。そう考えた僕は、少しだけ体育館の中を覗き込みます。多分、運動系の部活動か何か和気あいあいと活動しているのだと思っていたのですが、

中は戦場でした。

「行きますえー、刹那センパイ！」

「っ！ どこにこんな力がっ！」

小さな女の子が可愛らしい掛け声とは真逆の鋭い速度で木刀を振るい、その一撃を女の人が木刀で受け止めます。木刀を木刀で受け止めただけなのにもかかわらず、体育館の空気はビリビリと振るえます。

女の人は受け止めた一撃を力ではじき返し、女の子に木刀を振り上げます。



しかし、その鋭い木刀の一撃をバックステップでかわすと、女の子は木刀を流れるように振るう。

「っちい！ 本当に、初めて数日の太刀筋とは思えないな！」

横からの一撃を木刀で受け止めながら、女の子は苦笑を浮かべる。

「うふふ、やっぱり剣道って楽しいどすなあ」

そんな女の子に、女の子も笑いながら木刀を振るい続けている。

……なんででしょうか、この状況は。

どう見ても、普通の練習風景には見えないんですけどね。むしろ、戦場です。

目の前の光景に啞然としてしまう僕。最近の剣道ってレベル高いんですね。

開いた口がふさがらない状態の僕に、誰かが近づいてきました。僕が、そちらの方に顔を向けると、そこにはジャージに身を包み、竹刀を持った男の人が凄く笑みでこっちを見ている姿を視界に納めてしまいました。

その笑み、凄く嫌な予感がします。

すぐに逃げだそうと僕が身体を動かす前に、男の人は笑顔のままで言います。

「どうしたんだ、その女の子！ 剣道に興味があるのか！？ そうなのか！」

ならば、ちよつと見学していくといい！ 部員が増える事はいい事だな！」

僕の返事も聞こうとはせずに怒涛の勢いでそう言うと、僕を担ぎあげる男の人。まるで軽い荷物のようにひょいっと担がれる僕。

「えっ、ちよつと！ 違いますよ？ 僕は見学に来たわけじゃなくて、人を探しに！」

「おお、強い人を探しにきたのか！ さすがだな！」

最近の若者はそれぐらいの気合いがなくちゃいかん！ 青春は一度しかないのだからな！」

突然の出来事に驚きながらも、僕は解放されようとジタバタと暴れます。だけど、そんな抵抗などまるで気にせず男の人は物凄い力で僕を固定し体育館の中へと持っていきます。ちよつと、本当に下ろしてくださいよ！

まるで荷物の様に運ばれ、僕は体育館の入り口から一番遠いステージの上で、ようやく下ろされました。どすると、お尻から落ちる僕。ちよつとお尻が痛いです。

お尻をさすりながら、恨みがましげに僕は男の人を見る。そんな僕の視線など意にも返さず男の人が豪快に笑いました。

「ははははは、いいか。その男の子！ どれだけ青春の汗を流したかによって、青春の価値は決まるんだ！ さあ、男の子！ 今すぐに竹刀を振るうぞ！」

「ちよ、ちよつと！ 全てにおいて、待ってくださいよっ！」

一体どこに持っていたのか、竹刀を取り出し男の人はそれを僕に投げてきます。そんなテンションが物凄く高い男の人に、僕は慌てて大声で叫びます。

これでまた僕の声が聞こえないようだったら、人間の皮をかぶったゴリラにあっってしまったと諦めましょう。そして、会話は即刻終了し、全速力で逃げ出す事にします。

「ん、どうしたんだ、男の子！」

どうやら会話は出来るようですね。男の人がゴリラではない事に安堵のため息を吐き出し、僕は男の人に説明します。

「僕は剣道しに来たんじゃないんですよ。人を探し「何っ、そうなのか!? それはマズイな! しっかりとした青春を歩まないダメだぞ!」って人の話を聞いてください! 僕は、人を探してるんですよ!」

人の話を最後まで聞かずに叫ぶように言う男の人に、僕は泣きそうになりながら弁解します。何と言うか、この人と会話するの、もう嫌です。ぬらりひょんと同じぐらい話を聞いてくれません。

「おー、兄ちゃん! 何やってんだ!?!」

豪快に笑う男の人にそんな声がかげられました。

僕はその声ができる方に目を向けると、そこにはニコニコと笑っている女の子と、ちょっとモジモジしている女の子がいました。

どちらの女の子も僕よりも年下で、小学生とか幼稚園とかそのぐらいの年齢の様です。

「おう、妹よ! いま、この男の子に青春が何たるかを教えている

んだ！」

そんな講義頼んだ覚えはありませんよっ！ 僕は涙目になります。すると女の子は、豪快に笑う男の人と僕の様子を見て、小さくため息を吐きました。

「……あー、兄ちゃんの悪い癖がでたな。

ごめんな、兄ちゃんはテンションが最高潮に高まると基本的に人の話聞かないんだ」

あはは、と笑いながら全てを察したのか、女の子は申し訳なさそうにそう言います。

そして女の子は、もう一人の女の子に何か小声で言いました。女の子はその言葉にこくりと頷くと、どこかへと走っていきます。トテトテと走っていく姿は可愛らしいですね。

しかし、僕にはそんな女の子の様子を悠長に見ている暇はありません。

男の人は出会ってから一向に下がらないテンションで笑い声をあげると言います。

「ははははは、妹よ！ そして男の子よ！ 一緒に青春の汗を流そうじゃないか！」

「あははは、青春の汗は大好きだ！ でも、落ち着け、兄ちゃん！」

「何を言う！ 俺はいつでも落ち着いているぞ！ さあ、一緒に腹筋100万回だ！」

突然、その場に横たわり物凄い早さで腹筋を始める男の人。はつきり言つて物凄く怖いです。

ふんふんつと鼻息荒く、腹筋をし続ける男の人に、僕は何か言う事も出来ずに、嫌な汗を流します。何と言うか、エヴァンジェリンさんの家とは違う意味で胃が痛くなってきました。

腹筋をしている男の人をどうする事も出来ずにただ見ていると、先ほど走って行った女の人がバケツを持って帰ってきた。

そして、女の子はそのバケツを腹筋し続けている男の人に躊躇なく思いつきりぶっかけた！

「お、落ち着いてくださーい！」

腹筋で頭を上げている最中に水をかけられ、鼻と口と目に水が入ったのか、何か酷い事になる男の人。突然かけられた水に、男の人はしばらく何が起きたのか分からないように辺りを見回し、ふと気がついたように言いました。

「はっ、ここは!？」

「兄ちゃん、やっと正気に戻ったか!」

何事も無かったかのように笑う女の子。そんな女の子の言葉に、男の人はずぶ濡れになったジャージを確認して頷いた。

「いやー、すまん！ テンションが上がりましたようだ！」

……いえ、いいんですけどね。多分、これが麻帆良特有のノリなんだでしょうけどね。

小さく泣きそうになっている僕。これからやっていく自信とかを

全て無くした気分ですよ。

「あのな、兄ちゃん！ 今回の兄ちゃんの被害者はこっちの外人の兄ちゃんだ！」

女の子が僕の方を指さしてそう説明をする。その説明を受けて、男の人は力づよく頭を下げた。

「おお、すまん！ そのこの男の子！」

「あつ、いえ。その驚きはしましたが、実害はありませんでしたし」

先ほどよりは少しテンションが低くなった男の人に、僕はそう答える。まあ、強制拉致はされましたが、何か暴行を受けたりした訳じゃないですからね。怖かったと言えば、凄く怖かったんですけど。

「ははは、ありがとうな、男の子！ 俺の名前は宇佐美 勝信だよろしくな！」

「あつ、よろしくお願いします。僕はネギ・スプリングフィールドです」

また力強く頭を下げて、何故かそう自己紹介してくる宇佐美さんに、僕も反射的に頭を下げて自己紹介をする。そんな僕に、宇佐美さんは少し驚いた顔をしました。

「ほう、そうか！ 君があのおックスフォード首席卒業の子供教師か！」

「いやいや、君の熱い教師生活の事は俺も学園長から聞いたよ！ 良い青春をしてるね！」

「……はは、ありがとございます」

ぐつと親指を上げてそう言ってくる宇佐美さんに、僕は困ったような笑みを浮かべる事しかできませんでした。まさか、ウソの経歴だという訳にもいきませんしねえ。

「それで、そのネギ・プリン・アラモード君はここで何をしているんだ!？」

「ネギ・スプリングフィールドです」

僕はそんなに甘そうな名前じゃありません。というか、何しているって貴方が連れてきたんでしょ。

そんな風に、色々とツツコミを入れたかったのですが、何か言っただまたさつきみたいになっただけは嫌なので、曖昧に笑いつつも素直に理由を言う事にしました。

「えっと、瀬流彦さんを探していました。瀬流彦さんって分かりますか？」

「何っ！ 瀬流彦を探しているのか!」

僕の言葉に大袈裟に驚く宇佐美さん。多分、この人は何でもかんでもオーバーリアクションじゃないと気が済まない人なんだろうな。

そんな事を考えているとテンションの高い女の子が、僕の方を見て言いました。

「なんだー、瀬流彦なんかを探してるのか！ それぐらいなら知っ

てるぞー！」

「えっ、本当？」

ニコニコと笑いながらそう言う女の子に僕は、驚きつつそう尋ねます。そんな僕の問いかけに、女の子は力強く頷きます。

「ああ、本当だぜ！ 案内してやってもいいよ！」

自慢げに胸をどんっと叩き、ちよつとむせる女の子。

そんな女の子を見ながら、僕は小さく笑います。そうですね、他に手掛かりもありませんし、お願いしましょうか。魔法関係の話になる前に、この子には帰ってもらえばいいですし。

そう考えると、僕は小さく笑いながら言った。

「それじゃあ、お願いしてもいいかな？」

「おう、任せとけ！ そうそう私の名前は宇佐美 望だ！」

また自慢げに胸を張りながら、望ちゃんはそう言って笑った。そんな望ちゃんの笑みに僕もつられて笑いながら言う。

「うん、ありがとうね、望ちゃん」

「おう、兄ちゃんが迷惑かけたからな！」

はは、随分としつかりしてるんだね。

うん、でも本当に迷惑したよ？ 僕の下手したら僕のトラウマが増えかねなかったからね。



心の中でそう呟きながら、僕は心に誓った。

もうこの体育館には近づかないでおこうと。

上司が無能だと、部下の気苦労は絶える事がないと知れ。（後書き）

この調子で行くと、完結するまでに200話を超えてしまいそうと  
いう可能性に愕然とした作者です。話を長くしてしまう自分に泣き  
そうです。

モチベーションを保つのが大変ですね。

毎日更新を続けてらっしゃる方は本当に尊敬します。

みなさん、作者に感想を！ 感想があれば、頑張れる気がする！  
気の所為かもしれないけれど！

あるヒーローは変身する前に、大魔王をボコボコにしました。(前書き)

更新です。前回の続きです。

前に今回で原作に行くとかほざいていましたが、まだ原作が始まりません。

原作までもうちよっただけ続くんじゃないよ状態です。

あるヒーローは変身する前に、大魔王をボコボコにしました。

混沌としていた体育館から逃げるように脱出した後、案内役をかって出てくれた望ちゃんにつれられ僕は、大広間の中で多くの遊具が置かれている場所へとやってきました。

丁寧に整備された芝生の上に、小さなビルよりも高いジャングルジムとか、20人乗りのシーソーなど、通常よりも規模がでかい遊具があちこちと置かれています。何と言うか、この学園は全てにおいて規模が大きすぎませんか？

「えっと、瀬流彦だったら多分この辺りで寝てる筈だぜ！」

ぐって拳を握って力強くそう教えてくれる望ちゃん。テンションの高さがさっきの宇佐美さんの姿が思い出され、僕は少し冷や汗をながしながらも、周囲を見渡した。

遊具で遊ぶ子供たちが沢山いますね。楽しく遊ぶのは良いですが、5メートルぐらいある所から飛び降りたりするのは止めた方がいいと思いますよ？

「おっ、瀬流彦がいたぞ！」

辺りの様子を見回していた僕に、望ちゃんが遠くを指さし、そう教えてくれます。

指さされた先に視線を向けると、確かにそこには少し坂になっている芝生の上で気持ちよさそうに寝転んでいる瀬流彦さんがいました。

やっと見つける事が出来て、僕は安堵の息を吐き出します。そして、すぐに瀬流彦さんに声をかけようと思います。

「あつ、「ついに見つけたぞ、瀬流彦！」って、望ちゃん!？」

ところが、僕が声をかける前に、瀬流彦さんの方へ走っていくとそのままの勢いで気持ちよさそうに寝ている瀬流彦さんのお腹の上に飛び乗ります。

ぐえつという潰れた蛙の様な声を洩らす瀬流彦さん。

そんな瀬流彦さんに、望ちゃんはやりと笑うと瀬流彦さんを指さして言います。

「瀬流彦! もう逃げられないぞ!」

「痛たたた」

何が起こったのかわからずしばらく、その場でキョロキョロとしていた瀬流彦さんは、そんな望ちゃんの言葉に、少しだけ思案すると低い声を出して笑い始めました。

「……ぐふふふ、逃げられないのは、望! 貴様の方だ!

この大魔王である瀬流彦様が直々に貴様を叩きのめしてくれよう!」

「ふざけるな、叩きのめすのは私の方だ! この勇者である望が、大魔王を倒してやるうう!」

何か寸劇が寸劇が始まりました。瀬流彦さん、ノリノリですね。

大魔王だったらしい瀬流彦さんは、勇者だったらしい望ちゃんに向かつて言います。

「来い！ その勇者の資質とやらを見せてみる！」

「兄ちゃんの仇だ！」

いや、望ちゃんのお兄さんは体育館にいますよ？

そんなツツコミを入れる隙もなく、望ちゃんは飛び上がると瀬流彦さんの顔面に蹴りを入れます。まともに蹴りが入り、顔に靴の跡がくつきりにつけられたまま、2メートル程吹っ飛ぶ瀬流彦さん。だ、大丈夫でしょうか？

そのままゴロゴロと芝生の上をしばらく転がり、瀬流彦さんは少しだけ顔を上げると言いました。

「ぐうっ、み、見事だ、勇者望よ！」

息も絶え絶えといった感じでそう言う瀬流彦さんに、望ちゃんは胸を張って言います。

「当然だぜ！ 私の力を見せてやる！ 変身だあ！」

「えええっ、このタイミングで!？」

予想外の変身に瀬流彦さんは驚きの声を上げます。そりゃそうです。魔王を倒してから変身して更に魔王をボコボコにするヒーローなんて、お茶の間に放映できませんからね。

呆れながらも既に傍観モードに入っている僕。そんな僕の方を振り返り望ちゃんは言いました。

「さあ、大賢者ネギ！　一緒に変身だ！」

「えっ、僕も!?」

突然巻き込まれた僕は驚きながら自分を指さします。

「なにっ、大賢者ネギまでいたのか!?　だが、私はまだスーパーミラクルブラックウルトラハイパーモードになる事が出来る！　勝負はこれからだ！」

瀬流彦もノリノリですね!?　先ほどまで息絶え絶えだった大魔王は、いきなりすくつと立ち上がり、望ちゃんと僕に向かってそう言ってきます。

「くそっ！　スーパーミラクルなんとかモードだと！　なんかこう、全体的に万能な感じに変身するしかない！」

焦ったような表情で、そう言う望ちゃん。なんか全体的に万能な感じって設定が適当すぎるでしょ。

しかし、そんな適当な設定でも話は進んでいきます。

「いくぞ、ネギ！」

「ええ、えっと、分かりましたよ！　変身ですね！」

ツッコミを入れるタイミングもなくどんどんノリで進めていつてしまう望ちゃんに、僕は諦めてそう叫ぶと、なんか全体的に万能になる変身をします。といっても、ただ両手を上げて変身と叫ぶだけですけど。

「「変身！」」

とりあえず、何となくカッコいいんじゃないか思えるポーズを決める僕。それにしても万能な感じってどんな変身なんでしょう。万能ネギにでもなればいいのでしょうか？

「こつちだつて負けん！ スーパーエクセレントブラックモード変身！」

さつきと名前が違う！？

何か大袈裟にビシビシッとポーズを決めてそう叫ぶ瀬流彦さん。

「おお、向こうで面白そうな事やってるぞ！ 僕も混ぜる！」

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん。待ってよー」

うわああ、知らない女の子たちも入ってきた！？

もう何が何だか分からない状態のノリだけでヒーローごっこはしばらく続きました。

1時間ほど遊んだ後、僕はようやく解放されます。

「よし、今度は向こうで遊ぼう！」

「おっ、僕たちも行くぞ！」



「ま、待ってお姉ちゃん！」

望ちゃんは、先ほどまで一緒に遊んでいた女の子二人と遊具の方へと走っていきます。物凄い元気ですね。僕はもうへとへとですよ。

ようやく解放され、僕は小さく息を吐き出します。

そんな僕に同じく解放された瀬流彦は苦笑しながら僕の方へとやってくる。声をかけてくれました。

「お疲れ、ネギ君。大変だったでしょ？」

「いや、ははは。まあ、途中で勇者が魔王側についた時はどうすればいいのかと思いましたよ」

曖昧にそう答えながら笑う。僕の言葉に瀬流彦さんはまた苦笑を浮かべます。

「ふふふ、でもこれからネギ君は教師になるんだから、これぐらいで根を上げてたら持たないよ？」

へたり込む僕の隣に座り、瀬流彦さんはバツクから水筒を取り出すと僕に渡してくれます。僕はそれにお礼を言って受け取りながら、苦笑を浮かべて答えます。

「ははは、そうですね。僕も国で先生のボランティアとかやってたんですけどね。やっぱり偽物の教師と本物の教師は大変さが全然違いますね」

「うーん、教師がどうこうと言うよりも、ここの生徒が特別アグレッシブなだけだとも思っけどね」

また苦笑を浮かべる瀬流彦さんに、僕も苦笑します。  
水筒に口をつけ喉を潤します。生き返るとはこの事です。

空を見上げると日は少しずつ沈み始め、茜色に染まり始めていました。先ほどまで活気があったこの場所もどんと人が減ってきます。その様子を見つめる瀬流彦さんの表情は何となく寂しそうでした。

「瀬流彦さんは、」

「ん？」

その寂しそうな表情を見て、僕は瀬流彦さんに尋ねます。

「瀬流彦さんは、どうしてここにいたんですか？」

何となく気になりました。

今日電話した女の人も、望ちゃんも瀬流彦さんがここにいる事を知っていましたから。

茜色に染まる空を見上げながら尋ねる僕の言葉に、瀬流彦さんは少しだけ考えると、楽しそうに遊具で遊んでいる子供たちの方を見て言いました。

「そうだね。ここだとき、あの子達の楽しそうな様子が。」

遊具で遊んでいる音とか、楽しそうに遊んでいる声とか、元気に走り回る足音とかさ。

僕はそういうモノを聞いているのが好きなんだよね。

聞いているとき、あの子たちの笑顔が近くにあるって感じがしてさ」

何かを思い出しているのか、少し寂しそうに笑う瀬流彦さん。

その瀬流彦さんの表情は、僕が何か言っただけにはいけないようにな気がしました。

僕は口を閉ざして、少しだけ耳をすませました。

冷たい風が吹き抜けていきます。その風に乗る子供たちの遊ぶ声が聞こえてきました。

僕は届いてきたその声に小さく微笑みます。

……なんとなく、瀬流彦さんがここに来た理由が分かった気がします。

「それで、僕に何か用だったのかな？」

「え？」

しばらく楽しそうな声に耳を傾けていると、瀬流彦さんがそう尋ねてきました。その言葉に僕は素っ頓狂な声を漏らしてしまいます。そんな僕を見て、瀬流彦さんは苦笑します。

「いやね、望ちゃんが僕を探すなんて事あんまりないからね。だったら、望ちゃんに付いてきたネギ君が僕に何か用事があったのかなーって思っただけ。違ってたかな？」

ははは、と笑いながら瀬流彦さんはそう自信なさそうにそう言う。そんな瀬流彦さんに僕は慌てて首を振ります。

「いえ、瀬流彦さんに用事があつたんですよ。その、2 - Aの人たちの事とかを聞こうと思ったんですよ」

「2 - Aの事？」

ちよつと首をかしげている瀬流彦さん。僕はキョロキョロと辺りを見回し、声が聞こえる範囲に人がいない事を確認すると小声で尋ねます。

「……誰が魔法関係者かとか、です」

「ああ、そういう事か。というか、それは学園長から説明が無かったのかい？」

ありませんでしたよ。僕は小さくため息を吐き出します。その様子で全てを把握したのか、瀬流彦さんも困つたように苦笑を浮かべます。

「学園長はいい加減だからなー」

「いい加減で済ましていいのか疑問なんですけどね」

苦笑を浮かべる瀬流彦さんに僕は更に大きくため息を吐き出しました。

必要な事は全くしてくれず、いらぬ事ばかり押しつける人ですしね。なんで学園長やれているのかが不思議で仕方がありません。

確かに見た目だけは年季が入っていて偉そうですね。

「うーん、そうだね。僕も2-Aはあんまり詳しくないんだよね。とりあえず、真名ちゃんと刹那ちゃんは魔法関係者だよ。ああ、フルネームは『龍宮 真名』ちゃんと『桜咲 刹那』ちゃんだね」

あれ、その二人ってアーニヤと同室の二人ですよね？

学園長も一応そういう事も考えて部屋割りをしたんですね。意外と考えていた学園長に僕は少し驚きます。

「という事は、明日菜さんと木乃香さんも魔法関係者ですか？」

僕と同じ部屋にしようとするぐらいだし、魔法関係者なんですよね？

そう考えて言った僕の言葉だったけど、瀬流彦さんは小さく苦笑すると答えます。

「うーん、あの二人はね。魔法関係者じゃないらしいよ。あんまり詳しくは無いんだけどね」

予想外にそう首を振って答える瀬流彦さんに、僕は驚きの表情を浮かべます。訂正します。やっぱり学園長は何も考えていませんからね。

今度こそぶん殴ってやろうと考えている僕に、瀬流彦さんは少し考えながら教えてくれました。

「あのね、明日菜ちゃんは高畑先生が面倒を見ているらしいし、木乃香ちゃんは学園長のお孫さんなんだよ。でも、魔法関係者ではない事は確かだよ。」

ああ、木乃香ちゃんの方は、魔法に関わらせたくないっていう親

御さんの意思を尊重したとか」

……、その割には僕と同室にしようとしていましたけど？  
やっぱり学園長はボケたんじゃないかと思えます。

「ははは。僕にそんな顔されても困るな」

今の僕はどんな顔をしてるんでしょうか。  
とりあえず、マイナス方面の表情を浮かべているのは確かですね。

「うーん、そうだなー。後、魔法関係者って分かるのは春日 美空  
ちゃんかな？

凄く足が速い子で、悪戯好きの女の子だよ」

指を折りながらそう教えてくれる瀬流彦さん。とりあえず、それで全員の様です。

話をまとめてみます。

つまり瀬流彦さんが教えてくれた3人と、エヴァンジェリンさん、絡繰さん、それに明後日転入するアーニヤを合わせて、クラスの6人は魔法関係者って事ですか。クラスは全員合わせて31名です。

……ほぼクラスの5分の1が魔法関係者とは、学園長は本当に何を考えてるんでしょう。

魔法関係者を集めるにしても、全員が魔法関係者じゃないと魔法がバテてしまう可能性もあるのに。というか、もうバテてしまって学園長がオコジョになればいいのに。

「まあ、僕みたいな新人教師はあんまり深い事教えてもらえないから、他にももしかしたらいるかもしれないけどね」

「……まだ増えるんですか？」

ちよつと愕然としてしまう僕。

そんな僕に瀬流彦さんはまた苦笑を浮かべると言います。

「まあまあ。そう落ち込まないでよ、ネギ君。

魔法に関わつてようがどうであろうが、いい生徒達こには変わりないからさ。

頑張つてね、ネギ先生」

「うう、頑張ります」

ちらつと冗談めかして舌を出す瀬流彦さんに、僕は不安を抱えながらも頷きました。

一応、教育実習生見習いだから教壇に立つことはないんですけどね。

それでも魔法関係者がたくさんいるクラスと関わるのは個人的には嫌ですね。それにエヴァンジェリンさんの様な方がいるクラスですからね。不安が消える筈はありません。

ああ、考えるとまたネガティブに……。

「そうそう、さっき遊んでた双子ちゃんがいたでしょ？」

「ああ、ヒーローごっこで『若い未亡人のアパート管理人役』と『上京してきたお人よし浪人生役』をやっていた二人ですね」

あの配役はどうかと思いましたよ。

あの配役だと、英雄譚というよりも、ただのラブコメになりそうですね。

「うん、その二人だけ。あの子たちも2-Aの生徒だよ？」

……へ？ だって、どう見ても小学生低学年ですよ？

僕は驚いてまだ遊具で遊んでいる双子の女の子の方に目をやります。

元気に回る遊具を回している勝気そうな女の子と、遊具に乗って目を回されている垂れ目の女の子が遊んでいます。あの姿は良くて小学校4年生ですよ。4年生って僕と同じ年ですけど。

「いや、そんな驚いた顔されてもね。鳴滝 風香ちゃんと史伽ちゃんだよ。」

ちなみに飛び級とかじゃないからねー」

鳴滝 風香さんと史伽さんですか。

そう言われてみれば、名簿でいましたね。思い出しました。

名簿で見た時から妙に子供っぽいなーっとは思っていたんですが、実際会ってみると本当に子供っぽいです。あの姿でランドセルを背負わせたら絶対に小学生と間違われますし、幼稚園服を着せたら幼稚園にも見えそうです。

「まあ、とりあえずそんな感じのクラスだからね。頑張ってるねー」

その声に僕が視線を戻すと、瀬流彦さんはすでに立ち上がっていました。そして背中についた葉っぱを軽く払い落とすと、ニコニコ笑って手を振り、どこかへ行ってしまいました。



「……そんな感じのクラスだからって」

残された僕は、瀬流彦さんの言葉を反芻します。そしてどんなの  
かを考えます。

頭の中には30人の鳴滝さんとエヴァンジェリンさんが浮かんで  
きました。これは見た目は小学校クラスですが、僕がやりたかった  
小学校教師とは内容がかけ離れすぎです。ちよつと泣きそうにな  
ります。

うう、出来る限り頑張りますけど、頑張れる気がしません。

誰か、僕に平穩をください。

日が完全に沈み切り、大広間に人も少なくなってきました。遊ん  
でいた子供の姿は全くありません。

あまり遅くなるとまたあの化け物みたいなのが出てきそうだった  
ので、僕は速足で家へと向かい始めます。

すると、そんな僕を呼び掛ける声がありました。声の主は振り返  
らずにも分かります。

この声はアーニヤです。

「おい、ちよつと待ちなさいよ、ネギ！」

「アーニヤ！」

振り返るとそこには笑顔でこっちに走ってくるアーニヤがいました。

ああ、そのアーニヤの笑顔で疲れ切った心が癒されますよ。アーニヤが2・Aにいてくれる事が一番の清涼剤だと思います。

「ネギ、何してたの？」

僕がそんな事を考えると、アーニヤが小首を傾げてそう尋ねてきました。

その質問に、僕はなんと返していいのか迷い曖昧に笑います。

「えっと、ちよつと瀬流彦さんと話をしてたんだ」

体育館で拉致されたり、ヒーローごっこしたり色々あった事はこの際、置いておきましょう。

「アーニヤは？」

「私はね、龍宮さんにあんみつを奢ってもらったの。それで、今はその帰り」

楽しそうに笑うアーニヤに僕は『龍宮さん？』と首をかしげます。そんな僕にアーニヤはニコニコ笑いながら少しアーニヤが走ってきた方向を指さしました。

アーニヤが指さした方向には一人の女の人が手を挙げてゆっくりとこっちへ歩いてきていました。

「えっと、あの人が龍宮さん。名前は龍宮 真名よ。ああ見えても私と同じクラスなのよ。ちなみに、ああ見えてもとか言ったら恐ろしい目に合うから気をつけなさい」

何かを思い出したのかぶるつと震えるアーニヤ。

恐ろしい目ってどんなのでしょうか。知りたくはありません。僕が冷や汗を流しながらして苦笑していると、龍宮さんが僕の方までやってきました。

そして僕の事を見て、少し意外そうな表情を浮かべました。

「おや、君はネギ・スプリングフィールド先生だね。こんな所で会えるとは思わなかったよ」

「あ、はい、龍宮 真名さんですね。はじめまして。

何かアーニヤに奢っていたいただいたようで、ありがとうございます」

にこりと大人の笑みを浮かべてそう言う龍宮さん。そんな龍宮さんに僕はアーニヤのお礼を言いながら頭を下げます。『なんで、あなたがお礼してんのよ!』と言ってくるはアーニヤは軽くスルーです。

「ああ、はじめまして。奢りの事は気にしなくていい。面白い情報が聞けたからな。

それにしても……ふむ、改めてみると」

「な、何ですか?」

繁々と僕を観察するような目でみてくる龍宮さん。僕の事を観察

する目で見えてきた人は沢山いるのであまり気にしませんが、やっぱり慣れませんよね。僕は困った表情でそう尋ねます。

「いや、すまない。なかなかの魔力だと思ってね」

「……ははは、ありがとうございます」

これは僕の魔力じゃなくて、カモさんがくれたマジックアイテムの魔力なんですけどね。

僕の魔力なんてほとんどありませんよ。このアイテム外したら味噌つかすですよ？

でも、まさか本当の事を言う訳にもいかずに、僕は曖昧に笑いながら礼を述べる。

「だが、なるほどな。さすがあの闇の福音に喧嘩を売っただけの事はある訳だ」

「売ってませんよ！？　っていうか、何でそんな事知ってるんですか！？」

興味深げに呟く龍宮さんに僕は思わずそう叫んでしまう。

一体どこでそんな風に伝わってるんですか！？

「いや、あんみつ代として君の事を少し教えてもらったんだよ。

まさか来て早々、闇の福音に会いにいったとは思ってもみなかったがね」

ニコニコと笑いながらそう言ってくる龍宮さん。僕はその言葉に恨みがましげにアーニヤの方を見ましたが、アーニヤは下手な口笛

を吹き明後日の方向を見て誤魔化そうとします。  
誤魔化せてませんよ？

「……あのですね、僕は喧嘩を売ったんじゃないんですね。話し合  
いを」

とりあえず、このまま誤解されても困るので僕はそう説明しよう  
とします。すると、そんな僕に龍宮さんは楽しそうに笑いながら言  
いました。

「ふふ、分かっているよ。だが、どちらにしてもいきなり会いに行  
くとはさすがだよ。」

普通は名前を聞いたらビビるものなんだがな」

いや、ビビりましたよ。それはもう、これ以上なく。

あの時の事を思い返して、また背筋が冷たくなるのを感じ、慌て  
て忘れようと首を振ります。

「やはり、面白いな。アーニヤがあれだけ褒めまくる理由が「ちょ  
っと、何言ってるのよ!」?」「

何か喋りそうになった龍宮さんの口をアーニヤが慌ててふさごう  
と飛びつきます。

飛んできたアーニヤをひょいっと避けると、龍宮さんは軽く苦笑  
しました。

「ああ、悪い悪い。ついね」

悪びれもなく舌をだしてそう言う龍宮さんに、アーニヤは慌てふ  
ためきます。

「ついじゃないわよ！ もう！ 龍宮さんは先に帰ってて。私はちよつとネギと歩いていくから」

「ふふ、了解した。ゆっくりしていけばいい。ただ夕食には遅れないようにな」

大きくため息を吐き出して言うアーニヤに、龍宮さんは少し茶化すように笑います。

そして、僕の方へと視線を向けると言いました。

「それでは、明後日からよろしく頼むよ、ネギ先生」

「……ははは、お手柔らかに」

小さくウインクをして去っていく龍宮さん。明後日ですか、何だか不安しか募りませんね。

普通、こういうのって不安と期待が半々の筈なのですが、僕の心は混じりつけ無しの不安で構築されていますよ。

「全く龍宮さんったら」

家へと帰っていく龍宮さんを見送りながら、アーニヤは小さくため息を吐き出してそう言いました。龍宮さんとどんな話をしていたのか気になりますが、聞いたらアーニヤナツクルを喰らいそうなので止めておきます。それぐらいは分かります。

「それで、アーニヤどうしたの？」

アーニヤから一緒に帰りたいなんていうのは珍しいですからね。

何か理由があるのかと僕はそう尋ねると、アーニヤはちょっとだけ顔を赤らめます。

「ん、ちょっとね」

僕たちはゆっくりと夜の学園を歩き始めます。

まだ風は冷たく、夜は冷え込みますね。白く色づく息を見ながら僕はそう思います。

アーニヤは何も喋らず、僕も何も喋りません。

沈黙したまま二人でゆっくりと学園を歩いていきます。

「……ねえ、ネギ」

「なに？」

話しかけてきたアーニヤでした。

首を傾げる僕に、アーニヤは少しだけ照れた様に頬を染めました。

「明日、どこか行かない？」

「明日？」

アーニヤの言葉に僕はちょっと意表をつかれて、オウム返しのようにそう尋ねました。

だって、アーニヤから誘ってくるなんて凄く珍しい事ですからね。僕が誘ってアーニヤが文句を言いながらも受けてくれるというのがいつものパターンですから。

珍しげに首を傾げる僕に、アーニヤは小さく頷きました。

「うん、明日。」

……あのね、明後日はもう学校が始まるでしょ。そしたらさ」

そこで言葉を区切り、アーニヤはちょっとだけ悲しそうな目をして言いました。

「私たちってさ、その、教師と先生になっちゃうじゃない」

……教師と生徒。僕は心の中でそう反芻します。

そうですね、改めて言えばアーニヤは生徒で、僕は先生なんですよね。ずっと一緒だったアーニヤが僕の生徒になるなんて、何だか不思議な感覚で違和感があります。

「だ、だからね。何て言うのか、その、えっと。そ、そうなっちゃう前にどこか行きたいなって思って」

照れたように早口でそう言うアーニヤ。そんなアーニヤが僕はとても愛おしくなります。

思わず抱きしめようとも思いましたが、人目がある所でそんな事したら絶対に殴られるので、僕はその衝動を抑えながら、僕は小さく微笑むと頷きました。

「うん、そうだね。どこか行くのか」

「……うん」

小さく嬉しそうにそう答えるアーニヤ。

夜の闇でその顔はちゃんと見えませんでしたけど、その顔は真っ赤だった事でしょう。





あるヒーローは変身する前に、大魔王をボコボコにしました。(後書き)

ちょっと現実の方で書かなければならない小説があるので、1週間程更新速度が遅くなるかもしれませんがご了承ください。

さて、次回は！

……、まだ原作に行きません。

ただ何でもない私と、ただ何でも無い貴方である最後の日。(前書き)

今回は本気で難産だったぜ！

では、ネギ少年とアーニヤ嬢の砂糖を撒き散らす一日をどうぞ。

ただ何でもない私と、ただ何でも無い貴方である最後の日。

ア、アーニヤよ！

きき、緊張なんてしてないわよっ！

……こほん。えっと、こんにちは！

私の名前はアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。皆からはアーニヤって呼ばれているわ。

なんちゃって魔法学校を卒業した私は、明日からこの麻帆良学園に修行としてやってきているの。修行内容はなんと、この学校で生徒をする事。

しかも、私と幼馴染のネギが同じクラスの教育実習生見習いをする事になったんですって！

クラスには背の高くて綺麗な龍宮さんや、ちよっと固いけど礼儀正しい桜咲さん、それにあの闇の福音と恐れられているエヴァンジェリンがいるのよ！ これからどうなるのかしら！？

……っ、うるさいわね！ 無理がある事は薄々気付いているわよ。そもそも、私にこんな昭和臭のする魔女っ子のオーブンングトークが似合う筈ないじゃないの！

とにかく、とにかくよ！ 今私がいるのは麻帆良学園のとある駅の近くよ。

思ったよりも人通りが多いのは今日でお休みが終わりだからかしら？ 龍宮さんも今日は休み最後だからと甘味処を梯子するって言うってたし、桜咲さんも最後の休みですから、多分出かけている筈なので行ってきますとどこかに行っちゃったしね。

それにしても昨日、妙にポロポロな姿で桜咲さんが帰ってきたんだけど何かあったのかしら？

まあ、いいわ。そんな事より大切なのは、今私はネギを待っているって事よ。

自分で言うのも何だけど、これって結構珍しいのよ？

いつもなら、私は待ち合わせ時間ぎりぎりに行くんだもん。本当よ？

そりゃ、時々ちよつと早めに来て、ネギがない事を確認すると来るまで隠れる事もあるけどね。それに、ネギが来てから10分ぐらい焦らしてあんまり興味無いけど来てあげたわよー感を出したりする事もあるけどね！

でも、私が素直に待ち合わせに待つなんて珍しいのよ。

……言ってるで自分で何だか悲しくなってくるわ。

まあ、とにかくそういつ訳で私はちよつと早めに、待ち合わせ場所にやってきたのよ。

なんか変にドキドキするわ。

今の私の格好は、普段の地味なローブとかじゃなくて、私が持っている中で出来る限り可愛い服を選んだわ！　まだ風が冷たいから防寒対策をしつつ、出来る限り可愛らしさを表現した、渾身の出来よ！

本当は龍宮さんみたいなクールビューティーな大人系の服を着たいけど、流石に今の私に似合わない事ぐらい分かるわよ。昨日の夜にちょっと試して着てみたけど、龍宮さんに優しい笑みで『止めといた方がいいよ』と言われたしね。

……龍宮さんのズボンが松の廊下みたいになった時は愕然としたわ。

でも、私が素直に待ち合わせ場所で待つ。普段より気合いの入った服装をする。

これで分かるように、私は勝負に出ているのよ！

勝負って言っても別にどうすれば、勝ちとかは無いんだけど勝負なのよ。

そりゃ、まだ私はネギとキキキキスとかした事ないけど！　そ、そういうのが目的じゃないしね！

ただ、これから教育する側と、受ける側に別れる訳だし、二人での時間が少なくなったりするかもしれないし、私だけが生徒でネギがちよっと遠い世界に行っちゃったような気もするし、クラスは女の子ばかりだし、……その、ねえ。

ちよっと心配するじゃない。その、私と、ネギの、その、か、関係の事とか。

それに最近、目に見えてネギが疲れちゃってるからね。御苦労さまの意味も込めての、で、デートなのよ。だから、これは勝負なのよ！

覚悟してなさい！　メッタンメッタンのギッタンギッタンに癒してあげるからね！

「あ、あれ、アーニヤ！　びつくりした、アーニヤが先にいるなんて」

メラメラと心を燃やしていると、そんな声が聞こえてきた。その声に振り返ると、そこにはいつもよりちょっとカッコいい感じの服を着たネギがこっちに向かってきていた。

「ぐ、偶然よ、偶然。今日は早めに目が覚めたから、ちょっと時間より早めに来たのよ」

ふんつとそつぽを向きながら私はそう答える。ちょっと顔が赤くなっているのが自分でも分かるけど、気にしちゃう負けよ！

「そつか。でも、ごめんね。待たせちゃったみたいで」

な、何であんたが謝るのよ！　それじゃあ、普段遅れてる私が悪いみたいじゃない。いや、悪いのはわかってるけどね！

少し申し訳なさそうな表情を浮かべているネギに、私は心の中であたふたしてしまう。でも、それは顔には出さない。あくまでも冷静に対処するわ。

「と、とにかく、ネギも来たし。それじゃあ、遊びに行くわよ」

「うん、そうだね」

にこりと笑うネギの顔に、私はまた頬が熱くなるのを感じる。

……流石、ネギね。でも、まだまだ私は負けないわよ！ 必ずボ

コボコのメタメタにしてあげるんだから！

「そ、それじゃあ、まずはお昼にしましょ」

時計を見ると、12時過ぎ。手始めとして、まずはお昼御飯よ。ちよっと早めに来ていたから、お腹すいたしね。

そう言った私に、ネギも小さく微笑みながら頷いてくれる。

「そうだね。時間も丁度いいし。何が食べたい？」

「えっ、うーん。何でもいいわ」

あんまりお店知らないしね。適当にあった場所でいいわよ。お昼より本命はその後よ！

そう思いながら、私は答えると、ネギは少し考えて言いました。

「それじゃあ、美味しいらしいお店があるらしいから行って見ない？」

「えっ、美味しいお店？」

ネギもこの学園に来てすぐなのに、どんなお店知ってるのかしら？ 首を傾げる私に、ネギは安心させるように小さく笑う。



「うん、行ってみようよ」

にこりと笑って、自然に私の手を取り歩きだすネギ。うう、ちょっと恥ずかしい。

やっぱり人目がある所で、手をつなぐって恥ずかしいわよね。

何で、周りの人たち平気なのかしら？

ネギに連れられて来られたのは、大きな商店街の様な場所だった。でも、普通の商店街とはちょっと違って、八百屋さんとか魚屋さんとかレストランとか並んでるお店が全部食べ物を売っているお店。さっきの駅前よりも人が多くて、何だか凄く賑わっているわ。

商店街の入り口には『麻帆良市』という大きな看板が掲げられている。

「麻帆良市？」

「麻帆良市だよ、アーニヤ。」

麻帆良の台所って言われてるらしくて美味しいお店が彼方此方にあるみたいだよ」

ふーん。私はネギの説明を受けながら周囲を見渡す。

確かに美味しそうな料理が屋台形式で売られていたり、彼方此方のお店で美味しそうな匂いが漂ってきているわね。何と云うか、凄くお腹が刺激される所ね。

「何か、食べたい希望はある？」

ネギの言葉に私はキョロキョロと周りを見渡す。そこには焼きそばや、フランクフルト、焼き鳥、ドネルケバブ、ボルシチ、ポンデギ、キャシュ・ローレなど国籍問わずの多種多様な料理が売っている。

うーん、これは迷うわね。見た事無い料理もたくさんあるし。

腕を組んで色々と考え込んでいる私に、ネギは小さく笑う。

「ふふふ、じゃあ気になるのをちよつとずつ食べようか」

「そうね！ それが一番だわ！」

ナイスなネギの提案に私は頷く。全部美味しそうだしね。さすがに気になるの全部は無理だけど、6つか7つぐらいは食べてやるわ。

そうと決まれば、すぐに行動よ！

「ネギ、行くわよ！」

私はネギの手をつかむと、人ごみの中に飛び込んでいく。そんな私にネギは何故か照れたような笑いを浮かべると、私と一緒に飛び込んだ。さて、まずは何を食べようかしら。

「えっ、これってダチヨウの卵と肉の親子丼なの？」

「そうだけ、嬢ちゃん！ ダチヨウの肉は美味しい、栄養価高いし、カロリーだって他の肉より低いんだぜ！」

「低カロリー！？ あむっ、……あっ、美味しい！ ほら、ネギ！  
美味しいわよ！」

「あっ、本当だ。美味しい。ちょっとレアな所がいいね」

「そうだけ、坊ちゃん！ ダチヨウの肉は焼き過ぎるとすぐ固くなるからな！ そこが俺様の腕の見せどころよ！」

「……ネギ、本当にポンデキ食べるの？」

「えっ、美味しそうだと思ったんだけど。アーニヤも食べる？」

「い、嫌よ！ だって、それって虫の蛹でしょ！？」

「うーん、でも香ばしい匂いで美味しそうだったから。ぱくり  
美味しい？」

「うーん、口の中で虫を噛んでるって感じがする。食べる？」

「その感想で食べる気になる筈ないでしょっ！」

「ネ、ネギ！ 変なの売ってるわよ！ ラクダのコブですって！  
それって食べれるの！？」

「はは、駱駝の瘤、中華では高級品。食べてみる。美味しい」

「じゃあ、ちよっとだけ。ぱく。……っ！？」

「えっ、アーニヤ。大丈夫？ マズイの、美味しい？」  
「うう、不味くも無いし、美味しくもない。コメントに困る味ね」  
「ははははは、まだ味付けしてない。当然」

「たくあん専門店？」

「うん、ここはたくあん専門店だよ。お姉ちゃん達、食べていって  
「じゃあ、僕が食べてみようかな。……、うん美味しい  
「そうでしょ！ 美味しいでしょ！」

「うーん、たくあんって単品で食べるものなのかしら？」

「ご飯は隣のご飯専門店で売ってるよ！」

「一緒に売りなさいよっ！」

「クラゲゼリー？ 買って見たものの、これは流石にダメだと思う  
わ」

「アーニヤ、それ食べてみるの？ 無理そうなら僕が食べるけど」

「……お、女は度胸っ！ ぱくりっ！」

「ど、どっ？」

「……っ！？ うにゃああああ！？ まだ生きてる！？ 口の中で  
動いてる！？」

「えええ、生きてるってどっいう事！？」

「アーニヤ、その手に持ってるのは何？」

「雀の串焼き」

「アーニヤ、その僕に近づけてくるのは何？」

「雀の串焼き」

「ア、アーニヤ!? 僕の口に無理やり捻じ込もうともあがが!？」

「雀の串焼き」

「それって普通のたこ焼きなのかしら？」

「蛸以外にも色々入ってるって書いてたよ。色んな味を楽しめるって」

「じゃあ、このちよつと小さめの食べよ。あむ……、ぐはあ!？」

「これは、チヨコ味!？」

「怖いけど、僕はこの大きめの奴で。……、これは、梅干し味っ!」

「それじゃあ、私はこれ! って、クラゲの味じゃないっ!?! しかもやつぱり生きてるっ!」

「じゃあ、残りのこれを。これは、コーラーグミ? しかも中で溶けてるよ」

「ふー、大満足よ」

あれだけ歩いて、あれだけ食べて、大満足した私たち。

でも、流石にもう食べられずに、私とネギはどかりと近くにあったベンチに腰を下ろした。あー、冷たい風が気持ちいいわね。

「良く食べたというか、良く遊んだというか。でも、面白かったね」

「そうね。でも、料理を食べて面白かったって感想もどうかと思うけど」

お腹をさすりながらそう言って笑うネギに、私は小さく苦笑する。美味しかったとか、不味かったとかそんなのよりも、本当に面白かったわね。料理を食べて回ったというよりも、アトラクションを回ったって言った方がしっくりくるわ。

「ここがこれだけ賑わっている理由がわかるわ」

「うん、そうだね。お祭りでもないのに、これだけ人がいるんだから」

改めて麻帆良市に視線を向けると本当に人通りの多い。今日が長期休暇最後の日だという事を考慮しても、本当に人が多いわ。というか、この学園ってどれだけ人がいるのかしら？

駅前にも結構人がいたし、向こうの時計台の所にだっていっぱいだったし。何て言うか本当に都会って感じよね。

「って、あああああ！」

「ど、どうしたのアーニヤ？」

思わず大声をあげてしまった私に、ネギも驚いた顔をするけど、今はそんな事気にしてられない。

だってあの時計塔はもう2時30分を指してたんだから。後30分しかないじゃない！

「行くわよ、ネギ！」

「えっ、分かったけどどこに行くの!？」

ネギが何か聞いてくるけど、何か答えている時間はない。私はネギの手を取ると、急いで走りだした。

「はあ、はあ……しよ、小学生2枚で」

「あらあら、大丈夫？」

息も切れ切れに私は受付のお姉さんにそう声をかけた。受付のお姉さんはそんな私を見てちよつと心配した様な声をかけてくれるけど、も、問題ないわ。最近運動してなかったし、丁度いいわよ。肩で息をしながら私はそう答える。ふう、疲れたわ。

「アーニヤ、大丈夫？」

「な、なんで、はあはあ、あんたは、平気、なのよ」

何とか息を整えようとしている私に、ネギも心配した声をかけてくる。

これだからスポーツ少年は。昔はただのがり勉だったのに。いえ、今の方がいいんだけどね。

ちよつと恨みがましげにネギに視線を送る私に、ネギは何故視線を送られているのか分からずに小首を傾げながら、にっこりと笑う。むう、その笑みは反則よ。

「はい、アーニヤ。これ飲んで」

「……これは？」

ぶいっと視線を外して、火照った顔を冷やしている私に、ネギが何か渡してくれた。そんなネギに、私はちよつと疑わしい目を向けて聞く。だって、前みたいな微妙なジューズだったら、今飲める気しないわよ。

「これは、あつちの受付の人がくれたんだ。アイスティーだって」

そ、それなら大丈夫ね。

ネギの言葉に、受付の人に目を向けると、にっこりと綺麗な笑みを浮かべて手を振ってくれる。受付の人に私は目でお礼を言いながら、コップに口をつける。

ふう、ちよつと息がつけたかしら。

呼吸が元に戻った事で、私は喉の渇きから、一気にアイスティーを胃の中に流し込む。

「あらあら、そんなに急がなくてもいいのよ。まだ開演には時間があるから、といつても後5分ぐらいだけど」

一気に飲み干す私を見て、受付の女の人が苦笑しながら気を遣ってくれる。そんな風に心配してくれる彼女に私はちよつと照れたような笑みを浮かべた。

ふう、とにかく落ち着いたわ。私はお姉さんにお礼を言ってコップを返す。

そんな私にネギは、少し小声で尋ねてきた。



「ねえ、アーニヤ。開演ってここは何？」

「うふふ、ここはプラネタリウムよ」

ネギの言葉に、受付のお姉さんがそう答えてくれる。そのお姉さんの言葉の通り、今私はプラネタリウムの前にやってきていた。

何でプラネタリウムにやってきたかというのと、昨日龍宮さんと桜咲さんに遊ぶならどこがいいかと聞いた時に、桜咲さんが『では、一緒に星を見るとかどうですか？ 私は、そ、その大切な人と一緒に二人つきりで見たい、ですね。まあ、私の場合は……はあ』と教えてくれたからだ。桜咲さんは何故か最後にため息を吐き出していたけど、何だったのかしら。

その話で龍宮さんが『それなら、プラネタリウムはどうだ？ 私の知り合いもそこで働いていて』という話題をだしてくれたので、ここに来る事にしたのよ。

「プラネタリウム……ですか？」

「あらあら、今の子たちにはあんまり興味はないかもしれないわねえ。でも、夜空の星ってすっごく綺麗なのよ」

ちよつとピンと来ていないネギに、女の人がそう説明してちよつと残念そうに笑う。

そんな女の人に、ネギは慌てて首を振る。

「そ、そんな事ないですよ。僕の田舎にはプラネタリウムなんて無かったですし、それに星見るのも好きですから」

本当に楽しみといった感じ笑うネギに、私も微笑んだ。

ネギの言うとおり、なんちゃって魔法学校があるのも田舎だったから、町にプラネタリウムなんて洒落たモノはなかったし、そもそも無くても夜は満点の星空だったしね。時々、夜に寮から抜け出してネギと星空を見に行ったりもしたからね。気に入ってくれるかなと思ってたのよ。

まあ、星を見る時はだいたい、何故かあのオコジョもついてきたけど。

それに、この学園に来て、街が明るい所為で星が見えなくなっちゃったからね。

私としては凄く残念だったし。ネギもそうなんじゃないかなって思ったから。だから、こうやって一緒に見に来ようと思ったのよ。

「……ありがとね、アーニヤ」

「っ！　べ、別に私が見に来たかったから来ただけよ」

何か全部理解したような笑顔を浮かべてお礼を言ってくるネギに、私は顔を赤くしてそっぽを向く。

もう、何で全部分かっちゃうのよ！　これじゃあ、何か凄く恥ずかしいじゃない！

「それじゃあ、行こうか。アーニヤ！」

嬉しそうな笑みで、私の手を取るネギ。

「そ、そうね！　もう時間らしいし」

うつ、顔が熱くなってくる。なんで、あんなに自然に手を握れるのか不思議だわ！

そんな私とネギに、受付のお姉さんがあらあらと笑う。

「それじゃあ、席に案内するわね」

「あつ、ありがとうございます」

にっこりと笑うお姉さんに、ネギと私はお礼を言う。お姉さんは『いいのよ、それがお仕事だから』と言って笑うと、ふと私の隣にたって私の耳元で小声になった。

「うふふ、アーニヤちゃん達には一番いい席を案内してあげるわ」

「えっ、何で私の名前？」

思わず驚きの声を上げてしまう私に、女の人は人差し指を口に当てて、しーっという動作をすると教えてくれる。

「あらあら。それはね、龍宮さんが教えてくれたの。」

可愛いカップルが来るからサービスしてやってってくれってね」

うつうつ、龍宮さん何でそんな事言ってるのよ。ありがたいけど、それよりずっと恥ずかしいわよ！

さっきよりもずっと顔を赤くしている私に、彼女は小さく笑うと言った。

「うふふ、それじゃあ、星空の世界へ案内しますね」

『それでは、まずは冬の星空をご案内いたしましょう』

心地のいい声が聞こえてくる。

もうプラネタリウムの中は真っ暗で、空には綺麗な星空が浮かび上がる。座っている椅子はリクライニングシートでちょっと背中に力を入れると、背もたれが倒れて空を見上げやすい作りになっていた。

『皆様の頭の上の十字の印、そこを頭の上だとしますと、まず見つかるのは真っ直ぐ輝く3つの星』

機械から映し出された光が、星空を作り綺麗に散りばめられる。そして、そんな空の星空にはあちこちに線が引かれ、冬の星座を説明してくれる。

この声ってさっきの女の人の声よね？ こうやって聞くと、ほんとに心地いいわね。

ふと横を見ると、ネギが真剣な顔で空を見上げていた。そして、私の視線に気が付き、私の方をちらりと見るとにっこりと笑う。

うう、ここでその笑顔は反則よ！

『は昂と呼ばれ、昔は星がいくつ見えるかで視力検査にも使われていたと言います』

流れてくる説明が頭の中に入ってこない。そんな私に、ネギは小さく微笑むと、優しく私の手を握った！？ ぬうう、恥ずかしい！  
もう顔が熱くなるじゃない！ そ、その嫌じゃないけど！

真っ赤になる顔を握られていない手で触ると、やっぱり凄く熱い。こ、このままではいけないわ。何か分からないけど、ネギに負けちゃう気がするじゃない！

と、とりあえず説明に集中しましょう。そうすれば、顔の火照りもそのうちとれるわよ。

『それでは、次は宇宙の世界へ飛び立ちましょうか』

え？ 宇宙の世界？

しばらく説明を聞いていなかった所為で、話の流れについていけなくなる私。

そんな私は、耳に聞こえてきた説明に首を傾げた瞬間、星空に力ウントダウンする文字が見える。

『3・2・1・ゴー！』

うにゃああ！？ 座っている席が揺れる！？

何これ？ 何これええ！？ 何なのよ、これ！？

ちよつと煙の臭いがしてくるんだけど！ っていうか、向こうでスモークが焚かれてるんだけど！？

臨場感溢れまくってるんですけどおおお！？

『まずは木星に降りてみましょうか』

戸惑う私をよそに、説明は続けられる。

その説明と同時に、ゴゴゴゴゴゴという音が聞こえ、着地の瞬間

にガクンと揺れる。

ちよ、ちよつとアトラクションとして凝り過ぎじゃないの!?

周りのお客さんも驚きの声をあげている。これはプラネタリウムとしてありなのかしら?

ちよつと首を捻る私。

『た、大変です! 木星怪獣です!』

えええ、木星怪獣!? 何それ!? どんな設定!?

ドームには、ドラゴンをデフォルメした様な怪獣が映し出される。その怪獣はこのドームに興味を持ったようで、バンバンと乱暴に叩くとその度にドームが揺れる。

『助けてー、マホレンジャー!』

戦隊モノ!? ウルトラ系の巨大宇宙人じゃなくて、戦隊モノなの!?

というか、木星なのにそんなご当地ヒーローが出てきていいの?

『いけー、マホレンジャー!』

うわっ! 本当に出てきた! ただの全身スーツで出てきた!

宇宙なのに! 空気ないのに! どうなってんの!?

『以上で、今回の公演は終了しました。ありがとうございました』

何と言つか色々と凄かった公演が終わった。終了のアナウンスを聞いた後、しばらく呆然としてしまう私とネギ。こんな所で、あんなCGグラフィックが見られるなんて思わなかったわ。

「……凄かったね」

「うん、凄かったわ」

凄いと言いか言いようがないわよね。

綺麗とかロマンチックとか、そんなんじゃないわ。本当に凄かったわ。

後半なんて怒涛の展開だったし。そもそも、何でプラネタリウムでこんなハラハラドキドキの展開が映し出されているのよ。

「そ、それじゃあ、行こうか」

ツッコミどころ満載だったプラネタリウムに呆然としている私に、気を取り直したようにネギがそう言ってくれる。そのネギの言葉に、私は頷くと椅子から立ち上がった。

出口の方に行くと、受付のお姉さんがにっこりと笑って、手を振ってくれていた。

「うふふ、どうだった？」

「とにかく凄くて面白かったです」

お姉さんの言葉にネギはにっこりと笑いながらそう答えた。私もそう思うわ。

そんなネギの言葉にお姉さんは嬉しそうに笑う。

「あらあら、ありがとう。」

そう言ってもらえると、天文部の皆で頑張って作って良かったわ」

て、手作り!？」

何でも無い事のように、うふふと笑う女の人の言葉に、私はこの学園の底知れない恐ろしさを感じる。

そんな私たちに女の人はにっこりと笑うと言った。

「ああ、そうだったわ。アーニヤちゃん達に一つ注意する事があったの。」

もうちよつとで6時なのよ。この辺りで遊ぶなら気をつけた方がいいわ」

「気をつける?」

何か含みを持たせるようにそう言ってくる女の人に私は首を傾げる。

6時になにかあるのかしら? でも、何に気をつけるのかは言うてくれずに、女の人は静かに笑う。

「そう、気をつけるの。明日から新学期でしょ?」

だから、ちよつと大変なの。ある意味この学園の名物かしら」

「め、名物?」

何が言いたいのか分からずに首を傾げ続ける。

それでもやっぱり女の人は何も言わずに、うふふと笑う。その笑みが、ちよつと不安なだけだ。



深く尋ねようとしても女の人は、あらあらうふふと笑っただけでも答えてくれない。

「それじゃあ、頑張ってねー」

とりあえず、その場にずっとどどまっている訳にもいかないのだからプラネタリウムから出る私たち。受付のお姉さんはそんな私たちに手を振ってくれる。

「気をつけるってなんだろうね？」

「そんな事、分からないわよ」

手を振ってくれるお姉さんに別れを告げて、私たちはそう首を傾げた。この学園って6時になったら何かあるのかしら？

プラネタリウムを出た後、私たちは街の中を歩いてきた。まだ5時を過ぎた所だからか、人はいっぱいいて、凄く賑やかだった。晩御飯には少し早く、3時のおやつには遅い微妙な時間帯ね。

「ねえ、アーニヤ。ちょっと街の中を歩こうよ」

さて、これからどうしようと考えていた私に、ネギがそう言う。そんなネギに私は小さく頷くと、ゆっくりと歩き出した。

ここが街の中心の所為か、人が多い。

お店で買い物をしている人や、何かを食べている人。色んな人が色んな事をしている。

そんな様子に目をやりながら、何となく無言になってしまつた  
ち。

私はちらりとネギに視線を向けると、ネギは何かを考えているの  
か、ちよつと空を見上げていた。

うつ、こ、ここは手を握るべきかしら？

何か今までネギにいい所ばかり取られている気がするし、ここ  
は私から手を握って一発逆転した方がいいのかしら？

で、でも恥ずかしいわよ、そんな事！

頭の中でずっと葛藤し続ける私。なんとなく顔が赤くなってくる。

「ねえ、アーニャ」

「な、何よ？」

色々と考えていた所為で、思わず言葉に詰まりながらそう聞き返  
す。

そんな私にネギは少し顔を俯かせた。

ネギは何も答ええない。

私は何も言えずに、ただネギの言葉を待っていた。

ゆつくりとレンガ造りの道を歩く。冷たい風が少しだけ吹いてい  
く。

そんな風に乗って、楽しそうに笑う人の声や、お客さん呼び込  
む人の声が聞こえてくる。

私って田舎から外に出た事ってほとんど無かったけど、やっぱり

どんな場所でも人が生活してるんだなって実感する。

「日が沈み始め、空が茜色に染められていく。」

「……ねえ、アーニヤ」

「どうしたの？」

ネギが私を呼び掛ける。私は出来る限り、優しい口調でネギに問い返した。

そして、ただネギの言葉の続きを待つ。

「僕って頑張れるかな？」

ポツリと絞り出すような声でネギがそう言った。

何をとは聞かない。何の話かぐらい私にだって分かる。

私は何かを言う前に、ネギの顔を見る。ネギの顔はいつもの笑っている表情ではなく、不安に押しつぶされそうな、本当に弱々しい表情だった。

分かってるわ。

ネギは私より年下の本当は弱い男の子だから、この学園に来て不安で不安で、本当に不安で押しつぶされそうな事は私にだって分かっている。

「……ネギ」

私はその今にも消えてしまいそうな彼に、呼びかける。





おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！

「な、何？ 何なの！？」

地鳴りが響く！

何事かと顔を上げると、そこには、おそらく家に向かっているの  
であろう大量の学生が寮のある場所に向けて全力疾走を行っていた  
ああ！？

突然の出来事に、備えなんて出来ていない私とネギ。

道に立っていた私たちが、津波の如き集団けいりゅうしんぎょ下校に飲みこまれるの  
は当然の事だった！

「ね、ネギイイイ！？」

「あ、アーニャアアアアアア！？」

人ごみという波に飲まれ、人とぶつかり、人に流され、どこかへ  
と運ばれていく私。

懸命に伸ばした手も空しく、ネギとはどこかではぐれてしまい、  
今私がどこへ運ばれていつているのかも理解できない。

「ちよつと！ どいて！ ネギが！ ネギが！  
私がいないと、ネギがあああ！」

人こみからどうにか出ようと、もがく私。  
でも、下校に必死な人ごみは私になんか気づかずに、そのままど  
んと私を押し流していく。

「ね、ネギいいいいいいいい！」

私の叫びは、地鳴りに飲まれ、どこかへと消えていった。

気が付いたら、私はどことも知れない住宅街の道のど真ん中に立  
っていた。

あれほどいた人ごみは嘘の様に消え、周囲には灯された街灯と、  
月明かりだけだった。

ネギを探さないと！

ようやく意識を取り戻した私はただそう思った。

だって、あんなに不安な表情のネギを放っておけない。

人に飲まれ、流された所為で、疲れきっている身体を無理やり動

かし、私は街の中を歩き始めた。

暗くて、誰もいない街を歩く。

怖いとかそんな事言ってられない。

ネギには私がいないとダメなんだから。

重い足を引きづり、私はさっきの場所まで戻ろうとする。

今日が生徒と教師の関係じゃない、最後の日なんだから。

額からは滝の様な汗が流れてくる。

それでも私は足を動かさし、とにかくネギを探して歩く。

二人っきりの時間が取れなくなるかもしれない、最後のチャンスかもしれないから。

泣きそうになる自分自身を叱咤しながら私はとにかく足を動かす。しばらく歩いてキョロキョロとネギを探し、また足を引きずってでも先へと進む。

私は、私にはネギがいないとダメなんだから！

「ネギっ！」

暗い街の中、私は遠くの暗がりにいるネギを見つけた。



ネギ！ 良かった！

そんな言葉が心からあふれ出る。そして、私はネギに向かって走っていきこうとする。

そこで私の足は止まってしまった。

暗がりで見つけたネギは、ツインテールの女の人と何か喋っていた。

先ほどまでの不安な表情は無く、何か喋っていた。

あれ？

だって、ネギには私が、

私が元気づけ

あれ？

だって、今日が最後の

え？ 生徒と教師と、あれ？

最後の、チャンス だって

だって、ネギには

私には

だって、その、あれ……

気がつくど私はどこかに向かつて走り出していた。

頭の中はぐちゃぐちゃで、涙があふれてきて、身体はすっかり疲れていて、でも足は止まらなくて。

とにかく私はどこかへと走っていた。

頭の中にはネギの顔が浮かぶ。

私は必死にそれを頭の中から追い出しながら、とにかくどこかへと走り続けた。

ただ何でもない私と、ただ何でも無い貴方である最後の日。(後書き)

泣いてしまった、アーニヤ嬢！ 次回に続きます！

バレンタインに関するアンケートですが、締め切りました。

結論としては『本編を最優先しつつ余裕があれば投稿します。後、バレンタインデーは滅びればいい』となりました。

うん、アンケートした意味無かったような結論ですね。すいません。でも、皆さんの意見はともうれしかったです！

それに大丈夫！ 14日はバイトも何も無いから用事ないしねっ！

なので、もしかしたらバレンタインデー企画はあるかも……？程度に考えていてください。

うん、バレンタインデーなんて滅びればいいと思っよー！

ただ何でもない貴女と、ただ何でも無い僕である最後の日。(前書き)

そう簡単にネギ君に幸せを渡すつもりはありませんよ？  
でも、やっぱりネギ君の恋愛は書きづらいです。

今回はネギ君視点です。

ただ何でもない貴女と、ただ何でも無い僕である最後の日。

こんにちは、ネギです。

ここ最近ずっと気苦労とかそんな感じの毎日を送っているんですが、この学園に来て初めて朝から機嫌がいいネギです。

なんで機嫌がいいかと言うと、理由はもちろんアーニヤとのデートだからです。

まあ、アーニヤはデートとは名にかけてくれませんが、これは間違いないデートです。うん、多分デートです。……デートですよ？ ちょっと自信がない自分が嫌です。でも、多分デートですよ、おそらく！

まあそう言う訳で、いつもよりもちょっと良い服を着てアーニヤとの待ち合わせ先である駅前へと行きます。

それにしても凄い人ですよ。この麻帆良学園ってどれだけの人が住んでるんですかね？ 日本は家が狭いと言いますし、敷地だけでも広いこの麻帆良学園ですから、僕の田舎の数百倍は住んでいそうですね。そのうちのどれぐらいが学生なんでしょう？

少し速足で僕は駅前へ向かいながら、そんな事を考えます。

時間は今は12時をちょっと過ぎたぐらいの時間ですね。待ち合わせ時間は12時半なのであと30分余裕はありますが、アーニヤは早めに行ってる事が多いですからね。

いつも結構早めに来て、身を隠しながら僕の事を待っているんです。

それで、僕がついてからぴったり10分後にやってきて『あ、あれ、ネギ。早いわね。私は、その、あんまり興味ないけど、来てあげたわよ、感謝しなさいね』と照れた表情と棒読みで言ってくれますよ。毎回同じ台詞なので、もう覚えてしまいました。

本当はアーニヤよりも早く待つておきたいと思うんですけどね。でも、そうするとアーニヤが本当に泣きそうな顔で『ご、ごめん、待たせちゃった!？』と聞いてくるので、自重しています。

なので、遅くもなく早すぎもしない30分前に行く事になっているのです。

つて、あれ？

ふと待ち合わせの場所へと目をやると、そこには何故か拳を握つてメラメラと燃えているアーニヤがいました。

「あ、あれ、アーニヤ！ びっくりした、アーニヤが先にいるなんて」

慌ててアーニヤに駆けよつてその声をかける。駆け寄つた僕に、アーニヤは少し驚いた顔を浮かべる。

「ぐ、偶然よ、偶然。今日は早めに目が覚めたから、ちょっと時間より早めに来たのよ」

照れたようにぶいっとそっぽを向いて笑うアーニヤに、僕は小さく苦笑する。



「そっか。でも、ごめんね。待たせちゃったみたいで」

いつつも待つてもらってるけど、こうやってちゃんと待ち合わせ場所で待っていてくれるのは初めてだからね。僕はそう思って小さく謝ると、アーニヤは何故か慌てたようにアタフタし始める。

あれ、どうしたのかな？

「と、とにかく、ネギも来たし。それじゃあ、遊びに行くわよ」

アタフタしながら、照れたようにアーニヤはそう言ってくる。何がともかくなのか分からなかったけど、僕は小さく笑いながら頷く。

「うん、そうだね」

「そ、それじゃあ、まずはお昼にしましょ」

微笑んで頷く僕に、アーニヤは何故かちょっと顔を赤くしながらそう言う。確かに時計に目をやると12時をちよつと過ぎたぐらい。お昼御飯には丁度いいね。

「そうだね。時間も丁度いいし。何が食べたい？」

今日は誘ってくれたのがアーニヤなので、まずはアーニヤの希望を尋ねる。

「えっ、うーん。何でもいいわ」

僕の言葉にアーニヤは少し考えて、小さく首を振った。まあ、僕たちはこの学園に来て日が浅いからどこに何があるかほとんど知らないしね。

でも、折角のデートですから、下調べはしておきました。  
調べたといっても、情報元もほとんどありませんでしたからね。  
タカミチの部屋の雑誌と、まほら新聞ぐらいでしたけど。

「それじゃあ、美味しいらしいお店があるらしいから行って見ない？」

そんな事を考えながら、僕はアーニヤにそう言います。その言葉にアーニヤは少し意外そうな顔を浮かべます。

「えっ、美味しいお店？」

まあ、行った事のないから本当に美味しいかどうかは分からないですけどね。でも、色んなお店があるみたいですし、美味しいお店もある筈です。

「うん、行ってみようよ」

にこりと笑いながら僕は、アーニヤの手を取る。その行動に顔を赤くするアーニヤ。

いい加減なれてもいいと思うんですけどね。

アーニヤから手をつないでくる事だつてあるんですから。

まあ、その時はほとんど無意識なんですよけど。

心の中で小さく苦笑しながら、僕はアーニヤを連れて歩き出しました。

目指すは、麻帆良市まほらじょうです。

「ふー、大満足よ」

麻帆良市でがつつりと食べ歩いた僕たち。流石にこれ以上はお腹に入らないと、僕たちはベンチの上に腰をおろしました。

それにしても本当に色々な屋台やレストランがありましたね。お店の人も商品も凄い個性でした。まだ全体の5%程度しか見て回れませんでした。もう精神的にも肉体的にもお腹いっぱいです。

「良く食べたというか、良く遊んだというか。でも、面白かったね」

飲食店で面白かったという感想もどうなのかと思いますが、面白かったというのがぴったりと当てはまるので仕方ありませんね。

「そうね。でも、料理を食べて面白かったって感想もどうかと思うけど」

僕もそう思ってますよ。お腹をさすりながらも、僕はアーニヤの言葉に苦笑します。

「ここがこれだけ賑わっている理由がわかるわ」

アーニヤが辺りを見回しながら微笑みます。どうやら満足して貰えたようです。

まほら新聞とタカミチの雑誌で調べたといつても、こことデパート、それに映画館やプラネタリウムぐらいですからね。時間があればもっと色々調べたり、下見に行ったりしたんですが。

その事をちよつと残念に思いながらも僕も笑います。

「うん、そうだね。お祭りでもないのに、これだけ人がいるんだから」

本当に人が多いですよ。僕たちの田舎では、こんなに人が集まる事って無かったですからね。

人が集まった事といえば、卒業式の時と、後は学校の名前をなんちゃって魔法学校に改名した時に、退学願いを持って生徒の大半が校長室前に並んでいた時ぐらいですかね？

「って、あああああ！」

そんな時、アーニヤの声が轟きました。

何事かと思い、僕はアーニヤの方へ視線を向けます。

「ど、どうしたのアーニヤ？」

「行くわよ、ネギ！」

有無を言わずに僕の手を取って人ごみの中へと走っていくアーニヤ。

「えっ、分かったけどどこに行くの!？」

僕の質問には答えてくれず、僕はアーニヤに引かれて人ごみの中

へと入っていった。

それにしても、僕の手を握っているのは恥ずかしくないのかな？  
うーん、多分無意識なんだろうーな。

「はあ、はあ……しよ、小学生2枚で」

走り疲れたのかアーニヤは息を乱しながら、とあるドームの前で  
受付のお姉さんに向かってそう注文します。そんなアーニヤに、受  
付のお姉さんは心配そうに微笑みました。

「あらあら、大丈夫？」

につこりと笑って、アーニヤに尋ねるお姉さん。僕もちよつと心  
配になってアーニヤに尋ねます。

「アーニヤ、大丈夫？」

「な、なんで、はあはあ、あんたは、平気、なのよ」

なんでって運動してるからだよ。アーニヤは普段元気だけど、こ  
れといって運動はしてないからね。

それに流石に、好きな女の子に体力で負けたくないしね。

ちよつと睨んでくるアーニヤに僕は苦笑を浮かべる。そんな僕に

受付のお姉さんが声をかける。

「はい、これどうぞ。アイスティーよ。あの子に渡してあげて」

「えっ、ありがとうございます」

にっこりと笑ってコップを手渡してくれるお姉さんに僕はお礼します。そしてすぐに、もう限界ギリギリといった表情を浮かべているアーニヤにコップを渡します。

「はい、アーニヤ。これ飲んで」

「……これは？」

手渡したコップを受け取ってアーニヤがちょっと疑わしそうに首をかしげます。まあ、この学園に来て飲んだジュースって基本的に変なのばかりですからね。この前飲んだ『みたらしエビチリジュース』は凄く不味かったですし。

口の中いっぱい広がる嫌悪感を思い出しながら、僕は苦笑してアーニヤに教えます。

「これは、あっちの受付の人がくれたんだ。アイスティーだって」

その言葉に、アーニヤは安心したのかコップを受け取り口をつけます。アーニヤはお礼をいう様な目で受付のお姉さんに目をやります。そんなアーニヤを見て、僕も受付のお姉さんに目をやりました。

あれ？ この人ってどこかで見た事ありませんでしたっけ？

「あらあら、そんなに急がなくてもいいのよ。まだ開演には時間があるから、といつても後5分ぐらいだけだ」

「微笑みながらアーニヤと話しているお姉さんを見ながら、僕はちょっと考えます。」

「うーん、どこかで見た事あるんですけどねー。」

「ん、というか開演って？」

「ねえ、アーニヤ。開演ってここは何？」

「アーニヤは一体どこに連れてきてくれたんだろうと首を傾げる僕に、受付のお姉さんは微笑みながら教えてくれます。」

「うふふ、ここはプラネタリウムよ」

「プラネタリウム……ですか？」

「姉さんの言葉に、僕は少しだけ考え込むようにそつ呟きました。」

「あらあら、今の子たちにはあんまり興味はないかもしれないわねえ。でも、夜空の星ってすっごく綺麗なのよ」

「少し残念そうに言ってくるお姉さんに、僕は慌てて首を振ります。」

「そ、そんな事ないですよ。僕の田舎にはプラネタリウムなんて無かったですし、それに星見るのも好きですから」

「僕はプラネタリウムというのは行った事はありませんが、どんな所かはちゃんと知っていますよ。というか、タカミチの雑誌です」

に調べていたりします。

なんちゃって魔法学校時代はよくアーニヤとカモさんの3人で星を見に行きましたからね。まあ、カモさんを人としてカウントしていいのかは分かりませんが。

本当の事を言うと、二人っきりで星空を見たいと思っていたのですけど、カモさんが『いいかい、少年に嬢ちゃん。夜は危険がいっぱいだから自分たちだけで行こうとしてはいけない。俺はしがないオコジョだが、その辺の切り抜け方は知ってるんだ』と言ってくるので、カモさんも一緒だったんです。

実際になんちゃって魔法学校の近くには野生の獣が出たりしますからね。獣に会いそうになると、大抵カモさんの嫌な予感が発動して、上手く避けられたりしましたしね。

この学園に来て色々大変で残念な事が多かったですが、残念なことの中に星空がないという事もありました。昔からよくアーニヤと見上げていた星空です。やっぱり、夜には見上げたいですからね。多分、アーニヤも同じ事を考えていてくれたんですね。

僕はちよつと嬉しくなります。

「……ありがとね、アーニヤ」

微笑みながらお礼を言う僕に、アーニヤは顔を赤くしてそっぽを向きます。

「っ！　べ、別に私が見に来たかったから来ただけよ」

そんなアーニヤに僕は小さく微笑んで、アーニヤの手を取ります。そろそろ開演時間らしいですし、ここでじっとしていたら邪魔にな



りますからね。

「それじゃあ、行こうか。アーニヤ！」

「そ、そうね！ もう時間らしいし」

自分の頬を触りながら恥ずかしそうに俯くアーニヤ。そんなアーニヤを見て受付のお姉さんにはっこりと笑います。

「それじゃあ、席に案内するわね」

お姉さんはそう言うと、アーニヤに近づき小声で何か言っています。その言葉を聞いたアーニヤは何故か顔を赤くしています。一体何を言ってるんでしょうかね？

アーニヤは赤くなりあたふたと大袈裟に両手を振り回します。その様子を見て、お姉さんにはっこりと笑います。このお姉さんの笑みを見ていて、ふと思い出しました。

あつ、このお姉さんって2・Aの名簿に載っていた那波 千鶴さんですよ。

……あー、そう言えば天文部って書いてましたね。なるほど。

改めて思いますけど、鳴滝さん達と本当に同い年なんですかね？ というか龍宮さんもそうですが、本当に中学生ですよ？ いえ、どっちがどうとはあえて言いませんけど。

「うふふ、それじゃあ、星空の世界へ案内しますね」

そんな少し失礼な事を考えているうちに、内緒話が終わったのか那波さんが微笑えむと、僕たちを案内してくれました。

プラネタリウムの公演は本当に凄かったです。  
何と言うか……うーん、凄かったとしか良いようがありませんで  
したね。

最初の方はロマンチックな感じでしたが、後半からはハラハラド  
キドキのアクション映画に変化しましたからね。アーニヤなんて見  
終わった後にちょっとの間真っ白になってましたしね。

「うふふ、どうだった？」

僕たちが出口から出ると、那波さんが微笑みながら笑ってそう尋  
ねてきました。

そんな那波さんの言葉に、僕は小さく笑いながら答えます。

「とにかく凄くて面白かったです」

「あらあら、ありがとう。」

そう言ってもらえると、天文部の皆で頑張って作って良かったわ  
て、手作りですか！？ というか、このプラネタリウムって天文  
部が運営してるんですか！？

驚いている僕とアーニヤに那波さんは、あらあらと微笑みます。  
そしてそこで何かを思い出したようにぼんっと手を叩きます。

「ああ、そうだったわ。アーニヤちゃん達に一つ注意する事があっ

たの。

もうちょっとで6時なのよ。この辺りで遊ぶなら気をつけた方がいいわ」

「気をつける？」

そう言ってくる那波さんにアーニヤは首を傾げました。

あれですかね。気をつけるってもしかして、この前の化け物ですか？

あの時の事を思い出し、ちょっとだけ身震いをする僕に那波さんは小さく笑うと言います。

「そう、気をつけるの。明日から新学期でしょ？」

だから、ちょっと大変なの。ある意味この学園の名物かしら」

「め、名物？」

あの怪物って名物になってるんですかね。いや、怪物が名物って嫌ですよ。そもそも奈良の鹿とか北海道の熊とかそんな扱いでいいんでしょうか？

深く何が起きるのかを説明してくれない那波さんは、困惑している僕とアーニヤにニコニコと笑って手を振ります。

「それじゃあ、頑張ってるねー」

手を振ってくれる那波さんに、僕たちは小さく首をかしげます。

なんというか、この麻帆良学園ですからね。地面が割れて地底怪獣マグラールが出てきても驚きませんよ。いえ、驚きますけど。

「気をつけるってなんだろうね？」

「そんな事、分からないわよ」

物凄く不安ですよ。本当に。

「ねえ、アーニヤ。ちょっと街の中を歩こうよ」

僕はそう言いました。その言葉にアーニヤは頷きます。

プラネタリウムから出た後、僕とアーニヤは麻帆良学園の中をゆつくりと歩いていきます。

冷たい風がゆつくりと吹き抜けていきます。その風に耳を澄ますと、色々な音が聞こえてきました。

周りを見渡すと笑っている人もいます。お店でご飯を食べている人もいます。その人たちの笑い声、生活音がどんと耳の中に入ってきます。

僕の知らない所でも、色んな人がいますね。

僕の知らない所でも、色んな人が生活しているんですね。

僕はこの知らない場所で、生活していかなければならないんですよ。それも教師として。

本当に僕に出来るんでしょうかね。

9歳の僕が教育実習生見習いとしてですが、生徒たちとは違う立

場で生活していかなければなりません。学園長はあんな頭だし、闇の福音もいます。それに、タカミチだって基本的に出張ばかりで、僕がタカミチを見たのだって初日ぐらいです。

……凄く不安になってきました。泣きたくなくなってきました。

アーニヤに聞こえないようにため息を吐き出します。

「ねえ、アーニヤ」

思わずアーニヤの名前を呼んでしまいました。多分、今の僕の声は凄く情けない事になってると思います。

「な、何よ？」

アーニヤはどんな顔をしてるんでしょうか？ 不安を押し殺しながら、僕は俯きます。

アーニヤが僕の隣にいるのが分かります。それが凄く安心できて、それに凄く縋りたくて。

僕の口から何か言葉が出てきそうになりますが、その言葉は声になる前にどこかへと霧散していきます。泣きたくなくなります。アーニヤに抱きついて、声を出して泣きたくなくなりました。

「……ねえ、アーニヤ」

空が茜色に染まり、地面も茜色に染まっていきました。

「どっしたの？」

優しいアーニヤの言葉が心に響きます。

やっぱり僕はどうしようもなく弱いです。不安に不安が積み重なって一人でどうにかする事ができません。アーニヤが隣にいてくれる事でようやく立ち上がれるんです。

「僕って頑張れるかな？」

絞り出すように僕はそう尋ねました。

僕は教師として頑張れるのでしょうか？

僕はこの学園で頑張れるのでしょうか？

僕はこの不安の中で頑張り続けられるのでしょうか？

先の事を考えると、泣きたくなります。

先の事を考えると、怖くなります。

先の事を考えると、ただ不安に思います。

「……ネギ」

アーニヤが僕を呼び掛けてくれました。その言葉に僕はゆっくりと顔を上げます。

「アーニヤ……僕は」

今の僕の顔はどうなっているのでしょうか。

不安で顔が歪んでいるのでしょうか。涙を堪え目が赤くなっているのでしょうか。それとも、ただ力なく笑っているのでしょうか。

どれにしても、見れた顔ではないですね。









気がつくと僕はどことも知れない場所に立っていました。  
先ほどまでの人波はまるで嘘の様に引き、残ったのは光る電灯と  
暗がりだけでした。

「うつつう、アーニヤ」

ちょっと泣きそうになりながら、アーニヤの名前を呼びます。  
先ほどの事でネガティブになっていた感情の所為か、暗い街並み  
には不安しか覚え、僕はたとぼとぼとアーニヤの名前を呟きな  
がら歩き続けました。

「ここどこですか？ アーニヤ」

不安でしか心にありません。  
とぼとぼと道を歩きながら右も左も分からずに、ただゆっくりと  
足を動かします。

「うわっ」「きゃあ」

周りを見ていなかった所為で、僕は曲がり角で人とぶつかってし  
まいました。いえ、ぶつかったと言うよりも撥ねられたと言った方  
がしっくりときます。

思いつきり凄い速度でぶつかってきた何か。  
そんな何かに、僕は弾き飛ばされ壁にぶつかります。

「ぶつ」という通常では出ない咳が喉から吐き出してしまいます。

「痛たたた、だ、大丈夫？ 前をちゃんと見てなかったからって、

「あんたはこの前の！」

ちよつと泣きそうな表情で顔を上げると、そこには前に会ったツインテールの女性でした。この人はたしか、神楽坂 明日菜さんでした。

「あ、明日菜さん？」

「あんたはえつと、ナギ！ じゃなかった、えーつと、詐欺だっけ？」

思わず呟いてしまったその言葉に、明日菜さんはカラカラと笑いながらそう言ってきました。でも、もう突っ込む気力もありません。もう嘘つきでもなんでもいいですよ。

背中からぶつかった所為か、立ち上がる気力もわかずに僕はその場に座り込んでしまいました。

「ああ、そうよ！ ネギ！ ネギ・スプランドファールド？」

「……ネギ・スプリングフィールドです」

何が面白いのか笑顔をずっと浮かべながらそう言ってくる明日菜さんに、僕はとりあえずそう言っておきました。

「そうそう、ネギよ。ネギ！ えつと、確か先生になるんだからネギ先生って呼んだ方がいいかしら？」

「好きに呼んでください」

彼女の無駄に明るいうテンションについていく気も起きずに、僕はそれだけ眩くように言います。そんな僕に明日菜さんは、ちよつとムツとした表情を浮かべます。

「どうしたのよ、暗いわねー。何かあったの？」

落ち込んだ僕の顔を覗き込むように尋ねてくる明日菜さんに、僕は小さく呟く。

「……ええ、ちよつと人の波に飲まれて」

「ああー、アレかー。なははは、アレは慣れてない人には吃驚するわよねー」

凄く明るい顔を浮かべながら笑う明日菜さんに、僕は氣力を振り絞ってちよつとだけ笑いを浮かべました。

「って事は迷子？ だったら私が連れてってあげるわよ？」

この前携帯も拾ってくれたって話だし」

「いえ、大丈夫です。もう、……明日菜さんも帰らないと大変なんじゃないんですか？」

ニコニコと笑ってくる明日菜さんに僕はそう尋ねます。僕の言葉に、明日菜さんは笑いながら首を振ります。

「あはははは、いいのよ。もう時間過ぎちゃったし。木乃香と出かけてただけだねー。色々あってスタートダッシュが遅れちゃったのよね。だから、大丈夫よ！」

「いえ、それでも早めに帰った方がいいですよ」

ぐっと拳を握り元気をアピールする明日菜さんに、僕は力ない様子で首を振ります。というか、本当にもういいんで帰ってください。

そう思いますが、明日菜さんはそんな僕の気持ちなど全く察してくれません。

「だから、大丈夫よ！」

何が大丈夫なのか分かりませんよ。

もはやそう言う気力もなく、僕はじっとその場に座ります。

「ほら、何やってんのよ！ 家に帰るんでしょ！ ちゃんとしなさい！」

僕の手を握り無理やり立たせる明日菜さん。手を引かれ僕が無理やり立たされます。

立ち上がりながら、僕は顔を小さく下げて言います。

「あ、あの。もう本当に結構ですから。僕、人と逸れたんで探さない」と

「だったら、私も探してあげるわ！ 一人より二人の方がいいですよ！」

……なんか、物凄くテンション高いですね。

そんな明日菜さんに、僕は彼女にバレないように小さくため息を吐き出します。

「大丈夫ですよ、明日菜さんは学生ですから……、その、早く帰った方が」

もちろん探すのは一人より二人の方がいいに決まっています。

でも、そもそもデートではくれたからって他の女の人に頼って探してもらって僕としては凄くダメな気がします。それにアーニヤの顔もそんなに知らないでしょうし、逆に足手まといにしかないですしね。

そんな事を考えている僕に、明日菜さんは笑いかけます。

「もう、子供なんだから年上を頼りなさいよ！ 助けてあげるわよ」

いりません。放っておいてください。

そう答える訳にもいかずに僕は、出来る限りの笑顔を浮かべて言います。

「ありがとうございます。でも、僕は本当に大丈夫なんで、明日菜さんも早く帰って　っ!？」

その時でした。

僕の視界にアーニヤが移りました。

明日菜さんと話している僕を見て僕が声をかける前に、アーニヤは少し俯くと僕がいる方とは違う方向へ走っていつてしまいました。

「ちよっ！　アーニヤ！」

明日菜さんとの会話もそこに僕はアーニヤに向かって走り出

します。

しかし、そんな僕の手を明日菜さんが握りました。

ちよっ、ちよっと！ 放してくださいよ！

「あっ、こら！ 手伝ってあげるって言ってるでしょ！」

だったら今すぐ、その手を離してください！

怒鳴りたい気持ちを出来る限り抑えながら僕は明日菜さんに言う。

「だ、大丈夫ですから！ 本当に大丈夫なんで、離してください！

僕はこれから行く所がありますから！ 明日菜さんも早く帰ってください！」

乱暴に握られた手を振りほどくと、明日菜さんにそう言い残すと走ります！ 後ろで明日菜さんから何か怒ったような声が聞こえますが、もはや無視です。

僕は明日菜さんの事など頭から追い出し、僕はアーニヤが消えていった闇の中を全速力で走りだしました。

「おっと」「おや？」

暗がりでもまた人にぶつかってしまいました。

ぶつかった人の顔を見ると、その人は肌が白く、黒い綺麗な髪の毛の人でした。異常な程に薄い女の人です。なんというか、存在とかそう言ったモノが全て薄い女性です。この人って確か、この学園

にきたときにあつた人でしたっけ？

「ふむ、私にぶつかつてくるとは、さすがネギ・スプリングフィールドといった所ね」

そう呟く黒髪の女性。その女性の言葉の意味が分からずに、僕は少し首をかしげます。

そんな僕に、女性はにっこりと笑うと言いました。

「おやおや、泣いていたのか？ ふむ、随分と追いつめられた顔ね」  
優しく僕の頬を撫でる女の人。その言葉に僕はすぐに思い出します。

「っ！ そうでした。早くアーニヤを追わないと！」

「ふむ、アーニヤが誰を出しているか分からないが、先ほど泣きながら走り去っていた女の子がいたと思「どこに行きましたっ！？」

何か考えるように呟く女の人に、僕はそう叫びます。  
そんな僕を見ると女の人は小さく笑って遠くの闇の方を指さします。

「向こうだったね。向こうは森があるから気をつけた方がいいね」

「ありがとうございますっ！」

女の人の言葉に僕は頭を下げてそう叫ぶと、指さされた方へと全力で走りだしました。

先ほどの女性は闇に解けるようにどこかへと行ってしまいました。



落ち葉を踏みしめ、僕は森の中をかけていきます。

「アーニャっ！」

どこにいるかも分からないけど、僕はアーニャに呼びかけます。

「アーニャっ！」

泣きだしそうになるのを堪え、僕はとにかく足を動かします。真つ暗な森の中で、不安が心の中から溢れ出ようとしますが、それも無理やり抑え込みます。

今はそんな事を気にしている場合じゃないんです！ 不安とか恐怖とかそんなものよりもアーニャの方が絶対に大切です！

「アーニャアアアア！」

僕は心の中から彼女の名前を呼びます。

そして、走りきった先には小高い丘の頂上でした。

麻帆良学園の街灯が遠くに見え、暗い空が頭上に広がっていました。

そして、その場所で彼女が弱々しい姿で、そこに立っていました。

「……………ネギ」

「アーニヤ」

彼女が僕の名前を呼びます。僕も彼女の名前を呼び返しました。なんて答えていいのか分からずに、僕は一步近づきます。

「来ないで！ 今は来ないで！

今頭の中ごちゃごちゃなのよ！ お願いだから来ないで！」

彼女がそう叫びます。彼女の顔は涙があふれ、可愛い顔は歪んでいました。

それでも、僕は彼女の制止を聞かずにゆっくりと足を進めます。

「来ないでよ！ 本当に来ないで！ お願いだから来ないで！

今の私を見ないで！」

必死にそう叫ぶ彼女。そんな彼女に僕はゆっくりと彼女に近づきます。

一步、一步と確実に彼女へと近づいていきます。

近づいたびに彼女は大声で拒否します。

それでも僕はゆっくりと歩いていきます。

「アーニヤ」

「……ネギ」

もう彼女は僕の目の前にいました。彼女は涙を流しながら僕の手を見上げています。

僕は彼女の名前を呼び、彼女もか弱い声で僕の名前を呼びました。

彼女はもう拒否する言葉を言いませんでした。そんなアーニヤに僕はただ彼女を見つめます。

「アーニヤ」

僕はもう一度彼女の名前を呼び、彼女に向かってゆっくりと手を向けます。

ちよつと触れた手に、彼女はびくりと身体を震わします。それでも、彼女は拒否をしません。

そんな彼女を見て、僕はただ彼女を力強く抱きしめました。

「アーニヤ、良かった」

彼女を力強く抱きしめながら、彼女にそう言います。

「ネギっ！ ネギ！ ネギい！」

僕の胸の中で、彼女の感情が爆発したかのようにそう叫びました。

「ネギ！ ごめん、今私の頭の中ぐちゃぐちゃで、本当にごちゃごちゃで！ これから教育する側と、受ける側に別れると考えちゃったりしたら、もう泣きそうで、二人っきりの時間が無くなっちゃったと考えたら本当に不安で、本当に本当にネギが遠くに行っちゃうんじゃないかって考えたら泣きだしそうで！」

ネギに私は必要じゃないんじゃないかって、そう考えたら、私は、私はもう！」

崩壊した様にそう叫び続ける彼女に、僕はただ彼女を強く抱きし

めます。

彼女はただ僕を強くつかみ、泣き続けます。

「ネギ、ネギ、ネギ！ ネギィ！」

彼女も僕を力強く抱きしめ、僕の名前を叫び続けます。僕はただそんな彼女を強く抱きしめました。

しばらく抱きしめ続けていると、彼女は落ち着き始めたのか僕の胸の中で泣き続ける。

「ぐすつ……、ネギ……、ぐすつ、うっ、」

「ごめんね、アーニヤ」

そんな彼女に僕はただ小さくそう呟きます。そんな僕の呟きに、アーニヤは大きく首を振ります。

「なんで、なんで、あんたが謝ってんのよ！ 違うのよ！ 私が、私！」

「……僕も色々考えたんだ」

泣いているアーニヤに、僕は呟くようにそう言います。

この学園についてから、本当に色々と考えました。

この学園でどうすればいいのか。この不安だらけの学園で、どうやって生活すればいいのか。

そして、思いました。何で不安なりにもこの学園で数日過ごしていったのか。

不安なこの学園生活で。  
本当に恐怖のこの世界で。

アーニヤが隣にいてくれたから、僕は不安を押さえつける事が出来たんだ。

「色々考えたんだ。でも、どう考えてもやっぱり僕にはアーニヤが必要なんだ。

だって、アーニヤと一緒にいたいんだ！ アーニヤには迷惑かもしれない、だけど僕の隣にはアーニヤがいてほしいんだ」

「……本当？」

僕の言葉にアーニヤが不安げにそう尋ねてくる。そんなアーニヤに僕は力強く頷きます。

「ああ、本当だ。僕にはアーニヤが必要なんだ」

「……証明して」

アーニヤが小さな声でそう言ってきます。

そんな彼女に、僕は小さく頷きます。

彼女が静かに目をつむります。

僕もゆっくりと目を瞑ると、僕の顔が彼女の顔へと近づいていきました。

そして、

「えへへ、ありがとう」

アーニヤは小さく照れたように笑います。  
そんなアーニヤに僕も小さく笑うと言います。

「うん、僕にはアーニヤが必要なんだ。僕は弱いからアーニヤに支えて欲しいんだ」

「私もネギが隣にいて欲しいの。私もネギがいないとダメだから」

僕は照れたように笑い、アーニヤも照れたように笑うとそう言いました。

僕とアーニヤは手を握ると、ゆっくりと家へと向かって行きました。

明日はついに学園生活が始まります。  
まだ不安も沢山ありますが、アーニヤがいるんです。頑張ってい  
こうと思いました。

ああ、もちろんアーニヤを寮へ送った後に、家に帰りましたよ。  
当然ですよ。

ただ何でもない貴女と、ただ何でも無い僕である最後の日。(後書き)

いやー、長くてすみません。

そして後半がちょっと雑かもしれないですね。すみません。

次回はついに原作！

ではなく久しぶりにカモさんの話です。



季節外れの桜は開き、桜の下で男は思案し考え続ける。(前書き)

カモさんの話です。書きあげたのでサクサク更新。

今回も長いですね。

季節外れの桜は開き、桜の下で男は思案し考え続ける。

そこには何も無い空間があった。

壁も天井も地面も扉も、全てが真っ白な天国を思わせるような不自然な空間。前に来た時から何も変わっていないその空間へと足を踏み入れると、俺は煙草に火をつけると、煙を口から吐き出した。口から出た白い煙は、白い部屋の中にゆっくりと溶けていく。

この真っ白な何も無い部屋は『桜』の中枢部。

この場所は、『桜』の幹部連中や幹部補佐連中などが集まる場所だった。

「……デク、いるか？」

誰もいない部屋の中で俺は、呟くようにそう言う。

部屋の中に溶けていきそうな程小さな俺の声が響くと、どこからかブツンと放送にスイッチを入れるような音が聞こえてきた。その音に俺が少しだけ眉をひそめる。

そして、しばらく『テストテスト』という小さな声が聞こえたかと思うと、どこから聞こえているのか分からない部屋全体に響く電子音に似た大声が俺の耳に届いてきた。

「おやおや、誰がお呼びかと思えば、まさか貴方がここに来るとは

思いませんでしたよ。

てつきり、お嬢さんと仲良く殺し合っているものと思っ  
ていまし  
たが」

どこからともなく聞こえてくる加工されきった声は何が楽しいの  
かクツクツと笑う。

「うるせーよ、ロップ」

くだらない事を言ってくる電子音に俺は吐き捨てるようにそう答  
えると、その答えが気に入ったのか、電子音は耳触りな音で笑いを  
浮かべる。相変わらず、よく響く耳触りな笑い声だ。

一瞬この声を出してるロップを捕まえてぶん殴ってやろうかとも  
思ったが、クツクツと笑う電子音は俺のその感情を敏感に察知した  
のか、小さく微笑んだようにもう一度笑うと言った。

「ふふ、そうですか。まあまあ、僕としましてはどちらでもいいん  
ですけどね。」

こちらに立ち寄ったのは、この前調査を依頼されたモノですか？」

姿が見えず、声も加工されきっているのにも関わらず、ニコニコ  
と機嫌よさそうに微笑んでいる姿が容易に想像できる声。そんな声  
に、俺は小さく肩を竦めると頷いた。

「ああ、そつだ。後は疑問屋の奴を呼べ」

急な呼びだしたが、疑問屋の奴はいつも部屋で暇しているだろう  
から問題ないだろう。そう考えながら言った俺の命令に、電子音は  
クツクツと笑い頷く。

「分かりました。あと、デグーさんも貴方に会いたがっていますか？」

「いらん」

即答する俺に、電子音はクツクツとまた笑った。その笑い声に俺はため息を吐き出す。

あんなお喋りな奴といると話が進まない。それにそもそもデグーの相手をするのが面倒だ。

「分かりました、では1分程お待ちください」

クツクツと笑いながら電子音はそう言い、またブツンという音を立てて放送が切れる。

俺はその放送が切れた事を確認すると、小さくため息を吐き出すと煙草をくわえた。

全くこの連中は面倒な奴が多い。

一度大きく煙を肺へと満たし、肺から外へと煙を吐き出す。

「おうおうおうおう、聞いたぜ、見えたぜ、聞こえたぜ。なんだい、なんだよ、どうしたんだよ。俺を仲間外れにして何を漫談、相談、密談しようつて了見なんだい？ こっちは寂しいと狂い死んじまう小動物だぜ？ ちょっとぐらいい話に入れて、混ぜて、仲間にしてくれてもいいってもんじゃないかい？ これマジだぜ、嘘だぜ、ホントだぜ？」

音もなくいつの間にか部屋に入ってきたそいつの煩い声に、俺は小さくため息を吐き出す。

「つち、煩いのが嗅ぎつけてきやがった」

啜えたばかりの煙草を吐き捨て呟く俺。

吐き捨てた煙草は地面に転がり、ゆっくりと煙を上げる。

小さく呟いた俺の言葉を目ざとく聞きつけた声の主は、愉快そうに厭らしい声で笑い喋る。

「おいおいおいおい、そりゃひでーよ、まじーよ、泣いちゃうよ？  
こんな善良で真面目で寡黙な俺を前にして煩いつてのは、神も仏もお釈迦さまも、怒って笑って天罰くだすぜ？ それに話つてのはどうせあの人間の姉ちゃんとの愚痴ぐらいじゃねーのかい？ いつも優しいアイツが最近冷たいんだよな、奥さんそれは浮気ですぜってか！ ダハハハハハハハ、ゲエエ！？」

煩くて煩わし過ぎるその声に、俺は煙草からのぼる煙でつくって腕で声の主を締め付ける。

すると、虚空から茶色の小動物が現れ潰れた蛙の様な声を出しながら、必死に白く濁った煙から脱出しようとする姿が現れた。

「少し黙れ」

一睨みをし、俺がそう言うと、苦しみながらも茶色い小動物は笑い声を上げる。

「ぐええっ、まじで死ぬぜ、やばいぜ、苦しいぜ。ぐうっ、かははは、俺がもしも黙るとしたらそれは死ぬ日か、消える日か、終わる日ぐらいなもんだぜ。いやいやいや、これってマジだぜ、嘘だぜ、ホントだぜ？ がはははは、ぐうっ！？」

絞り出すようにしてそう喋り続けるデグーに、俺は小さくため息を吐き出すと煙の腕を操りデグーを壁に叩きつけてやる。

結構な速度で壁に叩きつけてやったのにも関わらずそのダメージが全くないように、デグーはすぐに立ち上がると、ゴホゴホと肺の中に空気を取り込みながら喋る。

「おいおいおいおい、マジで潰れて、死んで、殺されるかと思っただぜ。旧知の仲の俺に向かってそんな所業をするなんて、流石の未確認、鬼畜オコジヨと言われているだけの事はあるってもんよ、なあ、ぐえええ！？」

懲りずにまた何か喋ろうとしているデグーに、俺は舌打ちすると再び創りだした煙で握りつぶしてやる。一瞬のうちに白い煙に包まれ、その煙に潰されないよう必死に魔力を込めて抵抗し、何やら喋ろうと口を動かしているデグー。

だが、今度は完全に煙の中に閉じ込めてやったので、その煩い声が俺の元に届く事はない。これで安心できるな、と俺は新しい煙草に火をつけた所で、パンパンと手を叩く声が聞こえた。

「はいはい、お二人とも。お戯れはその程度で。  
今回は仕事の話をしにきたんでしょ？」

音がする方に目をやると、そこには完全に機械に覆われた身体をしたロップが立っていた。その姿は重火器はもちろんナイフやドリルといった武装を身につけ、肌の色すら見る事が出来ない。完全武装ぶりに、俺は小さくため息を吐き出す。

前回会った時とはまた違う貴金属に覆われているな。つたく、無駄な所にばかり金を使いやがる。

元がどんな動物だったのかも検討がつかないほどの姿をしたロップ

プに視線をやると、ロツプはそんな視線に小さく肩を竦める。

「少々遅れましたか？ まあ、許容範囲でしょう。」

疑問屋の準備に時間がかかりましてね」

「何故、我を呼んだ？」

ロツプの言葉の後に、疑問屋がゆっくりと足取りで部屋の中に入ってきた。部屋に入ると疑問屋は周囲を見渡して、俺に尋ねる。

「何故、奴が煙に閉じ込められている？」

「ああ、忘れていたな」

そう言えば静かだと思っていたが、デグーを閉じ込めておいたんだっただな。俺は小さく苦笑して、煙に流した魔力を霧散させると、煙はすぐに空気へと溶け、ぐったりとしたデグーがぼとりと地面に落ちた。

「うう、痛いぜ、ヤバいぜ、苦しいぜ。ったく、こういうのを何て言うんだっけ？ 日本じゃ口は災いのもと、口は禍の門、口と財布は締めるが得だったけか？ いやいやいやいや、これだけ無口で寡黙で静かな俺を捕まえて、それだけはないってか？ かかかかか」

性懲りもなくまた何か喋り始めたデグーに俺を軽く黙殺し、早く話を進めろという目線でロツプに目をやる。そんな俺の視線に、ロツプは小さく苦笑いを浮かべると言った。

「それじゃあ、さっそくお仕事の話に行きましょうか？」

まあ、そうは言ってもこの前注文された依頼は全て完了した訳ではありませんがね」

その言葉に、部屋の中の空気が一瞬で変わる。

腐ってもこいつらはこの『桜』の主要メンバーの一員だからな。普段ふざけていようが、仕事の時にふざけるような真似はしない。デグーの奴でさえ、渋々と口を閉ざしロップの方へと視線を向けていた。

静かになった部屋の中で、ロップは何かボタンの様なモノを押すと、部屋の中に立体映像が映し出される。

立体映像にはいくつかのグラフや数字が羅列されている。

「まず、この前に依頼された麻帆良学園産の機械や加工品、通称『麻帆良ブランド』の調査を行いました。調べた情報<sup>データ</sup>では、カモさんが危惧するような状況にはありませんでした。未知の回路などは使われていませんでしたし、魔力を使っている傾向もありませんでした。

まあ、そうは言っても安心されないでしょうから、もう少し調査を続行するつもりですが」

立体映像には麻帆良ブランドとされている商品の名前と姿が次々と映し出され、その成分や回路、魔力の有無についての情報が提示される。その情報を隅から隅まで見渡し、人知れずに厄介なモノが世界に出回っていない事にとりあえず安堵する。

そして、そんな大量の情報を眺めながら俺はロップに尋ねる。

「麻帆良のロボットについてはどうなっている？」

俺の言葉に、ロップは更にボタンを押し画面を切り替える。そこ



には細いロボットの腕と、無駄に頑丈そうなロボットの足が映し出された。

「それに関しては調査中です。カモさんが盗って来てくれた機械のパーツですが、これはかなり高レベルな技術でつくられている事は分かりますが、残念ながら我々でも製作が十分に可能なレベルのモノでした。これに魔力を媒介させる事は不可能ですね」

「っち、あのロボットそのものを捕ってくりや良かったぜ」

ロップの解答に俺は舌打ちをする。そんな俺にロップは小さく苦笑して答える。

「確かにそれだと研究は捗りますよ。でもあの闇の福音が保護しているんですよ。でしたら、まだ下手に触らない方が身のためですよ。」

ロボットの調査は本体が無くてもできますからね。必要なのは情報イタです」

「……何故、闇の福音は麻帆良学園の中に封じ込められている？」

クックツと笑うロップの言葉に、今まで黙っていた疑問屋がそう尋ねる。

その疑問屋の疑問に、俺は小さく肩を竦めて答える。

「千の魔法の男サウザンドマスターが、登校地獄の呪いをかけた所為で封じられているという事らしいが、詳細はまだ詳しく視ていないから分かんない。ただあの女に会った印象から言えば、学園の奴らやメガロ政府、レジスタンスなんかとは関わり合いを持って無さそうだな」

絵に描いたような悪だった闇の福音を思い出す。

俺を前にしたときの闇の福音は俺を殺さなかった。少年と会話をしていた時の闇の福音も少年を殺さなかった。前者は警告、後者は話し合いに自身で乗った故の意地。その共通点は誇りある悪って所だろう。

あのような女が、こそこそと裏で動き回る何かに手を貸すとも思えない。

仮に貸したとしても、誇りある悪として譲れないラインは、どんな相手にも譲らないだろう。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルを思い出している俺に、疑問屋の声が届く。

「何故、登校地獄程度で15年もくくりつけられている？」

「さあな。そのあたりはまだ何か仕掛けがあるんだろう。」

闇の福音自身もあまり本気で外に出ようとはしていないだろうしな

本気で外に出る気なら呪いがかけられていても方法はある。その方法を使用せずに生徒という立場に甘んじているという事は出る気はないと考えるのが当然だろう。

「……何故、出る気がないのだ？」

答えた俺の言葉に、疑問屋が更に疑問を投げかけてくる。

「そこまでは分からねーな。可能性としてはそもそも学生生活を楽しんでいられるというのもあるが、何らかの取り決め、または出られな

いように何かを握られているというのも考えられる」

学園に何かあるのか、出ないという事になにかあるのか、それともただ単純に弱みを握られているのか。詳しく調べていない以上、どうしようもないな。

「はいはい、脱線はそこまで。魔力の媒体になるロボットについての話を進めますよ」

闇の福音について盛り上がっている俺たちに、ロップは手を叩いて話を元に戻す。

そして、またボタンを弄り、内容はロボットの詳細なデータに移っていく。

どのような金属を使っているのか。

どのような魔力伝達手段で動いているのか。

どのような思考回路をしているであろうか。

事実と憶測を交えながらロップは説明をし続け、最後にこう締めくくる。

「まだ分からない事が多いですが、やはり基本としては人形遣いの技量と似通った部分は見つかりましたね。この情報から察するに闇の福音が関係していると考えるのが妥当でしょうね」

魔力を無機物に通し、意思を与える人形遣い<sup>ドールマスター</sup>。その生ける最高峰である闇の福音があるのであれば、無機物に魔力を与える技術は格段に上がるか。

詳しく調べるには、闇の福音をどうにかする必要がある訳だ。

「また面倒な事だな」

吐き捨てるようにそう呟く俺。その呟きにロツプは苦笑いを浮かべ、デグーは意地悪く笑い、疑問屋はただ無言を貫いていた。奴らを見ながら俺はこれからの方針を静かに思案していく。

「もう一つ情報データがあるんですよ」

「情報データだと？」

そんな俺に、ロツプがそう言った。

まるで出し惜しみするようにそう言ったロツプの言葉に俺は首を傾げる。その俺の姿が気に入ったのか、クツクツと笑いながら、ロツプは頷いた。

「ええ、とっておきの情報データです。

貴方データが調べようとしている事とは違いますが、貴方と関係している情報データですよ」

もったいぶるようにそう言うロツプ。その口ぶりは如何にも期待できる情報だと言いたげだったが、こいつがこう言う時は大抵たいした情報じゃねーんだよな。

言いたくて仕方がないとクツクツ笑っているロツプに、俺は小さく肩を竦めながらあまり期待せずに耳を傾ける。

黙ってロツプの言葉を促す俺に、ロツプはクツクツ笑うと答える。

「ネギ・スプリングフィールドの情報です」

「少年の情報ねえ」

やはり肩すかしをされたような気になり、俺はやる気なさげにそう呟いた。

気になるといえば気になるが、今はあまり興味ないな。

興味がない理由は、少し前まではネギ少年が、学園や政府、それにレジスタンスの中心であるのだからと仮説をたてていたが、周辺の事を探っているとどうやらそうではなさそうだと分かってきたからだ。

どのグループもネギ・スプリングフィールドを欲しがっているが、それはまだ先の話。今はそれよりも裏方活動に忙しいのだろう。

これもレジスタンスに潜入してくれたガトウの情報や、月詠の情報、それに『桜』の情報を集めた結果の推察ではあるが。

「……興味がなさそうですね」

残念そうにそう言うてくるロップに、俺は小さく肩を竦めると首を振る。

「いや、話を聞かせろ」

それでも奴らの情報があればいいだろうとそう言った俺に、ロップは凄く嬉しそうな声でクツクツと笑うと頷いた。

「いやいや、そう言うと思っていましたよ。」

ネギ・スプリングフィールドの件なのですが、まずウェールズの悲劇と呼ばれたあの悪魔襲来の日の事で新しく分かった事があるんです」

「悪魔襲来の日？」

また首を傾げる俺に、ロップは小さく頷くと持っていたボタンを押し、再び立体映像が現れる。

その立体映像には、ネギ少年が住んでいた町の様子が事細かに映し出され、住んでいた人間の情報も細かく記されていた。

「まず前提としてなのですが、ほとんどの方が『ウエールズの悲劇はネギ・スプリングフィールドを殺す為に仕組まれた』と考えています。」

ですが、ここに問題が生まれます。それは、『何故、プロに暗殺まで企てられたネギ・スプリングフィールドが素人でありながら生き残る事ができたのか』という疑問なんです。

まあ、これに気がついたのは、疑問屋でしたが」

少し苦笑しながら、疑問屋の方へ視線を向けるロップ。

そのロップの視線に、疑問屋は身じろぎもせずにとただ立体映像の方へと視線を向けていた。

「そこで考えられる事は3つです」

ロップはメタリックな色をした指を3つ立てて、そう離し始める。

「まずはネギ・スプリングフィールドを殺すのではなく操る為に襲撃を企てた。」

これは貴方がネギ・スプリングフィールドに派遣される前は、英雄願望が強かったらしいじゃないですか。つまり、強烈な英雄願望を刷り込む為の演出であった可能性があるという事です」

そういつてまずは指を一本折りたたむ、ロップ。

「次に、ネギ・スプリングフィールドの暗殺を企てた人間が馬鹿だった。」

これは可能性が低いですが、可能性がない訳ではありません。人間の魔法使いがやる事ですからね。

初めからネギ・スプリングフィールドに近づき殺しておけばいいものを、街を襲わせると言う選択肢を取ったあげく、その日にネギ・スプリングフィールドは町にはいなかったという大失態ですよ」

クツクツと笑いながら、そういつて指をまた一本折りたたむ。

そんなロップを見て、俺はただ黙ってロップの次の言葉を促す。これだけ時間をかけた訳だから、最後の理由が一番の本命なんだろう。

そんな俺の視線に、ロップは小さく微笑むと残った指を少し掲げて言った。

「そして、最後の可能性。

ネギ・スプリングフィールド殺害未遂は、<sup>性。</sup> 罠であったという可能性。

本当はあの村で石化された人間の誰かが狙いであり、それを誤魔化す為にネギ・スプリングフィールドを狙った様に見せかけた。あり得ない話ではないと思いますよ？」

そういつて最後の指を折りたたむとロップは、ボタンを弄り立体映像に映し出される情報を変更する。

映し出されたのは、あの事件の被害にあった人間の情報だった。

「あの事件で被害にあった人間は47人、そして生存者であるネギ・スプリングフィールド、ネカネ・スプリングフィールドを抜き、石化された人間は45人。死者は0という驚愕の数字です」

被害者の情報の中から、ネギ・スプリングフィールドとネカネ・スプリングフィールドの情報が消える。残った45人が石化された人間という事だ。

情報がスクロールされ、次から次へと石化された人間の詳しい情報が映し出される。

「あのナギ・スプリングフィールドの家でもありましたから、この村は彼を慕った人間が集まっていました。彼を慕った人間というのは良く言えば、気さくで実力のある人間。悪く言えば、実力のある無法者ですね。

彼の人間性故か、集まった人間の役半分は国籍などが全て不明の人間です。その中には国を追われた傭兵や研究者なども含まれていました」

映し出された情報のいくつかが赤く点灯する。その赤く点灯した人間が国籍不明の人間なのだろう。

こうやって見ると本当に画面の半分が赤く色づいていた。

「これだけでも、襲われた理由は何かありそうですね？

しかし、これだけではありません。問題は襲われた日です」

そう言って更にボタンを弄ると、今度は再びウェールズの地図が浮かび上がった。

「この日は、メルディアナ魔法学校からこの村にバスが来る日でした」



た。このバスは月に一度しかやってきません。  
そして、この日にこの村で降りた人間は5人です。

まずはネギ・スプリングフィールドの従姉であり、メルディアナ魔法学校の生徒であったネカネ・スプリングフィールド」

ロップがボタンを更に操作すると、画面に5人の顔が浮かび上がった。

「次に、村に家を持ち、出稼ぎに出ていたその年8歳になる子の父親であったオーレリアン・バリエ。この男の国籍はフランスですね。魔法使いではありませんが、実力はそうありませんね。」

町の外にでて魔法使いとしての活動はせずに、真面目に働いていたそうですよ。ちなみに、花屋で働いていたとか」

「男の顔が浮かび上がり、おの男について詳しく説明していくロップ。」

そして説明が終わると、また次の人間の顔が浮かび上がってくる。

「3人目は、村の酒屋に酒類を運び入れるためにやってきたシモーネ・セツラ。国籍はイタリアです。」

「この男も魔法使いです。実力は中々であったとされていますが、闘いよりも酒の方が好きで、魔法使いを辞めて酒屋になった程の酒豪だったとか。ちなみに妻子はいません」

また男の顔が浮かび上がり、説明が終わると次の男の顔が浮かび上がる。

「そして、4人目はメルディアナ魔法学校から休暇として訪れた、クラレンス・ブルックス。国籍不明であり、名前もおそらく偽名で

しょう。魔法学校の職員をしていたらしいですが、人前に姿を現さずに教科もほとんど担当していなかったとか。担当していた教科は魔法結界学。かなり優秀な人物だったそうですよ」

男の説明が終わり、次は女性の顔が浮かび上がった。

「そのクラレンスと一緒にやってきた、アニック・セラフィーン。この女性の国籍も不明であり、名前も偽名だと判断できますね。職員でしたが、教科は担当しておらずおそらく警備に回されていたと考えられますね。実力はあったようで、剣の腕もよく、さらに魔法も強力だったと聞きます。クラレンスと一緒に来ている事から護衛であったと推測されますね」

女性の説明が終わると、また画面上に先ほど説明した女性2人と男性3人の顔が浮かび上がった。

そして、その5人の顔を眺めてロップはクツクツと笑いながら言った。

「さて、この中で狙われるとしたら誰になるでしょうかね？」

「……なるほどな」

クツクツと笑うロップに、俺は苦笑しながらクラレンスという男の顔を頭の中に焼き付ける。

実年齢は30代前半らしいが、40代ぐらいに見える老けた男だ。

その男の顔を見ながら、俺はロップに尋ねる。

「何かネタは上がってるのか？」

これらの情報はある意味全て調べようとしたら調べれる情報だ。ロップがこれだけ自信を持って言っているという事は、『桜』の力を使って何か情報をつかんだのだろう。このクラレンスという男に関する情報を。

そう考えて尋ねる俺に、ロップはクツクツと笑うと頷いた。

「ええ、まずはデグーさんにこの村に行ってもらいました」

そのロップの言葉に今まで渋々黙っていたデグーが嬉々とした表情で離し始める。

「おうおうおうおう、行ったぜ、見たぜ、探したぜ。山超え海超え、結界超えて、英雄が生まれ育ったという村までえっちらおっちらこつちらと、行ってきたぜホントぐええええ!？」

話が長くなりそうだったので、俺はデグーをもう一度締め付けておく。

そんなデグーを見て、ロップは小さく苦笑すると言いました。

「では、結論をお教えしましょう。」

結論としましては何も見つかりませんでした」

「……何も？」

俺は思わずそう問い返してしまう。

デグーが調べにいったという事は間違いはない筈だ。こんな奴でも、仕事に関してはしっかりとする。そして、そんなデグーが何も見つける事ができなかったという事はだ。

その俺の問いに、ロップは力強く頷く。

「ありとあらゆる全ての痕跡が消えていました。生活必需品から何もかもが、全て溶けたようになっていました。」

これはつまり、隠すべき何かがあったという事ですよ。これに関してはまだ調査中ですがね」

全ての情報を提示し終わったロップはクツクツと笑うと、『それではまた』という言葉を残し仕事は終わったと部屋へ帰っていく。それに続き疑問屋も黙って部屋から出ていく。

そんな奴らを見送りながら、煙でつかんでいたデグーを壁に叩きつけ、俺は少し思案する。

あの村が黒なのは間違いないだろう。

そしてこの話では、あの魔法学校も深くかかわっているという事だ。

「……少し底が見えたと思えば、また規模が広がりやがる」

あの村に、一体何があったのか。

何を思って、誰が襲ったのか。

そして、誰がどのような目的で活動しているのか。

俺は新しい煙草に火をつけ、肺に煙を満たす。  
吐き出した煙は、ゆっくりと白い部屋の中へと溶けていった。

季節外れの桜は開き、桜の下で男は思索し考え続ける。(後書き)

寝ぼけながらネギ・スプリングフィールドと書こうとしたら、ネギ・グリフィンドールと書いてしまった作者です。

久しぶりのカモさんの目線の話でした。

これからしばらくは、ネギ6：カモ3：その他2ぐらいの主役率でやろうと思っています。

今回は原作！ には行きません！ 当然です！

でも、そろそろ原作に行きたいなー。

明日、演劇が公演される。演者達は準備を進め台本を読み直す。(前書き)

朝だ！ 眠い！ 更新だ！ 後編に続くぜ！

明日、演劇が公演される。演者達は準備を進め台本を読み直す。

S I D E : 学園長

唸りながらワシはとあるホテルの一室で座禅を組んでおった。

妙に長い後頭部から汗が流れおち、規則正しい息遣いが静かに部屋の中に響いていく。

色即是空とでもいえば良いか、魔力と気を体内で紡ぎあげ一定の力を創りだすと、心の中はすでに無が訪れており、ワシの周囲には常人でも見れば分かる程の歪みが生まれておった。

身体へ流し込んでいる魔力が身体に備わっておる気と混ざり相乗効果で膨れ上がっていく。

ジワリと汗が流れる。ワシはそれを感じながら絞り出す様な声で唱え始める。

「…………つ、契約により我に従え、高殿の王」

膨大になる力を体内に抑え込みながら、うねり狂う魔力に言葉を紡ぎあげ、方向性を与えていく。

指向性を与えられた魔力は荒れ狂う気を導き、一つの現象へと変化させていく。



「我が身体に不可思議はなく、我が身体は記憶に留まらぬ。  
その姿は人であり、その姿に違和感はない」

紡ぎあげるのは、認識阻害の魔法。魔法を見ても違和感を覚えず、ワシの姿を見ても記憶にとどめる事が出来ない魔法じゃ。

高密度に練り上げられた魔力を体内に押し込め、麻帆良学園と同等の認識阻害魔法へと変化していく。その変化を身体で感じながら、ワシはその魔法を完成させる。

「集え、広がれ、認識阻害魔法！」

ワシの言葉と同時に、高密度の魔法が体内に膨れ上がり、ワシの身体の表面に力強くまとわりついた。

小さく息を吐き出し、それを確認すると、念のために失敗はないかと表面の魔力で構成された結界に目をやるが、……うむ特に問題はなさそうじゃのう。

安心して小さく頷くと、ワシは座禅を解くと近くに置いてあったタオルで頭を拭く。

やはり、学園の外に出るのは面倒じゃのう。魔法が使えんのもちろんじゃが、この頭の事で悲鳴でもあげられてはたまったものではない。誰が妖怪じゃ、失礼するわい。

長い頭を丁寧にタオルで拭きながら、ワシは小さくため息を吐き出した。

今、ワシがいるのはとあるホテルの一室であった。シングルにしては十二分に広く、ベッドもふかふかで、質の良い調度品も並べられておる。俗に言うスイートという部屋じゃ。ベッドに腰掛けながら、出来る限り快適な部屋にしようというホテル側が必死で配慮し

た部屋の様子をつかがい、また小さくため息を吐き出す。

確かにここは落ちついた良い部屋じゃが、やはり自室が一番じゃのう。

手触りのよいベッドのシーツを触りながらワシは愚痴っぽく考えてしまう。

そもそもこのベッドは寝づらいのじゃよ。普通の人間には良いかもしれないが、ワシのように頭が過度にながい作りをしている人間に合った様には作られておらん。ワシはこの頭の所為で仰向けに寝るところか、寝返りすら打てんのじゃぞ？

「……こんな頭になるんじゃないのう」

思わずそう呟き、重い頭を撫でるワシ。本当ならもう少しかっちょよい紳士でダンディーな老人になっている筈じゃったのに。ううう、と心の中で小さく涙を流す。

そんな時、扉をノックする音が聞こえてきた。

「うむ、入れ」

気持ちを切り替え、ワシがそう許可をすると扉はすぐに関き、タカミチ君が入ってきた。まあ、このホテルに泊まっておる関係者はタカミチ君しかおらんしのう。

ちらりとタカミチ君へと視線を向けると、彼は苦笑しながら頭を下げる。

「おはようございます、学園長」

「うむ、おはよう。」

さつそくじゃが、ネギ君との兼ね合いもあり、ワシは今日の夜にでも学園に帰る事にする」

挨拶もそこそこに、頭の中で計算を行いながら今後の予定を答えるワシに、タカミチ君は苦笑顔を浮かべる。しかし不満などはないようで、相変わらず笑顔を張り付けているタカミチ君はにっこりと頷く。

「分かりました。では、僕は今朝のうちに学園に帰ろうと思います」  
「それはならん。タカミチ君にいくつかやって貰わなければならぬ事があるからのう」

にっこりと笑うタカミチ君に、ワシは首を振ってそれを止めた。その言葉にタカミチ君は首を傾げる。まあ、新学期の準備やら何やら忙しいと考えておるのじゃろうが、そういう訳にはいかん。ワシは近くに置いてあった書類をタカミチ君の方へと放り投げる。

「これは？」

渡された資料をキャッチし、さつと目を通しながら尋ねるタカミチ君。そのタカミチ君の問いにワシは髭を撫でながら答える。

「ふむ、悠久の風からの依頼じゃよ。」

一つは旧世界の紛争地域、一つは魔法世界での小競り合いじゃよ。魔法世界といってもゲート付近での事じゃから、向こうへ行く必要はないわい」

「……分かりました」

普通の魔法使いなら、どちらも中々に厳しい仕事であるがタカミチ君はそうではないじゃろう。長くても5日あれば片づけてくるじやろう。そう考えているワシに、思った通り、手元の資料を見終わったタカミチ君は何でもない様に小さく頷く。

「これらの仕事であれば、3日もあれば十分じゃろ？」

「そうですね」

ワシの言葉に、タカミチ君は少し考えてすぐに頷く。心強い返事じゃろう

即答するタカミチ君に、ワシは小さく微笑むと学園長として言う。

「では、頼むぞ」

「ええ、分かりました。それでは失礼します」

それだけ言うとなすぐに部屋から出ていくタカミチ君。それを目で追いながら、ワシは少しだけ笑った。

さて、これでまずは一手じゃ。どう動くかのう、ネギ君？

自分自身の研究室で作業をしていると、ノックもせず誰かが入ってくる音が聞こえた。

何の音かと、音がする方へ目をやると、そこには慌て過ぎたのか、服も着崩れまくっているハカセが泣きそうになりながら私の下へ走ってきくのが見えた。

「超さーん、やっぱり見つかりませーん！」

ふむ、それは困ったネ。突然入ってきた事を咎めずに、私は涙のためながらそう言ってくるハカセを見て小さく唸った。

「防犯カメラや赤外線センサーの洗い出しは終わったんだっただ力？」

当然しているであろう事を尋ねる私に、当たり前と言いたげにハカセは力強く頷いた。

「3日ばかりで全部洗い出しましたよー！でも、誰が侵入したかどうか分からない所か、侵入された形跡だっで見つからなかったんですよ！」

そりゃそうネ。そう簡単に足がついたら、私の所に泣きついてこないからネ。

力強く頷きながら、そう言ってくるハカセに、私は小さくため息を吐き出し、優しく頭を撫でてあげる。まったく髪がボサボサで、服もめちゃくちゃネ。女の子なんだから、もう少し気を使うヨロシ。

「ううー、どうしましょう、超さん」

「大丈夫ネ、まずハカセは仮眠してくるといいネ」

涙をこらえているハカセに、私はゆっくりと彼女の頭を撫でながらそう答える。

ハカセの目下にクマが出来てるネ。おそらく、泥棒騒ぎでここ三日徹夜はしているハカセに私はそう小さく微笑む。

しかし、そんな私にハカセは首を振りながら訴えてくる。

「でも、超さん……。あれは最新式の茶々丸のパーツで」

「仕方ない、とは言えないが、今は忘れるネ。私の方でもしつかりと探しておくから、寝てくるネ。」

ハカセにはして貰いたい事がまだまだあるからね」

パーツよりもハカセに倒れられる方が厄介ネ。

最後は冗談めかすようにウインクをする私に、ハカセは少し躊躇したが『分かりました』と言って研究室から外へと出て行った。素直に眠りに行ってくれたハカセに、私は安堵しながら、目の前にあるパソコンのキーを叩いた。

その瞬間、画面には学園のありとあらゆる逃走経路と考えられる場所が映し出されていく。赤外線を通す事により、この画面には隠されたモノまで映し出されるのだが、

「……やはり、影も形もないアルな」

しばらく画面を眺めた後に、私は小さくため息を吐き出した。今私が探しているのは、この工学部に入り込んだ泥棒を探しているネ。泥棒が盗っていったのは、茶々丸の最新パーツとタナカさんのパーツだから困った物ネ。パーツ2つで二百万は下らないね。

まったく、一体誰が盗って行ったのか。  
泥棒と思わしき人物の欠片も映らない液晶を眺めながら、私は一人で思案する。

まず、前提条件としてハカセにすら内緒で設置したこのカメラにさえ映っていないとなると、やはり一般人とは考えられないネ。そもそも一般人はこの警備を超えてこれはしないネ。例えこの学園の無駄に身体能力が高い生徒でもネ。

クラスメートである何人かの顔を思い出しながら私は、小さくため息を吐き出す。

そこから導き出される答えは、犯人は十中八九魔法関係者。それも、かなりの腕を持った人物ネ。

「この所、学園とメガロ政府が対立し始めているとも聞くしネ」

どちらにしても好ましい状況ではないネ。まあ、それでもメガロ政府が態々私たちの機械を盗んでいくとは思えないネ。奴らは機械よりも魔法具の方に重点を置くからネ。

図書館島に被害がなくて、工学部に被害があるなんて事はありません。ないネ。

という事は、今考えられるあやしい人物は一人。

そいつの名前は歩部 守ネ。

茶々丸とエヴァンジェリンに近づいてきた人物らしいネ。

一体何者なのか分からないが、おそらく研究者であるとエヴァンジェリンは言っていたネ。

『あの歩部とかいう男は、間違いなく研究者だった。それもお前のような研究者ではないタイプのな』

苦々しそうにそう言っていたエヴァンジェリンを思い出し、私は小さくため息を吐き出す。正直言ってこれ以上、想定外の出来事は起きて欲しくなかったんだがネ。もしも邪魔する人間なら困ったものネ。

私はそう考えながら、とりあえず茶々丸のデータから歩部という男に関するモノを全て抜き出す事にする。

これ以上ゴタゴタして欲しくないアルネ。

ようやく、ネギ・スプリングフィールドが英雄になりくるのだからネ。

S I D E : 近衛 木乃香

「アスナー、早く行こうやー。遅れるでー」

時間は朝の9時ぐらい。

部屋の玄関先でウチはアスナに向かってそう声をかける。



今日はアスナの朝の新聞配達も終わり、朝食も食べから、これからウチらは休み最後の日にデパートでやってる『ちくしょう、3学期開始だ！ ヤケ買いセール！』に行く事にした。その為、ウチは外出の準備をきっちりと終えて玄関で待ってたんやけど、アスナの準備がまだ整ってへんかった。

「ちょっと待って、もうすぐ行くから」

洗面台から聞こえてくるアスナの声。ちりんちりんという音が聞こえてくるから、アスナが洗面台で髪をくくってるのが分かる。そんなアスナにウチは玄関で足をパタパタしながら、急かす声をかける。

「早よせな、始まってまうでー」

セールの開始は10時からやえ。多分、デパートの前は凄い行列やろうから、今から言っても間に合うか微妙やな。

「分かってるってー。ちょっと待ってって」

バタバタという足音を立てて、慌てて準備をするアスナ。あつ、ガタンって音がした。アスナこけたな。騒がしい音をたてまくり準備するアスナに、ウチは苦笑する。

「せやから早く準備しとけばええのに」

「もー、分かってるって、ごめんごめん。ほら準備出来たわよ」

ようやく準備が出来たんか、玄関へとやってくるアスナ。どうだつと胸を張るアスナの姿を上から下まで眺めて、ウチは小さくため

息を吐き出す。

「なによ、このか？」

そのウチのため息に、アスナはちよつとムツとした表情を浮かべる。

「靴下の色、左右違ってるえ？」

白い靴下と黒い靴下を指さしながら、ウチは苦笑する。

ウチの言葉にアスナは一瞬何を言っているのか分からないといった表情を浮かべて、足元を見た後、一瞬で顔を真っ赤にして凄い速度で部屋の中へと戻っていく。

「ちよつ、ちよつと待ってて！　すぐに履き替えてくるから！」

履いてる時に気づかへんかったんかな？　相変わらずそそっかしいアスナに、ウチは小さく笑う。

しばらくまたドタバタした後、再び玄関に戻ってくるアスナ。今度はちゃんと靴下の色が揃ってるけど、若干髪が乱れてるえ。折角整えてたのに。

「さあ行くわよー！」

まあ、それぐらいはええかな？

照れているのか無駄にテンション高くそう言うアスナに、ウチは苦笑しながら頷き玄関から外へ出る。

外に出ると、青い空に白い雲が見える。今日もいい天気やなー。

一度大きく伸びをして、身体をほぐすとクルリと振り返りアスナ

に向かって尋ねる。

「アスナー、ちゃんと携帯持った？」

「持つてるわよ！ そう何回も落とさないって！ って、そんなに疑わしい顔しないでよ！ アレは私だけの所為じゃなくて、向こうもぶつかってきたから！」

……うー、ちょっと心配やえ？

心配そうな表情を浮かべているウチに、アスナは顔を赤くしながらも文句を言っている。そんな恥ずかしがり屋でそっかしいアスナに、ウチは小さく笑う。

「また今度、あの子にお礼せなあかなー」

「もう分かってるって！ 早く行くわよ！」

呟くように言ったウチの言葉に、アスナはそう言っているとズンズンとデパートに向けて凄い速度で走っていく。その速度に追いつくために、ウチは笑いながら履いたローラーズスケートで追いかけていく。向かうのはもちろん、『ちくしょう、3学期開始だ！ ヤケ買いセール！』をしてるデパートやえ。

それにしても3学期開始かー。

そしたら、あの外人の男の子も先生になんねんなー。

その時のクラスの皆の反応を想像して、ウチは小さく微笑みながらデパートへと走って行った。

SIDE：瀬流彦

いやー、相変わらずこの時期は賑やかだねー。

僕はいつも通り、大広間の芝生の上で寝転びながらそう考えていた。聞こえてくるのは、子供たちの楽しげな声、遊具が動く音、それに泣きだした子供の声と、それをあやす声。

今日が長期休暇最終日の所為かその音はいつもよりも賑やかだった。

「うーん、平和だねー」

青い空の上を、ゆっくりと流れていく雲を見上げながら僕は思わずそう呟いた。

まあ、平和と言っても関西からの化け物が時々襲ってきたりしているから、本当は平和でないんだけどね。でも、こうやって子供の声が聞こえてくるのは平和な証だよ。

本当の平和って何かなんて僕には分からないしね。

変に哲学的な事を考えてしまっている自分自身に僕は苦笑すると、ゆっくりと目をつぶり、聞こえてくる声に耳を傾けながら、小さく微笑む。

やっぱり子供がいるってのはいいよね。

後は僕の隣に、可愛い女の人がいたら言う事ないんだけどね。それも凄く強い女の人ではなく、普通の女の人がいいよね！。

なんていうのかな、それが凄い幸せってモノなのかもね！。

「……やっぱり、ここにいましたか」

ふと僕に向けられた言葉に、閉じていた目を開くとそこにはちよつと釣り目の美人な女の人が立っていた。彼女の腰元には隠す気が見受けられない刀が添えられている。

その女性を見て、僕はあまり興味なさげに呟く。

「葛葉先生ですか」

彼女の名前は葛葉 刀子先生。この学園の魔法先生で腕はめつぱう強い。美人だけど、ちよつと怖くてあまり関わり合いになりたくない先生だ。

そう考えている僕に、葛葉先生は小さくため息を吐き出しながら教えてくれた。

「ガンドルフィーニさんが呼んでいましたよ？」

それだけ言って『何かしたんですか？』という表情を浮かべる葛葉先生に僕は少しだけ苦い表情を浮かべる。あー、これって、多分この前の話だね。エヴァンジェリン家に行った時の話。

しかも、あのネギ君が行ったっていうんだから心配するのは当然かな。

ガンドルフィーニ先生は優しいからね！。

僕はそんな事を考えながらも、物凄く注意されて怒られそうだな  
ーっと考えて小さくため息を吐き出した。

「後で行くと伝えてください」

そのうち行きますから、と言った僕に葛葉先生はにっこりと笑う  
と言った。

「嫌です」

えー、嫌ですって。

妙に晴れやかな笑顔を浮かべている葛葉先生に、僕は困った顔を  
する。しかし、そんな僕の気持ちなど軽くスルーして葛葉先生はち  
よつと怖い顔を浮かべる。

「今すぐに連れてこいと言われましたかね」

なるほど、それほどガンドルフィー二先生は怒ってるんですね？  
後、とりあえず、その刀に触れる手をどうにかしてくれませんか  
ね？

ビリビリと飛んでくる殺気に、僕は小さくため息を吐き出す。逃  
げ出そうにも、彼女から逃げれる程僕は強くないしね。これは覚悟  
するしかありませんね。さっさと行ってコッテリ絞られてしまいま  
すか。

「はいはい、分かりましたよー」

「そうですね。それは良かったです」

寝転びながらも頷く僕に、葛葉先生は殺気を抑えてにっこりと笑う。

うん、怖いよね、その笑顔は。そんなだから、この前彼氏にフラれっ！？」

「今……、何か考えましたか？」

僕の頬の1？隣に突き刺された刀。冷や汗が出る僕。にっこりと笑う葛葉先生。

その目は殺そうとしてる目ですね。それぐらい、分かりますよ。

相変わらず、恋愛関係の話は鬼門だね。

「な、何も考えてませんよ？」

「……そうですか」

慌てて首を振る僕に、葛葉先生は何でもない様に刀を柄の中にしまった。

いやー、吃驚したよ。というか、何で分かったのかとか、周りの人が何で騒がないのかとか色々疑問に思うけどまあいいや。あんまり質問すると墓穴ほって殺されそうだしね。

「それじゃあ、行きましょうか？」

「そ、そうだね」

にっこりと笑う葛葉さんに僕はちょっとチビリそうになりながらそう頷く事しか出来なかった。うー、エヴァンジェリンさんよりも

怖いね。

仕方なしに僕はゆっくりと立ち上がろうとして、ふとそれを止めて葛葉先生に言った。

これはずつと言つと思つてたんだよね？

「……あの葛葉先生？」

少し真剣な表情を浮かべてそう言う僕に、葛葉先生は少し緊張した顔で尋ねる。

「何ですか？」

どうやら僕が何がしたいのか気づいていないみたいだね。

そんな葛葉先生に僕は小さくため息を吐き出す。

「あー、寝転んでいる男の近くにスカートで近寄るのはどうかとか、そんな風に無防備なのはどうかとか色々言いたい事はあるけどーっ。黒はどうかと思いまっ！？」

少し説教じみた口調で言おうとした僕は殺気を感じて慌てて転がる。

横を見ると、そこには先ほどまで僕がいた場所に刀が刺さっている。今回は威嚇とかではなくて、殺す気でしたよね？

「ええ、死にたいようですね。殺してあげますよ」

……あははは、やっぱり地雷踏んじゃいましたよね。

今すぐ頭と体が泣きわかれしそうに雰囲気醸し出す葛葉さんを前に、僕は乾いた笑いしか浮かべられませんでした。



SIDE：神多羅木

俺は少し唸りながら、いつもの図書館島で本へ視線を落としていた。

本棚に囲まれ、食肉植物をいなしながら俺は手に取っている本を先へ読み進めていこうとする。

「おや、またいらしたんですか？」

「つたく、でやがったな。」

イラツとする声が聞こえた。その声に嫌々ながら顔を上げると、そこにはローブで顔を隠したクーンル・サンダースと名乗る男が立っていた。

その男を視線に止めると、小さくため息を吐き出すと、また本に視線を落とし読み進めていく。

「おやおや、無視ですか？ いけませんよ？」

そういうのが苛めの発端になるんです。教師である貴方がつと、危ないじゃないですか」

何かへらへらと笑いながら戯けた事を言っただけの男に、無詠唱で魔法を放つが、ひょいっと避けやがる。本当に腹が立つ奴だ。

殺せなかった事に、俺は舌打ちしながら、とにかく本に集中しよう  
と本へ視線を落とす。

「おや、またアルビレオ・イマが残した本を読んでいるんですか？」

「黙ってる、殺すぞ」

苛立ちを隠そうともせず、そう答える俺にクウネルの奴はニヤニヤと微笑みやがる。ローブで顔が見えないのに、ニヤニヤ笑っているのが凄く分かる。ハッキリ言ってみかつく。

また魔法をぶっ放したい衝動に駆られるが、これ以上ここで暴れる訳にもいかずに俺は大きく深呼吸をして心を沈める。

「ふふふ、それにしても随分と真面目に読んでいますね。貴方も同士ですね。」

この着衣水泳の時に、普段の服の下から透けて見えるスクール水着のエロスに関する項目なんて最高だとして危ないですって、おつと、よつと」

何か言ってくる男に、俺は風の矢を何発か放ち追い払う。クウネルは軽く避けられる事に苛立ちは募るが、少しずつ離れていくクウネルに俺は小さく安堵した。全く、何がスクール水着のエロスだよ。吐き捨てるようにそう考えながらまた本へと視線を向ける。

確かに読み方によってアイツの言うようにただのエロ談義本になっってしまう。しかし、この本の正しい読み方で読めば、重力魔法の本になるんだよ。

何故、その事を知っているのかといえば、この前、この男に騙されてアルビレオ・イマの本はただのエロ本だとあの人に報告した時

の事だった。

すると、あの人は微笑みながら言ったのだ。

『はははは、相変わらずじゃのう。あの男は。

じゃが、あいつはマメで捻た男じゃからのう。通常の読み方なら  
そうなるが、違う読み方をすれば重力魔法の本になる筈じゃ』

その言葉に、俺は半信半疑でもう一度本を読む事にしたのだが、  
確かにあの人の言う通りであった。

しかし、本当に読み方を変えるだけで、エロ談義が重力魔法の本  
に変わるとはな。それに重力魔法の内容を隠す為にエロ談義本にす  
るとは。

「いえいえ、それは逆ですよ？ エロ談義を隠す為に重力魔法をで  
すねって！ ちょっとは話させてくださいよ！」

また懲りずに近づいてきた男に俺は無詠唱で、魔法を放ちまくり  
男を追い払い続ける。

藪蚊みたいにすぐに出てくる奴だな。うざりたい。

こっちは早くこの本を読み進めなきゃならねーんだよ。

ネギ・スプリングフィールドの事もあるし、お前なんかは構って  
る暇はねーんだよ。

痛くなる頭を押さえて、俺は再び本に視線を落とす。

えーっと、『重力とは魔力を圧縮し、スクール水着が透ける様は、  
引力と魔力の公式を、普段見慣れたスクール水着でも、魔力だけで

は重力を生み出す事はできずに、そこにエロスがあるのです』って。

「……………何ですか？」

顔を見上げると、そこにはクウネルの姿が。俺が何が言いたいのか本当に理解できないと言いたげに首を傾げるこいつを見て、俺の頭の血管が何本か引きちぎれる音が聞こえた。

「だあああああ！ 耳元でいらねーこといつてんじゃねーよ！

デイグ・デイル・デイリック・ヴォルホール！ 逆巻け凍てつく嵐、業の者に竜巻く苦痛の牢獄を！」

「ちよつ、待ってください！？ それはこの場所は洒落になってませんよ！？ 本気ですか！？」

何か言ってくるクウネルに、俺は今までのストレスをぶつける為に魔法を詠唱し続けていった。

## SIDE：月詠

あーん、今日は刹那センパイはおらへんから暇ですえー！。うちは刀を触りながら、小さくため息を吐き出しました。

今いるのは大広間の体育館ですえ。生徒さん達の掛け声なんか聞いてきますー。

そもそもうちが、何でそんな所におるかと聞かれたら、凄く単純ですえ。

この前、刹那センパイに会ってこうビビッと来てしまったうちは、すぐに刹那センパイが入部している剣道部に入部したんですえ。これで刹那センパイと合法的に殺し合えますえー。

まあ、殺すなんてもつたいたい事できまへんえ。まだまだ弱い刹那センパイをここで殺してしまつたら、もつたいたいやないですか。もつと腕が上がった所で、殺すのが一番なんですえ。

せやから、今はただ刹那センパイと竹刀で打ち合つて、身体の疼きを静めてますんや。

そうは言っても、カモはんの仕事を忘れた訳やありまへんから、いきなり自分の実力全開にして刹那センパイに稽古をつける訳にもいきまへん。

今のうちは、両親の才能を受け継ぎ、剣の才能があつた女の子としてこの剣道部に入部してますえ。

そして、元々の身体能力や基礎なんかは、才能という言葉で誤魔化して、剣道部に入部してからは基本的には試合しかしてまへん。

そしてその試合相手の大半が刹那センパイですえ。

なんとというんでしょー、あの未熟な感じがまたそそりますなあ。

熟成されきつてどんな手を使つても殺しにくるカモはんも、絶品で最高でもう命を賭けてでも殺しに向かいたい方ですけど、刹那センパイの未熟さもまた味ですな。

剣を持ってまだ数日という設定やから、本気を出さずに刹那センパイより弱いという事になってるうちに強気で攻めてくる刹那センパイ。

その刹那センパイの顔を見ると、うちはゾクゾクしますえ。

だって、うちがこの木刀をほんの少しだけ速く動かしたら、あの白くて綺麗な喉を引き裂けるんです。

まるで無防備な子供のように、本当に少し力を入れただけで斬れるんですね？

切られた喉からは限りない鮮血が噴き出し、何が起きたのか分からない顔でパクパクと口を動かした後、絶望的な表情を浮かべて、傷口を押さえて事切れる刹那センパイ。

その刹那センパイの鮮血を浴びながら微笑むうち。

何か志があるやろう刹那センパイ。

せやけど、そんな刹那センパイの志をたった一度の斬撃で断ち切ってしまううち。

センパイの顔は絶望を浮かべてはるに決まってる。

うちの顔は歡喜を浮かべているに決まってる。

あーん！ 想像しただけでもゾクゾクしますえー。

なんともロマンチックな感じじゃないですか！ あー、ほんまに殺してやりたい。









明日、演劇が公演される。演者達は準備を進め台本を読み直す。(後書き)

そういえば、前回みたいにカモ君が主役の陰謀話に感想が極端に減る不思議。

もしかしてカモ君に主役の魅力がないのかしら？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9248m/>

---

ネギまの世界に転生したカモ。

2011年2月13日22時34分発行